宮古島市内戦争遺跡分布調査報告書(1)

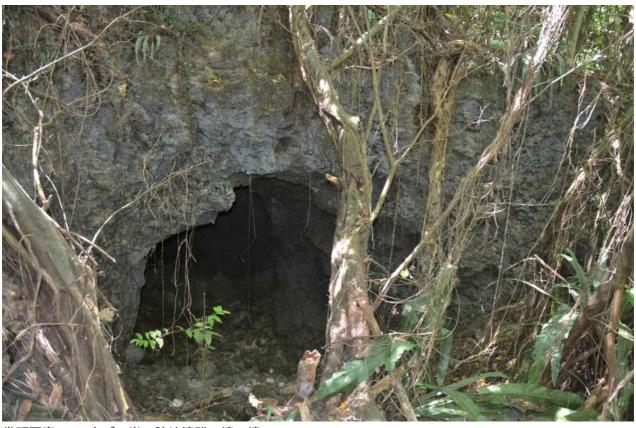
- 城辺地区・上野地区 -

平成30(2018)年3月宮古島市教育委員会





巻頭写真 1. 下里添の野戦重火器秘匿壕群 壕 2



巻頭写真2. ウズラ嶺の陣地壕群 壕1壕口



巻頭写真3. 東保茶根の戦争遺跡群 東の砲台跡



巻頭写真4. 新里の機関銃壕群 壕3



巻頭写真 5. 陸軍中飛行場戦闘指揮所 外観



巻頭写真 6. 御真影奉護壕 北側壕口外観

例 言

- 1. 本書は、平成29年度国庫補助事業「市内遺跡発掘調査等」で行った、戦争遺跡分布調査の成果をまとめたものである。平成29年度は、宮古島市内の城辺地区、上野地区を対象とした。
- 2. 本書における戦争遺跡の名称については、『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(V)-宮古諸島編-』(沖縄県立埋蔵文化財センター 2005 年)に従い、新たに発見された戦争遺跡については、原則として小字名もしくはその場所を示す地形等の固有名詞を用いるとともに、戦争遺跡の性格を示す種類を組み合わせて名称の決定を行った。
- 3. 本分布調査は、宮古島市教育委員会が直営して行った。以下の業務については、委託契約を締結した。 野原岳の戦争遺跡確認調査:設備設計メンテック
- 4. 本報告書内における ref. は、国立公文書館アジア歴史資料センターのレファレンス番号を示すものである。
- 5. 本報告書内における壕の測量図については、方位と距離の計測を用いて行った簡易測量図である。また、壕の位置については、地形図をデジタルカメラ内臓の GPS 機能をあわせて確認を行った。
- 6. 消滅している戦争遺跡については、跡を附した。
- 7. 各戦争遺跡の概要については、①所在地、②立地・現況、③歴史状況、④遺構の特徴を記したが、③ 歴史状況の詳細が不明な遺跡については省略した。
- 8. 本書の原稿執筆は、久貝弥嗣、山口直美、森谷大介、菱木勇一、西里咲子が共同で行い、森谷大介が中心となり編集を行った。なお、本報告書における文責は久貝弥嗣がもつものとする。
- 9. 本書の作成にあたり、聞き取り調査を行ったテープデータ及び、戦争遺跡の測量図面やデータなどについては、宮古島市教育委員会で保管している。

目次

类	皕	写	す
77:	ᄽᅜ	_	ᆓ

例言

弗	l 무	訓	自食栓	样
	第	1 簱	う 調	査経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
	第	2 餌	5 調	査体制 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第2	2章	単	战争 遺	跡の概要
	第	1 飲	う 戦	争遺跡の種類 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
	第	2 飣	方宮	古島市内の戦争遺跡へのとりくみ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
	第	3 飣	方宮	古島市の戦争略史年表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
第:	3章	坂	战辺地	区の戦争遺跡(※)は新規または追加された戦争遺跡を示す
	第	1 餅	5 保	良
		1.	保良	の沖縄戦時の概況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
		2.	保良	の調査成果一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
		3.	保良	の戦争遺跡
			(1)	フカスクアブ・・・・・・・・ 18 (2) ウンヌヤー・・・・・・・ 19
			(3)	村越の壕群(※)・・・・・・・・ 20 (4) 吉野海岸の壕・・・・・・・ 22
			(5)	東平安名崎の銃眼(※)・・・・・・ 23
	第	2 觧	う 新	城
		1.	新城	の沖縄戦時の概況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
		2.	新城	の調査成果一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
		3.	新城	の戦争遺跡
			(1)	高嶺後の陣地壕群跡(※)・・・・・ 31 (2) 南野加那の壕(※)・・・・・・ 32
			(3)	がらのこし 村の後の壕(※)・・・・・・・ 34
	第	3 飣	う 福	里
		1.	福里	の沖縄戦時の概況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
		2.	福里	の調査成果一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
				の戦争遺跡
			(1)	福里公園の忠魂碑・・・・・・・ 42 (2)西川底の壕群(※)・・・・・・・ 43
			(3)	ツガマキ御嶽の壕(※)・・・・・・ 46 (4) 西高阿良後の壕群(※)・・・・・・ 48
	第	4 飣	5 比	嘉
		1.	比嘉	の沖縄戦時の概況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
		2.	比嘉	の調査成果一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
		3.	比嘉	の戦争遺跡

(1) インヌチブ	アブ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• • 5	8 (2)	イサガヌアブ				 59
(3) 高腰城跡(。 の蛸壺と壕群(※) ・・・	• 6	0 (4)	ぁ ず ぬ かー 按司の泉の壕	(*)••••			 62
(5) ツヅピカ征	卸嶽の壕(※) ・・・・・	• 6	3 (6)	池原·久路布	の壕群(※)			 64
(7)屋良座の場	豪(※) ・・・・・・・・	• • 6	6 (8)	ずいふくずいどう 瑞福隧道の弾	痕(※)・・			 68
(9) 加治道の過	辟難壕跡(※)・・・・・	• 7	0					
第5節 長間								
1. 長間の沖縄戦時	うの概況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・							 71
2. 長間の調査成果	只一覧 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·							 76
3. 長間の戦争遺跡	K							
(1) 与那浜崎の	の砲台(※)・・・・・・	• • 8	5 (2)	長南陣地壕群	Ⅰ跡(※)・			 88
(3)長南陣地場	豪Ⅱ(※)・・・・・・・	• • 9		長南陣地壕群				
(5) 山川の壕((*)	• • 9	4 (6)	長間巣玉川の	住民避難壕	群跡(<u>(</u> *)	 95
第6節 下里添								
1. 下里添の沖縄戦	は時の概況・・・・・・							 96
2. 下里添の調査成	は果一覧・・・・・・・・							 100
3. 下里添の戦争遺	跡							
	野戦重火器秘匿壕群・・	• 10	7 (2)	西更竹司令部	壕(※)・・			 113
(3)佐事川の『	陣地壕(※)・・・・・・	• 11	6 (4)	西更竹の壕 I	跡(※)・・			 120
(5) 西更竹の場	豪Ⅱ(※)・・・・・・・	• 12	1 (6)	西更竹の壕群	∭ (※)⋅ ⋅ ⋅			 122
(7) 西更竹の(住民避難壕跡(※)・・・	• 12	4 (8)	ウズラ嶺の陣	i地壕群(※)			 125
(9) ウズラ嶺	西の壕跡(※)・・・・・	• 12	9 (10)	ウズラ嶺の野	戦病院壕跡	(*).		 130
(11) 西花切の場	豪群(※)・・・・・・・	• 13	2 (12)	ムムクーリャ				 139
(13)「陣歿せる	。 軍役動物を吊ふ」碑・・	• 14	0					
第7節 西里添								
1. 西里添の沖縄戦	は時の概況・・・・・・							 142
2. 西里添の調査成	は果一覧・・・・・・・・	• •						 145
3. 西里添の戦争遺	跡							
(1)旧西中共同	司製糖場煙突の弾痕(※)	• 15	1 (2)	アーリヤマの	戦争遺跡群	(※)・		 152
(3) ミルク嶺(の地下壕群・・・・・・	• 15	4 (4)	山地の壕群(※	(()			 156
(5) ムイニー ³ 第8節 砂川	ヤマの壕群(※)・・・・	• • 15	8					
	の概況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・							 159
	是一覧 · · · · · · · · ·							
3. 砂川の戦争遺跡								
	, ブ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 16	3 (2)	ぁだんぱる 安谷原の壕群	(*)			 164
	の壕 (※)・・・・・・			21000				
第9節 友利	•							
	うの概況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・							 169
	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·							
3. 友利の戦争遺跡								

でがしほちゃね (1) 東保茶根の戦争遺跡群 ・・・・・175 (2) キィキャガー ・・・・・・・・・182
(3)マエノアブ(*)・・・・・・・183 (4)アブチャー(仲原洞窟)・・・・・・184
(5) モリガホの壕 (※)・・・・・・185
第10節 城辺地区の戦争遺跡のまとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・186
第4章 上野地区の戦争遺跡(※)は新規または追加された戦争遺跡を示す
第1節 新里
1. 新里の沖縄戦時の概況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・188
2. 新里の調査成果一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・192
3. 新里の戦争遺跡
(1)新里の機関銃壕群(※)・・・・・195
第2節 宮国
1. 宮国の沖縄戦時の概況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・200
2. 宮国の調査成果一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・204
3. 宮国の戦争遺跡
^{たかやまばる} (1)高山原の壕群(※)・・・・・・・209 (2)東青原の壕(※)・・・・・・・・212
(3) タカシガバーの機関銃壕・・・・・214 (4)「ドイツ商船遭難之地」碑の弾痕(※)・216
第3節 野原
1. 野原の沖縄戦時の概況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・217
2. 野原の調査成果一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・225
3. 野原の戦争遺跡
(1)ナベアマ原の壕群(※)・・・・・234 (2)陸軍中飛行場戦闘指揮所・・・・・236
(3) 野原岳北側発電施設壕(※)・・・・239 (4) 野原岳頂上の電波探知機壕群・・・・・240
(5) 御真影奉護壕・・・・・・・・・242 (6) 大嶽城跡公園西側壕群・トーチカ・・244
(7)大嶽城跡公園東側壕群・・・・・・246 (8)ツガガーの地下壕群・・・・・・・248
(9) タキグスバルの地下壕群・・・・・252 (10) タキグスバル北の壕跡(※)・・・・・255
(11) 野原鏡原の壕跡(※)・・・・・・256 (12) 千代田カギモリ原の壕跡(※)・・・・258
(13) 千代田カギモリ原の碑(※)・・・・260
第4節 上野
1. 上野の沖縄戦時の概況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・261
2. 上野の調査成果一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・263
第5節 上野地区の戦争遺跡のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・265
※おことわり 第2節宮国の(1)東青原の壕、(2)高山原の壕群は、それぞれ新里と野原の小字に所在していますが、いず れも宮国との境界に接した位置にあり、展開していた日本軍の部隊編成から、より関係性の深い地区へ便宜上、

分類しています。



第1章 調査経緯

第1節 調査経過

平成 29 年

- 4月 名古屋市教育委員会伊藤厚史氏による戦争遺跡の現地調査指導 野原岳の戦争遺跡分布調査支援業務・設備設計メンテック 城辺、上野地区の行政連絡員への情報提供依頼
- 5月 上野、字野原地区の聞き取り調査、聞き取りによる戦争遺跡の確認調査
- 6月 中飛行場設営による住民の強制移転の足跡調査
- 7月 戦争遺跡分布調査(城辺地区)中間報告
- 8~9月 城辺地区の戦争遺跡確認調査
- 10月 上野、字上野の聞き取り調査、聞き取りによる戦争遺跡の確認調査
- 11月 上野、字宮国の聞き取り調査、聞き取りによる戦争遺跡の確認調査
- 12月 上野、字新里の聞き取り調査、聞き取りによる戦争遺跡の確認調査 平成 30 年
 - 1月 戦争遺跡分布調査(上野地区)中間報告
 - 2月 城辺·上野地区調查成果整理

第2節 調査体制

本書の作成にあたっては、宮古島市教育委員会生涯学習振興課が担当し、以下の体制で実施した。

事業主体 宮古島市教育委員会 教育長 宮國博

事業所管 生涯学習部 部 長 川満 広紀

事業総括 生涯学習部次長兼生涯学習振興課長 久貝 喜一

課長補佐兼文化財係長 砂辺 和正

事業事務 生涯学習振興課 文化財係 主 事 久貝春陽

調查担当 生涯学習振興課 文化財係 主任主事 久貝 弥嗣

調査補助 生涯学習振興課 文化財係 嘱 託 員 川満 広紀

臨時職員 菱木 勇一、山口 直美、森谷 大介、上原 則子

文化財資料室整理員 西里 咲子、草浦 昌子、平安山 恵利香

支援業務(野原岳戦争) 設備設計メンテック

調査協力 伊藤 厚史 (名古屋市教育委員会)、山本 正昭 (沖縄県立博物館・美術館)、保久盛 陽 (南 風原町教育委員会) 下地 和宏、佐渡山 安公 (宮古島市文化財保護審議委員)、多良間 隆 (城 辺支所長)、新垣 則子、 佐藤 宣子 (宮古島市教育委員会市史編さん室)、立津 義康

第2章 戦争遺跡の概要

第1節 戦争遺跡の種類

『沖縄県の戦争遺跡』(沖縄県立埋蔵文化財センター 2015)では、沖縄県内の戦争遺跡を以下のような種類に分類・報告している。

A. 沖縄戦以前

①海底線関係施設、②中城湾海軍需品支庫、③海軍望楼・特設見張所、④中城湾臨時要塞、⑤船浮臨時要塞、⑥防空監視哨、⑦戦争に関連する施設・記念碑

B. 沖縄戦

①飛行場、②司令部壕、③陣地、④特攻艇秘匿壕、⑤学徒隊壕、⑥病院壕、⑦官公庁壕、⑧御真影奉護壕、⑨住民避難地、⑩偽陣地・偽兵器、⑪被災・破壊痕跡、⑫収容所

本報告書では、上記の分類に従い、宮古島の戦争遺跡の分類を行った。しかし、宮古島市内には確認できない分類の戦争遺跡もみられる。以下に宮古島市内で現在確認できる戦争遺跡の種類について列記するとともに、各分類の定義を『沖縄県の戦争遺跡』(沖縄県立埋蔵文化財センター 2015)を参考に概説する。なお、分類表記については、上記の分類表記に従うものとし、現在確認できるもののみを対象としたが、今後他地区の分布調査を行うなかで対象とする戦争遺跡の種類が増える可能性もある。

1. A ⑦戦争に関連する施設・記念碑

宮古島市内では、本分類に該当する戦争遺跡として忠魂碑と奉安殿が確認できる。

①忠魂碑

日清戦争・日露戦争後、戦死した兵士を祀った忠魂碑が全国的に建立された。沖縄では、日露戦争後、 特に大正期、昭和初期に盛んに建立されている。

宮古島市内では、現在でも「旧平良町の忠魂碑」(建立年:1924年)、「旧下地町の忠魂碑」(建立年:1932年)、「旧城辺村の忠魂碑」(建立年:1927年)、「旧伊良部村の忠魂碑」(建立年:1914年)の4つの忠魂碑が確認できる。「旧伊良部村の忠魂碑」は、1912年に建立された「旧佐敷村の忠魂碑」に次いで、県内で2番目に古い忠魂碑である。

②奉安殿

1888 (明治 22) 年には、全国の小中校に御真影が下賜、1890 (明治 23) 年、「教育勅語」が発布され、さらに翌年には「小学校祝日大祭儀式規定」が制定された。下賜された御真影と「教育勅語」を保管するために建設されたのが奉安殿である。宮古島の中では1928 (昭和 3) 年、池間小学校に建設されている。全ての学校で奉安殿が建設されたわけではなく、建設しなかった学校では校舎内に設置された奉安室に、御真影・教育勅語を保管した。

2. B①飛行場

飛行場に分類される戦争遺跡は、実際の飛行場の滑走路の他に、これに附随する誘導路や飛行機の掩体や、指揮所、電波探知機壕などが含まれる。沖縄県内では、以下の飛行場(陸軍8か所、海軍5か所)が建設され、宮古島市内でも3つの飛行場が建設されている。

宮古島市内では現在残されてはいないが、飛行機の掩体として、コの字形に土盛をし、天井部分を草木で覆って偽装した形態の掩体が構築されていたとの聞き取り調査が得られている。

- <陸軍> 沖縄北飛行場(読谷飛行場) 伊江島飛行場 沖縄中飛行場(現米軍嘉手納基地) 沖縄南(仲西)飛行場 沖縄東(西原)飛行場 宮古島西飛行場(下地) 宮古島中飛行場(野原) 石垣島飛行場(白保)
- <海軍> 小禄飛行場(現那覇空港) 宮古島海軍飛行場(現宮古空港) 石垣島北(平喜名)飛行場 石垣島南飛行場(旧石垣空港) 南大東島飛行場
 - *陸軍が首里石嶺に、海軍が糸満に秘密飛行場を建設。

3. B②司令部壕

司令部とは、旅団以上の規模の部隊が指揮下部隊を統率する組織で、最高指揮権を持つ司令官を補佐し、 作戦や用兵の計画・指導を行う、参謀などの幕僚を中心に構成される。司令部壕は、敵の攻撃から司令部 をも守るために地上に堅固な構造物として、あるいは地下にトンネル状に構築・設置された施設である。

宮古島市内においては、タキグスバルの地下壕群が第28師団の司令部壕、西更竹司令部壕が独立混成第60旅団の司令部壕と考えられている。

4. B③陣地

陣地とは、上陸戦における地形の優位を得ることを目的とし、あらかじめ適所に障害物や塹壕などを設置したり、火砲などの装備を配備した場所をさす。陣地は、砲台、トーチカ、銃眼、陣地壕、監視所、戦闘指揮所、通信所の6つに細分される。

- a. 砲台:大砲などの大型の火器を設置するための台座である。
- b. トーチカ:鉄筋コンクリート製の防御陣地を示す、ロシア語の軍事用語。トーチカには、小銃や機関銃などの小型の火器が構えられる銃眼と、監視を兼ねた小窓が設けられる。
- c. 銃眼: 遮蔽物の内側から銃器を撃つために構築された小窓。コンクリートで枠が作られているもの もある。
- d. 陣地壕:自然洞窟を利用したり、地質にあわせてダイナマイトや削岩機、ツルハシを用いて掘削された将兵が戦闘用に利用する壕
- e. 監視所:丘陵頂頭部など、高所の見晴らしが良い位置に立地し、監視窓などを有するものもある。
- f. 戦闘指揮所:戦闘指揮所は、一定の形態で捉えることができないが、立地的には丘陵頂部や先端部に位置し、周辺の陣地の中心的な場所に位置する戦闘時の拠点となる場所。
- g. 通信所:通信所は電気信号を送受信する施設。

宮古島市内では、海軍砲台として、平良砲台、パナタガー嶺の砲台、平瀬御神崎の砲台、与那浜崎の砲台、海軍飛行場の砲台、友利砲台(東保茶根)が設置されている。また、下里添の野戦重火器秘匿壕群には、陸軍の九六式 15 糎榴弾砲が秘匿され、来間島には山砲、海岸線には敵の上陸に備えての水際作戦のひとつとして、多くの銃眼が構築されている。

5. B ④特攻艇秘匿壕

特攻艇秘匿壕とは、太平洋戦争時において陸海軍が採用した主に体当たりによる攻撃を行うための小型艇、(特攻艇)を秘匿する壕である。陸軍は陸軍海上挺身隊、海軍は海軍震洋隊の部隊が組織されている。宮古島市内では、陸軍海上挺身隊の特攻艇秘匿壕として、荷川取ウプドゥマーリャ特攻艇秘匿壕(第4大隊)、大浜の特攻艇秘匿壕群(第30大隊)、トゥリバー浜特攻艇秘匿壕群(第30大隊)が確認されている。海軍震洋隊の特攻艇秘匿壕として、ヌーザランミ特攻艇秘匿壕(第41震洋隊・八木部隊)が確認され

ている。

6. B ⑧ 御真影奉護壕

御真影とは、「明治期から第二次大戦の敗戦まで、宮内省から各学校に貸与された、天皇・皇后の写真」 (大辞林)のことであり、御真影奉護壕とは、この御真影を護るために構築された壕のことである。

宮古島市内では、1944(昭和19)年10月10日の空襲の後、野原岳にある第28師団司令部壕の近くに御真影の奉遷所が構築された。10月31日に、宮古島市内の御真影を宮古中学校に一時奉遷し、11月1日に野原岳の奉遷所(御真影奉護壕)へ移された。壕の構築には、市内の学校に勤務する教師が交代制で作業を行い、奉遷後も交代制で見張りが行われた。

7. B 9 住民避難地

住民避難地とは、米軍上陸以前に掘られた防空壕や、戦況に即して住民が避難した自然洞穴、本来は軍の陣地壕であったところ、山間部などに避難した際の掘立小屋やカマドなどの跡を総称する。

体験談や聞き取り調査によれば、宮古島市内では、家の敷地内やその周辺に家族が緊急に避難できるような小さな防空壕を掘ったり、自然の洞穴などに避難することが多かったようである。

現在では、家の敷地内や周辺に構築された防空壕が残されている事例は確認できないが、自然洞穴が現在でも確認できるものも多く、代表的な事例として、「チフサアブ」(来間島)、「フカスクアブ」(城辺保良)、「宮古南静園の避難壕」などがある。住民避難地は、前述してきた日本軍関連の壕に比して調査事例が少なく、今後これらの住民避難地に関する詳細な調査も必要とされる。

8. B⑪被災·破壞痕跡

被災痕跡とは、主に米軍の攻撃による弾痕や爆弾穴のことで、破壊痕跡は旧日本軍が作戦上、飛行場や 橋梁を破壊した跡である。

宮古島市内では、明確な破壊痕跡は現在のところ確認されていないが、被災痕跡としては、「南静園職員宿舎塀に残る弾痕」や、「旧西中共同製糖場煙突の弾痕」などが現在でも確認できる。

第2節 宮古島市内の戦争遺跡へのとりくみ

宮古島市内における沖縄戦に関する調査・研究は、他の自治体とも同様に聞き取り調査を基にした体験 談の編さん作業が先駆けとなっている。沖縄県教育委員会が、1974年に沖縄県史の沖縄戦記録として県 内の戦争体験談の編さんを行ったのをかわきりに、旧平良市では1978年に、旧城辺町では1996年に、 旧上野村では2003年に体験談がまとめられている。これらの編さん事業を通して、宮古島市内の戦争遺 跡の確認も進められていく状況がみてとれる。

宮古島市内の戦争遺跡が初めて体系的にまとめられたのは、1995年に宮古郷土史研究会が編集した『宮古の戦争と平和を歩く』である。本誌は、戦後50年という節目の年に発刊されたもので、会の定例会などで論議を行い、宮古の各地に散在している戦跡を網羅したガイドブックを作成することを編集目的としている。本誌は、A5版本文58頁からなる小冊子であるものの、宮古島市内の20の戦跡の概要と、忠魂碑、慰霊碑、歴史年表などから構成されている。

2003年から2004年にかけて沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した、宮古島諸島での戦争遺跡の分布調査は、旧市町村の地域史などの体験談や、宮古郷土史研究会の作成した冊子をベースとし、市内の戦争遺跡を網羅的に踏査している。この分布調査において、宮古島市内では62(旧平良市16、旧下地町4、

旧上野村 11、旧城辺町 26、旧伊良部町 5)の戦争遺跡が報告されている。この調査報告された戦争遺跡は、現在の宮古島の戦争遺跡を語る上での基礎資料として活用されている。

また、2011 年度から 2015 年度にかけて、この分布調査で確認された戦争遺跡の性格や時期等の内容を詳細に確認するための戦争遺跡詳細確認調査が実施され、2015 年 3 月には、『沖縄県の戦争遺跡 - 平成 22 ~ 26 年度戦争遺跡詳細確認調査報告書 -』が発刊されている。

この報告書の中では、県内の戦争遺跡が 1,076 か所に及ぶことを確認するとともに、145 の戦争遺跡について詳細な調査報告が行われている。沖縄県では、これらの調査成果をふまえ、2015 年度より戦争遺跡の文化財指定作業を着手している。宮古島市においてもこの確認調査によって、10 の戦争遺跡の詳細調査がおこなわれ、西更竹司令部壕が新聞報道されるなど、非常に注目をあびた。

沖縄戦の宮古島市内の状況を知る資料としては、当時、駐屯していた日本軍の兵員の手記が数多く残されている。また、瀬名波栄編集の『先島群島作戦 (宮古篇)』(1975年発行)は、宮古島における日本軍の部隊が網羅され、宮古島における沖縄戦を考える中で重要な位置を示している。

また、アジア歴史資料センターのインターネット検索を通して、数多くの戦史資料を確認することができるようになったのも、戦争遺跡の調査を行う上での大きな環境の変化のひとつといえる。これらの資料を整理していくことで、宮古島市内における日本軍の各部隊の駐屯地や壕の性格などをより詳細に捉えていくことが可能となる。

近年宮古島市においては、ほ場整備工事などの大規模開発に伴い、新規発見される戦争遺跡が相次いでいる。また、戦史資料などに記載がみとめられるものの、その詳細な実態の確認にいたっていない戦争遺跡も多くみられる。これらの状況から、宮古島市内の戦争遺跡について再度調査を行う必要性が求められている。

文化財保護行政の視点からみた戦争遺跡として、沖縄県域の全体的な動向としても、1990年に南風原町で沖縄陸軍病院南風原壕群が戦争遺跡としてははじめて町の指定文化財となり、県内の各市町村でも戦争遺跡の指定への機運が高まりをみせている。

宮古島市内においても、2004年4月15日に、狩俣の海中公園に隣接するヌーザランミと呼ばれる嶺に構築された、「海軍特攻艇格納秘匿壕」が旧平良市の史跡に指定されている。しかし、宮古島市内における戦争遺跡での指定は、現在にいたるで、本1件のみで、戦争遺跡の保存と活用は大きな課題である。

注1:西更竹陣地壕については、琉球新報2015年6月8日、宮古新報2015年6月9日、宮古毎日新聞6月9日付の 朝刊で新聞報道されている。

注2: 宮古島市内の戦時下における手記など資料については、平成29年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業第 1回ジンポジウム「戦争遺跡の保存・活用について考える」資料集内でとりまとめを行った。

第3節 宮古島市の戦争史略年表

※宮古郷土史研究会編『宮古の戦争と平和を歩く』を基礎資料として作成した。

日	付	宮古郷土史事項	日付	日本と世界				
1930(F	昭和 5) 年	E						
2月	03日	荒木中将(六師団長)来郡講演	4月	ロンドン海軍軍縮条約調印され、統師権干犯問題政治問題化				
5月	27日	日露戦役功労者として県知事久松五人の漁夫表彰する						
1931(F	昭和 6)年	F						
2月	11日	「日露戦役功労ノ五勇士」祝賀会催される(久松小)	9月	満州事変おこる				
1932(F	昭和 7) 年	F						
3月	10日	下地村「忠魂碑」除幕式催される(洲鎌)	3月	「満州国」建国宣言				
1933(昭和 8) 年	Ę						
4月	25日	報国第二八号"沖縄号"宮古・八重山上空飛行訪問	3月	国際連盟を脱退				
1934(昭和9)年								
5月	12日	宮古郡教員の精神作興大会遂行される(平良第一小)	2月	プロレタリア作家同盟解散される				
5月	27日	招魂祭につづいて平良町義勇軍組織される (郡運動場)	6月	文部省に思想局設置				
5月	27日	城辺村義勇軍組織される						
7月	06日	宮古郡義勇軍発会式挙行される						
9月	18日	「満州事変」三周年記念旗行列催される	12月	ワシントン海軍軍縮条約破棄を米国に通告				
1935(F	昭和 10)	 年						
3月	23 日	「皇太子御召馬鹿島立」祝賀会(城辺村役場)	3月	日本共産党中央委員会弾圧で壊滅				
4月		宮古郡教育部会「久松五勇士」乗用サバ二買上げ海軍省に献納する	4月	文部省全国学校に国体明徴を訓令				
5月	27日	日本海戦三十周年記念式典で「久松五勇士」海軍省より表彰される						
7月	01日	平良第二尋常高等小学校"御真影"盗まれる(校長2ヵ月間減棒十分ノニ減額処分)	8月	中国共産党抗日救国宣言				
1936(昭和 11)							
1月	1月 24日 稲垣国三郎大阪愛日小校長来郡「久松五勇士」に記念品贈る(記念撮影)		2月	二・二六事件				
11月	13日 -15日	ドイツ皇帝感謝記念碑六十周年記念式典挙行される (展覧会・講演会)	3月	メーデー禁止令				
			11月	日独防共協定締結				
1937(昭和 12)	—————————————————————————————————————						
6月	29日	平良町防護演習おこなわれる	7月	日華事変おこる				
			7月	中国に抗日民族統一戦線結成				
11月	30日	銃後産業の緊張を促す全国初の農民運動会宮古で催される	11月	日独伊三国防共協定成立				
			12月	南京大虐殺				
1938(昭和 13)	年						
10月	18日	平良彦一平良第一尋常高等小学校長、支那派遣軍慰問に発つ	4月	国家総動員法公布				
			7月	産業報国中央連盟創立				
1939(昭和 14)	年						
3月	04日	出征軍人遺家族の慰安学芸会催される(新世界)	3月	軍用資源秘密保護法公布				
5月	22日	「青少年学徒二賜ハリタル勅語」下賜される	3月	大学軍事教錬必修課目となる				
6月	23日	国民精神総動員沖縄事務局設置される	4月	米殼配給統制法公布				
7月	13日	大日本防空協会沖縄支部結成される	5月	ノモンハン事件				
10月	21日	宮古ではじめて防空演習する	7月	国民徵用令公布				
			9月	「興亜奉公日」始まる(毎月一日)				
1940 昭	四和 15) 年	F						
3月	09日	久松防空自警団結成される	1月	米内光政内閣成立				
3月	16日	下地村出征軍人、戦歿軍人遺家族慰安学芸会	7月	第二次近衛内閣成立				
		催される(下地小)	1	·-···				

日	付	宮古郷土史事項	日付	日本と世界
1940 昭	昭和 15) 年			
3月	18日	出征兵士の遺家族慰安を兼ねて学芸会開催される(新世界)	9月	部落会・町内会・隣保班・市町村常会設置を通牒
10月	12日	平良町大政翼賛運動並に三国同盟締結町民大会催される	9月	日独伊三国軍事同盟成立
10月	14日	下地村大政翼賛会村民大会催される	10月	大政翼賛会発会式
11月	10日	宮古郡「皇紀二千六百年祭」記念式挙行される(郡運動場)	11月	「紀元二千六百年」式典
12月	10日	大政翼賛会沖縄支部発会式催される	11月	大日本産業報国会設立
			12月	内閣情報局設置
1941 昭	昭和 16) 年	F		
2月	01日	「宮古朝日新聞」創刊される	3月	国防保安法公布
2月		宮古郡青少年団結成式挙行される(新世界)	4月	国民学校令公布
4月	01日	学制改革により尋常高等小学校は国民学校 (初等科・高等科) となる	4月	生活必需物資統制令公布 (配給制)
			4月	日ソ中立条約成立
			7月	第三次近衛内閣成立
10月	14日	「満州国派遣義勇軍」勧誘講演会開かれる	10月	東条英機内閣成立
11月		新里校区婦人会部落会ごとにモンベ服講習会 開かれる	12月	対米英宣戦布告
12月	13日	下地村翼賛壮年団結成される	12月	言論・出版・集会・結社等臨時取締法公布
1942 昭	3和 17) 全			
1月	05日	大政翼賛会伊良部壮年団結成される	1月	「大詔奉載日」始まる(毎月八日・興亜奉公日改称)
1月	24日	福里北海岸浦底に飛行機不時着する	1月	日独伊三国新軍事協定調印
2月	13日	特務艦柏丸池間沖に碇泊する	2月	衣料配給切符制実施
3月	30日	翼賛政治体制協議会沖縄県支部結成される	2月	「食料管理法」公布
6月	07日	銃後少国民の文化確立めざし、沖縄少国民文化協会設立される	3月	「戦時海運管理令」公布
6月	26日	大日本婦人会沖縄県支部結成される	4月	米空軍、本土初空襲(東京・名古屋・神戸)
7月		県庁、二市五五町村に一村一社めざし「無神社七か年計画」たてる	6月	ミッドウェイ海戦、日本海軍大敗
10月	08日	平良町武運長久祈願祭催される	7月	情報局、一県一紙の新聞社統合を発表
10月	18日	軍人援護教育研究会開かれる(平良第一小)	8月	米軍、ガダルカナル島上陸
11月	17日	下地村大日本婦人会結成される	11月	拓務省を廃し大東亜省を設置
11月		県庁、標準語純正化のため「会話読本」を国民学校に配布する	12月	大本営、ガダルカナル島撤退決定
12月		宮里百貨店で時局展示会開かれる	12月	大日本言論報国会成立
1943 昭	昭和 18) 年			
3月	10日	平良で街頭"軍歌の会"催される	5月	国民動員実施要綱決定
4月	01日	県庁、女子青年学校の通学服をモンペに統一する	5月	アッツ島日本守備隊全滅
9月		宮古神社移転竣工する(権現堂合祀)	9月	イタリア無条件降伏
10月		宮古商工会、沖縄県商工経済会設立のため解散決議する(公会堂建設基金一万円は国防 費として献金)		
10月	15日	狩俣部落会「標準語・礼法」優良部落として県から表彰される		
10月		七原・屋原・クイズの軍用飛行場用地接収はじまる(~ 1944 年 5 月)		
11月	15日	七〇九五部隊、下地小七教室を借用訓練する		
11月	27日	宮古郡教育部会「故大舛松市大尉遺烈顕彰式」催す		
12月	25日	宮古郡教育部会「模型飛行機」講習会ひらく(平良第一小)	12月	徴兵適令一年繰上げ
		秋から末にかけて貸客船嘉義丸 (2509 トン)・湖南丸 (2664 トン) 奄美大島近海で米潜水艦に撃沈される	12月	学徒出陣

E	付	宮古郷土史事項	日付	日本と世界
1944 B	召和 19) 纪			
3月	22日	南西諸島に大本営直轄の第三十二軍新設され、沖縄防衛本格化する	3月	中学生の勤労動員
4月	26 日 ~ 28 日	当銘由金県視学「決戦教育・運営」について教師対象に各学校で講演す		
4月	29日	平良町役場、出征軍人家族懇談会催す(平良第二小)		
5月	05日	要塞建築第八中隊岸川善二大尉らおよそ 100 人宮古入り		
5月	08日	第二〇五飛行場大隊吉岡軍一郎大尉らおよそ 500 人宮古入り		
5月	08日	平良第二国民学校、軍の使用はじまる		
5月	11日	下地国民学校、軍に接収される(二部授業・一部林間授業)		
5月	20 日	新里国民学校、軍に接収される(9月1日~分散授業)		
5月	27日	宮古郡青少年団「士気高揚弁論大会」催す(新世界)		
5月		宮古西(陸軍)飛行場建設はじまる		
6月	11日	郡内各学校、日曜日の出校は正規の授業として扱う	6月	マリアナ沖海戦
6月	12日	渡辺第三十二軍司令官、再び宮古を視察する	6月	大都市の学童集団疎開
6月	14日 ~15日	宮古神社遷座祭・奉納祝祭催される		
6月	15日	平良の街に午後五時半警戒警報発令、翌日午前二時空襲警報発令される敵機来襲なく午 前五時解除)		
6月	29 日	宮古島守備兵員 4600 人乗組の富山丸徳之島東沖で撃沈され 3700 人死ぬ		
6月		郡内各国民学校で「青少年兵志願隊」結成される		
6月		宮古中(陸軍)飛行場建設はじまる(10月05日完成)		
6月	30 日	第二十八師団、三十二軍に編入される		
7月	01日	平良第二国民学校四教室、軍に接収される (9月2日~全教室接収・御嶽等で分散授業)	7月	「中央公論」「改造」に廃刊命令
7月	07日	政府、奄美・沖縄・宮古・石垣から七月中に老幼婦女子八万人を本土へ、二万人を台湾 へ疎開させるよう命令する(翌 1945 年 3 月までに全県で約 6 万人が九州へ、二万二千 人が台湾へ疎開 = うち宮古は約 1 万人)	7月	サイパン島の日本軍全滅
			7月	東条内閣総辞職、小磯国昭内閣成立
7月	07日	第二十八師団参謀長福地春男大佐宮古着任、県立宮古高等女学校を司令部にあてる(師団長櫛淵銓一中将着任)		
7月	07日 ~08日	大本営参謀長勇少将、先島防衛準備のため宮古入り		
7月	19日	城辺国民学校七教室、軍に接収される(9月14日〜全教室接収)		
7月	28日	西辺国民学校二教室並に家事室、軍に接収される	8月	閣議一億総武装を決定
8月		平良第一・第二・下地三校児童九州疎開へ出発(9月1日宮崎県小林町着・8月22日対 馬丸、悪石島付近で撃沈)	8月	学徒勤労令・女子挺身隊勤労令を公布
9月	14日	伊良部国民学校全教室、軍に接収され、民家で分散授業はじめる(1945 年 3 月 28 日接 収解除)	9月	十七歳以上を兵役に編入
9月	17日	第三十二軍司令官牛島中将・高級参謀八原博道大佐ら第二十八師団巡視に宮古入り		
10月	04日	狩俣国民学校全校舎、陸軍病院分院として接収され、御願所で分散授業はじめる	10月	レイテ沖海戦
10月	10日	那覇・平良など初めて米軍の空襲うける(十・十空襲、宮古は午前 7 時 30 分〜 8 時 15 分のべ 16 機のグラマン来襲、午後 1 時 5 分にも来襲、主として飛行場と漲水港碇泊中 の船舶を空襲、大神島は死者 3 人・住家 13 軒焼失)	10月	神風特攻隊初出擊
10月	13日	午後 3 時 40 分~ 4 時 10 分、米空軍二度目の宮古空襲		
10月	27日	石原雅太郎平良町長・砂川恵知下地村長・友利清祐城辺村長らは疎開者慰問のため台湾 へ出発する		
11月		郡内各国民学校「御真影・勅語謄本」等宮古中学校に移される(野原越の「奉遷所」に 移し毎日男教員交替で当番)		
11月	18日	宮古出身者約800人警備召集される(特設警備五〇五大隊)		
12月	03日	年内三回目の米軍来襲、艦載機十数機主に海軍飛行場を爆撃する		
12月	08日	軍慰安の学芸会催される(伊良部小)		
12月	22 日 ~ 23 日	第三十二軍長参謀長ら迎え宮古島防衛禦作戦大綱決まる		
12月		宮古群島守備の兵力ほぼ展開終わる(陸軍2万8千人・海軍2千人・計3万人余り)		

E	付	宮古郷土史事項	日本と世界	
1945 E	昭和 20) 纪	. ₹		
1月	03日 ~ 08日 11日 ~ 13日 21日 25日 29日	宮古は空襲または警報つづく(7月まで連日空襲あるいは空襲警報発令のため多くの学校は卒修了式・入学式無期延期)	1月	本土決戦等戦争指導大綱決定
1月	12日	第二十八師団長櫛淵中将、漢口第三十四軍司令官に転出する(16 日後任の納見敏郎中将 着任)		
1月	20日	閣議「沖縄県防衛強化実施要綱」決定する		
2月	05日 ~ 08日 13日 ~ 16日 18日 23日 ~ 24日	宮古は空襲あるいは警報発令つづく	2月	近衛元首相、敗戦必至・終戦終結の方途講ずべしと上奏
			2月	ヤルタ会談
2月		島田知事、決戦施策の三大目標(国土防衛の強化、食糧自給の達成・自主輸送の確立) 発表する	2月	米機動部隊本土初空襲
3月	01日 ~03日 05日 ~07日 09日 ~10日 ~13日 ~15日 22日 -31日	宮古は空襲あるいは空襲警報つづく		
3月	23日	沖縄群島、米軍の艦砲射撃うける	3月	硫黄島の日本軍全滅
3月	26 日 ~ 27 日	米軍、慶良間諸島に上陸する	3月	国民勤労動員令公布
3月	27日	数百機による大爆撃、宮古全域にわたって被害をうける	3月	学校授業一年間停止
3月	29日	県立宮古高等女学校、空襲のため卒業式とりやめ証書などは個別に手交する	3月	東京大空襲
4月	01日 ~11日 13日 ~18日 ~20日 ~24日 ~26日 ~30日	宮古は空襲あるいは空襲警報つづく		
4月	01日	米軍、北谷・読谷に上陸する	4月	小磯内閣総辞職、鈴木貫太郎内閣成立
4月	05日	米海軍、読谷村比謝に軍政府樹立、布告第一号発布する		
4月	09日	平良の街は中央部から北西部方面へかけて焼失する		
4月	09日	沖縄守備軍・標準語以外の使用を禁止「沖縄語ヲ以テ談話シアル者ハ間諜トミナシテ処 分ス」		
4月	16日	米軍、伊江島に上陸、ついで本部半島を制圧する(~18日)		
4月	26日	米太平洋艦隊司令官ミッツ提督、宮古島攻略作戦の無期延期を指令する		
5月	01日 03日 ~ 05日 09日 ~ 18日 20日 22日 ~ 31日	宮古は空襲あるいは空襲警報つづく	5月	ドイツ軍、無条件降伏
			5月	「戦時教育令」公布
5月	04日	英太平洋艦隊、宮国沖から宮古島を艦砲射撃する(軍艦 18 隻 385 発撃ちこむ)		
5月	24日	『沖縄新報』この日まで発刊、以後停刊となる		
6月	01日 ~ 22日 24日 ~ 27日 29日 ~ 30日	米軍の空襲つづく(延べ 1733 機)	6月	国民義勇兵法公布
6月	02日	宮古出身者の防衛召集強化される	6月	連合軍「ポツダム宣言」発表

E	日付 宮古郷土史事項		日付	日本と世界
1945 F	昭和 20) 纪	<u> </u>		
6月	10日	米軍司令官バックナー中将、牛島中将に降伏を勧告する		
6月	17日	平良町から伊良部村へ疎開はじまる(19 日、23 日、24 日、29 日の 5 回)		
6月	23 日	第三十二軍司令官牛島満・参謀長長勇、摩文仁で自決―沖縄戦終了する(一般県民 9 万 4000 人・将兵 9 万 4136 人・米軍将兵 1 万 2281 人・総計 20 万余人死ぬ)		
7月	01 日 ~ 03 日 07 日 ~ 08 日 10 日 14 日 ~ 19 日 21 日 29 日 31 日	米軍の空襲つづく		
7月	02日	米軍、琉球作戦終了を宣言する		
7月	13日	西部国民学校、昭和 20 年度入学式おこなう		
8月	01日 06日 ~ 07日 12日	米軍の空襲		
8月	01日	新里国民学校、昭和 20 年度入学式・始業式おこなう	8月	米軍、広島に原爆投下
8月	05日	平良第二国民学校、昭和19年度卒・修了式盛加御嶽でおこなう(8月12日添道・下崎・成川)	8月	米軍、長崎に原爆投下
8月	15日	終戦	8月	日本、ポツダム宣言受諾
8月	17日	米軍機により降伏ビラまかれる	8月	鈴木内閣総辞職、東久邇内閣成立
8月	22日 ~24日	各学校「停戦詔書奉読式」挙行	8月	連合軍先発隊厚木に到着
8月	31日	軍旗、大本営命令により野原岳の洞窟司令部で奉焼のち洞窟を破壊		
8月	31日	「御真影」「勅語」等奉焼す	9月	ミズリー号艦上で降伏文章調印
9月	01日	現地編成及び現地徴収部隊の復員終了	9月	GHQ 陸海軍解体命令
9月	07日	納見師団長ら米軍機で沖縄本島へ渡り、停戦協定に正式調印	9月	GHQ 戦犯容疑者の逮捕命令
9月	24日	米軍約二千名宮古島に海路進駐測候所下にキャンプをはり日本軍の武装解除にあたる	10月	東久邇内閣総辞職、幣原喜重郎内閣成立
10月	06日	兵器奉還業務完了	10月	治安維持法廃止
10月	20日	宮古駐屯将兵らの復員はじまる	10月	政治犯 3000 人釈放
12月	01日	納見中将、連合軍より BC 級戦犯に指名される	10月	国際連合発足
12月	05日	米軍宮古進駐 (8軍政始まる)	11月	GHQ 財閥解体命令
12月	13日	納見中将、野原越司令部の宿舎で自決	12月	農地改革・選挙法改正

第3章 城辺地区の戦争遺跡

第1節 保良

1. 保良の沖縄戦時の概況

昭和19年8月22日に宮古島に上陸した上田巌大佐連隊長率いる騎兵第28聯隊 (豊5640) は長間周辺を中心とした守備を命じられ、各民家に分散宿泊していた。しかし、第28師団に続き、独立混成第59旅団 (旅団長:多賀少将)、同第60旅団 (旅団長:安藤少将)の増強に伴い、10月以降皆粉地、福嶺、新城、割首 (現在の吉野)方面への守備区域の変更となっている。福嶺小学校の『七十年誌』によると、昭和19年10月3日に長間に駐屯していた騎兵第28聯隊の連隊本部 (連隊長:上田巌大佐)が、福嶺国民学校におかれたとある (福嶺小学校創立七十周年記念事業期成会 1989)。

騎兵第28聯隊の第2中隊、機関銃中隊の主力、第1中隊の第1小隊(小隊長:長谷川浩中尉)は新城へ、第1中隊の主力と機関銃中隊の小隊(小隊長:陶山国見中尉)を割目地区へ配置している。各中隊から各小隊にいたるまで にわか造りの茅葺兵舎を各々の守備陣地付近に建設して、水際陣地と主抵抗陣地の二段構えの陣地構築を進めた。その他、東地区では東平安名崎の近辺に、独立速射砲第25中隊(柿崎隊)、保良の海岸線には海軍の監視所が設けられている。

昭和19年9月13日には独立混成第59旅団が、10月3日には独立混成第60旅団が宮古島入りしている。独立混成第59旅団の大部分は伊良部島の防衛にあたるものの、同旅団に属する独立歩兵第395大隊は同旅団を離れ、第60旅団の指揮下に入り、東平安名崎一帯に配備されていたとされる。独立歩兵第395大隊は、昭和20年6月に第59旅団が伊良部島から戻り、北地区の防衛にあたるのに際して、同大隊も第59旅団に復帰している。このことから独立歩兵第395大隊は、昭和19年9月もしくは10月頃から保良地区に駐屯し、昭和20年6月に同地域を離れたものと考えられる。

騎兵第28聯隊が移動した後のこの地域には、独立混成第60旅団に属する独立歩兵第397大隊 (以下、独歩第397大隊とする)がウズラ嶺より移動し、島の東部海岸、東平安名崎付近から保良地区にかけての水際作戦の守備にあたった。その他関連する体験談としては、前田隊が会場 (公民館)に来た頃には、空襲が激化していたことや、集落北部一帯に川村隊が駐屯していたことなどが確認できる。また、前述の福嶺小学校『七十年誌』によると、昭和20年11月3日には当地駐屯の駒13061大隊 (=独歩第397大隊)と、地元住民とが合同大運動会を開催したとの記録もあり、終戦後も保良地区に独歩第397大隊がいたことがみてとれる。

山砲兵第28聯隊の戦史資料によると、「新城東端北方七百米凹地」、「割目北端西方八百米」に山砲75程を、福嶺の東には迫撃砲を設置していることがみてとれる (ref. C11110237900、山砲兵第28聯隊 戦史資料より)。体験記によると中村隊は御嶽の近辺で駐屯し、保良の嶺で陣地壕を掘っていたとある。山砲兵第28聯隊第2中隊の小隊長クラスには、中村臣明中尉の名前を確認することができ、中村隊はこの第2中隊の1小隊であることが推察される。

城辺町史第二巻戦争体験編の上里マツイさんの体験記によると、集落の西から100メートルくらいの



写真 1. 北久場岩陰墓出土の薬莢



図版 1. 火薬を使って魚獲りの図(小林 1997)

ところには木山軍曹に関連したキヤマ壕があったとされ る。木山軍曹の所属する部隊などについては明らかではな いが、このキヤマ壕は弾薬を保管する場所でもあったよう で、青年会場 (公民館)からキヤマ壕へ兵隊が荷馬車で弾 薬を運んでいたところ、荷馬車の安全紐がはずれ、弾薬箱 が路面に落下して破裂。荷馬車について歩いていた子供た ちの中で、マツイさんの長女とその子を子守していた平良 マツエさんが亡くなっている。また、弾薬を輸送中の兵隊 も3人犠牲になったとされ、南軍曹という兵隊は失明して いるが一命をとりとめている。これらの日本軍兵士の詳細 は明らかではないが、上里マツイさんの体験談のなかで は、この時の爆発で死亡した兵士の名前として、重松、村 山(浦山)の名前をあげている。戦没者名簿から保良で亡 くなった戦死者を確認すると、独立歩兵第395大隊に所属 する、浦山茂人兵長 (福岡県)、重松繁人兵長 (福岡県)、 森本盛義上等兵(鹿児島)が3月26日に戦死していること がみてとれる。

前述したように独立歩兵第395大隊は、昭和20年6月頃 まで保良の一帯に駐屯していたことが確認されていること

から、爆発事故に関連した部隊が独立歩兵第395大隊である可能性は高い。その一方で、事故のおこった 日にちについては、証言によって異なり、その日を特定することができない。

平成20年8月から10月にかけて発掘調査の行われた北久場間岩陰墓からは、3点の薬莢が出土している(宮古島市教育委員会 2011)。北久場間岩陰墓は、城辺吉野東地区の土地改良工事に伴ない発掘調査が行われた遺跡で、5基(墓1~5)の岩陰墓から構成されている。3点の薬莢は、墓3の石積下から出土している。岩陰墓からは、青磁の皿や福建・広東系の青花碗、肥前陶磁器などが出土しており、墓の年代については16世紀以降と記されている。3点の薬莢はこれらの墓から出土した遺物とは、明瞭に年代の異なる遺物である。

3点の薬莢はいずれも同じ型で、底面には「DM4」と刻印されている。これと同型の薬莢はイリノソコ 陣地壕からも出土しており、重機関銃などに使用される弾丸と想定される。

また、小林正平氏の手記には昭和20年の6月以降に、東平安名崎の西側にあるマイバー(前場浜)に歩兵第397大隊MG中隊の小林小隊、徳田小隊が陣地を構築したとあり、戦史資料 (ref. C11110011000)からもその配備状況がみてとることができ、マイバーからの敵の上陸を阻止することを目的としている。

このマイバー一帯では、平成20年11月から12月にかけて、保良マイバー上方風葬墓の発掘調査が行われている(宮古島市教育委員会 2011)。遺跡名のとおり近世から近代にかけての古墓群で、全体で3つの墓で発掘調査が行われている。これらの墓はマイバーを前面にのぞむ丘陵の斜面地に位置しており、墓の本来の形態は岩陰墓であったと想定されるが、3つの墓口とも台形状の形態を呈している。自然の地形だけではなく、人為的な掘削を伴うものと考えられる。手記に記された位置からも、保良マイバー上方風葬墓は、岩陰墓を二次利用した陣地壕と想定され、その構築・使用部隊としては、独立歩兵第397大隊の小

林小隊か徳田小隊の可能性が高いといえる。

住民避難壕に関連するものとしては、空襲の時は「チビピィキアブ」に入った。部落の西には「フカスクアブ」もあった。北には「ナナカサアブ」という自然壕もあったなどの体験談も確認することができる。現在では、チビピィキアブは埋められており確認することはできないが、フカスクアブは大きな鍾乳洞である。また、ナナカサアブも現在は確認できていない。他にも七又地区の住民は、ウンヌヤーという自然壕に避難したとのことである。

保良地区の住民の体験記によると、畑のあちらこちらに兵隊が駐屯し、各家庭に食糧の供出を求めたり、徴用で糧秣運搬を強いられたり、訓練に駆り出されたりしたとのことである。畑に掘った井戸や防空壕も兵隊にとられたと語られている。

		昭和 19 年						昭和 20 年						
	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	
騎兵第 28 連隊		長間	•		-	佐川根								
独立歩兵第 395 大隊			←							-	北地区			
独立歩兵第 397 大隊										ウズラ嶺	lacksquare		-	
海軍							?							
独立連射砲第 25 中隊					- →	佐川根	?							
山砲兵第28連隊第2中隊							?							

図版 2. 保良の部隊駐屯変遷図

【注釈】

- 注1:第2中隊の中隊長は三星虎雄大尉。小隊長クラスに本多恒雄中尉、前沢勝治中尉、岩福新作中尉の名前が確認できる。
- 注2:機関銃中隊の中隊長は山崎繁雄大尉。小隊長クラスに佐藤浩中尉、陶山国見中尉、戸沢正明中尉、野田勘士少尉らの名前を確認できる。
- 注3:第1中隊の中隊長は岩間惟憲大尉。小隊長クラスに井橋巧中尉、野口守男中尉、長谷川浩中尉の名前が確認で きる。
- 注4:独立速射砲第25中隊 (柿崎隊) は、隊長以下145名が昭和19年8月12日に宮古島へ上陸。47粍砲8門、車輛9両、小銃若干を保有し、歩兵第30連隊に配属 (ref. C11110016400)。
- 注5:独歩第397大隊第3中隊第3小隊長前田文治少尉と想定される。
- 注6:独歩第397大隊第1中隊長川村秀雄大尉と想定される。
- 注7:『城辺町史第二巻戦争体験編』のなかで上里マツイさんの長女は、昭和20年5月6日に弾薬・破片により死亡とある。また、子守をしていた平良マツエさんも同じく昭和20年5月6日に弾薬爆発により死亡とある。
- 注8: 『太平洋戦争における宮古島戦没者名簿 (都道府県別)』(宮古市町村会 1996)や『都道府県別納骨者名簿』(平良市)においても上里マツイさんの長女らが死亡した昭和20年5月6日付の戦死者名は確認できない。『沖縄県史沖縄戦記録2』における上里マツイさんの体験談では、事故の日を昭和19年2月13日とされるが、城辺町史(1996年)における上里マツイさんの体験談では、事故の日は昭和20年5月6日としている。また、『太平洋戦争における宮古島戦没者名簿(都道府県別)』(1996年)における浦山兵長らの死亡日は、昭和20年3月26日とされている。

【参考文献】

福嶺小学校創立七十周年記念事業期成会(編)1989年『七十年誌』福嶺小学校創立七十周年記念事業期成会

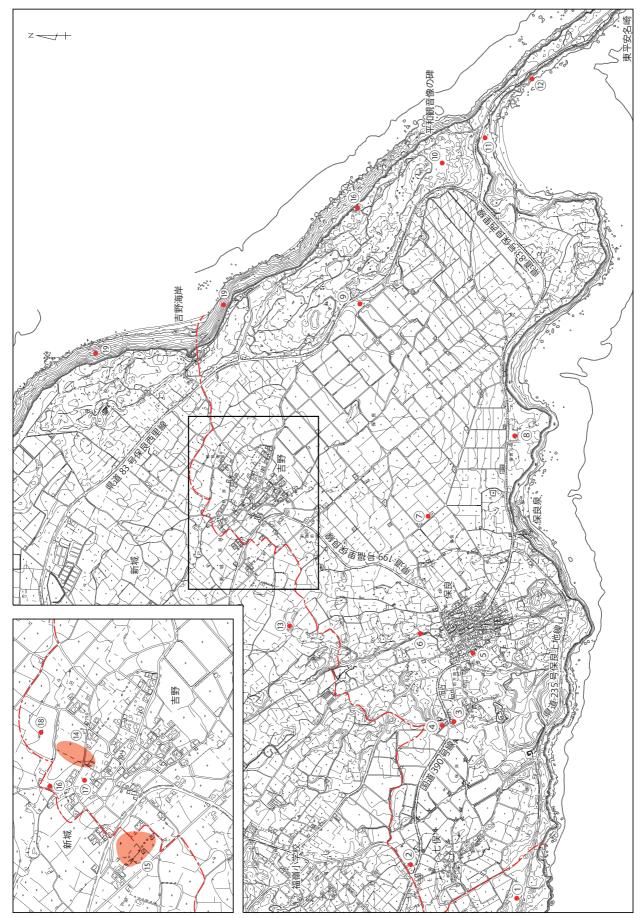
城辺町史編纂委員会(編)1996年『城辺町史第2巻戦争体験編』城辺町役場

瀬名波栄 1975年 『先島群島作戦 (宮古篇)』 先島戦記刊行会

宮古市町村会 1996年『太平洋戦争における宮古島戦没者名簿(都道府県別)』

平良市 発行年不明『都道府県別納骨者名簿』

宮古島市教育委員会 2011年 第Ⅲ章第 2 節 1. 北久場間岩陰墓『宮古島の岩陰遺跡 - 沖縄県宮古島市内遺跡発掘調査 -』 宮古島市文化財調査報告書第 4 集



第1. 図 保良地区成果図(地図)

2. 保良の調査成果一覧

①自然壕

聞き取りによると、七又集落から離れた南に自然壕があり、避難壕として利用していた。(昭和6年生)

②ウンヌヤー(避難壕)

国道390号線の道路の側に壕があり、避難壕として利用されていたが、現在は埋まっており、壕口部分のみが残っている。

③チビピィキアブ(避難壕)

体験談(上里マツイさん)によると、深くて広い大きな自然壕であったが、現在は埋められている。

④フカスクアブ(避難壕)

体験談 (平良清一さん) によると、戦時中、壕口が高くて広く敵に見えるため避難壕としては不向きといわれていた自然壕。現在は所有者が管理している。

⑤前田隊宿舎

体験談 (上里金治さん)によると、旧保良公民館には、独立歩兵第397大隊第3中隊第2小隊前田文治 少尉がいたとされている。

⑥キヤマ壕

軍の爆弾の保管庫として利用された。聞き取りでは、住民も避難壕として利用した。(昭和8年生)

⑦ナナカサアブ(避難壕)

体験談 (平良清一さん) によると、戦時中は避難壕として利用されていたが、現在では土地整備事業でなくなっている。

⑧海軍監視所跡

体験談 (石原金一さん)によると、旧ロラン局辺りに海軍の部隊がおり、松林にテントを張って東の海 を通る船を監視し、本部に報告する勤めをしていたとされる。

9北久場間岩陰墓

平成20年の土地改良の際に、岩陰墓から3点の薬莢が発見され、底面には「DM4」と刻印。同型の薬莢がイリノソコ陣地壕からも出土しており、重機関銃などに使用される弾丸と想定される。

10柿崎隊駐屯地跡

聞き取りから保良1221-99番地附近には、独立速射砲第25中隊の柿崎隊がいたとされる。(大正9年生)

⑪保良マイバー上方風葬墓

小林正平さんの手記によると、東平安名崎の西側にあるマイバーに、歩兵第397大隊MG中隊の小林小隊、徳田小隊が陣地を構築したとあることから、岩墓を二次利用したと想定される。

①東平安名崎の銃眼

保良海岸に銃眼と見られる跡がある。

13村越陣地壕群

平成27年のほ場整備事業に伴い発掘された陣地壕。

14陶山隊駐屯地跡

聞き取りによると、吉野部落の北側には騎兵第28聯隊機関銃中隊陶山隊がおり、地元住民は糧秣運搬をさせられていたとの証言がある。(大正9年生)

15野口隊駐屯地跡

聞き取りによると、陶山隊の駐屯地から東側 (保良1383-1番地、保良1384-1番地)には、野口隊がいたとされる。(大正9年生)

16兵隊壕 I

「城辺町史第二巻戦争体験編」によると、保良919-4番地附近には兵隊壕があったと記されている。

⑪兵隊壕Ⅱ

「城辺町史第二巻戦争体験編」によると、保良882-1番地、882-2番地附近には兵隊壕があったと記されている。

18兵隊壕Ⅲ

「城辺町史第二巻戦争体験編」によると、保良920番地附近には兵隊壕があったと記されている。

19吉野海岸の壕

2005年の調査で確認された壕。今回の調査で同様の壕が北側でも確認されている。



写真 2. ①自然壕



写真 4. ⑤前田隊宿舎



写真 6. (7)ナナカサアブ(避難壕)



写真3. ③チビピィキアブ(避難壕)



写真 5. ⑥キヤマ壕



写真 7. ⑧海軍監視所跡



写真 8. ⑨北久場間岩陰墓



写真 10. ①保良マイバー上方風葬墓



写真 12. ①野口隊駐屯地跡



写真 14. ①兵隊壕Ⅱ



写真 9. ⑩柿崎隊駐屯地跡



写真 11. 似陶山隊駐屯地跡



写真 13. 16兵隊壕 I



写真 15. 18兵隊壕Ⅲ

3. 保良の戦争遺跡

(1) フカスクアブ(ふかすくあぶ)

①所在地

宮古島市城辺字保良深底

②立地 • 現況

保良へ向かう国道 390 号線沿いの保良集落の西部、集落入口すぐの左側にある鍾乳洞。私有地内に位置している。

③歴史状況

戦争体験談や聞き取り調査によると、フカスクアブは保良の住民避難壕として利用されていた。このアブの特徴は規模は大きいものの、開口部が大きく東に向いている為、敵に見えやすいのではないかと危惧したとのことである。近くにはチビピィキアブがあり、地下で繋がっていた。

④遺構の特徴

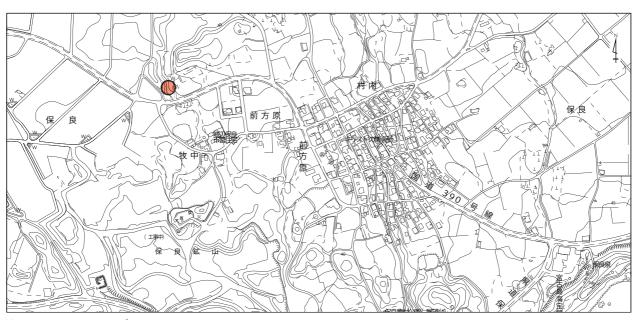
鍾乳洞の開口部は高さ6メートル、幅 15メートルで、東の方に開いている。奥行きは 17メートルを 呈する。



写真 16. 開口部



写真 17. 開口部より内部を望む



第2図 フカスクアブの位置図

(2) ウンヌヤー (うんぬやー)

①所在地

宮古島市城辺字保良深底

②立地 • 現況

ウンヌヤーは、国道390号線沿いの七又集落の東側、保良集落へ通じる道路沿いの畑の片隅にある洞 穴である。洞穴の入口周辺は、耕作地との境をコンク リートによって方形に囲われ、洞穴自体は埋められて おり、現在は入ることはできない。

③歷史状況

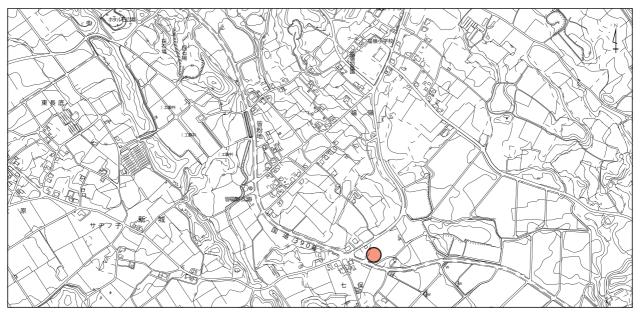
この地域では昔から「鬼が住んでいるところ」と言 われていた自然壕で、戦争体験談や聞き取りによると、 戦時中は近隣の住民が避難壕として利用していた。

④遺構の特徴

本壕は、現在その大部分が埋まった状態にあるため、 その形態を確認することができなかった。



写真 18. 現在の壕口部分



第3. 図 ウンヌヤー位置図

(3) 村越の壕群(むらこしのごうぐん)

①所在地

宮古島市城辺字保良村越・字新城嶺符

②立地·現況

保良集落と吉野集落、新城集落の中間のほ場整備された畑地に位置する。全体で2基確認され、1基は、 ほ場整備工事によって消滅しており、もう1基は現存する。記録保存し消滅した壕を壕1、現存する壕を 壕2とする。

詳細は『長南岩陰墓・長南陣地壕群・地盛南岩陰墓・地盛南陣地壕・村越陣地壕群』(宮古島市教育委員会 2015 年) を参照。

③歷史状況

宮古群島の守備は第 28 師団の宮古島転用に引き続き、独立混成第 59 旅団、同じく第 60 旅団が加わり、 その外各種の配属部隊が相次いで先島集団長の指揮下に入れられ、昭和 19 年 12 月頃までに所定の全兵 力が展開を終わっていた。

島の東地区では東平安名崎の近辺に独立速射砲第25中隊(柿崎隊)、新城・割目(吉野)方面には騎兵第28聯隊を配備、保良の海岸線には海軍の監視所を設けた。

昭和19年12月22~23日の第32軍宮古島防衛作戦会議で、水際に兵力を重点的に集中する水際決戦方式が取られることになり、再度の配備変更が行われた。この地域ではこれまで駐屯していた騎兵第28聯隊が配備変更で中地区へ移動となった後、独立混成第60旅団独立歩兵第397大隊がウズラ嶺より移動し、島の東部、東平安名崎付近から保良地区・新城地区にかけて配備された。同大隊は天号作戦にむけて陣地構築が主任務となる。

保良地区の住民の体験記によると、畑のあちこちに兵隊が駐屯し、各家庭に食糧の供出を求めたり、徴用で糧秣運搬を強いられたり、訓練に駆り出されたりしたとのことである。この壕は前述の状況から独立歩兵第397大隊に関連する可能性を否定できない。

④遺構の特徴

壕 1 は壕口が北側に開口し、全体的に「く」の字型の形態をなす。入口部分から約 10.2 メートルほど直進すると約 140 度折れ曲がり、約 10 メートルほど直進する。壕の高さは、約 $1.7 \sim 1.8$ メートルで、幅は床面部分で約 1.8 メートル、天井部分で約 1.4 メートルと、逆 U の字型の形態を呈している。

本壕の特徴のひとつとして、折れ曲がった部分から地表部にむかって、壕の通路部分が登る形態をなす。



第4. 図 村越陣地壕群位置図

地表部へ続く壕口は、戦後に埋められている。壕内の通路部分には、柱を設けたと思われる堀込が左右対 称に確認された。しかしながら、壕の全体的な形状としては、やや粗雑な構造をしている。

壕2は、壕1の東側に位置し、壕口は約0.8メートルほどと非常に狭く、壕内部も人がひとりは入れる程度の小規模な壕である。壕口部分から東側へ約4メートルほど直進して止まる。

※壕が所在する字は新城嶺符であるが、保良村越と新城嶺符にまたがっていることから、名称については発見時のほ場整備の事業名を由来とし、村越の壕と命名した。



写真 19. 村越陣地壕群遠景



写真 21. 壕 1 内部



写真23. 壕1(壕内から壕口を望む)



写真 20. 掘削後の壕 1 壕



写真 22. 壕 1 灯り取り



写真 24. 壕 2 壕口

(4) 吉野海岸の壕(よしのかいがんのごう)

①所在地

宮古島市城辺字保良割目後原

②立地 • 現況

吉野海岸の丘陵の崖面に位置する。吉野海岸へと下る道路沿いや、砂丘地からその位置を確認することはできるが、壕は崖面に位置する点や雑木林内に位置していることから壕へ至ることはできない。壕の位置する丘陵地は、島尻層(クチャ層)と琉球石灰岩の不整合面が露頭しており、その不整合面の周辺に同様の穴が複数確認できる。

③歷史状況

壕の構築に関しては、地元での防衛召集によって形成された郷土防衛隊第 209 中隊が東は浦底嶺か

ら比嘉越、与那浜方面にかけて、西は久場間までの 海岸線にかなりの数にのぼる壕を構築したと (沖埋文 2005) とあることから、本壕もそれに関連する壕と推定 される。

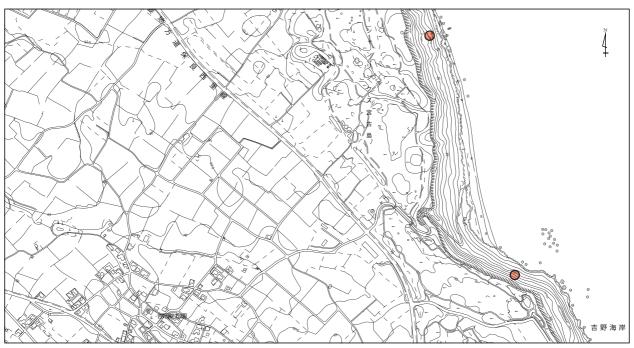
④遺構の特徴

壕の内部の確認を行うことはできなかった。壕口は 北東方向を向き、高さ約2メートル、幅約2.5メート ルと推定され、ドーム型を呈する(沖埋文2005)。

今回の踏査で、本壕と類似した掘り込みを、北側にも確認できた。



写真 25. 吉野海岸の壕(南側の壕)遠景



第5. 図 吉野海岸の壕位置図

(5) 東平安名崎の銃眼(ひがしへんなざきのじゅうがん)

①所在地

宮古島市城辺字保良平安名

②立地 • 現況

銃眼は東平安名崎のマイバー浜側の断崖に設けられ、海岸部より確認できる。他の銃眼の事例から、銃眼への入口は、東平安名崎の岬部分から縦穴状に掘り込まれ、L字形に曲げて断崖部分に銃眼を設けていることが想定されるが、現在はアダンなどが群生しており、その入口部分を特定することができなかった。 ③歴史状況

独立歩兵第 397 大隊将校の手記の中に「私が与えられた守備範囲は沖合から陣地の右に展開する 300 メート程の三日月形の砂浜で、この砂浜が敵の上陸地点と見なされていた。砂浜の両側は断崖となって居て、大きな岩が積み上げた様になって居る。徳田小隊は西側から、私の小隊は東側からこの砂浜目指して上がってくる敵の上陸船艇を挟撃する形で布陣した。 5 メートル程もある大きな岩の下に出来た空間は砲を据えるのにお誂え向きになって居て、ことさら手を加える事もなかったから、すぐ機関銃砲を此処に据えて、打ち寄せてくる波頭を目標に見立て、これを狙う訓練を始めた。」と記されていることから、この銃眼は筆者の小林小隊と文中の徳田小隊が、「海軍の 23 ミリ機関砲を持って平安名岬に行き、敵の上陸に備えて布陣せよ」との命令の下、布陣していたと考えられる。(「今次太平洋戦争における宮古島防衛戦

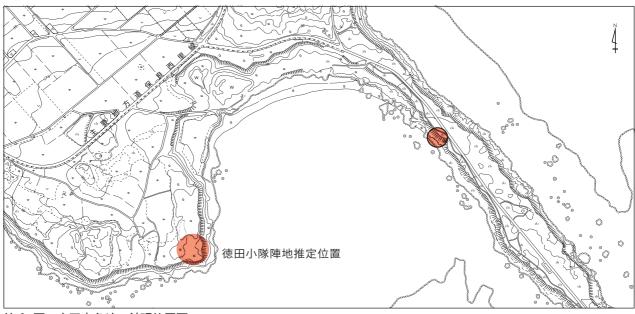
に参加して」 関東甲信越田島隊有志の会 平成9年発 行 より抜粋)

④遺構の特徴

銃眼を海岸部から確認しているのみで、実際の規模などは不明であるが、銃眼は南西部のマイバー浜を向くように設けられており、浜への上陸に対する水際作戦のひとつの遺構であると考えられる。



写真 26. 東平安名崎の銃眼遠景



第6.図 東平安名崎の銃眼位置図

第2節 新城

1. 新城の沖縄戦時の概況

昭和19年8月22日に宮古島に上陸した上田巌大佐連隊長率いる騎兵第28聯隊(豊5640)は、長間周辺を中心とした守備を命じられ、各民家に分散宿泊していた。しかし、第28師団に続き独立混成第59旅団 (旅団長:多賀少将)、同第60旅団(旅団長:安藤少将)の増強に伴い、10月以降、皆粉地、福嶺、新城、割目(現在の吉野)方面への守備区域の変更となっている。

12月22日~23日の第32軍宮古島防衛作戦会議で、水際に兵力を重点的に集中する水際決戦方式が取られることになり、再度の配備変更が行われた。それに伴い騎兵第28連隊は中地区の防禦を担当することになり、昭和20年1月末、佐川根北方高地に部隊本部をおき、佐川根西南方地区一帯に陣地を構築することになった。

騎兵隊が移動した後のこの地域には、独立混成第60旅団に属する独立歩兵第397大隊(以下、独歩第397大隊とする)がウズラ嶺より移動し、島の東部海岸、東平安名崎付近から保良地区にかけての水際作戦の守備にあたった。独歩第397大隊第3中隊(中隊長:大友正一大尉)は新城へ、第3小隊(小隊長:平本和也少尉)は保良付近へ、MG(機関銃)中隊第3小隊(小隊長:小林正平少尉)は皆粉地の松林の中に兵舎を設けている。

(1) 新城

現在の新城集落一帯の部隊の展開についてみていきたい。前述したように、新城には昭和19年10月から昭和20年1月にかけてまでは、騎兵第28連隊が駐屯している。聞き取り調査では、新城の集落内にも騎兵隊が駐屯しており、住宅には将校が宿泊していたとされる(将校1人と付き添い1人)。この宿舎の南東側に位置する新城の旧青年会場(ブンミャー跡)には炊事場が、北西側には騎兵隊の兵舎が設けられ、炊事場から将校の宿舎まで食事を運んでいたとされている。これらの状況から、おそらく住宅は騎兵隊のひとつの部隊の中心的な場所となり、その周辺に関連部隊が駐屯していた状況を想定することができるが、詳細については明らかではない。

体験談では新城地区の南西にある御嶽(パイヌ御嶽)の周辺には兵隊がおり、兵舎や壕があったとある。この壕は近くの皆粉地山(イナクズヤマ)の松の木を伐採し壕の支柱にして構築していた。さらに、通称「オッパイ山」と呼ばれている小山の北の麓に、騎兵隊が幕舎を造って陣取り、集落の東端(原文のママ現況の方角とは異なっている)には騎兵隊の倉庫があったとされる。現在、体験談にある壕跡を確認するには至っていないが、新城集落の西から南西部にかけても、騎兵隊の一部が駐屯していたことが分かる。その他、通称「カーバタザカマ」と呼ばれている坂道では、火葬場があったとの証言が得られている。

次に、昭和20年1月以降に新城集落に移動してきた独歩第397大隊について整理を行う。独歩第397大隊の内、新城集落北側一帯に展開したのは第3中隊(中隊長、大友正一大尉)である(『城辺町史』)。しかし、今回聞き取り調査などを行う中で、第3中隊に関する情報は非常に少なく、その詳細については判然としない。

新城集落での戦争の被害状況としては、集落内に爆弾が落ち、幼い子供が被弾し死亡、炊事場や屋根が被害を被ったとの事である(新城竜男 2歳 新城835 昭和20年7月30日 自宅にて被弾)。また、新城の住民の避難先としては松林の中に逃げ込んだとの聞き取りも得られている。

(2) 皆福

福嶺小学校の『七十年誌』によると、昭和19年10月3日に長間に駐屯していた騎兵第28聯隊の連隊本部(連隊長:上田巌大佐)が、福嶺国民学校に置かれたとある(福嶺小学校創立七十周年記念事業期成会1989)。聞き取り調査では、福嶺国民学校は食糧庫としても使用され、兵隊はその周辺に天幕をはって駐屯し、学校の門には守衛を置くなどの監視所を設け管理していたようである。また、学校の中には馬が20頭程おり、茅葺の厩舎が設けられていたようである。

体験談からも福嶺国民学校附近では、騎兵第28聯隊が本部として駐屯し、隊長は民家に、兵隊たちは 公民館(旧公民館の位置は未明)に寝泊まりしていた。防衛隊として召集された民間人も公民館に宿泊し たとある。他の体験談からも、将校が3人いたとあるが、将校の名前等は不明である。

騎兵第28聯隊が移動した後の独歩第397大隊の状況を知る資料として『今次太平洋戦争における宮古島 防衛戦に参加して』がある。この中の第397大隊第3歩兵砲中隊第3小隊平本和也少尉の手記によると、 昭和20年6月に、第397大隊はウズラ嶺から新城へ展開している(平本1997)。

また、独立歩兵第397大隊歩兵砲中隊の位置は、皆粉地の国道390号線沿いの小山のあたりを兵舎としていた。第397大隊MG中隊第3小隊長の小林正平少尉は、皆粉地の松林の中を兵舎としたと記している。体験談からも、皆粉地の南西、ピンザ嶺という山の南側に大きな部隊が陣取っていたとされ、このピンザ嶺の南側が想定される。さらに、小林さんの手記から、MG中隊第3小隊の北東側は歩兵砲中隊の兵舎であったとされ、その兵舎跡の写真が掲載されている。この写真からその兵舎跡は特定できた。

皆福地区については、2015年9月に圃場整備工事に伴い新たな陣地壕が発見されている。その壕は、琉球石灰岩を掘りこんで構築されており、壕の形態的な特徴から日本軍に関連する陣地壕と捉えることができる。本壕に関連した部隊の特定はできていないものの、この場所にも部隊が展開していたことを示すものである。

戦時下における皆福一帯の住民避難壕としては、学校の近くにはカーラアブという自然壕があり、近辺の住民の避難場所であった。皆福集落の住民の被害状況としては、学校周辺で機銃掃射があり、民間人が死亡している。また、聞き取り調査からは、福嶺国民学校にも爆弾が落ちたとされる。

注1:連隊長をさすものか、部隊長や小隊長などをさすものかは不明である。

注2:『城辺町史』第2巻戦争体験談によると。

與那嶺カマド (52) 新城468 昭和20年4月15日、被弾のため死亡。

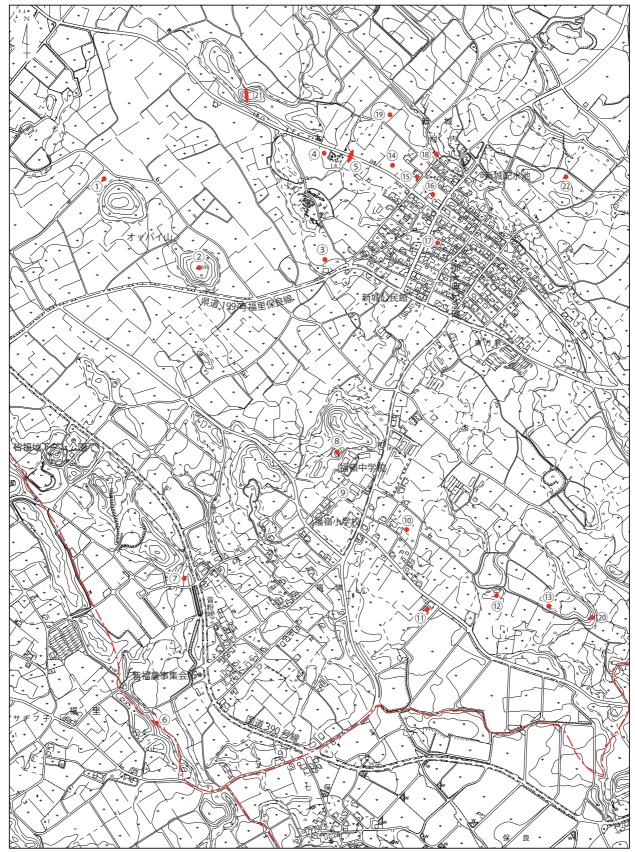
平良マツ (53) 新城470 昭和20年5月14日、自宅にて被弾のため死亡。 平良勇 (15) 新城470 昭和205月14日、自宅にて被弾のため死亡。

【参考文献】

福嶺小学校創立七十周年記念事業期成会(編)1989年『七十年誌』福嶺小学校創立七十周年記念事業期成会

平本和也 1997 「宮古島・軍隊 思い出すまま」『今次太平洋戦争における宮古島防衛戦に参加して』関東甲信越田島隊有志の会

小林正平 1997「わが戦場、宮古島の思い出」『今次太平洋戦争における宮古島防衛戦に参加して』関東甲信越島隊有志 の会



第7. 図 新城地区成果図(地図)

2. 新城の調査成果一覧

①騎兵隊兵舎跡

体験談(新城政良さん)によると、オッパイ山(西の森)の北の麓に騎兵隊が兵舎を造って陣取っていた。

②兵隊壕(未確認)

聞き取りによると、オッパイ山(東の森)には、壕があったとされているが、現在では壕跡は確認できなかった。(昭和8年生)

③壕(未確認)

体験談(友利夏子さん)によると、パイヌ御嶽周辺には兵舎や壕があったとのこと。現在では壕跡は確認できなかった。

4) 陣地壕跡

聞き取りにより、陣地壕があったとされるが、現在では畑地になっている。(昭和8年生)

⑤火葬場跡

体験談(友利夏子さん)によると、病気で死んだ兵隊はカーバタザカマといわれる坂の側の畑で死体を焼いていた。また、聞き取りでは、死体を焼いた匂いが集落まで漂っていた。

⑥独歩第397大隊MG中隊兵舎跡

体験談(与那覇富太郎さん)によると、ピンザ嶺という山の南側に大きな部隊が陣取っていたとあるように、新城 $407 \sim 408$ 番地あたりを宿舎とするような聞き取りも得られた。また、第397大隊 MG 中隊第3小隊長の小林正平少尉の手記には、皆粉地の松林の中を宿舎としたと記されている。

⑦独步第397大隊歩兵砲中隊兵舎跡

第397大隊 MG 中隊第3小隊長の小林正平少尉の手記によると、新城406-1番地あたりには、歩兵砲中隊の兵舎があったとのこと。また、この手記の中には兵舎跡の写真が記されていた。

⑧カーラアブ(住民避難壕)

体験談(本永朝言さん)によると、福嶺中学校の西側に皆福集落の住民が避難したとされる自然壕があり、5~60名くらい入ったとされる。今回その場所を確認することはできなかった。

⑨騎兵第28連隊本部宿舎

福嶺国民学校(現在の福嶺小学校)に連隊本部が置かれたとされ、体験談(普天間明さん)によると、教室には食糧を保管し、門には守衛が立っていた。聞き取りでも同様の証言が得られた。

⑩爆弾投下場所

体験談(普天間明さん)によると、皆福集落では空襲で3名が死亡した(詳細は注2を参照)。

⑪将校宿泊地

体験談(与那覇カ子メガさん)によると、新城519-1番地の民家に将校3名がいたとされるが、将校の名前等は不明である。聞き取りでも与那覇という民家には将校がいたとのことが確認された。

12兵舎跡

聞き取りにより、兵隊がいたとされる。現在は畑地。(昭和8年生)

③福嶺後陣地壕群

平成25年9月のほ場整備事業に伴い発掘された陣地壕。

(14)騎兵隊宿舎跡

聞き取りにより、新城199-1番地一帯には騎兵隊の兵舎が設けられていた。(昭和8年生)

15将校宿泊地

聞き取りにより、新城204番地の民家に将校が宿泊。将校1名と世話役1名がおり、将校の名前等は不

明、世話役は木村か、木がついた名前だったという。(昭和8年生)

16炊事場跡

聞き取りにより、新城の旧青年会場(ブンミャー跡、新城786番地)には、炊事場が設けられていた。(昭和8年生)

①民間人死亡場所

体験談(友利夏子さん)によると、新城835番地の民間人(2歳)が爆弾の破片によって、自宅にて亡くなった。

18騎兵隊倉庫跡

体験談(新城政良さん)によると、集落の東端、新城802-1番地の西側には騎兵隊の倉庫があったとされ、聞き取りでも辺りには騎兵隊がいた。

⑲独歩第397大隊第3中隊(大友隊)駐屯地跡

体験談(友利夏子さん)によると、大友隊は集落の南側にいたとのことだが、城辺町史第二巻戦争体験の 地図では集落の北側になっている。

②福嶺後の陣地壕群

福嶺地区のほ場整備により発見された壕群。

②南野加那の壕

今回の踏査で発見された壕。

②村の後の壕

今回の踏査で発見された壕。



写真 27. ①騎兵隊宿舎跡



写真 29. ③壕(未確認)



写真28. ②兵隊壕(未確認)



写真 30. ④陣地壕跡



写真 31. ⑤火葬場跡



写真 33. ⑦独歩第 397 大隊歩兵砲中隊兵舎跡



写真 35. ⑨騎兵第 28 連隊本部宿舎



写真 37. ①将校宿泊地



写真 32. ⑥独步第 397 大隊MG中隊兵舎跡



写真 34. ⑧カーラアブ(避難壕)



写真 36. ⑩爆弾投下場所



写真 38. ①兵舎跡



写真 39. ① 福嶺後陣地壕群



写真 41. ①騎兵隊宿舎跡



写真 43. ⑥炊事場跡



写真 45. 18騎兵隊倉庫跡



写真 40. ③福嶺後陣地壕群



写真 42. ①将校宿泊地



写真 44. ①民間人死亡場所



写真 46. 19独步第 397 大隊第 3 中隊 (大友隊) 駐屯地

3. 新城の戦争遺跡

(1) 福嶺後の陣地壕群跡(ふくみねぐすのじんちごうぐんあと)

①所在地

宮古島市城辺字新城福嶺後

②立地 • 現況

本壕は、福嶺後地区のほ場整備工事に際して発見された壕である。琉球石灰岩丘陵地の下部を人為的に掘り込んで構築した壕であり、2基の壕が隣接して確認されている。ほ場整備工事により消滅してしまうため、平成26年度に宮古島市教育委員会による記録保存調査が実施されており、平成29年度に発掘調査報告書刊行予定である。

③歷史状況

本壕は、人為的に掘り込んで構築されており、日本軍が使用した壕と推察される。

新城には、昭和 19 年 10 月より騎兵第 28 聯隊が駐屯し、昭和 20 年 1 月に移動したのちには、独立歩 兵第 397 大隊が配備されている。

聞き取り調査などでは、本壕を使用した直接的な部隊名などは確認されなかったが、これらの部隊が構築、使用した可能性が考えられる。

④遺構の特徴

本遺跡は、2つの壕から構成される。2つの壕口は、直線距離で約20メートル離れた位置関係にあるが、 壕1は、壕2の位置する北西方向に掘り込まれていることから、連結を予定していたと考えられる。

壕1は、壕口が南東方向に開口し、屈曲しながら北西方向に延びる。壕口の高さは約1.7メートル、幅約1.4メートルで壕口部分から緩やかに下る。壕内は、1.7~1.9メートルと立って歩けるほどの高さを有するが、壕の壁面や床面の構築面は粗い。壕の最奥部には、割れた石灰岩の面に、文字が書かれた場所がある。にじみが激しいため判読が困難であるが、「昭和二十年八月十五日□□」と書かれれてあるとみえる。

壕2は、東方向に開口し、一度屈曲しながらほぼ西方向へのびる。壕口の幅は約1.6メートル、高さ約1.7メートルを有し、壕1同様に緩やかな傾斜を有し、壁面、床面の構築は粗い。また、壕内には天井の崩落による土砂の堆積が厚い場所もある。

※写真は、2. 新城の調査成果一覧の③をご参照下さい。



第8.図 福嶺後の陣地壕群位置図

(2) 南野加那の壕(みなみぬかなのごう)

①所在地

宮古島市城辺新城南野加那

②立地·現況

本場は、今回の分布調査で新規に発見された場である。壕は、小丘陵の中腹分に構築されており、排水地のために掘削を行った岩盤に壕口が開いた状態で確認された。

③歴史状況

城辺町史の体験談には、新城集落の西方に大友隊が駐屯していたことが記されている。大友隊は、独立歩兵第397大隊の第3中隊(中隊長:大友正一大尉)を示すものである。第397大隊は、1945(昭和20)年6月に新城も含めた保良地域に配備されている。それ以前は、騎兵第28聯隊(昭和19年12月に移動)や独立歩兵第395大隊(昭和20年6月移動)なども新城周辺に駐屯している。また、山砲兵第28聯隊も新城周辺に駐屯しているが、本壕の場所に山砲などが設定した記録は認められなかった。

④遺構の特徴

本壕は、全部で2つの壕口が確認でき、通用口と想定される縦穴状の開口部が2つ確認できる。壕口1は、石灰岩丘陵の中腹部分を掘り込んでおり、ほぼ真北に開口する。壕口は、幅が約2.4メートル、高さ約1.9メートルで、すべての面を直線的に整形して、コの字形を呈する。

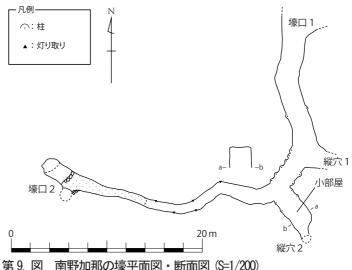
壕口1からは、くの字形に通路が曲がり、東側部分にほぼ垂直に立ち上がる縦穴1が位置する。壕内から開口部を確認することはできないが、少なくとも2メートル以上の高さを有している。

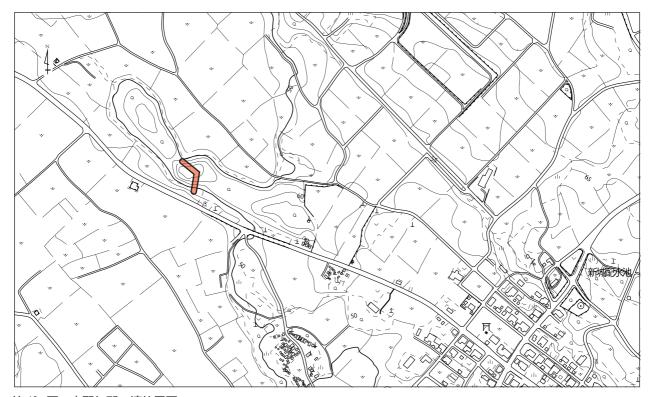
縦穴 1 から南西方向へ進むと、通路部分に柱痕と思われる壁面の凹が、両側面に確認できる。この部分の柱痕の凹の直径は、約 $0.2 \sim 0.3$ メートルほどである。

小部屋1は、入口部分の両側面に同様の柱痕と思われる凹が左右対称に確認できる。小部屋の断面も壕口1の部分と同様に丁寧に整形されたコの字形を呈する。幅は約2.4メートルで、高さは2.1メートルと広い空間を形成する。

南側部分には、縦穴が1つ確認できる(縦穴2)。縦穴1と同様にほぼ垂直に立ち上がり、高さは約2メートル以上を有する。この小部屋から西進すると、壕口の幅が約1.2メートルまでに一気に狭くなる。壁面には、灯り取りが複数確認できる。この狭い通路をさらに西進すると壕口2に達する。

本壕の用途は判然としない。しかし、東側部分は何らかの重火器を格納するような幅や高さの広い構造を呈していると考えられる。この場合、縦穴には足掛けなどがみられないことから、換気口としての役割を果たしていた可能性もある。それに対し西側部分は、壕口の幅も狭く通用口として使用した可能性も推察される。





第10. 図 南野加那の壕位置図



写真 47. 壕口 1部分の遠景



写真 49. 小部屋部分



写真 48. 壕口 1



写真 50. 壕口 2

(3) 村の後の壕(むらのこしのごう)

①所在地

宮古島市城辺新城村の後

②立地·現況

本遺跡は、新城の集落の北方の小丘陵下部に位置する。周辺は、畑地として利用されているが、本遺跡 同様の周辺には雑木林が部分的に点在する。また、遺跡一帯は草木の繁茂も激しく、壕の確認を行うこと が難しい遺跡である。

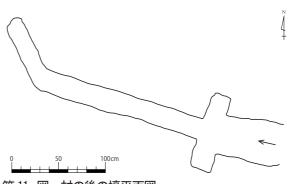
③歴史状況

新城地域には昭和19年10月から昭和20年1月まで、騎兵第28聯隊の一部が駐留し、その後、独立 歩兵第397大隊第3隊が移駐してきている。人為的に構築された本壕は、どの部隊がどの段階で構築し たか確定することは困難である。

④遺構の特徴

本遺跡は琉球石灰岩を人為的に掘削して構築した壕である。壕口は東へ開口し、幅は 1.7 メートルであるが、土砂が流入しているため高さは 1 メートルほどである。壕口から壕内へは緩やかに下っており、壕内部は壕口からほぼ同じ幅で、約 3.4 メートル西進している。この 3.4 メートル進んだ時点で、両壁面ともほぼ同じ形態で南北に掘り込みを有する。掘り込みの形態は、幅 1 メートル、奥行き 0.8 メートル、高さ 1.6 メートルほどである。

そしてこの両側面の掘り込みから、さらに西へ約8.6メートル直進するが、壕内の幅は約0.9メートルと狭くなる。高さは約1.6メートルである。直進したのち、北西方向に曲がり、約2.6メートルほど直進して突き当りとなる。壕の規模自体はそれほど大きくはないが、非常に丁寧に構築された壕である。



第11. 図 村の後の壕平面図



第12. 図 村の後の壕位置図



写真 51. 壕口



写真 52. 壕内部から壕口を望む



写真 54. 壕口付近



写真 53. 壕内部



写真55. 村の後の壕遠景

第3節 福里

1. 福里の沖縄戦時の概況

(1) 福西•福中•福南

沖縄戦時の福里に関する情報としては、現在の城辺小・中学校一帯に関するものが多く、その地域一帯 を一括して福西・福中・福南地区として以下に報告する。

『城辺小学校沿革誌』によると、昭和19年7月19日から9月14日まで城辺国民学校に戦車第27聯隊第3中隊(球12102部隊)が駐屯している。9月14日以降は、戦車隊は西部および南部(富阿良後)へ移動している。高阿良後の移動先としては、体験談から戦車隊の幕舎が設けられた場所や、松林の中に戦車を秘匿した場所も確認されている。その一方で、体験談や今回の聞き取り調査では、東高阿良後に近接する西川底(体験談では福南の山)で戦車壕に関する情報が得られ、実際にその壕を確認することができた。松林の中に戦車を秘匿していた以外にも、壕内にも戦車を秘匿していた可能性が考えられる。

戦車隊に関連する体験談としては、歩兵第30聯隊第6中隊(中隊長橋口克己中尉)が福南の高阿良後で戦車の訓練をしたとある。

戦車隊が移動した後の城辺国民学校には、9月14日から11月13日まで独立混成第60旅団の司令部が置かれた。第60旅団の司令部は、11月13日に西城国民学校に移動している。約2ヶ月の期間にわたって城辺国民学校に駐屯しているが、この旅団に関する体験談や聞き取りはほとんど得られていない。

第60旅団司令部が西城国民学校へ移動した11月13日からは、第28師団第4野戦病院の辻部隊(衛生隊)が城辺国民学校に進駐している。体験談からも宮古高等女学校の挺身隊が宿泊した場所や、稲生医大尉の宿泊地、遺体置き場などが確認されている。

福里地域への空襲など被害としては、昭和 20 年 5 月 3 日に城辺国民学校校舎周囲に小型爆弾が落されたほか、ツガマキ御嶽の入口には時期不明であるが 250 キロ爆弾が爆発している。

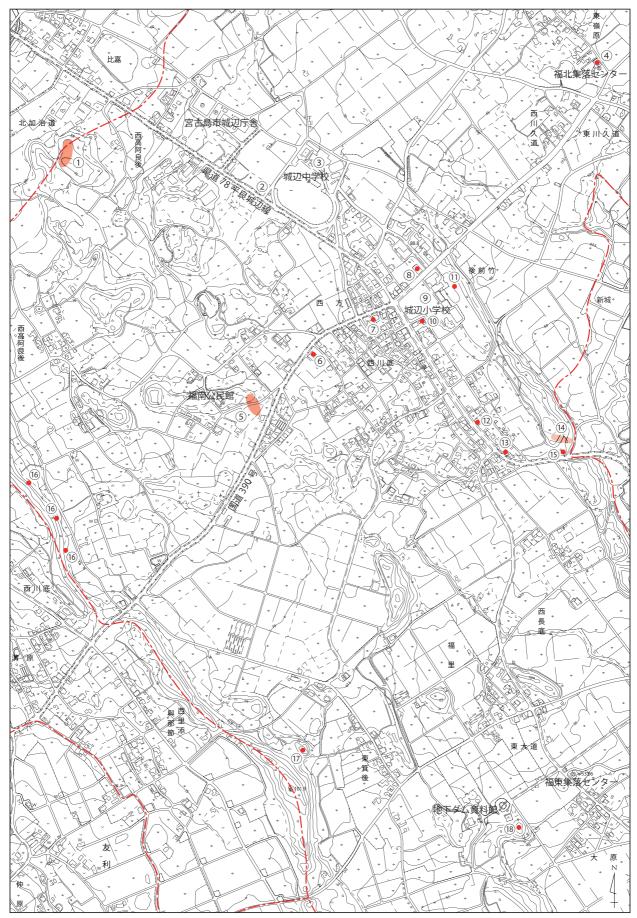
体験談には、ツガマキ御嶽のそばに兵隊の掘った防空壕があったとされ、今回その壕を確認することができた。この壕はナンコージ坂に面しており、ナンコージ坂近くには歩哨がたっていたとされる体験談や、衛生兵の部隊がいたという聞き取りも得られている。その詳細を確認することができなかったが、現在の城辺中学校一帯には、海軍の本部が置かれたとの体験談がある。

(2) 福北

現在の福北集落センターには、特設警備第 209 中隊の約 200 名が天幕を張って宿舎として利用していたとある。この第 209 中隊は与那浜方面から、浦底嶺、比嘉越、久場間までの海岸地帯に壕を構築していたとあり、第 209 中隊が構築したと考えられる海岸地帯の壕が山川、吉野で確認されている。

(3) 福東(一部、福中の南側含む)

福東では、体験談から住民避難壕として利用した自然洞窟が2か所確認されている。



第13. 図 福里地区成果図(地図)

2. 福里の調査成果一覧

①西高阿良後の壕群

聞き取りにより、市営住宅福里第2団地から300メートル西、小丘陵に2基の壕が確認されている。(昭和4年生)

②機関銃設置場所

聞き取りによると、城辺中学校の西隣、県道 78 号線沿いにある N T T 城辺電話交換局あたりには機関 銃が設置されていた。(昭和 4 年生)

③海軍第313 設営隊宿舎

聞き取りによると、当時の城辺村立青年学校 (城辺中学校)に海軍がいたとされ、海軍第313設営隊藤岡小隊が駐屯していた。(昭和4年生)

④特設警備第209中隊宿舎

体験談 (平良恵徳さん) によると、福北集落センターには特設警備第 209 中隊の約 200 名が、天幕を張って利用していた。

⑤戦車置き場の松林跡

聞き取りによると、当時は松林があり、林の中に戦車を置いていた。(昭和4年生)

⑥戦車隊幕舎跡

体験談(荷川取秀子さん)によると、ンミャーマガー(地名)に戦車隊の天幕が張られていたとされる。

⑦宮高女挺身隊宿泊地

体験談 (荷川取秀子さん)では、第4野戦病院の看護婦として奉仕している。昭和20年3月14日看護教育実施実習のため城辺福里に入舎し、3月22日まで看護教育を行っている(『宮古高等学校沿革誌』より)。福里875の民家は、この時の宿泊地であったと考えられる。宮高女とは、宮古高等女学校の略称。

⑧遺体置場

体験談 (荷川取秀子さん) によると、現在の城辺図書館のあたりは当時馬場といわれ、天幕の中に床を張り、亡くなった兵隊を安置していた。

9第28師団第4野戦病院

第4野戦病院として利用される。昭和19年7月19日から9月14日までは、戦車隊(戦車第27聯隊第3中隊)が駐屯し、9月14日から11月13日までは、独立混成第60旅団の司令部が置かれ、11月13日からは第28師団第4野戦病院の辻部隊(衛生隊)が使用している(城辺小学校沿革誌より)。

⑩稲生医大尉宿泊地跡

体験談 (荷川取秀子さん) によると、福里 896 番地の民家はピィダリヤー (屋号) と呼ばれ、第 28 師 団第 4 野戦病院稲生芳文医大尉と水野 (付き添い兵隊) が宿泊した場所。『城辺町史』第二巻戦争体験 談で『稲尾中尉』と表記されるが、『先島群島作戦』で表記される「稲生芳文医大尉」に比定されるものと考えられる。

⑪忠魂碑

昭和2年8月に建立された忠魂碑が福里公園内にある。近接して、平成13年には慰霊碑が建立されている。

12)将校宿泊地跡

体験談 (下地ヒデさん)によると、福里 1239 番地には中尉、少尉の将校が 4 名、十畳間の部屋にいたとされるが、部隊名は不明。

①爆弾投下場所

聞き取りによると、福里 1230 番地には 250 キロ爆弾が落ちた。(昭和 4 年生)

(4)ツガマキ御嶽の壕

聞き取りによると、ツガマキ御嶽の側に兵隊の掘った防空壕があり、ナンコージ (地名)の道路側の壕口と繋がっていたとのこと。現在、壕口はいづれも確認できるが、内部の連結は草木やゴミで埋まって確認できない。聞き取りではナンコージ付近には、陸軍の衛兵がいたとの証言が得られた。(昭和4年生)

15步哨任務地跡

聞き取りによると、ナンコージ(地名)には歩哨が立っていた。(昭和4年生) (歩哨とは警戒・監視にあたる兵の事を示すが、具体的な役割は不明である。)

16西川底の壕群

聞き取りによると、西川底の嶺には3つ並んだ戦車壕があるとされ、中でも中央の壕が一番大きく、戦車を格納しているのを見た。また、戦車にも乗せてもらったこともあり、木材の運搬もしていた。(昭和4年生)

①グンガマヤー(避難壕)

体験談によると、ムイゴシ(地名)といわれる所には避難壕があるとされる。

18自然壕(避難壕)

体験談によると、地下ダム資料館の南東 200 メートルの丘の麓に自然壕があるとされるが、現在では確認できなかった。



写真 56. ①西高阿良後の壕群



写真 58. ③海軍第 313 設営隊宿舎



写真 57. ②機関銃設置場所



写真 59. ④特設警備第 209 中隊宿舎



写真 60. ⑤戦車置き場の松林跡



写真 62. ⑦宮高女挺身隊宿泊地



写真64. ⑨第28師団第4野戦病院



写真 66. ①忠魂碑



写真 61. ⑥戦車隊幕舎跡



写真 63. ⑧遺体置場



写真 65. ⑩稲生医大尉宿泊地跡



写真 67. ①将校宿泊地



写真 68. ①爆弾投下場所



写真 70. 14ツガマキ御獄の壕



写真 72. 16西川底の壕群



写真 74. ①グンガマヤー (避難壕)



写真 69. 14ツガマキ御獄の壕



写真 71. 15歩哨任務地跡



写真 73. 16西川底の壕群



写真 75. 18自然壕

3. 福里の戦争遺跡

(1)福里公園の忠魂碑(ふくざとこうえんのちゅうこんひ)

①所在地

宮古島市城辺字福里後前竹

②立地 • 現況

忠魂碑は、城辺小学校の東、福里公園内にあり、1927(昭和2)年、明治維新で軍功をあげた日本陸軍の創始者山縣有朋の揮毫で、城辺町在郷軍人会の後援で建立された。その隣には2001(平成13)年に慰霊碑が建立され、308名の戦没者を弔っている。

③歴史状況

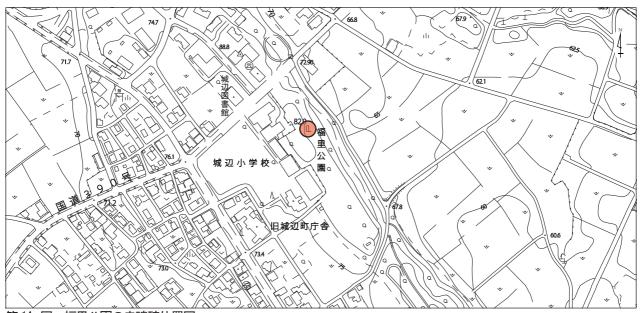
日露戦争直後から全国各地でさかんに建立されるようになった「忠魂碑」は靖国神社に直結する「村の靖国」であった。宮古では1914(大正3)年5月、伊良部村長浜で建立され、ついで、1924(大正13)年1月、平良の下里カママ嶺(揮毫山縣有朋元帥)、1927(昭和2)年8月城辺村福里(揮毫山縣有朋元帥)、1932(昭和7)年3月下地村洲鎌ツヌジ御嶽(揮毫鈴木壮六陸軍大将)に建立している。いずれも町村当局を中心に在郷軍人会等によるものである。(みやこの歴史より引用。)こ



写真 76. 忠魂碑



写真 77. 慰霊碑



第14. 図 福里公園の忠魂碑位置図

(2) 西川底の壕群(にしかわぞこのごうぐん)

①所在地

宮古島市城辺字福里西川底

②立地 • 現況

国道 390 号線を城辺小学校へ向かう西里添と福里の境の低い丘陵に位置し、壕口は東側を向いている。

③歷史状況

戦車第 27 聯隊第 3 中隊は昭和 44 年 7月 17 日に宮古島に上陸している。城辺小学校沿革誌によると、『昭和 19 年 9月 14 日、当校駐屯の戦車隊、当校より西部および南部へ移動。当校舎には八□□旅団司令部設置。校舎大部分採用される(但し職員室除く)』とあることから、戦車第 27 聯隊第 3 中隊は宮古島上陸後、一時期、城辺小学校に駐屯したと考えられる。その他、城辺町史第二巻戦争体験談編では、戦車隊は高阿良後の前ミャーマガーに天幕を張り、炊事に井戸を利用していたとの事である。

また、歩兵第30 聯隊に現地入隊し、福南の高阿良後で実際の戦車で訓練したとの証言もあり、この福南の地には戦車隊が駐屯した事を裏付けている。同中隊は戦車を12台保有し、総勢124名であったことが同中隊の戦史資料で確認できる。西川底は字福里の南側に位置し、この地の壕群は戦車第27 聯隊第3中隊との関連性が高い。

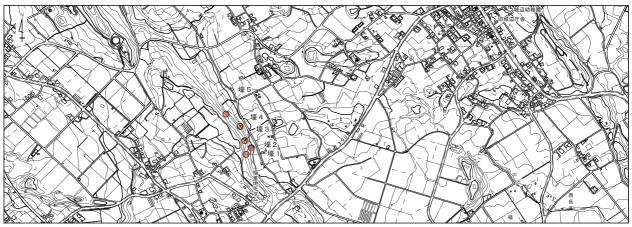
④遺構の特徴

場群は、西川底にある嶺の東側の麓に、約30メートルの間隔をあけて等間隔に5基の壕口が確認できる。 5基中3基の残存状況は良好で、1基はゴミの流入により入口がほぼ埋まっている状態であるが、内部は 広く残地は良い。

壕1。琉球石灰岩を掘り込んで構築されている。壕口は東を向いており、幅約4メートル、高さは約3メートルと広く、断面はU字型を呈す。内部は、壕口から西方向に直線的に14.5メートルほど進み、奥に行くほど尻すぼみとなり、約3メートルまで幅が狭まる。左奥にも通路が南西方向に折れ曲がっている。幅約0.8メートルの通路が上方向にアールを描きながら約7メートル登り、南方向を向くともうひとつの壕口にでる。

壕2。羨道のみが構築され壕内部については掘削の行われていない構築途中の壕である。羨道部分の幅は3.3メートル、長さ5.1メートルである。壕口は砲北東を向く。

壕3。琉球石灰岩を掘り込んで構築されている。羨道が17メートルほど続いており、壕口が北東方向に幅3メートル、高さ3メートルの逆U字型の形に開いている。内部は壕口から直線で約14メートル進



第 15. 図 西川底の壕群位置図

んで止まっており、左右の壁面には 1.6 メートル程の小部屋が作られている。右奥には北西方向に通路が 8.5 メートル伸びており、幅 2.5 メートル、高さ 2.3 メートルの脇部屋が作られる。

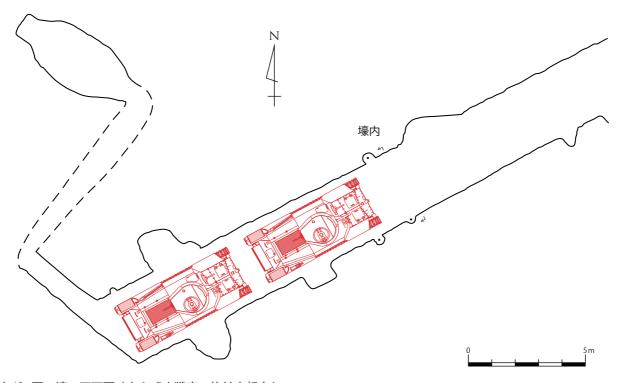
壕4。本壕は、羨道部分の幅が3.4メートルあるが、壕口近くにはコンクリートで固められた石積があり、その部分が通路側にせり出している。この石積のある最も羨道の幅が狭まる部分は幅3.1メートルである。羨道の長さは約8.5メートルを有し、北北東を向く。壕4については、羨道部分と壕内部が直線ではなく30度ほど曲がった形状をなす。そのため、壕口部分は北東方向を軸とする。壕内の幅は約3.3メートルで長さは15.8メートルである。最奥の突き当り部分には約1.8メートル上がった部分に約1.2メートルの通路が構築され、90度折れ曲がった先に、幅1.6メートル、長さ7.2メートル、高さ1.4メートルの脇部屋が設けられている。壕内の天井部分は崩落も多いが、やや丸みを持った略方形状の断面形を呈する。

壕 5。琉球石灰岩を掘り込んで作られている。入口はゴミや土砂の流入により幅 0.8 メートル、高さ 0.4 メートルと非常に狭い。内部は高さ 3 メートルほど降りた位置にあり、南西方向に直線で幅 3.6 メー



写真 78. 西川底の壕群(遠景)

トル、奥行10メートル程伸びている。右側には1か所、幅0.8メートル、高さ1.3メートルの小部屋が作られている。右奥には西方向に通路が約3メートル伸びており、幅3メートル、高さ1.8メートル程の小部屋が作られている。また、その延長線上に上方向に登りながら約3メートル進み、北東と北西に分かれ、それぞれ3メートル程掘り進めて止まっている。奥の通路には、5か所の灯り取が見られ、壕口からの突き当り南壁には高さ1.6メートルの位置に、幅0.25メートル、奥行0.25メートル、高さ0.3メートルの棚が作られている。



第16. 図 壕3平面図(九七式中戦車の格納を想定)



写真 79. 壕 1 壕口



写真81. 壕3 羨道から壕口へ



写真83. 壕3 壕内から壕口を望む



写真 85. 壕 4 壕口



写真 80. 壕 2



写真 82. 壕 3 壕口



写真 84. 壕3 右奥の通路部分



写真 86. 壕 5 壕口

(3) ツガマキ御嶽の壕(つがまきうたきのごう)

①所在地

宮古島市城辺字福里福里(ツガマキ御嶽内)

②立地·現況

国道 390 号線を福里交差点から保良方面へ向かい、集落を抜けた先にある左カーブの下り坂(ナンコージ坂)が下りはじめるあたりで左側へ折れる道路 (旧道)がある。この道路を少し進み、緩く下りだしたあたりの左斜面に下側の壕口がある。

このカーブの北側の標高 85.6 メートルの頂上から南に少し下がった場所にある(福里公園の南端部)、 ツガマキ御嶽の拝所の奥に、もうひとつ上側の壕口がある。

③歷史状況

聞き取り調査によると、このナンコージに通じるツガマキ御嶽の壕は、人力で掘り、2~3メートルの 柱や梁で壕内を補強しながら掘り進めていた。

この壕の下側の出口となるナンコージには、衛兵の立哨する場所があったとの体験談がある。また、軽傷の患者を担架に乗せて運んでいたとの証言もあるから、城辺国民学校に駐屯していた第28師団第4野戦病院の辻部隊との関連性を示唆していると考えられる。

④遺構の特徴

本壕は2つの壕口を有する高低差のある全長約65メートルの壕で、平面形は略「M」字状を呈し、大きく3回屈曲している。南西方向に開口する上側の壕口(以下、壕口1)は、ツガマキ御嶽の拝所の奥に位置する。

壕口1は、幅が約1.6メートル、高さ約1.7メートルで、壕口を掘り込んで構築している。壕口1からは、北東方向に約13メートル直進するが、壕内にむけて約5メートルほどの高低差を有し、傾斜角が約30~40度程度ある比較的急な下りの斜面地となっている。直進後は南東方向に折れ曲がり、10メートルほど進むが、この部分は天井までの高さが低く、約1.4メートルほどで腰を屈めて歩くほどである。

その後、北東方向に折り曲り約 10 メートル進む。この 3 メートルほど進んだあたりから、天井から床面まで黒く変色している。なにかが焼けたような煤のような痕跡がみてとれる。次に再び南東方向に折れ曲がるが、その折れ曲がり部分に $0.2 \sim 0.3$ メートル大の石灰岩が集中する部分がみられる。この礫の集中は、本来石積み構築されていたものが崩れて散石しているものと考えられる。この礫の集中部を境に、前述した煤と思われる黒い変色が見られなくなる。南東方向に折れ曲がった後は、上りの傾斜となり緩やかに湾曲しながら約 15 メートル進んで、南東方向に開口する下側の壕口(壕口 2)へと至る。

壕口2は、ゴミや土砂の堆積によって完全に閉じた状態にあるが、この壕口2の手前2メートルあたりから上りの傾斜が強くなる。この壕口2からの高低差は約3.5メートルで、壕口1の入り口部分の傾斜に比べると緩やかである。また、壕口2あたりには、石灰岩礫を積んだ石積がやや崩れた状態であるが残されている。石積みの高さは約0.8メートルほどである。

壕内は壕口1の入口部分を除いて、高さが約 $1.7\sim2$ メートル、幅が約2メートルほどの人が歩くのには十分な空間を有している。やや礫が散在し崩落した箇所も見られるが、現況として歩いて中を確認できる状態にある。壁面は自然面を良く残しており、構造的には粗雑な作りの感を受ける。また、壕口2は、外側から見る限り、自然洞の様相を呈していることなどから、本来の自然洞を利用する形で壕を構築したものと推察される。

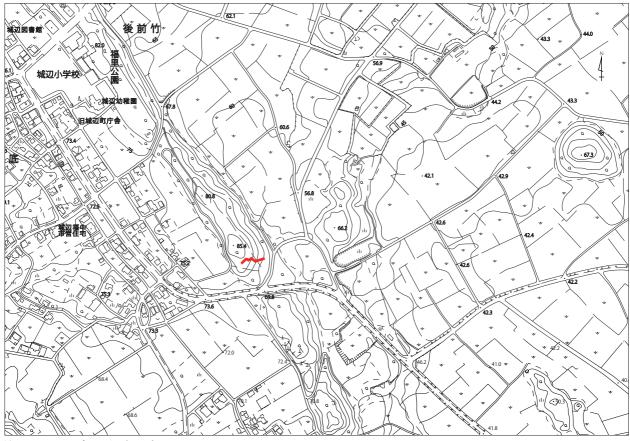
壕内では、いくつか灯り取りが確認できるほか、壁面に小規模な石積も見られるが、その用途は判然と しない。また、1点のみであるが缶詰の缶を確認でしたが、遺物はほとんど残されていない。



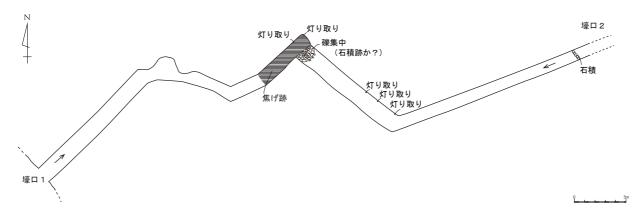
写真87. 壕口1へ向かう御嶽の入口



写真 88. 壕口 1 を内部より望む(高低差約 5 m)



第17. 図 ツガマキ御嶽の壕位置図



第18. 図 ツガマキ御嶽の壕平面図

(4) 西高阿良後の壕群(にしたかあらぐすのごうぐん)

①所在地

宮古島市城辺字福里西高阿良後

②立地·現況

県道 78 号線(城辺街道)を城辺小学校へ向かう、比嘉(加治道)と福里の境の低い丘陵に位置し、壕口は西側を向いている。

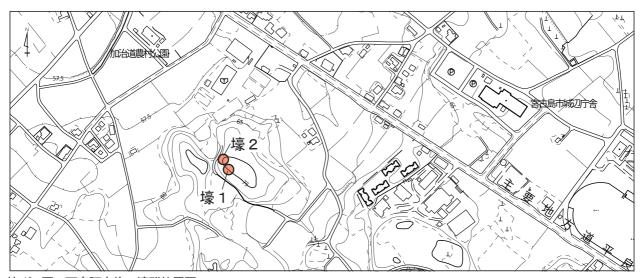
③歴史状況

山砲兵第28 聯隊の戦史資料 (ref. C11110237800、C11110237900) の砲兵隊陣地構築一覧表によると、「川治道城辺街道西側高地に山砲2門」を設置している。記された川(加)治道城辺街道西側高地は、小字西高良後と比定できることから、本壕は山砲兵第28 聯隊と関連する壕の可能性が高い。

④遺構の特徴

壕1は、壕口が南西方向に開口し、幅3.4メートル、高さ3.1メートルを呈する。壕の平面形態としては、壕口より北東方向へ約6メートル直進し、北西方向に90度、折れ曲がり、略S字状に緩やかに湾曲しながら約7.3メートル進んで突き当りとなる。直進部分の最奥部には幅1.6メートル、奥行0.9メートル、高さ0.75メートルの棚状の堀込を有する。直進部分の通路は壕口から同じ幅、高さで構築され、非常に広い空間を有し、何らかの兵器を格納する目的が推察される。壕口の先は、石灰岩の掘り込んだ羨道の造りとなっており、長さ約5.7メートル、幅約3メートルを呈する。S字状に湾曲した部分は、幅1.4メートル、高さ2.5メートルの通路状の形態をなす。

壕2は、壕口は北北西に開口し、壕口の幅は約3.3メートルである。南南東に約11.5メートル直進し、南南西に90度、折れ曲がり、壕1同様にS字状に緩やかに湾曲しながら約11メートルほど進んで突き当りとなる。壕口から延びる直進部分は、壕口と同じ幅、高さで直進しており広い空間を有し、左右に4対の柱痕が確認できる。また、直進の突き当り部分には幅1,5メートル、高さ1.8メートル、奥行き1.3メートルの堀込を有する。壕内の断面形態は馬蹄形を呈する。S字の部分は、幅1.2メートル、高さ1.7メートルで通路状の形態を呈する。壕1、2のS字状の通路は、それぞれの壕に向かっていることから、2つの壕をつなげる目的で構築されていた可能性が高い。



第19. 図 西高阿良後の壕群位置図



写真89. 壕1 壕口部分



写真90. 壕1 S字状通路部分



写真92. 壕2



写真 91. 壕 1 棚状の掘り込み



写真93. 西高阿良後の壕群(遠景)

第4節 比嘉

1. 比嘉の沖縄戦時の概況

比嘉の集落に日本軍が駐屯し始めたのは、1944年の9月頃とされる(比嘉自治会創立150周年記念事業期成会)。聞き取り調査では、駒部隊、「球部隊、工兵隊などの部隊がいたとの話があり、明確な部隊名としては駒13064部隊が聞けた。駒13064部隊は独立歩兵第400大隊の通称で、聞き取り調査で川村尾張大隊長、安藤一第2中隊長の宿泊地が確認されている。

作尾嶺にある高腰城跡には通信施設が設けられていたとの情報がある(宮古毎日新聞 2015年7月26日 掲載)。高さ2メートルの土台が設けられ、監視所(もしくは見張所)としての役割も果たしていた。また、通信隊は公民館や集落内の民家にも駐屯しており、聞き取り調査の中で、通信隊の宿舎として利用されていた民家には下里太郎(狩俣出身)、上原信一(吉田出身)の名前を確認することができた。

比嘉には第32軍電波警戒独立第2警戒隊が駐屯していたことが戦史資料から確認できる (ref. C11110272300、C11110272600)。独立第2警戒隊は増田中尉を警戒隊長とし、第32軍通信隊1個分隊と、第28師団通信隊1個分隊から構成されている。独立第2警戒隊の中には、下里太郎という上等兵の名前が確認でき、民家に独立第2警戒隊の一部が駐屯していたことを裏付ける証言といえる。民家については、本部であったとの聞き取りもあり、この民家は独立第2警戒隊の本部であった可能性が高い。また、比嘉の仲尾嶺ファームポンドには、移動式の通信機器を積載したトラックが出入りしていたとの聞き取りが得られている。

その他、駒1308部隊が比嘉の集落に駐屯していたとされる(比嘉自治会創立150周年記念事業期成会)。 駒1308部隊はおそらく駒13068部隊のことと想定され、独立混成第60旅団工兵隊の通称である。本部 隊の資料は1件 (ref. C11110014500) 確認できたものの、比嘉への駐屯の状況などについては記載がな く、その詳細は不明確な部分が多い。

集落周辺では、一般兵は茅葺の兵舎を建て駐屯していたほか、部隊の中隊長などの士官は集落内の民家に宿舎している。そのため当時の軍の様子を伺い知ることができる証言も多かった。また、爆弾の落ちた場所なども体験談にはみられ、マラリアによる被害が大きかったことなども記されている。

『宮古島建築兵始末記』の中には、「東飛行場建設予定地に分遣され長間と比嘉の間の小松林を伐り、縄張りをもらって、張り切っていた第2分隊(要塞建築勤務第8中隊の分隊)が、その着工もしないうちに撤収を命ぜられた」とあり、比嘉の一帯には東飛行場の建設が予定され、要塞建築勤務第8中隊の第2分隊が派遣されていたことが判る。

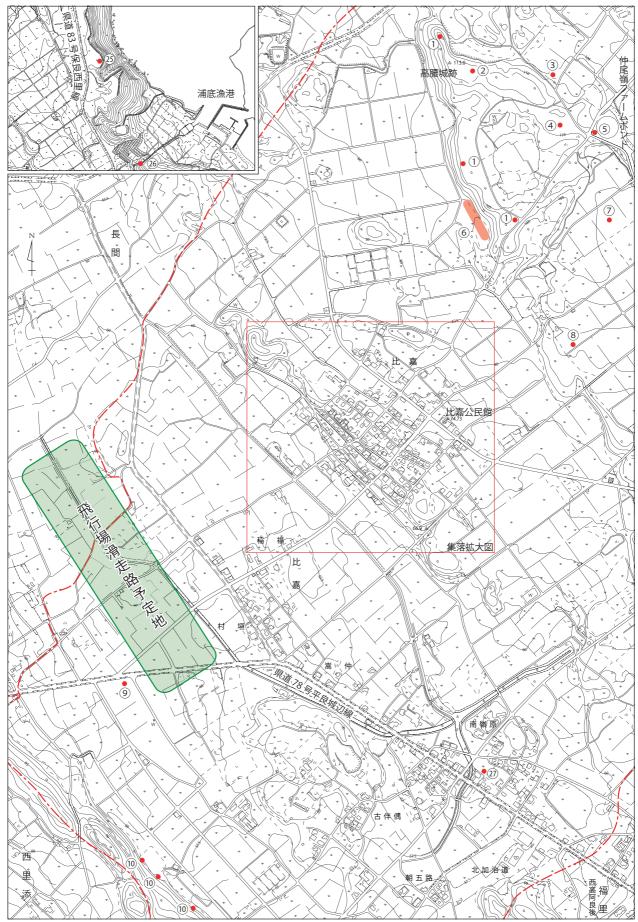
聞き取り調査でも、比嘉集落の南西側に位置する福地と呼ばれる平坦地から長間に向けて、滑走路の 建設が予定されていたとの証言が得られた。また、聞き取りの中でも、『宮古島建築兵始末記』にあるよう に、杭打ちまでされたものの、実際の作業は行われなかったとの話があった。当時の具体的な滑走路の位 置や長さは不明であるが、建設が予定されていた範囲を確認することはできた。

滑走路建設予定地の近くの通称「下の島」と呼ばれる地域(小字の福地・稲福あたりと思われる)には、 工兵隊がいたとの聞き取りも得られているほか、建設予定地の松林の中には年をとった兵隊がいたとの聞 き取りもあることから、下の島周辺に駐屯していたと考えられる工兵隊は、この東飛行場に関連した要塞 建築勤務第8中隊第2分隊であった可能性が高いといえる。しかし、第60旅団工兵隊が比嘉に駐屯して いたとの記録もあることから、東飛行場建設との関連性についても留意する必要がある。

池原・久路布の西側丘陵では、聞き取り調査をきっかけに複数の壕が確認されている。聞き取りでは戦車壕と呼ばれていたが、壕の規模や戦車との関連性については戦史資料や関連資料からは、本地域と戦車隊に関する資料は得られていない。しかしながら、壕の規模からは戦車に関連する壕の可能性も高いといえる。



第20. 図 比嘉地区(拡大)成果図(地図)



第21. 図 比嘉地区成果図(地図)

2. 比嘉の調査成果一覧

①高腰城跡の蛸壺と壕群

高腰城跡内には蛸壺や壕群が見られ、通信施設が設けられていた事から、通信隊が関係した蛸壺や壕群と思われる。

②通信隊櫓跡

聞き取りによると、高腰城跡には通信施設の中に、2メートル程の櫓が設けられ、昼夜に渡り監視をしていた(昭和10年生)。

③按司の泉の壕

洞泉の奥に、人為的に掘った穴が確認されている。

④ツヅピカ御嶽の壕

御嶽の敷地内に、人為的に掘った穴が確認されている。

⑤移動式通信車設置場所

聞き取りによると、現在の比嘉の仲尾嶺ファームポンド付近には、通信機器を積載したトラックが出入りをしていた。(昭和13年生)

⑥兵隊壕・弾薬庫(未確認)

聞き取りによると、ほら穴の中に弾薬倉庫があったとのことだが確認できなかった。(昭和13年生)

⑦インヌチアブ(避難壕)

聞き取りによると、比嘉の中組が避難したとされる自然壕。(昭和13年生)

⑧イザガヌアブ(避難壕)

聞き取りによると、比嘉の子の組が避難したとされる自然壕。(昭和13年生)

⑨慰安所跡

体験談(山城三郎さん)によると、県道から比嘉に入る三叉路の東に慰安所があった。

⑩池原・久路布の壕群

聞き取りにより、池原・久路布の西側の丘陵では3つの壕が確認されている。(大正13年生)

⑪イラパズ御嶽の避難壕

体験談(砂川ヒデさん)によると、比嘉の申組が避難したとされる自然壕が御嶽内にある。

12火葬場跡

聞き取りにより、駒部隊の死亡者を火葬した場所。(昭和12年生)

(13)食糧庫跡

体験談(砂川ヒデさん)によると、ミュー御嶽内に食糧庫があった。

(1)通信隊宿舎(1)

比嘉68番地の民家が、通信隊の宿舎として利用されていた。

⑤川村尾張大隊長宿泊地

比嘉19-2番地の民家での聞き取りによると、この民家にはカワムラオワリという軍人が宿泊していたとのこと。これは独立歩兵第400大隊の大隊長である、川村尾張のことと比定される。また、同民家での聞き取りにおいて、アンドウ、オサカユキオ、サトウタカオ、ヤマグチ、ノダ、キクチ、ウチダといった軍人の名前が挙げられた。このうちアンドウは同大隊の第2中隊長の安藤一と考えられる。また、ヤマグチについては、聞き取りによって得られた、集落内に宿泊していた第32軍電波警戒隊独立第2警戒隊の警戒分隊長、山口正雄軍曹の可能性が考えられる。

16爆弾保管庫

体験談(砂川ヒデさん)によると、比嘉5番地の東に爆弾が積まれており、敵の機銃弾で家が焼けたので、軍が家を造った。

①駒部隊兵隊宿舎

体験談(砂川ヒデさん)によると、カムラヤー(屋号・比嘉62番地)の前に駒部隊がいたとされている。聞き取りでは本部とされ、近くには衛兵も立っていた。

18安藤第2中隊長宿泊地跡

聞き取りによると、茅葺の家で独立歩兵第400大隊第2中隊の安藤一のみが使用した。現在は畑地。(昭和9年生)

19食糧庫跡

聞き取りによると、ヨコオウジという階級の高い兵隊が食糧班におり、缶詰やお米を貰った。(昭和13年生)

20経理部

体験談(砂川ヒデさん)によると、比嘉11番地に経理部があったが部隊名は不明である。

②爆弹投下場所

体験談(砂川ヒデさん)によると、ウヤキヤー(屋号・比嘉12番地)の南に爆弾が落ちたとされ、聞き取りでは、50キロ爆弾で、その破片により死亡者や負傷者もでたとのこと。

22通信隊宿舎(2)

比嘉125番地の民家で、上等兵が $5\sim6$ 名おり、宮古出身者 2 名もいた。通信隊の宿舎として利用されていた。

23兵隊宿舎

聞き取りによると、比嘉130番地には馬に乗った階級の高い兵隊がいた。(昭和13年生)

24通信隊宿舎(3)

聞き取りによると、当時の比嘉青年会場 (現在の比嘉地域総合施設) には通信隊がいたとされる。(昭和7年生)

②屋良座の壕

砂川雅一郎氏のご教示により確認された壕。

26 瑞福隧道の弾痕

砂川雅一郎氏のご教示により確認された痕。

⑦加治道の避難壕跡

加治道地区のほ場整備により発見された壕。



写真94. ①高腰城跡の蛸壺



写真 96. ③按司の泉の壕



写真 98. ⑤移動式通信車設置場所



写真 100. ⑦インヌチアブ(避難壕)



写真 95. ②通信隊櫓跡



写真 97. ④ツヅピカ御嶽の壕



写真 99. ⑥兵隊壕・弾薬庫(未確認)



写真 101. ⑧イサガヌアブ(避難壕)



写真 102. ⑧イサガヌアブ(避難壕)



写真 104. ①イラパズ御獄の避難壕



写真 106. ① 食糧庫跡



写真 108. ⑤川村尾張大隊長宿泊地



写真 103. ⑩池原・久路布の壕群



写真 105. ①火葬場跡



写真 107. 4通信隊宿舎 (1)



写真 109. ①爆弹保管庫



写真 110. ①駒部隊兵隊宿舎



写真 112. 19食糧庫跡



写真 114. ②爆弾投下場所



写真 116. ② 兵隊宿舎



写真 111. 18安藤第 2 中隊長宿泊地跡



写真 113. ② 20 経理部



写真 115. ②通信隊宿舎 (2)



写真 117. ②通信隊宿舎 (3)

3. 比嘉の戦争遺跡

(1) インヌチアブ (いんぬちあぶ)

①所在地

宮古島市城辺字比嘉赤尾川口

②立地·現況

仲尾ファームポンドの南側のサトウキビ畑の中に位置し、竪穴の壕口は空気抗としてのパイプを立てた 状態で閉じられている。

本遺跡の位置については、砂川雅一郎氏(比嘉自治会長)にご教示いただいた。

③歴史状況

インヌチアブは比嘉集落の北東に位置し、体験談や聞き取り調査などから、集落の中組が避難した壕と される。

④遺構の特徴

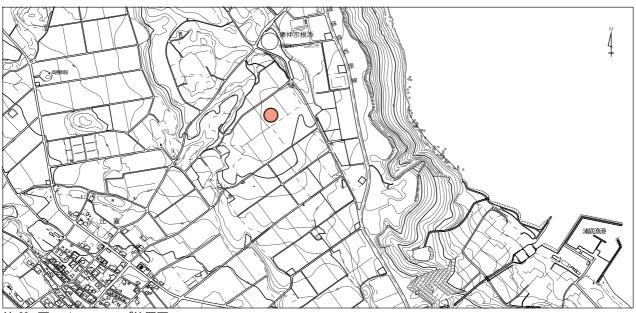
現在は、コンクリートで蓋がされているため、内部を確認することはできない。



写真 118. インヌチアブ近景 (サトウキビ畑内)



写真 119. インヌチアブの現況



第22. 図 インヌチアブ位置図

(2) イサガヌアブ (いさがぬあぶ)

①所在地

宮古島市城辺字比嘉屋良座

②立地 • 現況

本アブは比嘉集落の東方に位置する。洞穴の周辺は、ほ場整備工事が行われ、イサガヌアブの位置する 一角のみが自然地形を残している。

③歴史状況

本アブは比嘉の子組の住民避難壕であることが、聞き取り調査から確認できる。

④遺構の特徴

イサガヌアブは、琉球石灰岩を基盤とする自然洞窟である。洞窟の開口部は、東南東を向き、幅 1.7 メートル、高さ 1.2 メートルほどである。

開口部からは約 $5\sim6$ メートルほど地下へと下る急勾配な地形をなす。斜面地を下ると平坦な地形となり、北北東へと約10メートルほど進み、西北西への向きを変えて洞窟は延びていく。洞床部の地形は平坦であり、幅も $3\sim4$ メートルと広い空間を有するが、天井までの高さが約 $1.2\sim1.5$ メートルほどと低く、腰を屈めて歩くような状態となる。

また、地下水が豊富に流れていることから、洞床部の一部に吸い込み口があり、さらに地下へと流れ込んでいる。そのため、洞床部には自然堆積の土が厚く堆積しており、堆積の厚さが約 0.5 メートルに及ぶ場所もあることから、洞窟の最深部まで進むことができなかった。



第23. 図 イサガヌアブ位置図



写真 120. 洞口



写真 121. 洞内

(3) 高腰城跡の蛸壺と壕群(たかうすじょうあとのたこつぼとごうぐん)

①所在地

宮古島市城辺字比嘉仲尾嶺

②立地 • 現況

高腰城跡の蛸壺は、県指定史跡の高腰城跡に、1基が確認されている。高腰城跡は丘陵上部に立地しており、東海岸を一望できる。

また、高腰城跡の南側に1基の蛸壺と3基の壕が点在する。高腰城跡の南側部分は平成29年度の植林 事業に際して発見された戦争遺跡である。

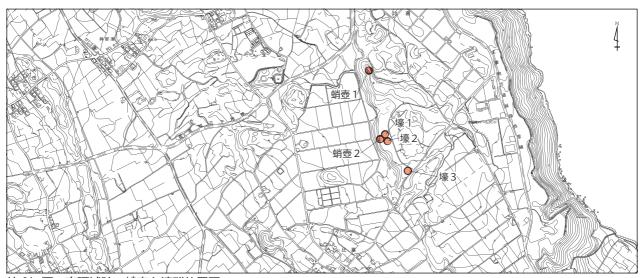
③歴史状況

高腰城跡の近接地域には、通信隊や独立歩兵第 400 大隊が駐屯してことが、聞き取り調査等で確認できる。この蛸壺や壕群もそれらの部隊と関連していると思われるが、どの部隊が構築したのか詳細は不明である。

④遺構の特徴

高腰城跡内の蛸壺は 1×1.2 メートルの略方形を呈する。蛸壺の内部には厚く土砂が堆積しており、現在の深さは 0.9 メートルほどである。

高腰城跡の南側の2基の蛸壺についても、類似した形態を呈している。また、3基の壕の内、壕1と壕2は隣接しており、琉球石灰岩の岩盤を地下へ向かって掘り込んで構築されている。いずれもほぼ直線的な構造をなすが、壕1はやや湾曲した形態をなす。壕3は、壕1壕2よりも南側に位置し、小規模な琉球石灰岩の岩山を掘り込んで構築した壕である。



第24. 図 高腰城跡の蛸壺と壕群位置図



写真 122. 壕 1壕口部分



写真 123. 壕 1 壕内部



写真 125. 蛸壺 1



写真 124. 壕 2 壕口部分



写真 126. 蛸壺 2

(4) 按司の泉の壕(あずぬか一のごう)

①所在地

宮古島市城辺字比嘉仲尾嶺(按司の泉内)

②立地·現況

本壕は高腰城跡東側に隣接する畑地の一角に位置する。壕は按司の泉と呼ばれる湧水部の脇を人為的に掘り込んで構築されている。湧水はクチャ層と琉球石灰岩の不整合面から流れ出ており、壕はこの不整合面のクチャ層を掘り込んでいる。

内部は天井部からの崩落が激しい。これは前述した不整合面を天井部分に持つことに起因している。天井部分は約 $0.3 \sim 0.4$ メートルの厚さのクチャ層であるが、その上は琉球石灰岩層で内部が空洞化しているため、天井部分の崩落の危険性が非常に高い状況にある。

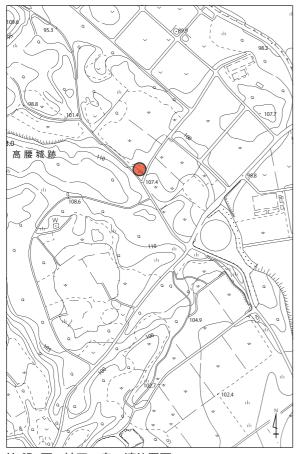
③歴史状況

本場と直接的な関係性を示す部隊の特定はできない。しかし、壕の断面形態は方形型に規則的に構築されていることから、日本軍関連の壕と想定される。

高腰城跡には通信施設が設けられていた点や、比嘉に駐屯していた部隊との関連性も想定される。

④遺構の特徴

壕は湧水部の脇から掘り込まれており、壕口は東北東を向く。壕口から西南西へ約 2.8 メートル直進した後、北北西へ 90 度向きを変えて 5.8 メートル直進して行き止まりとなる。壕内の幅は約 0.6 ~ 0.8 メートル、高さ 1.1 メートルほどと非常に狭い。内部に水はたまっていないが、時期によっては、壕口部分に湧水地からの水が溜まっている状況も確認できる。



第25. 図 按司の泉の壕位置図



写真 127. 按司の泉の壕 入口



写真 128. 按司の泉内部の壕口

(5) ツヅピカ御嶽の壕(つづぴかうたきのごう)

①所在地

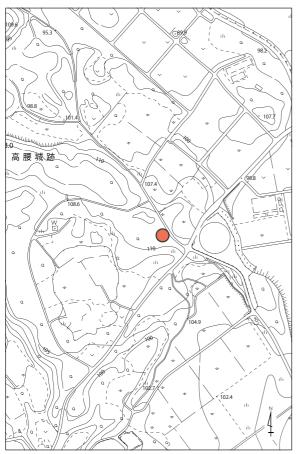
宮古島市城辺字比嘉仲尾嶺(ツヅピカ御嶽に隣接)

②立地 • 現況

ツヅピカ御嶽の西側に隣接するように壕口が開口している。

④遺構の特徴

本遺跡の基盤は泥岩層である。この泥岩層を約1メートルの幅で掘り込み、壕を構築しているが、壕内には水が溜まった状態になっているため、中に入ることはできなかった。周辺には通信隊などの日本軍が展開していることから、これらの部隊との関連が推察される。



第26. 図 ツヅピカ御嶽の位置図



写真 129. 壕口



写真 130. 壕内

(6) 池原・久路布の壕群(いけはら・く一るふのごうぐん)

①所在地

宫古島市城辺字比嘉池原,久路布

②立地 • 現況

本場群は、城辺字比嘉の小字池原と小字久路布の西側に接する丘陵に位置し、合計3基の壕が確認された。壕の前方は戦後のほ場整備によって、一段低いサトウキビ畑が広がり、壕口とは段差がある。

③歷史状況

戦車第27 聯隊第3中隊戦史資料 (Ref. C 11110011100) によると、作戦準備に関する命令の内容として主力をウヅラ嶺の集積所に、一部を福里待機位置近傍に集積すと記されている。同隊の所有する戦車は12基で、本壕は、体験談等から戦車第27練隊が駐屯したとされる福里南の小丘陵沿に構築されており、戦史資料にある福里待機位置近傍と見ることができ、関連性を示唆している

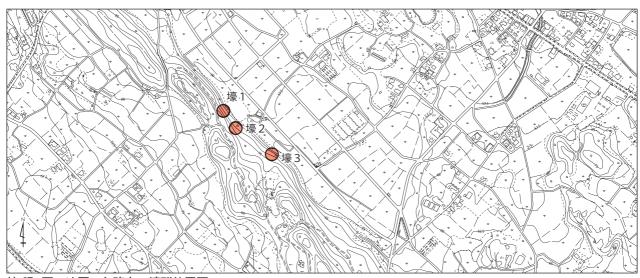
④遺構の特徴

本壕群は丘陵の東側に位置し、合計 3 基の壕が確認された。壕の前方はキビ畑になっており、戦後のほ場工事の為か、岩盤が削り取られている。その為、入口付近の畑からは 1.8 メートルの段差ができているが、距離的には $6 \sim 8$ メートルしか離れておらずアクセスについては比較的容易である。

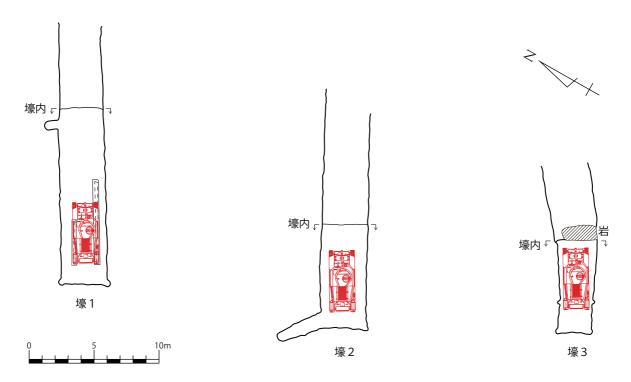
壕1 琉球石灰岩を掘り込んで作られており、残りは比較的良い状態である。約6メートルの羨道が作られている。壕口は北東を向いており、幅3.5メートル、高さ2.9メートルの広い口を開けている。壕口から南西方向に直線で約13.5メートル進んで止まっており、壕口付近の北壁に幅0.5メートル、奥行1メートルの小部屋が作られている。壕内部には車輪幅が0.4メートル、車輪軸がおよそ1.2メートルの轍が残されている。

壕2 琉球石灰岩を掘り込んで作られており、制作途中で中止した状態なのか、残りは悪い。約8.5メートルの羨道が作られている。壕口は北東を向いており、幅3.5メートル、高さ2.2メートルの広い口を開けている。壕口から南西方向に直線で約8メートル進み止まっている。右奥に北西方向に通路が掘られているが、約4メートル進んで止まっている。

壕3 琉球石灰を掘り込んで作られている。壕口付近が崩落による岩盤でほぼ塞がっている。中は幅2.5メートル、高さ2.7メートルと広い作りをしており、壕口から南西方向に直線で約7メートル進んで止まっている。壕口付近の崩落により土砂の流入が内部の半分を占めている為、残りは非常に悪い。



第27. 図 池原・久路布の壕群位置図



第28. 図 壕1・壕2・壕3の平面図(九七式中戦車の格納を想定)



(7) 屋良座の壕(やらざのごう)

①所在地

宮古島市城辺字比嘉屋良座

②立地 • 現況

本壕は東海岸線を通る県道 83 号線沿いに位置する。県道の海岸線部分は植林がされており、その海岸に面する急崖の崖上部分に壕口が確認される。壕口は垂直におよそ $5\sim6$ メートルほど掘り込まれた縦穴式である。

戦後、この縦穴に馬が転落するという事故もあり非常に危険な場所であり、現在は周辺を簡易なフェンスで囲み安全対策が行われている。

本壕の存在については、砂川雅一郎氏(比嘉自治会長)よりご教示いただいた。

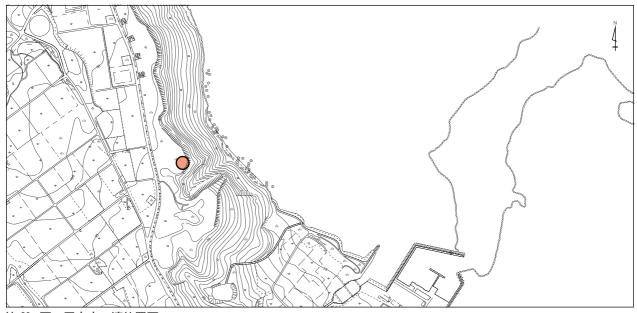
③歷史状況

本場を構築、使用した部隊は不明である。東海岸線一帯には、水際作戦のひとつとして、海岸警備隊の構築した壕が点在しており、本壕もそのひとつであると推察される。

しかしながら、本壕のように垂直に石灰岩を $5\sim6$ メートルも掘り込む形態の壕は類例が少なく、その他の部隊との関連性も想定される。

④遺構の特徴

壕口は幅が $1\sim1.2$ メートルの略方形状を呈し、地質が島尻層(粘土層)への不整合面に達する部分まで、垂直に $5\sim6$ メートル琉球石灰岩を掘り込んでいる。そこから壕は横に向きを変え、10 メートルほど掘り込み、海岸線側の急峻な崖の中腹に位置し開口する。崖側の開口部からは、浦底漁港一帯などの東海岸を一望できる。



第29. 図 屋良座の壕位置図



写真135. 壕口部分(縦穴)



写真136. 壕内部 (縦穴の降り口を望む)



写真138. 屋良座の壕 道路沿いからの近景



写真137. 壕内部 (開口部を望む)



写真 139. 開口部から海岸線を望む

(8) 瑞福隧道の弾痕(ずいふくずいどうのだんこん)

①所在地

宮古島市城辺字比嘉加治多。(瑞福隧道の浦底漁港側の出口部分)

②立地 • 現況

一周道路の県道 83 号線から、浦底漁港側の隧道口部分へむかう道は、草木が生い茂った状態にあり、 隧道口部分にも土砂が堆積した状態にあり立ち入りは困難である。

本壕の存在については、砂川雅一郎氏(比嘉自治会長)よりご教示いただいた。

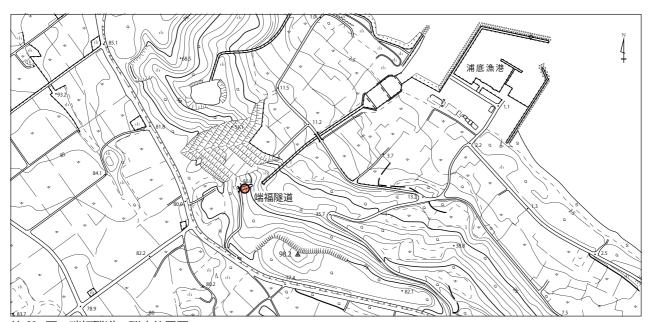
③歴史状況

瑞福隧道は 1933(昭和8) 年に着工し、1937 (昭和12) 年に竣工した隧道である。コンクリート造で、排水溝約 7,000 メートル、隧道約 1,000 メートル、放水路約 600 メートルからなり、高さは 2.45 メートル、中央幅 2.70 メートル、下の幅 2.45 メートルの規模である。

工事を行った当時の瑞慶覧 朝 牛 城辺村長の功績を永く称えるため、瑞の一文字をとって瑞福隧道と名づけられた。2002(平成 14) 年 5 月 15 日に、旧城辺町の建造物の指定を受ける(現在は宮古島市指定文化財〔建造物〕)。

④遺構の特徴

隧道口部分には、5つの弾痕が確認される。いずれも、着弾の衝撃によって円形に破損する。隧道口は コンクリート造りであるため、日本軍の軍事施設と誤認され、機銃掃射を受けたものと推察される。弾痕 の数がそれほど多くないことから、集中的に機銃掃射の対象にされたというよりは、単発的な様相が強い と考えられる。



第30. 図 瑞福隧道の弾痕位置図



図版 3. 瑞福隧道の弾痕(○は弾痕の位置を示す)



写真 140. 弹痕①・②



写真 142. 弾痕④



写真 141. 弾痕③



写真 143. 弾痕⑤

(9) 加治道の避難壕跡(かじどうのひなんごうあと)

①所在地

宮古島市城辺字比嘉朝五路

②立地 • 現況

本壕跡は平成25年度のほ場整備工事に伴い、新たに発見された避難壕である。畑地として利用されており、現在は埋められているため、壕を確認することはできない。平地にある琉球石灰岩の自然の空洞を利用した壕である。

④遺構の特徴

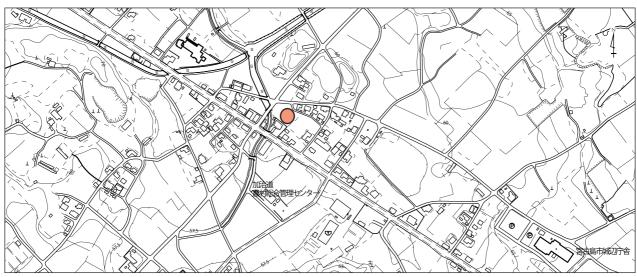
本壕は壕口の部分は、幅1メートル、高さ0.8メートルと非常に狭く、琉球石灰岩の自然の空洞部分を利用している壕内は、壕口から地下へ約2メートルほど直進しながら下る。突き当り部分は幅1.4メートル、高さ1メートルほどの小空間を有するが、人為的に掘削された痕跡は認められない。聞き取り調査から、周辺住民の避難壕として利用されたとの証言が得られている。



写真 144. 壕口



写真 145. 壕内



第31. 図 加治道の避難壕跡位置図

第5節 長間

1. 長間の沖縄戦時の概況

(1) 長南地区

長南地区には、第28師団通信隊、通称更竹通信隊が駐屯している。

第28師団通信隊は、昭和15年8月13日に満州国新京において編成されている。哈爾浜や斉斉哈尓での警備を経て、昭和19年7月20日に釜山港を出帆し、8月12日に宮古島に上陸している。第28師団通信隊は、通信隊長國武達雄陸軍少佐以下500名余りからなり、同通信隊の隷下に中央航空路部沖縄管区、第5保安中隊宮古隊、第16航空通信連隊第4中隊1個分隊、沖縄軍通信隊(電信第36聯隊)、第5中隊第1小隊(無線小隊)があり、独立第4電波警戒隊、第26對空無線隊を指揮下にいれている。同通信隊は、宮古高等女学校で2週間ほど逗留したのち、長南地区へと移駐している。

長南地区における通信隊の各施設は、元隊員によってその場所が記された資料があり、現在でもおおよその位置を特定することができる。通信隊は、長南公民館の一帯を中心に、有線、無線隊の兵舎を各3戸、厩1戸の計7戸の掘立小屋を建てているが、現況としてその痕跡は全く残されていない。事務室が置かれたのは、現在の公民館のある位置で、その北西側の小高い丘は対空監視所として利用され、同丘の下部には衛兵所が設けられており、壕が構築されていたとの聞き取り調査での証言があった。現在では、壕への入り口部分が雑木林で覆われ、一見して壕口を見ることはできない。しかし、今回の調査によって、その壕口を確認することができ、壕内部の形態も確認することができた。

公民館の東側の小高い丘には、壕が掘られ、壕口が3つあって兵隊が駐屯していたとの聞き取りがえられている。現在、その小丘部分ではひとつの壕口を確認しているが、廃棄物や崩落などもみられ、残りの壕口については確認できていない。隊長室が置かれていたとされる場所であるが、現在はサトウキビ畑として利用され、その痕跡は残されていない。その他、公民館の北側にある小丘陵地には、御嶽があり、その周辺には将校室や、食糧庫、被服庫などが置かれていたようである。

長南地区には慰霊碑があったとされ、建立場所は御嶽のある小丘陵地の上部であったという。その後、碑は丘陵の下に移動され、さらに現在の豊旗の塔などがたつ二重越に移動したとのことである。二重越には同通信隊の慰霊碑が建立されているものの、「魂」と記されたと云われている碑とは異なるもののようである (二重越の碑は「通魂の碑」)。移築にともない改築された可能性も想定される。なお、御嶽のある小丘陵地の上部は、何らかの碑が設置されていたと想定される台座が現在も残されている。

1)根間地地区(小字、南根間・仲根間・東根間・北根間・東前田・田又、及び下里添西更竹の一部を含む)

根間地一帯に駐屯していた部隊に関する明確な資料は得られていない。しかし、聞き取り調査では、通信隊と結びつけられる証言が多く得られている。ウシオマンゴという隊長やヤスイ准尉が、パイの御嶽にいたとされる。ウシオマンゴは独立混成第60旅団通信隊の隊長である、牛尾慎吾大尉のことと考えられる。その他、伝書鳩の小屋も設けられており、根間地には独立混成第60旅団通信隊が、駐屯していた可能性が高いといえる。

田又では、自動車修理場があったとの聞き取りが得られているが、自動車修理や整備を行う部隊の詳細 は不明である。

丸国アルミの南西側の崖面には、山砲隊の壕が構築されていたとの聞き取り証言が得られた。山砲兵第28聯隊の戦史資料(ref. C11110237800、C11110237900)では、山砲兵第28聯隊第1大隊が、長間から更竹一帯に展開していたことがみてとれる。現在、壕は埋没して確認することができないため、山砲兵と

2) 山田地区(小字、山田・当根川・真良瀬嶺、及び東仲宗根瓦原・更竹の一部を含む)

山田地区には、輜重兵第28聯隊が駐屯している。輜重兵とは兵站を主に担当する、陸軍の後方支援の 部隊である。

輜重兵第28聯隊は、昭和15年8月23日に満州国牡丹江において編成された。昭和19年6月26日に臨時編成の命を受け、約500名が7月20日釜山を出発。8月22日に宮古島に上陸している。輜重兵第28聯隊は連隊本部の他に、第1大隊として第1中隊から第3中隊、第2大隊として第4中隊から第6中隊で編成されている。連隊には陸上勤務第201中隊、水上勤務第101中隊、船舶工兵第23聯隊第1中隊、独立自動車第104中隊、第7野戦船舶第2移動修理班、船舶輸送司令部宮古出張所、特設飛行場設営隊(昭和20年9月1日解散)が隷属関係にある。

山田地区には輜重兵第28聯隊の本部が置かれており、体験談や聞き取り調査の成果から、連隊長が宿泊した民家を中心に、周辺には中尉の宿泊した事務所や、通信隊の兵舎、経理担当の宿泊地などが隣接している。長間438-3番地の民家は連隊本部の谷山雅哉医大尉が宿泊した。

(2) 長中

長間一帯においては、昭和19年8月22日に宮古島に上陸した、上田巌大佐連隊長率いる騎兵第28聯隊(豊5640)が守備を命じられ、各民家に分散宿泊していた。その後、昭和19年10月3日に長間に駐屯していた騎兵第28聯隊の連隊本部(連隊長:上田巌大佐)が、福嶺国民学校に置かれたとある(福嶺小学校創立七十周年記念事業期成会1989)ことから、長中の集落に騎兵第28聯隊が駐屯していたのは、昭和19年8月22日頃から10月3日頃までの2か月弱であったことが判る。

その後、いつ頃部隊が駐屯し始めたのかは不明であるが、独立歩兵第399大隊が展開していることが、戦史資料 (ref. C11110011000) や戦闘詳報 (ref. C11110326700) から見て取れる。戦闘詳報から第2中隊が長中集落一帯に駐屯していたことを読み取ることはできるが、大隊の本部やその他の小隊の駐屯地の詳細は不明である。

(3) 長北

体験談では、海岸に高射砲を据え付けるための壕構築作業をし、ユーヌヌス御嶽の近くに構築されたこの壕は、鉄筋コンクリートを使用していたとある。また、海軍は与那浜の西側に、陸軍は会場(現在の長北公民館)におり、兵舎は大瀬原の北側や、屋敷原に数多くあった。日本軍は海岸沿いにコンクリートの壕を造り、アメリカ軍の飛行機を標的として、撃っていたとの体験談も確認できる。

これらの体験談はその位置やコンクリートを使用するといった情報から、与那浜崎の砲台に関するものと考えられ、長北にも与那浜崎の砲台構築に関わった部隊が展開していたともいえる。与那浜崎の砲台については海軍第313設営隊の藤岡技術少尉率いる第2中隊第2小隊が主体となって構築作業を行っているが、砲台の構築後、管理・使用を具体的にどの部隊が行っていたのかは明らかにすることができない。しかし、山砲兵第28聯隊の戦史資料 (ref. C11110237800) によると、「與那浜砲台十二榴二門」とあることから、与那浜崎の砲台には12糎榴弾砲が2門設置されたことになる。体験談によると、実際に何十発か撃っていたようである。

その他、長北一帯には駒部隊の兵舎が点在していたことが、体験談や聞き取り調査から確認することができる。大瀬原の松林には本部があり、屋敷原に兵隊がいたとされる。戦車第27聯隊第3中隊の戦史資

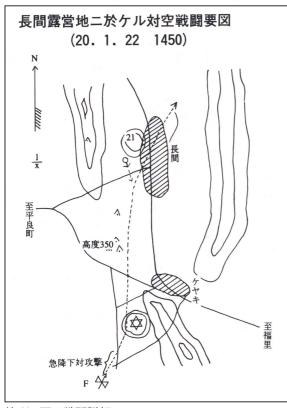
料 (ref. C11110011100) によると、大瀬原を予備待機位置にしたとある。予備待機であることから、実際に戦車隊が駐屯したかについては、体験談や聞き取りでは確認できなかった。また、体験談や聞き取り調査にある本部や兵隊に関しては、独立歩兵第397大隊の戦史資料 (ref. C11110011000) の部隊展開図などから、独立歩兵第400大隊が同地に展開していたことがみてとれ、同大隊は比嘉や長北、与那浜崎を含む東海岸地域に展開していた。

【注釈】

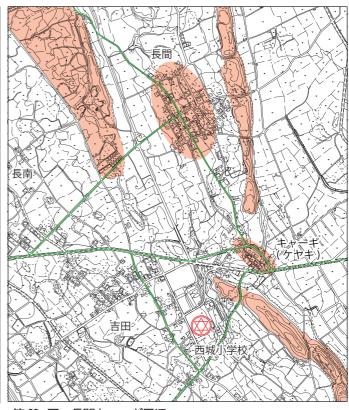
注1:長間露営地二於ケル対空戦闘詳報(昭和20年1月22日の戦闘詳報、独立歩兵第399大隊第2中隊)。この戦闘詳報によると、1月22日午前7時20分から午後5時にかけて、敵機が延べ20機来襲している。その内の14時50分頃の、平良地区・中飛行場四機編隊の敵機が高度2000メートル。この時の状況としては、グラマン機が4機編隊で来襲し、平良地区、中飛行場、南地区方面に爆撃を行った後、旅団司令部(西城小)に対し、急降下対地攻撃を為しつ、長間上空方向に対して飛来してきた。この時、敵機の高度が350メートルと低かったこともあり、第2中隊の中隊長である簗瀬中尉がLG分隊に対して射撃を命じている。この射撃に対する成果は不明であるが、その後敵機は急上昇して北の方へ飛び去っている。この日は、大隊長以下の将校は、旅団司令部へ招致されており、不在であったため、第2中隊長が部隊長代理をつとめていた。尚、LG分隊とは軽機関銃部隊を示すと考えられる。

図は、戦闘要図に記された位置を現在の地図に照合したものである。 は、独立混成第60旅団の本部が置かれた西城国民学校 (西城小)を示し、ケヤキはキャーギ集落を示すものと想定される。戦闘要図に記された丘陵地も現在の地形とほぼ対応するが、長中集落西に位置する丘陵地は、現在ではその地形に変化がみられる。長間の集落の部分に記された「2/ III」のIIIは、戦史資料 (ref. C11110011000) から独立歩兵第399大隊を示すものであり、2 は、同大隊の第2 中隊を示すものと考える。このことからも長中集落一帯に独立歩兵第399大隊の第2 中隊が駐屯していたことがみてとれる。

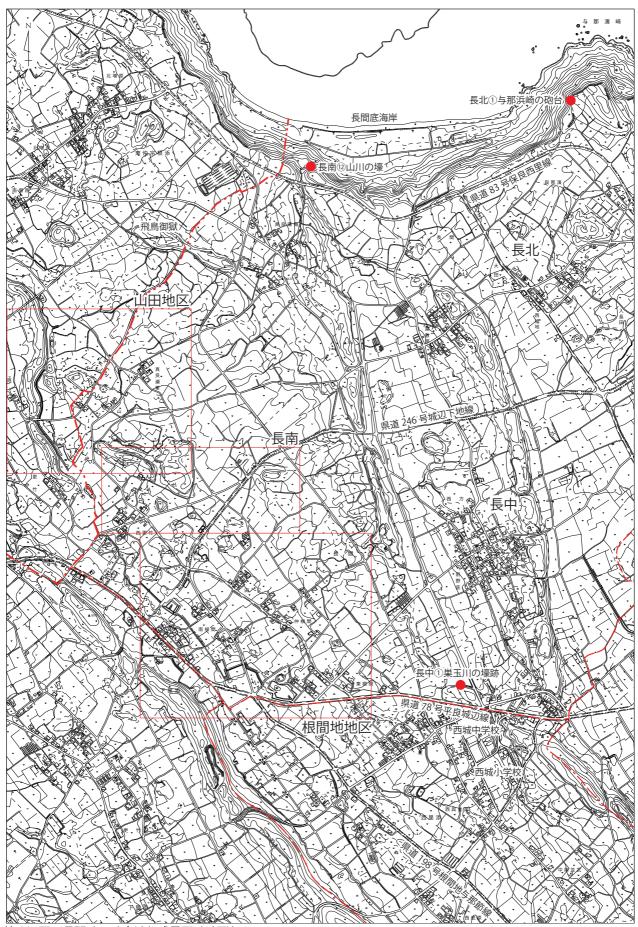
注2:大瀬原(ウルシバル)は、小字の大田・西福地にまたがる集落の通称で、長北地区の中心集落となっている。



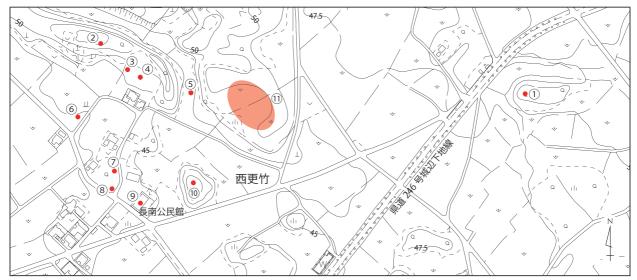
第32. 図 戦闘詳報



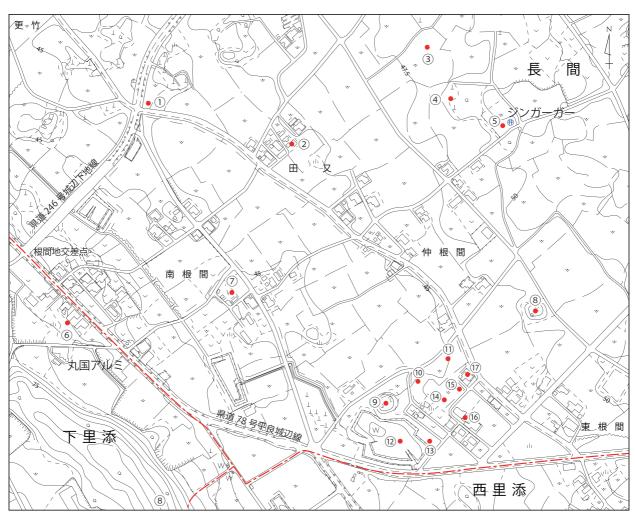
第33. 図 長間キャーギ周辺



第34. 図 長間地区(広域)成果図(地図)



第35. 図 長南地区成果図(地図)



第36. 図 根間地地区成果図(地図)



第37. 図 山田地区成果図(地図)

2. 長間の調査成果一覧

(1) 長南地区

①長南陣地壕群跡 I

平成24年のほ場整備事業に伴い発掘された陣地壕群。

②慰霊碑跡

体験談 (霧生藤吉郎さん)の更竹陣地概図などによると、第28師団通信隊は昭和19年8月に宮古島に到着し、長南へ進駐。同年10月には地元の御嶽の脇に、私設の敢闘神社が造られ、兵たちが拝礼をしていたという。昭和54年4月、31柱を弔う「魂」の慰霊碑を当時の神社附近に建立。その後、地元の事情により慰霊碑を御嶽の山の外へ移転 (麓附近)。更に平成元年4月8日、二重越へ慰霊碑を移転している。ただし、二重越に建立された石碑は「通魂」と記されており、移転・改築の詳細は判っていない。

③食糧庫跡

体験談 (霧生藤吉郎さん) 更竹陣地概図より、糧秣庫と記載。現在は畑地。

4)将校室跡

体験談 (霧生藤吉郎さん) 更竹陣地概図より、将校室と記載。現在は畑地。

5被服庫跡

体験談 (霧生藤吉郎さん) 更竹陣地概図より、被服庫と記載。現在は畑地。

6隊長宿泊地跡

体験談 (霧生藤吉郎さん) 更竹陣地概図より、石垣清太郎宅の隣には隊長室があったとされ、聞き取りでも建物が当時あったとされる。現在は畑地。

⑦対空監視所跡(長南陣地壕群Ⅱ)

聞き取りにより、頂頭部に対空監視所があったとされ、壕口も確認された。(昭和9年生)

⑧衛兵所跡(長南陣地壕群Ⅱ)

聞き取りにより、兵隊が立っていたという場所。(昭和9年生)

9第28師団通信隊本部

体験談 (古見三郎さん) によると、現在の長南公民館に部隊の本部を置き、小さな茅葺の家を事務室と して利用した。

⑩兵隊壕(未確認)

聞き取りによると、現在のゲートボール場の東の山には壕跡が4か所とあったとされており現在は塞がれている。また、当時は木が生い茂り車を隠すためにも利用していた。(大正14年生)

⑪長南陣地壕群Ⅲ

本壕は、ほ場整備工事に伴い確認された壕である。

①山川の壕

宮古島市指定の山川ウプカーのほぼ真上に位置する。石灰岩を掘り込んで構築されている。

1) 根間地地区

①自動車修理場跡

聞き取りにより、田又の集落の外れに当時は松林があり、山田地区にある輜重兵第28聯隊の自動車隊の本部があったとされる。現在は墓地になっている。(昭和4年生)

②炊事場跡

聞き取りによると、長間1089-1番地の民家が炊事場として利用され、若い女の人は向いの井戸の水汲 みなどの手伝いに使われていた。(昭和4年生)

③第4野戦病院分院跡

体験談 (国吉貞子さん) によると、兵舎のすぐ横の方に病院があり、前は田んぼがあったとされる。高い所を掘って防空壕のようにしていたとされ、聞き取りからも大野山林の木を利用して病院として壕の中を構築していた。城辺の病院のひとつだったという。現在は整備事業により畑地になっている。

④兵舎跡·炊事場跡

聞き取りによると、ジンガーガー (井戸) 附近に位置し、工兵隊により兵舎等を構築していた。兵舎の近くには炊事場があり、米つきに行っていた。当時は小高い松林だったが、現在は畑地になっている。 (昭和 4 年生)

⑤工兵隊駐屯地跡

体験談 (国吉貞子さん) によると、道の側のジンガーガーの隣には兵隊の家を造る工兵隊がいたとのこと。また、聞き取りからも、九州からきた上野隊という年寄の部隊がいたとされる。他にもヤマガワという沖縄出身の少尉がいたとされるが、部隊名は確認できなかった。

⑥壕跡(西更竹の壕Ⅳ)

聞き取りによると、丸国アルミ工業の南西側にある崖面には、以前、壕が3つあったとされているが、埋めてしまった。壕には折れたツルハシが残っていたという。また、戦史資料によると、長間根間地には、山砲兵第28聯隊の第2中隊(中隊長:山下弘大尉)が展開していたことから、山砲隊が関係している壕だったと考えられる。(昭和9年生)

⑦井戸・炊事場跡

聞き取りによると、井戸の水を利用して炊事場もあった。(昭和4年生)

8 兵舎跡

聞き取りによると、二スの御嶽には兵隊がいた。(昭和4年生)

9兵舎跡

体験談 (国吉貞子さん) によると、カッジャヤー (屋号) 横のパイの御嶽の中に、兵舎が造ってあったとされ、聞き取りでも御嶽内には兵隊がいたとされ、ウシオマンゴやヤスイ准尉がいたとのこと。ウシオマンゴは独立混成第60旅団通信隊の隊長である牛尾慎吾大尉のことと考えられる。

⑩伝書鳩小屋跡

聞き取りによると、パイの御嶽周辺に第60旅団通信隊の伝書鳩の鳩小屋があり、ハヤカワという兵隊 が鳩に餌をあげていた。また、井戸の水を利用していた(昭和9年生)。

⑪自活畑跡

聞き取りによると、伝書鳩小屋の隣りに自活畑があり、自活班のナカシマという兵隊が豚や山羊を養い、当時は一緒になって草を刈りに行っていた。(昭和9年生)

12爆弾投下場所

聞き取りによると、女性が畑で芋を掘っていたところ、近くに250キロ爆弾が落ち、パイの御嶽に避難 した。投下地点は現在、浸透池になっている。(昭和4年生)

① 井戸·炊事場跡

聞き取りによると、井戸の水を利用した炊事場があった。飯あげを担っていた兵隊は押せば倒れそうなほど痩せ細った兵隊だった。(昭和9年生)

(4)召集ラッパを吹いた場所

聞き取りによると、当時、長間1176番地のそばには大きな木があり、その下で起床、飯あげ、消灯の時間には、北東の方角に向かってラッパで合図していた。ラッパ手はハヤシという兵隊であった。(昭和9年生)

15兵舎跡

長間1164番地の民家の前には、兵舎が建てられていた。現在は牧草地。

16軍医・衛生兵宿泊地

体験談 (国吉貞子さん) や聞き取りによると、長間1176番地の民家に山梨県出身の軍医 (氏名不明) と、ハスダ、ヒロガネは衛生兵、また、小林という世話役がいた。機関銃で姑が左頬に怪我をした際、 軍医が傷を縫ってくれたとされる。

①点呼場跡

聞き取りによると、長間1164番地の裏側はラッパの合図で兵隊が集合まる場所であった。(昭和9年生)

2) 山田地区

①山田バダの壕群

体験談 (平良金盛さん)によると、少年奉皇隊として横穴の避難壕を掘った。聞き取りから3基の壕が確認された。(昭和9年生)

※山田バダの壕群の所在地は平良字東仲宗根添瓦原。詳細については平良地区に掲載。

②岩崎眞一等兵の慰霊碑跡

輜重兵第28聯隊岩崎眞は昭和20年1月7日宮古陸軍病院にて病死。聞き取りによると、慰霊碑を地

域住民で建立した。現在、慰霊碑はない。

③兵舎跡·炊事場跡

聞き取りによると、通称、山田バダの近くに炊事場・兵舎があった。(昭和9年生)

4)経理担当宿泊地

体験談(平良金盛さん)によると、長間595番地の民家には、経理担当の兵隊が宿泊していた。

⑤通信隊兵舎跡

体験談(平良金盛さん)によると、ティンヌシュウ御嶽の南、通信隊の兵舎があった。

⑥林間学校跡・見張り櫓跡

体験談 (平良金盛さん) によると、輜重兵第 28 聯隊本部の副官である宇野中尉が校長役となり、ティンヌシュウ御嶽の中に、林間学校 (軍によって小学校が接収され、授業が休止となったため、野外で行われた私的な授業と考えられる) があったとされる。また、御嶽には大きな松の木があり、その上に櫓を組んで見張所にしていた。現在、松の木の大木は戦後の台風で倒れてしまっている。

⑦兵舎跡

体験談 (平良金盛さん) によると、長間 574 番地の民家の前の畑は兵舎であった。はじめはテントであったが、のちに集落の住民をまじえて茅葺で造り、連隊付きの兵隊 $40\sim50$ 名が宿泊していた。

⑧連隊長宿泊地

体験談 (平良金盛さん、平良カニメガさん) によると、長間 574 番地には輜重兵第 28 聯隊連隊長横山伊一郎大佐が宿泊。横山大佐転任後は、後任の宮川正少佐が宿泊していた。

9中尉宿泊地

体験談(平良カニメガさん)によると、長間568番地の民家には中尉が宿泊していた。

⑩壕(未確認)

体験談 (平良金盛さん)によると、当時は長間 568 番地の北側に嶺があり、そこに壕を掘り、中に味噌、米、塩、砂糖などを保管し、食糧庫として使用していた。しかし、現在壕跡は確認できなかった。

⑪医大尉宿泊地

体験談 (平良カニメガさん) によると、長間 438-3 番地の民家には、輜重兵第 28 聯隊本部の谷山雅哉 医大尉と将校 2 名が宿泊していた。

12火葬場跡

聞き取りによると、長南集落と山田集落の間に火葬場があったとされ、第28師団通信隊の火葬場と思われる。現在は建設会社の資材置き場になっている。(昭和9年生)

(2) 長中

①巣玉川の壕跡

本壕は、ほ場整備に伴い発見された住民避難壕である。

(3) 長北

①与那浜崎の砲台

宮古島地区防衛配備図の中にも記載されている、海軍の砲台のひとつである。



写真 146. 長南②慰霊碑跡



写真148. 長南④将校室跡



写真 150. 長南⑥隊長宿泊地跡



写真152. 長南⑧衛兵所跡(長南陣地壕群Ⅱ)



写真147. 長南③食糧庫跡



写真149. 長南⑤被服庫跡



写真 151. 長南⑦対空監視所跡(長南陣地壕群Ⅱ)



写真 153. ⑨第 28 師団通信隊本部



写真 154. ⑩兵隊壕(未確認)



写真 156. 根間地②炊事場跡



写真 158. 根間地4 兵舎跡・炊事場跡



写真 160. 根間地⑥壕跡



写真 155. 根間地①自動車修理場跡



写真 157. 根間地③第4野戦病院分院



写真 159. 根間地⑤工兵隊駐屯地跡



写真 161. 根間地⑦井戸・炊事場跡



写真 162. 根間地 8 兵舎跡



写真 164. 根間地⑪伝書鳩小屋跡



写真 166. 根間地⑫爆弾投下場所



写真 168. 根間地(4)召集ラッパを吹いた場所



写真 163. 根間地 9 兵舎跡



写真 165. 根間地①自活畑



写真 167. 根間地13井戸・炊事場跡



写真 169. 根間地⑤兵舎跡



写真 170. 根間地16軍医·衛生兵宿泊地



写真172. 山田①山田バダの壕群



写真 174. 山田②岩崎眞一等兵慰霊碑跡



写真 176. 山田④経理担当宿泊地



写真 171. 根間地①点呼場跡



写真 173. 山田①山田バダの壕群



写真 175. 山田③兵舎跡・炊事場跡



写真 177. 山田⑤通信隊兵舎跡



写真 178. 山田⑥林間学校跡・見張り櫓跡



写真 180. 山田⑧連隊長宿泊地



写真182. 山田⑩壕(未確認)



写真 184. 山田⑫壕(未確認)



写真 179. 山田⑦兵舎跡



写真 181. 山田 9 中尉宿泊地



写真 183. 山田①医大尉宿泊地



写真 185. 山田①火葬場跡

3. 長間の戦争遺跡

(1) 与那浜崎の砲台(よなはまざきのほうだい)

①所在地

宮古島市城辺字長間与那浜

②立地 • 現況

砲台跡は長間底海岸を望む、標高 80 メートルの与那浜の突端部 (与那浜崎) に位置する。城辺の北海岸を通る県道 83 号線沿いから、ユーヌヌス御嶽へ向かう農道へ入ると、現在はサトウキビ畑が広がっている。サトウキビ畑から北側部分は海岸へむけての急崖をなしており、砲台はこの急崖部分の石灰岩を掘りこんで構築されている。そのため砲台直上は、サトウキビ畑として現在は利用されている。

③歴史状況

与那浜崎の砲台の構築にあたっては、海軍313設営隊が中心となって構築されたものと考えられる。 海軍313設営隊の第2中隊第2小隊藤岡隊は、城辺砲台の構築を行ったとある。城辺砲台の場所につい ては、資料から明確な位置を特定することができないが、おそらく与那浜崎に比定されるものと考える。

山砲兵第28 聯隊の第7中隊神田文男の体験談『遥かなる宮古島』によると、第7中隊の一部は比嘉の 集落に幕舎を設け、与那浜崎の砲兵陣地構築に取りかかったとある。また、体験談などから比嘉や西城の 住民も砲台の建築にかりだされたことが記されている。

砲台構築後に、具体的にどの部隊が砲台を管理・使用したのかは明らかにすることができない。しかし、 山砲兵第28 聯隊の戦史資料 (ref.c11110237800) によると、「與那浜砲台十二榴二門」とあることから、 与那浜崎の砲台には12 糎榴弾砲が2門設置されたことになる。体験談によると何十発か実際に撃ってい たようである。

④遺構の特徴

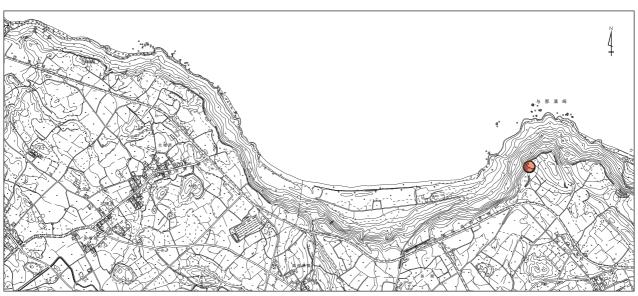
現在、砲台への出入りを行っているサトウキビ畑からの急崖部分にあく壕口は、本来の砲口であったと考えられる。砲口部分も含め、砲台は全体的にコンクリート造りの強固なものとなっている。砲口は、ほぼ真西を向いており、前面には長間底海岸を望む。砲口の大部分は多量の土砂が流れ込んでおり、その全体像を確認することができないが、砲口部分の幅は現況としておおよそ5メートル前後で奥行は6~6.5メートルにも及ぶ。土砂の堆積が厚いため詳細な高さを計測することはできないが、天井までの高さは、2メートル以上に及ぶことが想定される。砲口部分から約6.5メートル東進すると、南東側に壕が折れ曲がりコンクリートのアーチ型の作りとなる。約4.3メートル進むともうひとつの壕口に至り、本来の出入口がこの壕口から行われたものと考えられる。

この南東側に折れ曲がったアーチ型の壕内には、左右に1つづ小部屋へむかう出入り口が設けられている。北東側の小部屋はコンクリートづくりで、五角形の形態をなし、天井部分もアーチ型をなし最大高は約3メートルほどと非常に高い作りとなっている。小部屋の出入り口は幅約1メートルで、高さは約1.6メートルあるが土砂の流入が及んでいる。内部には戦後のビン類の破片が多く散乱し、壁には落書きもみられる。この小部屋については弾薬庫としての機能も想定される。

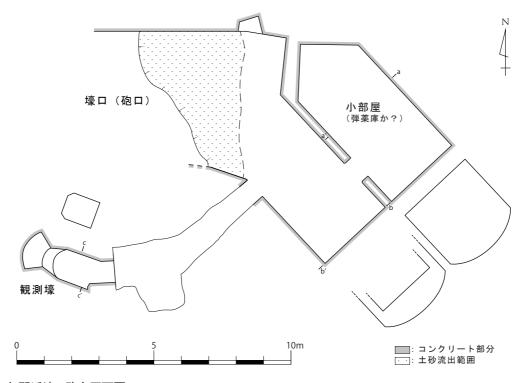
一方、南西部分の小部屋は入口部分がコンクリート造りとなっているが、通路部分は石灰岩が露頭した状態にあり、崩落の危険性も高い場所である。通路の壁面の一部には石が積まれている状況もみてとれる。この通路は緩やかに湾曲し、コンクリート造りの観測窓へと至る。観測窓へ至る手前(南側)には、幅約 1.7 メートル、奥行約 1.2 メートルの掘り込みが設けられている。観測窓の設けられた部屋は、現在石灰岩が詰まった状態にあり、天井までの高さが 1.1 メートルと非常に狭く感じるものの、幅は約 1.1 メートルである。観測窓が砲口とほぼ同じ真西を向いて設けられている。

まとめ:『先島群島作戦(宮古篇)』によると長間底海岸は、上陸が予想されていない。しかし、長間底海岸の北側の突端部分にも増原高射砲陣地が設けられており、与那浜崎の砲台と同様に、長間底海岸一帯からの上陸に備えて設けられたことがみてとれる。

また、ここで報告を行った与那浜崎の砲台の東へ約20メートル進むと、銃眼が1基確認された。銃眼への入り口は現在のサトウキビ畑の中にあると想定され、現在はその壕口を確認することができず、内部へ入ることはできない。銃眼の部分はコンクリート造りで、長間底海岸の方を向いていることから、砲台との関連性をもって構築された銃眼であるといえる。



第38. 図 与那浜崎の砲台位置図



第39. 図 与那浜崎の砲台平面図



写真 186. 長間底浜から与那浜崎を望む



写真 188. 壕内



写真 190. 観測壕 内部



写真 192. 砲台から見た長間底浜



写真187. 砲口(砲口と推定される)



写真 189. 小部屋(弾薬庫)



与真 191. 観測場 外観



写真 193. 壕口

(2) 長南陣地壕群 [跡(ながなんじんちごうぐん [あと)

①所在地

宮古島市城辺字長間東前田

②立地 • 現況

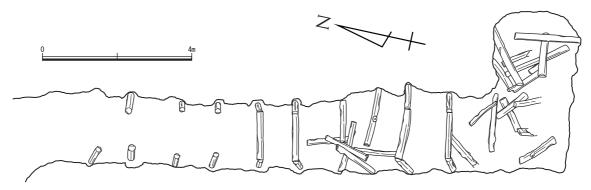
本遺跡は長南公民館の北東に位置する、標高 $46\sim58$ メートルの小丘陵地に位置し、周辺の住民への聞き取り調査では、ユーランミと呼ばれる場所である。本遺跡は平成 24 年度の長南地区ほ場整備工事に際して、新規に発見された遺跡である。

全体で3つの壕から構成されるが、壕1以外の2基の壕については土砂で埋没した状態にあり、壕1を中心に記録保存調査が実施された。

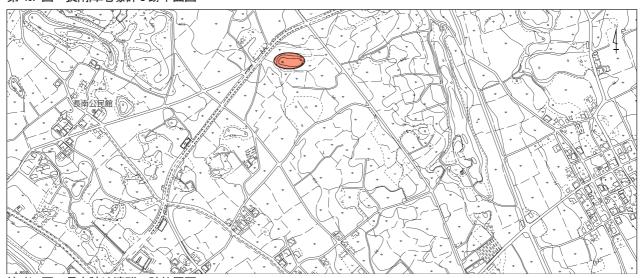
小丘陵地は琉球石灰岩と島尻層の不整合面が露頭した状態にあり、壕1はこの不整合面の島尻層の部分を、掘り込んで構築している。現在、ほ場整備工事により壕群は消滅している。

④遺構の特徴

壕 1 は発見された段階で、壕内に多量の坑木を確認することができた。坑木の内、柱と梁については、当時の状況を残した状態のものも多かった。前述したように天井部分は琉球石灰岩であるが、壁面、床面は島尻層であるため、壕内には常に水が溜まった状態にあった。平面形態としてはL字型の形態をなし、壕内の幅約 1.8 メートル、高さ約 1.8 ~ 2.2 メートルほどと比較的広い形態をなしている。壁面部は柱を構築するための蛇腹状の形態をなし、掘削時の工具痕が明瞭に残されている。壕内からは柱や梁の他に、柱を固定するための楔型の木製品や、柱の下に敷いた円盤状の木製品が出土している。



第40. 図 長南陣地壕群 I 跡平面図



第 41. 図 長南陣地壕群 I 跡位置図



写真 194. 壕 1 内部



写真195. 発見時の壕1 近景



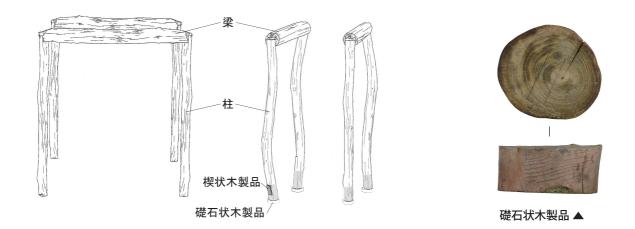
写真197. 壕1 内部(坑木の散乱状況)



写真196. 壕1 柱と梁の接合部



写真198. 壕1 内部(柱間に設けられた木材)



柱 柱 ▲ 接ぎ木部分の拡大 ▲ 棒状木製品 ▲ 釘が刺さった状態の木製品 ▲ 楔状木製品

図版 4. 壕内の木製品の使用状況

(7) 長南陣地壕 Ⅱ (ながなんじんちごう Ⅱ)

①所在地

宮古島市城辺字長間西更竹

②立地·現況

本塚は長南公民館の北西にある小丘に位置する。壕口は道路から見えているが、現在はゴミや土砂の流入により壕内に非常に入りづらい状態である。

③歴史状況

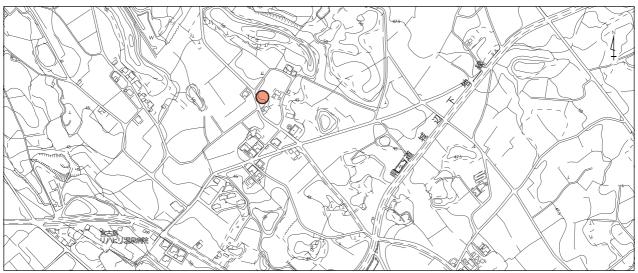
戦昭和19年8月12日、宮古島に上陸した、第28師団通信隊は2週間ほど宮古高等女学校に逗留した。その後城辺村長間に移駐し、有線・無線兵舎各々3戸、厩1戸、計7戸の茅葺の小屋を、民家の合い間に構築したことが、同通信隊隊員の手記に陣地概図として記載されている。この概図には、対空監視所や衛兵所の場所が示されており、この壕はこれらの用途との関連性を伺わせる。現地では、宮古中学校職員生徒196名に依る鉄血勤皇隊を編成し、同通信隊員と共に、有線を以て宮古島航空用地上通信網並に作戦骨幹通信網、無線を以て先島集団通信網を確保せんとした。

④遺構の特徴

壕は、琉球石灰岩を掘り抜いて構築されており、内部は比較的丁寧なつくりをしている。内部の断面は 逆U字型をしており、壕口は東と西に2か所掘られているが、土砂の流入により現在外から確認できるの は西側の壕口のみである。

西側の壕口はほぼ真南を向いており、幅 0.6 メートル、高さ 0.5 メートルと非常に狭いが、中は幅 1.9 メートル、高さ 1.6 メートルの広さをもつ。壕の平面形態としては、壕口から北へ真っ直ぐに約 6.5 メートル直進し、そこから東西 2 方向に分かれる。西側通路は 2.4 メートル掘り進み止まっており、東側通路は東北東方向に 11 メートル掘り進める中程で、0.7 メートルの段差が作られ通路が幅 0.9 メートル、高さ 0.7 メートルと狭くなる。突き当りには小部屋があるが、外からのゴミの流入によって部屋内は、ほぼゴミで覆われている現状である。

また、この小丘には戦中に通信隊の衛兵所や対空監視所があったとされ、これらの施設と関連性が高い ものと考える。



第42. 図 長南陣地壕Ⅱ位置図



写真 199. 西側壕口部分近景



写真 200. 壕内部

(4) 長南陣地壕群Ⅲ(ながなんじんちごうぐんⅢ)

①所在地

宮古島市城辺字長間西更竹

②立地 • 現況

本遺跡は長南集落の背後にある、小規模な地形の標高差を利用して構築された壕で、現在、2基の壕が確認されている。遺跡一帯の周辺部まで、ほ場整備工事が及んでいるが、遺跡のある場所は草木が繁茂し、壕の確認は困難な環境にある。

③歴史状況

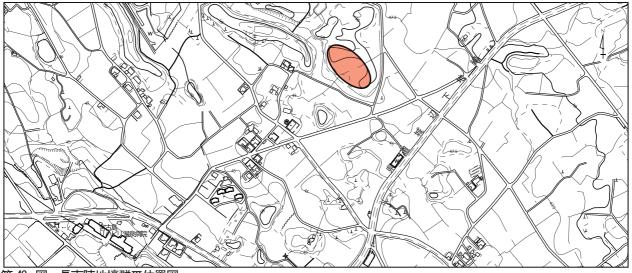
本壕は第28師団通信隊に関連する壕と考えられるが、その利用状況などについては不明である。

④遺構の特徴

2基の壕のうち、西側に位置する壕は、壕口部分に石灰岩の岩塊が多くあり、内部に入ることは困難である。また、東側に位置する壕については、今回内部の確認までを行っていない。



写真201. 長南陣地壕群皿 近景



第43. 図 長南陣地壕群Ⅲ位置図

(5) 山川の壕(やまが一のごう)

①所在地

宮古島市城辺字長間山川

②立地 • 現況

本遺跡は、城辺東海岸の長北海岸の後背の丘陵上部に立地する。宮古島市指定文化財の山川ウプカーのほぼ真上辺りに位置する。本遺跡は、平成20年度に確認された壕であるが、遺跡の一帯は草木の繁茂が激しく、今回の分布調査時には再確認することができなかった。

④遺構の特徴

本遺跡は、琉球石灰岩を掘り込んで構築された壕である。人がひとり通れるほどの約 0.8 メートルの幅で高さ約 1.5 メートルほどの通路を構築しており、突き当り部分に銃眼を設けている。石灰岩を通路状に掘り込んだ銃眼は、現在のところ宮古島市内で類例がなく、非常に特徴的な壕である。長北海岸を含めた東海岸からの上陸を想定した水際防衛を目的とした壕と考えられる。



第44. 図 山川の壕位置図

(6) 長間巣玉川の住民避難壕群跡(ながますだまがわのじゅうみんひなんごうぐんあと)

①所在地

宮古島市城辺字長間巣玉川

②立地·現況

本遺跡は県道78号平良城辺線に面した、丘陵の中腹部に位置する。平成28年度の長中地区ほ場整備工事に伴い、新規に発見された遺跡であり、同年8~9月にかけて調査が行われた。現在は工事が完了したため消滅している。

④遺構の特徴

本遺跡は3基の壕から構成される。緩斜面の下端部に開いた自然の小洞穴(岩陰)を利用したものである。周辺の住民から太平洋戦争時に避難壕として利用していたと、聞き取りの情報があることから、避難壕として位置付けた。東側から壕1、壕2、壕3とした。

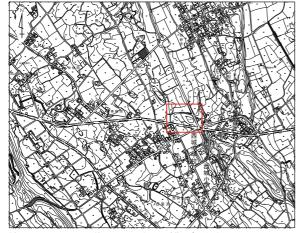
壕1は壕口の幅が2.8メートル、高さ0.9メートルで、奥行きは2.4メートルほどである。壕口の高さが低く、腰を屈めて入る高さで、内部も0.9メートルとそれほど高くない。壕の最奥部は、段差があり、高さが0.5メートルほどとなって鍾乳石も形成されている。全体として人為的な加工はみられず、自然の小洞穴(岩陰)を利用した避難壕である。

壕2は壕口の幅が1.4メートル、高さ1.9メートルで、奥行き3.4メートルである。壕口は北北西を向き、 壕内には2次堆積による土砂の堆積が広く確認される。壕内の最大幅は、3.4メートル、高さは2.9メートルと、入口部分に比して広い形態をなしているが、鍾乳石が形成されるなど、人為的な加工は認められない。壕1同様に自然の小洞穴(岩陰)を利用した避難壕である。

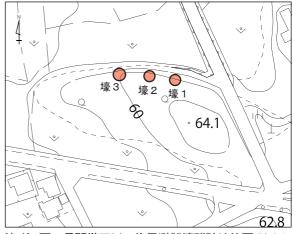
壕3は天井部分が崩落したと考えられ、オープンな 状態になっている。入口部分の幅は1.2メートルとや や狭いが、最奥部は2.9メートルと広くなっていく形 態をなしている。奥行きは4.4メートルで、壁面部は 比較的平坦な状態をもつことから、人為的に加工して いることが考えられる。



写真 202. 壕 2 壕口



第45. 図 長間巣玉川の住民避難壕群跡位置図



第46. 図 長間巣玉川の住民避難壕群跡地位図(拡大)

第6節 下里添

1. 下里添の沖縄戦時の概況

下望添は第28師団が司令部を置いた、上野野原に隣接していることもあり、多くの部隊に関する体験談や聞き取りの成果が確認されている。そこで、本節では下里添に駐屯した、各部隊の概要をまとめながら下里添の沖縄戦時の状況をまとめていきたい。

(1) 山砲兵第28聯隊

山砲兵第28聯隊は、砂川国民学校(現:砂川小学校)に連隊本部を置き、下里添では花切に第4・6・7中隊が、ウズラ嶺に第9中隊が駐屯したとされる。山砲兵第28聯隊は、昭和19年8月12日に宮古島に上陸しているが、山砲兵第28聯隊の各中隊がいつ頃各地に展開したかは不明である。しかし、砂川小学校は8月14日に軍に校舎が接収された(『砂川小学校沿革誌』)とあることから、この時期に近い段階で各地区に中隊が展開した可能性は考えられる。

体験談や聞き取り調査では、第4・6中隊の宿泊地が明らかになっており、第4中隊については慰霊碑が現在でも残されている。また「渡辺包次日記(抄)」には、第2大隊の本部の置かれた花切公民館(現在の下南公民館)の西側には医務室が置かれていたことも確認できる。体験談から、8月16日に花切の松林に第2大隊の全員を集めて終戦の話をしたとあることから、第2大隊の本部は終戦まで花切に置かれていたことが推察される。

また、戦史資料にも下里添と想定される、野原の南東側に第4中隊が駐屯していたことが記されている (ref. C11110237800、ref. C11110237900)。また、第6中隊は、昭和20年2月に嘉手苅の東側へと移動しているようである。

聞き取り調査では、第1大隊第1中隊の駐屯地と、その炊事場跡が確認されている。戦史資料によると、第1大隊(第2中隊を除く)は、「與那原北方5百米高地」に陣地を構築していることがみてとれる。聞き取りで得られた駐屯地や炊事場跡は、おそらくこの陣地に関連するものと考えられる。なお、「與那原北方5百米高地東側」には、山砲2門、15糎榴弾砲1門が設置されており、同隊に属する重火器であったと推察される。

第7中隊については、同隊に所属していた神田文男著『遥かなる宮古島』に、同隊の展開の詳細を確認することはできるが、体験談や聞き取り調査では、同隊に関する情報はまったく得られなかった。

また、第9中隊に関する体験談や聞き取りも得られず、具体的な駐屯地を明らかにすることができない。さらに前述した戦史資料では、第6中隊が嘉手苅に、第7中隊が野原岳の北側に展開していることになっており、体験談や聞き取り調査と食い違う点も見られる。これは各中隊が時期によって移動をしていたものと推察され、戦史資料にみる配備展開の時期と異なることに起因するものと考えられる。

山砲兵第28聯隊の砲兵隊陣地構築一覧表によれば、山砲(75ミリ)が「東花切北方閉鎖曲線」に5門、「花切八六高地東側」に4門、「花切八六高地南方五百米」に4門、「花切八六高地西側」に3門、「ウズラ嶺八七高地北方百五十米」に2門、「ウズラ嶺八七高地西側」に3門を設置したとされ、迫撃砲は「花切北方閉鎖曲線東側」に12門が設置されたとある(ref. C11110237900)。

花切八六高地は西花切の南側に位置する丘陵の最高標高地を指すものと考えられ、「ウズラ嶺八七高地」は西更竹の丘陵地の北西部に位置する、最高標高地点を示すものと考えられる。東花切北方閉鎖曲線については、その場所を特定できなかった。これらの山砲、迫撃砲の陣地構築については、現在のところいずれもその痕跡や体験談、聞き取りの証言がまったく確認されておらず、その場所を特定するには至っ

ていない。

(2) 独立速射砲第5大隊

独立速射砲第5大隊(以下、独速第5大隊と記す)は、下北公民館に本部を置いたことが体験談に記されている。しかし、『下里添北区邑立ち100周年記念誌』によれば、時期は不明であるが、吉岡軍一郎少佐を長とする第205飛行場大隊が公民館を借用したとあり、その詳細が明らかではない。

(3) 第28師団第1野戦病院

第28師団第1野戦病院は花切に位置し、昭和20年5月4日に平良(東仲宗根添)盛加に移動したとある(『群島作戦』)。また、同資料には「ウズラ嶺の洞窟病院入口」と記された写真が掲載されており、ウズラ嶺にも洞窟病院があったことが見て取れる。この洞窟病院については、聞き取り調査からその場所を確認することができた。

(4) 第28師団病馬収療所

下里添の納骨堂近くには、「陣歿せる軍役動物を吊ふ」碑が建てられている。この碑文には「昭和20年中秋」や「納見中将誌」と記されていることから、納骨堂の工事と同時期に建立されたと考えられる。

『平良市史』第4巻近代資料編の中には、野原越の東の方に病馬廠があり、そこに病気の馬の世話をしに通ったという体験談がみられる。このことから「陣歿せる軍役動物を吊ふ」碑は、第28師団病馬収療所との関連性のあるものと考えられる。

(5) 独立歩兵第395大隊

独立歩兵第395大隊は花切に駐屯し、後に北区に移動したとある(『群島作戦』)。この第395大隊の詳細については、戦史資料などがなく資料に乏しいが、第395大隊の第3中隊に所属した龍沼梅光著『北満・宮古島戦記』がある。本誌は龍沼氏の所属した、第3中隊の宮古島市内での記録に限られるが、中隊レベルでの宮古島における活動をみてとることができる。これによると第3中隊は、昭和19年9月18日に伊良部島に上陸し、その2日後に宮古島へ移動している。15日間ほど平良で輸送部隊の使役を行った後、10月6日に城辺皆粉地に移動し、6月2日には下里添与那原に移動、さらに時期は不明であるが、花切へと移動して来ている。そして花切で終戦をむかえたものと推察される。

本来、第395大隊は独立混成第59旅団に属するものの、第395大隊のみが東地区に配備され、独立混成第60旅団の指揮下に入れられている。この龍沼氏の記録から第395大隊が、昭和20年6月から8月にかけて、下里添の与那原から花切に駐屯していたことがみてとれる。

(6) 野戦重砲兵第1 聯隊第1大隊

周知の戦争遺跡である下里添野戦重火器秘匿壕は、野戦重砲兵第1聯隊第1大隊の九六式15糎榴弾砲を秘匿した壕である。今回の調査で3つの壕群から構成されている秘匿壕が確認された。戦史資料 (ref. C11110010000) によると防衛配備として、東地区正面に4門を配備したとある。同資料には同隊の所有する砲門が、九六式15糎榴弾砲であることが記されている。また、『先島群島作戦』では城辺ザラツキ高地に、野戦重砲兵第1聯隊第1大隊の第3中隊が配備され、15糎榴弾砲4門を所有していたとある。

(7) その他

『宮古島建築始未記』によれば、要塞建築勤務第8中隊の本部がウズラ嶺に置かれたとある。

独立歩兵第399大隊が、下里添一帯に陣地を構えたとされる (ref. C11110011000)。特に、第二次陣地とされた花切一帯は、山砲兵第28聯隊の駐屯地とも重複している。しかし、第399大隊に関する体験談や聞き取りの情報を得ることはできなかった。

戦車第27聯隊第3中隊の主力をウズラ嶺の集積所においたとある (ref. C11110011100)。しかし、この部隊に関する詳細は判然としない。

小結

以上、各部隊の展開について整理を行ってきたが、この状況を踏まえて地域的な視点から再整理してみたい。まず、花切・与那原一帯には、山砲兵第28聯隊が中心的に駐屯している状況がみてとれる。ただ、独立歩兵第395大隊なども同様に花切、与那原一帯に展開している状況がみてとれる。しかし、現在のところ、体験談や聞き取り調査などから、この2つの部隊の関係性について触れられているものが確認できない。

さらたけ かみ

更竹(上区)には、独立速射砲第5大隊が駐屯していることが体験談や聞き取り調査から確認できる。しかし、この地域についても、第205飛行場大隊が公民館を借用したとの資料もあり、この2つの部隊の関係性についても判然としない。

ウズラ嶺には第1野戦病院、要塞建築勤務第8中隊の本部、戦車第27聯隊第3中隊などの部隊が駐屯したとの情報がある。今回の調査でウズラ嶺で3基の壕が確認されており、これらの部隊との関連性を考える必要性がある。しかし、これらの3つの部隊と壕跡との関連性については、現在、明らかにすることができなかった。

佐事川には野戦重砲兵第1聯隊第1大隊が、野戦重砲を秘匿した壕が確認されている。このことからも同部隊がこの地に駐屯していたことが明らかである。佐事川陣地壕は野戦重砲の位置する丘陵と、ウズラ嶺八七高地の中間地点に位置している。壕の形態からも日本軍の関連した壕であるが、具体的な部隊との関連性ついては不明である。その他、佐事川には慰霊碑として、海上挺進基地第30大隊や病馬慰霊碑が設置されていることから、これらの部隊との関連性が深い地域であると考えられる。

【注釈】

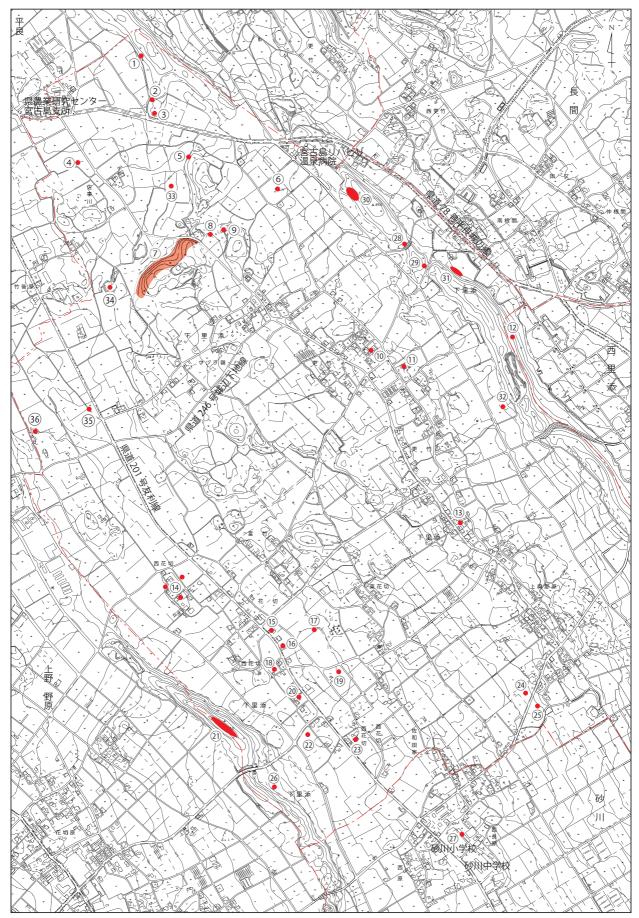
- 注1:第4中隊については慰霊碑、『体験談』、戦史資料 (ref. C11110237800、C11110237900) を、第6中隊、第7中隊は『体験談』を、第9中隊は宮古島市史所蔵の資料をその根拠としている。
- 注2:『遥かなる宮古島』(神田文男)によれば、第1・2大隊は、九四式山砲を使用し、第3大隊は、10糎榴弾砲を 使用していたとある。
- 注3: 龍沼梅光氏は軍曹の階級で復員し、第3中隊の中の小隊の班長を勤めている。
- 注4:与那原での駐屯時期は短かったと思われる。
- 注5:下里添野戦重火器秘匿壕が位置する丘陵と考えられる。地元の読みで、ザラツキは更竹を示す。

【参考文献】

『下里添北区邑立ち100周年記念誌』(下里添上区公民館 1992年)

『北満・宮古島戦記』 龍沼梅光 1989年

ref. C11110010000 戦史資料野戦重砲兵第 1 聯隊第 1 大隊



第47. 図 下里添地区成果図(地図)

2. 下里添の調査成果一覧

①下里添の野戦重火器秘匿壕群

佐事川(地名)には野戦重砲兵第1聯隊第1大隊が96式15糎榴弾砲を秘匿していた壕が3基確認されている。その他にも地下式の壕跡が1基確認されている。

②海上挺進基地第30大隊慰霊碑

同隊は昭和19年9月に久留米において編成され、11月22日特攻艇の秘匿用壕(大浜の特攻艇秘匿壕群、トウリバー浜特攻艇秘匿壕群)の洞窟構築のため宮古島に駐屯。海上挺進第30戦隊の来島に備えたが、翌年3月1日の大空襲により同戦隊は全滅に近い状況となり、特攻艇の洞窟も使用されることなく、山中部落の新陣地へ移り終戦。同隊の戦没者60名を慰霊する碑として昭和57年1月建立。

③「陣歿せる軍役動物を吊ふ」碑

野原越 (地名) には第28師団病馬収療所があったとの聞き取りがあり、同収療所に関する碑と推察される。昭和20年中秋に建立。

4)慰安所跡(1)

体験談(荷川取松金さん)によると、下里添1370-1番地辺りには慰安所があり、当時の城辺国民学校を壊した材木で造った。また、部屋は12部屋ぐらいあり、廊下の両側に6部屋ずつあった。

⑤佐事川陣地壕

2つの壕口がコの字型に連結されて掘られている。 兵隊の陣地壕。

⑥ムムクーリャ(避難壕)

上区の北側700メートルに位置する自然洞窟で、住民避難壕として利用された。体験談 (荷川取マツさん)によると、洞窟は広くて下に降りていった。現在は土砂が堆積している。

⑦ウズラ嶺陣地壕群

現在、ウズラ嶺では4基の壕が発見されいる。聞き取りによると、その内の3基は榴弾砲との関連性が深いと考えられ、東側の1基については食糧庫として利用されていたと確認されている。

⑧ウズラ嶺野戦病院跡

ウズラ嶺には洞窟病院があったとされ、周辺には井戸もあったとの聞き取りがある。(大正14年生)

⑨火葬場跡

体験談(荷川取松金さん)によると、ウザンミ御嶽の北西の窪みに死んだ兵隊を焼いていた。また、御嶽の木々は遺体を焼くために、ほとんどが切られてしまった。

⑩西本少佐宿泊地

体験談(本村キクさん)によると、下里添936-5番地の民家には独立速射砲第5大隊の大隊長西本哲郎が 宿泊、隊長付きの当番兵は荒川という兵隊だった。この民家の裏の方には野戦病院の炊事班がテントを 張って炊事をしていて、炊事班長は森田という兵隊だった。

①独立速射砲第5大隊本部

体験談(本村キクさん)によると、現在の上区構造改善センターに大隊本部が置かれ、公民館を中心に何棟かの兵舎があり、その周辺にも中尉や少尉が宿泊した民家もあった。

⑩西更竹司令部壕(駒部隊)

更竹丘陵地に位置する、独立混成第60旅団司令部壕。

(13)民間人死亡場所

聞き取りによると、機銃掃射で目をやられて亡くなったとされる。(年齢不詳) ※松川トミ 昭和20年7月6日死亡 9歳。

①戦車保管所跡

聞き取りによると、一帯はガジュマルの樹木があり、その下に穴を掘り戦車を隠してあった。台数については3~4台との聞き取りもあるが、それより多いとの聞き取りもある。(昭和7年生)

⑤航空機整備兵宿泊地(1)

体験談(佐和田文さん)によると、下里添83番地の民家には航空兵の青年10名くらいが宿泊していた。

16 鬼塚少佐宿泊地

体験談(佐和田文さん)によると、下里添76番地の民家には山砲兵第28聯隊第2大隊の鬼塚一二少佐が 宿泊していた。

⑪山砲兵第6中隊兵舎跡

体験談(佐和田文さん)によると、隊長宿泊地より東北100メートルのあたりには、山砲兵第28聯隊第6中隊が駐屯していた。

⑱山砲兵第2大隊本部

旧下区青年会場跡には山砲兵第28聯隊第2大隊本部が置かれていた。また、体験談(渡辺包次さん)によると、現在の下南公民館の西側には医務室が置かれ、負傷兵の治療や島民の治療もした。

19慰安所跡(2)

砂川地下ダム野原岳第1群機場の東、当時は松林でその中に瓦葺の家があったとされる(『戦場の宮古島と「慰安所」』より)。体験談(佐和田文さん)によると、主計の大竹中尉が食糧を届けていた。大竹中尉は山砲兵第28聯隊第2中隊本部の主中尉大竹茂と思われる。

20第28師団防疫給水部兵舎跡

聞き取りによると、下里添61-2番地には松林があり、給水部がいたとされ、『戦場の宮古島と「慰安所」』によると、サキタリガーで毎日水を汲みあげ、枯れた時は二スミャガーで水をくみ上げていた。(昭和2年4)

② 西花切陣地壕群

下区公民館から西側の嶺に兵隊が掘った陣地壕があり、神田文男氏の手記『遥かなる宮古島』掲載の山砲兵第28聯隊第7中隊本部壕跡の写真と同一の壕を確認することができた。このことから第7中隊が構築した壕であったと思われる。

②山砲兵第4中隊兵舎跡

体験談(佐和田文さん)と、聞き取りによると、下里添29番地周辺には、山砲兵第28聯隊第4中隊が駐屯していた。

② 航空機整備兵宿泊地(2)

聞き取りによると、下里添18-4番地の民家には、特攻機の整備兵が宿泊していた。(昭和12年生)

徑山砲兵第1中隊兵舎跡

聞き取りにより、下里添551番地辺りには、山砲兵第28聯隊第1中隊の兵舎があった。(昭和12年生)

②山砲兵第1中隊炊事場跡

聞き取りにより、下里添560番地辺りには、山砲兵第28聯隊第1中隊の炊事場があった。(昭和12年生)

26山砲兵第4中隊戦没者英需碑

昭和19年7月満州黒竜江省斉斉哈爾から城辺花切の地に駐屯し、翌年終戦を迎えた同中隊の19名の戦 没者を弔う慰霊碑。昭和51年10月に建立。

②山砲兵第28聯隊本部

昭和19年8月14日、軍に校舎が接収された(『砂川小学校沿革誌』)。当時の砂川国民学校には山砲兵第

28聯隊本部が設置されている。※字砂川に所在。重複掲載。

28西更竹の壕 I

本壕は県道246号線の拡幅工事に伴い発見された壕である。

29西更竹の壕Ⅱ

地域住民の情報により、更竹嶺の頂上付近に壕を確認。

③の西更竹の壕群Ⅲ

今回の踏査により、西更竹の丘陵地で2基の壕と2基の蛸壺が確認された。

③1)西更竹の壕Ⅳ

聞き取りによると、この付近に壕があったとのこと。戦後、農地として開墾した時に埋めたとの証言が得られている。※参照:第5節長間1)根間地地区⑥と同一の壕である。(年齢不詳)

②西更竹の住民避難壕

本壕は西更竹地区のほ場整備工事に際して発見された壕である。

③ 自然壕

聞き取りによると、風土病(マラリア等)で亡くなった地元住民を葬った壕。その後、遺骨は収集され、 ウズラ嶺陣地壕群のある丘の尾根附近に移動し、壕は軍が利用した。(年齢不詳)

34弹薬庫跡

聞き取りによると、現在の採石場は軍の弾薬庫で、榴弾砲に装てんする砲弾に火薬を詰めるなど、作業場でもあった。(年齢不詳)

③連合軍機の墜落場所

聞き取りによると、イギリス軍太平洋艦隊と思われる3人乗りの軍用機が墜落。乗員2名は即死、1名は捕虜となったが、後に死亡した。(昭和8年生)

36ウズラ嶺西の壕

本壕は、ウズラ嶺地区のほ場整備工事に際して発見された壕である。

【注釈】

今回の聞き取り調査で「城辺町史」第二巻戦争体験編 362頁に記載されている、第 6 中隊と第 4 中隊の場所が逆であることが確認された。



写真203. ①下里添の野戦重火器秘匿壕群 壕1



写真 205. ②海上挺進基地第 30 大隊慰霊碑



写真 207. ④慰安所跡 (1)



写真 209. ⑥ムムクーリャ(避難壕)



写真 204. ①下里添の野戦重火器秘匿壕群 壕 2



写真 206. ③「陣歿せる軍役動物を吊ふ」碑



写真 208. ⑤佐事川陣地場



写真 210. ⑦ウズラ嶺陣地壕群



写真 211. ⑧ウズラ嶺の野戦病院跡



写真 213. ⑩西本少佐宿泊地



写真 215. ②西更竹司令部壕



写真 217. ④戦車保管所跡





写真 214. ①独立速射砲第 5 大隊本部



写真 216. ③民間人死亡場所



写真 218. ⑤航空機整備兵宿泊地(1)



写真 219. 16 鬼塚少佐宿泊地



写真221. 18山砲兵第2大隊本部



写真 223. ② 第 28 師団防疫給水部兵舎跡



写真225. ②山砲兵第4中隊兵舎跡



写真220. ①山砲兵第6中隊兵舎跡





写真224. ②西花切陣地壕群



写真226. ②航空機整備兵宿泊地(2)



写真227. ②山砲兵第1中隊兵舎跡



写真229. 您山砲兵第4中隊戦没者英霊碑



写真231. ③1西更竹の壕Ⅲ



写真 233. ③ 弹薬庫跡



写真228. ②山砲兵第1中隊炊事場跡



--写真 230. ②8西更竹の壕 II



写真 232. 33 自然壕



写真234. ③適合軍機の墜落場所

3. 下里添の戦争遺跡

(1)下里添の野戦重火器秘匿壕群(しもさとそえのやせんじゅうかきひとくごうぐん)

①所在地

宮古島市城辺字下里添佐事川

②立地 • 現況

本壕群は、沖縄県農業試験場宮古支場の東側の丘陵地に位置する。丘陵の最高標高は74メートルであるが、壕はこの丘陵西側の下部(標高約60メートル付近)に構築されている。丘陵は森林地であるが、壕の位置する丘陵下部には畑地が広がり農道が設けられているため、この農道沿いに壕跡を確認することができる。

③歷史状況

野戦重砲兵第一聯隊第一大隊(大隊長:高矢三郎少佐)は、昭和19年7月13日第28師団に配属。 7月15日那覇港出帆、7月16日宮古島平良港上陸同日より同地に在りて防衛を任ず。同大隊の戦史資料によれば、自己部隊編成人員は606名、九六式15糎榴弾砲12門を所持し、指揮班と3中隊編成であった。陣地構築のため、延4,800名の現地人使役を使用したとある。陣地の状況については、洞窟陣地45、野戦陣地20、砲台3、起工は昭和19年8月上旬、所要人員延2,5000名(兵力のみ)。完成時期は、昭和20年8月上旬概成とある。

陣地は敵攻撃による破壊はなかった。集積輸送には自動貨車などを使用したが、大部分は人力に依りて実施。弾薬、糧秣は全て洞窟内に収容す。群島作戦の記載では次のようになっている。「宮古島に於いては始め城辺国民学校に宿営、民間人の協力を得て洞窟陣地の構築作業。同年 10 月には第一中隊(隊長三上大尉)を伊良部島に派遣。独立混成第 59 旅団の指揮下に入らしめた。大隊主力は山砲兵第 28 聯隊梶大佐の指揮下に入った。」この中で、城辺国民学校とあるのは、学校沿革誌等から、西城国民学校であると考えられ、体験談や聞き取りなどからも、西城国民学校であることが確認できる。

④遺構の特徴

本壕群は、4つの壕跡から構成される。

4つの壕の内、南側にある壕(以下、壕1とする)は、終戦後、納見中将の命によって納骨堂へと改修



第48. 図 下里添の野戦重火器砲秘匿壕群位置図

され、現在は入口部分がコンクリートで塞がれているため、内部に入ることはできない。壕1は、地表面から地下へとむけて斜めに掘りこむ地下式の様相を呈している。この斜面部は現在階段が設けられているが、本来は緩やかな傾斜面をなしていたことが推察される。壕口は、幅3.4メートル、高さ2.1メートルで、西南西を向き、その方角の先には野原岳が位置する。沖縄県立埋蔵文化財センター2005の報告によれば、奥行きは約6メートル程で、天井並びに壁は直線状に加工されており、丁寧なつくりになっていたとの聞き取りが記載されている。

一方、北側の壕(以下、壕2とする)は、今回の確認調査によって新規に発見された壕である。壕2の 壕口は、幅3.6メートル、高さ2.1メートルと壕1と同様の形態をなす。地表面から地下へ斜めに掘りこ む地下式の壕で、壕口は南西方向をむく。壕口からは、ほぼ同じ幅で、北東方向に約 36 メートル直進す る。地表部から、約11メートルまでは緩やかな斜面地を呈すが、11メートルから24メートル地点まで ほぼフラットで、24メートル地点から最奥部まで再度緩やかな斜面地になる。壕口部分には、両壁面に 2か所ずつコンクリートを用いて柱を補強した跡が確認できる。さらに壕口から約6メートルほど行く と両壁面を左右対称に幅約3.5メートル、奥行き2.1メートルの掘り込みが設けられている。さらに壕口 から約10メートルほど進むと、東側の壁に地表面へむけて階段を設けた掘り込みが確認できる。階段は 11 段あり、地表部へは貫通しておらず、構築途中であった可能性も高い。これとは逆に、壕口から 13.5 メートルの地点では、西側壁面から地下へむけて斜めに掘りこんでいる。掘り込みの途中からは地層が島 尻層 (クチャ層) へと変わる不整合面が確認できる。壕の床面からの高低差は2メートル以上あり、北部 へむけて通路を構築しているものと考えられるが、雨水が2メートル近くたまった状態にあり、その先を 確認することができない。壕の断面形は、ほぼ長方形型を呈すが、天井部分の幅の方は床の幅よりもやや 広くなっている。壕内は、比較的陽がはいるように感じるが、壕内の壁面には多くの灯り取りが確認でき る。また、缶詰の缶やビン類も散布している。壕2は、壕1とほぼ同じ規格の壕口や地下式の構造を呈し ていることから、壕1と同様に九六式 15 糎榴弾砲が秘匿されていたと考えられる。

壕3は壕口部分が、ほぼ埋没した状態で確認された。壕内部は壕口からハの字型に開き、それぞれの壁面部に長方形の窪みを作り、また壕口と同等の幅まで狭まる形態をなしている。通路部分の幅は約3.1メートルと広く、北東方向へ約10.5メートル直進する。西側部分の壁面には3か所、東側の壁面には1か所、灯り取りが確認される。東側部分では、通路部分から4.5メートル進んだあたりから、南東側へ延びる地下式の通路が構築されている。この地下式の通路は、7段の階段をもって地下へと下るが、通路部分は水没した状況にある。水没した通路は、天井部分から床面まで2メートルを越えるものである。なお、この地下通路については、水没しているため直接確認することはできなかったが、壕2で確認されている北方向へ延びる地下通路と、声が通じる点から連結しているものと推察される。壕3についても、壕2と類似した壕の形態をなすことから、九六式15糎榴弾砲の秘匿を目的とした壕と考えられる。

壕 4 は、壕 $1 \sim 3$ とはまったく異なる性格の壕である。壕口の大部分は埋没しているが、壕内は急な斜面で南東側に湾曲しながら、地下へと下る斜面地の形態をなしている。約 8 メートル進んだ先に、コンクリート造りの水路と 5.8×2.5 メートルの貯水升があり、壕の奥の方から流れ込む水を溜めるような構造である。この貯水升に隣接した壕の通路と思われる掘り込みが確認できるが、水没しているためその構造や用途については判然としない。



写真235. 壕群入口近景



写真 237. 壕 2 入口のコンクリート構造物



写真239. 壕2 壕3への連絡口



写真 241. 壕 2 灯り取りと壁面に打たれた釘跡



写真 236. 壕 2 入口付近



写真238. 壕2 入口の柱構造部分



写真240. 壕2 未完成の階段(上へ10段)



写真242. 壕2(最奥部)



写真 243. 壕 3 壕口



写真244. 壕3 内部(内部から壕口を望む)



写真246. 壕3 壕2への連絡口



写真245. 壕3 榴弾砲設置の掘り込み



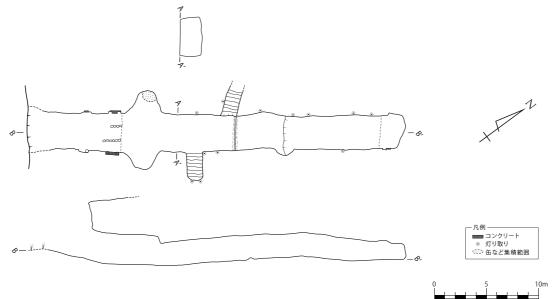
写真247. 壕3 歯ブラシ検出状況



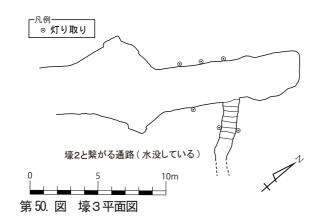
写真 248. 壕 4 壕口

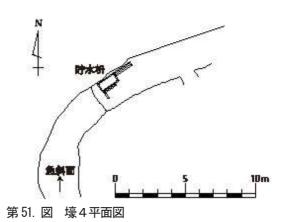


写真249. 壕4 貯水升と通路(通路は水没)



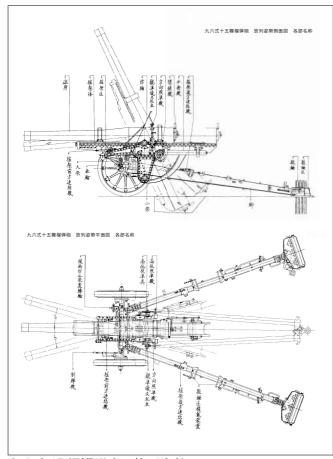
第49. 図 壕2平面図・断面図







九六式 15 糎榴弾砲(全体) 西原町中央公民館敷地内に展示



九六式 15 糎榴弾砲 放列姿勢 (上)側面図 (下)平面図 (佐山二郎 2012『野戦重砲 騎砲他』より転載)

図版 5. 九六式 15 糎榴弾砲の概要



九六式 15 糎榴弾砲(正面) 【九六式 15 糎榴弾砲の概要】 砲身 口径 149.1 ミリ 全長 3523 ミリ 重量 1.388 キロ

高低射界 -5~+65度(43度以上は掘込必要)

方向射界 左右 15 度 最大射程 11.900 メートル

(2) 西更竹司令部壕(にしさらたけしれいぶごう)

①所在地

宫古島市城辺字下里添西更竹

②立地·現況

本壕は宮古島市城辺字下里添西更竹の丘陵地に位置する。宮古島はおおむね南北に連なる丘陵地が、いく筋か並んでおり、第28師団司令部があった野原岳は、ほぼ島の中央を貫く丘陵地の中ほどにある。西更竹の丘陵地は、その東側に位置する丘陵地である。丘陵の最高標高地は88.7メートルであり、司令部壕はこの丘陵の中ほど、標高およそ60メートルに位置している。この司令部壕の位置する丘陵地の南方には、アーリヤマ戦争遺跡群が位置おり、標高の低い宮古島において、これらの丘陵地は戦時中の日本軍の壕が、数多く形成された地域でもある。

司令部壕の位置する丘陵地は、原野であるが、壕の近くまで植林が行われている。そして、その植林地の東側部分はサトウキビ畑として利用されている。この司令部壕は、2012年に近接する長南陣地壕群の発掘調査時の聞き取り調査で、宮古島市教育委員会によって新発見された壕跡である。更竹周辺の住民の多くが、この壕の存在を知っており、戦後この壕を訪れた人も多かったようである。なお、本壕は「吉田の陣地壕」として一度報告されている(久貝 2012)が、地域名の誤認とその構造から「西更竹司令部壕」として報告を行うこととした。

③歷史状況

本司令部壕は、明確な利用部隊が明らかにされていない。西更竹の位置する城辺地域は、戦時中は東地区と位置付けられ、独立混成第60旅団の管轄地区である。独立混成第60旅団は、昭和19年8月10日満州牡丹江で編成された。昭和19年9月23日に釜山港を出帆し、10月30日に宮古島に上陸している。宮古島においては、城辺一帯の東地区の防衛を行い、司令部を長間の西城小学校に置いている。独立混成第60旅団の通称は駒部隊であるが、本壕に関する聞き取り調査の中では、駒部隊が使用していたとの話が得られた。

④遺構の特徴

本壕には、現在3つの壕口が確認されているが、内部の構造から土砂で埋まった状態の壕口がもう1か所あることがみてとれ、4つの壕口が連結した構造をなしている(南側より、壕口1、壕口2、壕口3、壕口4とした)。壕口1~3は長さに若干の違いがみられるものの、複数回折れ曲がる複雑な構造をなしており、いずれも同一の構造で規則的である。この入口の途中部分には、約2平米の掘り込みを有しており、通行の際の一時的な待機所としての機能が想定される。

現在では、この入口付近に、くるぶしまで浸る程度の水が常時たまっているような状態であるが、連結した通路部分には水がたまっているような場所はみられない。壕口1~3を連結する通路は、断面の形態が馬蹄形を呈し、幅が約1.5メートル、高さが約1.5~1.8メートルほどの人ひとりが通れる程度で、それほど大きな形態をなしているものではない。4つの壕口をつなぐように、構築された通路は、最も南側の壕口1側からは北進し、壕口2部分から、最も北側にある壕口4に向けて北西方向にのびている。また、この連結部の通路と交叉するように、壕口3から南西側にのびる通路が構築されている。この通路は、交叉部分からやや湾曲するものの、南西方向に58メートル続いている。そして交叉部分から48メートル進んだあたりで基盤が、クチャ層から琉球石灰岩へ移り変わっている。この基盤の変化のためであろうか、さらに南西側に6メートル進んだ時点で、この通路は行き止まりとなっている。

本壕では構造的な特徴として、約10平米ほどの面積を有する脇部屋が、通路の左右に数多く設けられているという点がある。脇部屋の総数は、18に及ぶ。いずれも、天井までの高さが約2.2~3メートル

ほどと通路部分と比べ高いつくりとなっている。その用途を推し量る資料が現在のところ確認できないものの、倉庫や小部屋としての利用が推察される。

本壕における遺物の出土は、非常に少ないものの、脇部屋部分で薬ビンと思われるビン類がわずかに散乱する箇所がみてとれる。その他、壁面部分には、ランプをつるすためと考えらる釘などが打ち込まれている箇所が複数みてとれる。

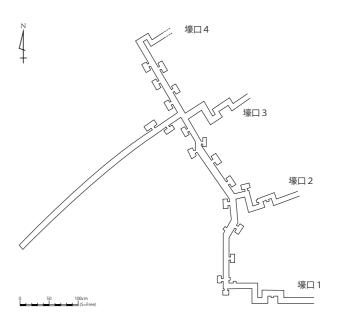
ここまで記述した壕跡とは別に、もう2つの別途の壕口が確認されている。これらの壕口は、石を積んで入口をふさいだ状態にあるため、その内部の構造を確認するに至っていない。しかしながら、これらの壕口と、司令部壕との間には、それぞれの壕口を結ぶような形で、隊道が構築されている。

また、隊道の中間部分には、長さ10メートル、高さ3メートルほどの盛土がなされている。これらの 状況から司令部壕を含めた丘陵地一帯を、ひとつの要塞として構築する意図がみてとれる。

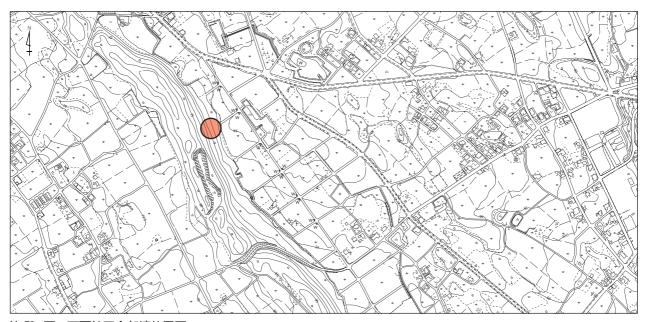
まとめ。

本壕は、総延長が224メートルにも及ぶ、 宮古島市内では最大規模の壕跡である。『先島 群島作戦(宮古篇)』では、城辺字長間に旅団 司令部が置かれていることが判る。独立混成第 60 旅団の本部は、西城小学校に置かれており、 本壕はその西側の丘陵地に位置する。その規模 などや位置的な関係、聞き取り調査の成果を踏 まえると、本司令部壕が独立混成第60 旅団の 司令部壕であった可能性は非常に高い。

久貝弥嗣 2012年「(仮称)吉田の陣地壕について」『宮古郷土史研究会会報№ 191』宮古郷土史研究会



第52. 図 西更竹司令部壕平面図



第53. 図 西更竹司令部壕位置図



写真 250. 壕口 1 部分



写真 251. 壕内部



写真253. 壁面に打ち込まれた金具



写真 252. 脇部屋



写真 254. 脇部屋に散乱する瓶類

(2) 佐事川の陣地壕(さずが一のじんちごう)

①所在地

宮古島市城辺字下里添佐事川

②立地·現況

県道 78 号線(城辺線街道)を平良から城辺方面へ進み、農業研究センターと宮古島リハビリ温泉病院の間の農道を右折し、30 メートル程行くと畑の端にサジガー井戸がある。その井戸から 50 メートル程、畑のきわに沿って奥に進むと、左側に 1 メートル程の水路を挟んで小丘陵があり、壕口は小丘陵の壁面に開いている。

佐事川の陣地壕から北に700~800メートルの距離には、下里添の野戦重火器秘匿壕群が、また、南に200メートルの距離にある丘陵には、野戦洞窟病院壕があったと言われ、その南西側およそ200メートルの場所にはウズラ嶺陣地壕がある。

③歴史状況

この陣地壕の周辺は東南には西更竹司令部壕、南にウズラ嶺陣地壕群、独立速射砲第5大隊本部、北に下里添の野戦重火器秘匿壕があり、1キロ西側には師団司令部壕と考えられているタキグスバルの地下壕がある。このような地形からみて、師団司令部の1施設ではなかったかと考えられる。城辺町史の体験談の中には、佐事川嶺に師団司令部があった。との情報も得られているが、この師団司令部がタキグスバルの地下壕を指しているのか、あるいは佐事川の陣地壕を指しているのか判然としない点があり、構築の形態から、本部壕としての機能を有すると考えられるが、部隊名を特定するには至っていない。

④遺構の特徴

佐事川の陣地壕は2つの壕口が、「コ」の字型に連結しており、泥岩(クチャ層)の岩盤を掘りこむかたちで構築されている。2つの壕口は、いずれも西を向き、北側の壕口は土砂の堆積によりほぼ壕口(壕口1とする)が埋まった状態にある。南側の壕口(壕口2とする)は、幅が90センチ、高さが1.5メートルほどと、人ひとりが腰を屈めて出入りするような規模であるが、内部は高さが1.8~2メートルほどの高さを有しており、立って歩けるほどの高さとなる。壕口2から約28メートルほど東進するが、その入口から9.5メートルほど南側に幅0.9メートル、奥行1.4メートル、高さ1.7メートルほどの小部屋が設けられている。

同様の小部屋は、壕口1の入口から9メートルの南側にも設けられている。この2つの小部屋は、狭い 通路をすれ違うための待機所としての役割を有すると考える。また、この2つの小部屋には灯り取りが3 つずつ壁面を掘り込むかたちで設けられており、壕口2側の小部屋の灯り取りには、当時のものと考えられるロウソクも残されている。

壕内には床面の両壁側に幅約 0.2 メートル、深さ約 0.05 メートルの側溝が設けられている。これは壕が帯水層である泥岩(クチャ層)の地盤を掘り込んで作られており、壕内に水がたまりやすい環境のため、その排水の役割を有している。

また、排水のために、壕内は全体的に壕口へと下がる傾斜をもつように作られている。これとは別に、 壕口1の連結部周辺には南壁部分に幅約0.2メートル、高さ0.05メートルの段差が確認できたが、その 用途は判然としない。

2つの壕口を結ぶ南北方向の連結部は、やや東側に湾曲しながらも、幅が約2.2メートルと広く作られている。西側の壁面部には、8か所に柱を設置するための掘り込みが確認できる。連結部の北側は、ほぼ一定の間隔で柱跡が5か所設けられ、東側の壁にもそれに対応するように掘り込みが見られる。しかし、この東側の掘り込みは、西側の掘り込みが柱の形に合わせて約2メートルの高さにわたって半円状に掘り

込むのに対し、柱部分の半円状の掘り込みをもたず梁がわたされる、約2メートルの高さの場所が部分的に丸く掘り凹んだ形状をなしており、東西の柱跡の掘り込み方法には違いがみてとれる。その一方で、連結部の南側で東壁に確認された3つの柱跡は、その間隔がやや不規則であり、壁面の崩落などにより明瞭に西壁部分の柱や梁の掘り込みが確認できない箇所もあった。連結部は、天井部分の崩落個所が大きく2か所にみられ、床面には崩落の土砂が堆積している。

場内の壁面には、連結部や小部屋部分を中心に灯り取りの窪みを複数確認することができる。ロウソクの残存については前述した通りだが、壕口1側の小部屋に設けられた灯り取りの掘りこみの底面には、缶の底の部分を切り取って灯りを立てるための道具も置かれていた。その他、壕内の壁面には多くの箇所に釘が打ち込まれていた他、先の部分が丸い形状をしたピン状の釘が打ち込まれた箇所も見られた。これらの部分の壁面の多くは黒く変色していることなどから、灯りを下げるための機能を有していたことが推察される。

壕内には遺物がほとんどみられず、唯一壕口2との連結部の境目あたりに、透明のビン(インクをいれるためのビンか?)が1点確認できた。

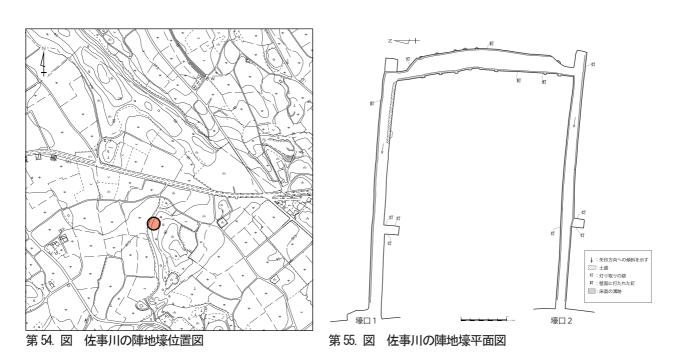




写真255. 壕口2を望む。床面の両端には溝が設けられている。



写真 256. 壕内(連結部。壁には柱を設置するための掘り込み跡が明瞭に残る)



写真257. 佐事川の陣地壕の近景



写真259. 灯り取り(ろうそくが残る)



写真261. 壕口1の側から連接部をのぞむ



写真263. 壕口1側の小部屋



写真 258. 壕口1の入口から壕内を望む



写真260. 壁に打ち込まれたピン状の鉄製品



写真262. 連結部から壕口2側をのぞむ



写真264. 壕口1側に残る土盛り

(4) 西更竹の壕 I 跡 (にしさらたけのごう I あと)

①所在地

宫古島市城辺字下里添西更竹

②立地 • 現況

本壕跡は県道 246 号城辺下地線の拡幅工事に伴い、新たに発見された遺跡である。本工事に際して、平成 25 年 10 月から 11 月にかけて記録保存調査が実施されている。発掘調査後は、工事に伴い消滅した。調査時には西更竹避難壕として報告を行ったが、築壕された形跡がみられる為、日本軍に関係する壕であると推定される。今回の分布調査時に、西更竹の壕 I へ名称変更を行った。

④遺構の特徴

本壕の平面形態は L 字型を呈する。現在の地表面から地下へ下がるように壕が構築されているが、壕内には土砂の堆積が厚い。 L 字型に 90 度折れ曲がった部分から、壕奥の突き当りまで(南方向)は約 4.7 メートルで、幅は最も狭い部分で 0.8 メートル、広い部分で 1.2 メートルを呈する。壕内の高さは約 1.3 メートルある。

※宮古島市教育委員会 2014年 『西更竹岩陰墓・西更竹避難壕』 -城辺下地拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告書一 宮古島市文化財調査報告書第6集



写真265. 壕の開削状況(東より)



写真266. 壕口(南より)



第56. 図 西更竹の壕 I 跡位置図

(5) 西更竹の壕Ⅱ (にしさらたけのごうⅡ)

①所在地

宮古島市城辺字下里添西更竹(前井の東南東約150メートル)

②立地 • 現況

壕は、県道78号線から丘陵を横断して上区集落へ向かう道路沿いに確認できる。丘陵の頂上部近くに 壕口はあり、道路沿いに位置していることから、道路によって壕が寸断された可能性もある。壕口部分一 帯は、草木が繁茂している時期もあることから、確認が困難な場合もある。

④遺構の特徴

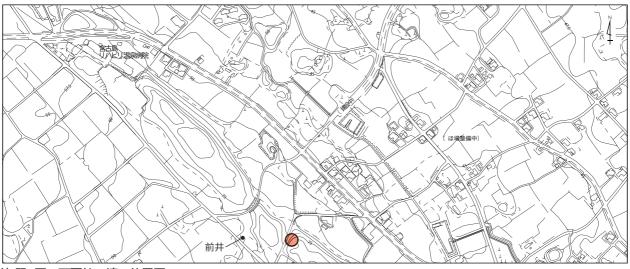
現在確認できる壕口は、幅が約0.5メートル、高さが約0.6メートルと非常に狭く、北西方向に開口している。平面形態は、略「く」の字形を呈しており、壕口から1.4メートルほど南南東に直進すると、南へ下るように約4メートル直進する。この下りの傾斜角はきつく、地下壕の形態をとるように構築されている。その後、南南東に約5.6メートル直進すると二股に分岐し、それぞれおよそ2.3メートルほど進むと突き当りとなる。壕内の幅は約 $1.0 \sim 1.2$ メートル、高さは約 $1.5 \sim 1.7$ メートルあり、部分的に崩落がみられる。



写真267. 壕口の外観



写真 268. 壕内部 (壕口部分をのぞむ)



第57. 図 西更竹の壕Ⅱ位置図

(6) 西更竹の壕群Ⅲ(にしさらたけのごうぐんⅢ)

①所在地

宫古島市城辺字下里添西更竹

②立地·現況

西更竹司令部壕の位置する西更竹の丘陵地で2基の壕と2基の蛸壺が確認された。丘陵の長間側は急崖の地形をなすが、下里添側は比較的緩やかな斜面地をなす。2基の壕はいずれも野原岳を望むように開口し、丘陵の中腹部に位置する。一方の2基の蛸壺は、丘陵の頂上部付近に位置する。

③歴史状況

本壕の位置する丘陵の南東部には、独立混成第60旅団の司令部壕が位置する他、山砲隊の壕も構築されていたことが確認されている。しかし、これらの壕は、いずれも下里添側に開口しており、本壕については、これらと異なる部隊が構築した可能性も高いと考えられる。

④遺構の特徴

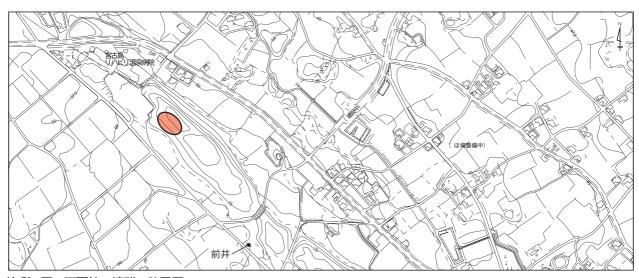
本遺跡は、2基の壕と2基の蛸壺から構成される。2基の壕は、いずれも丘陵の中腹から頂上部近くの 斜面地を、琉球石灰岩を掘り込んで構築しており、2基の蛸壺は頂上部付近を掘り込んで構築している。

壕1は、壕口が南西部に開口しており、南西-北東方向を軸にした直線的な壕である。壕内は、幅が1.8 メートル、高さ1.7メートルで、奥行きは4.8メートルに及び、壕内の断面形態は方形状を呈する。

また、本壕は琉球石灰岩を掘り込んだ、約4.2メートルの直線的な羨道部を有している。天井部分の石灰岩の厚みは、1.4メートルほどと比較的薄い。壕1の北西側には約20メートルの等間隔で2つの墓が確認される。この2つの墓は斜面の掘り込みを利用した構造で、壕を2次利用した可能性が考えられる。

壕2も、壕1と同様の直線的な形態をなしている。壕口の幅は1.7メートル、高さ1.6メートルの方形状を呈し、奥行きは4.5メートルである。壕口は、南西方向に開口し、壕1同様に野原岳を望む。天井部分の厚みは、約0.8メートルと薄く、内部は一部天井が崩落している。壕1、壕2とも類似した形態をなし、同様の機能を有していたことが推察される。壕の規模から、緊急避難としての壕ではなく、何らかの重火器を格納していた可能性も考えられるが、その痕跡などは確認できない。

2基の蛸壺は、いずれも方形状に基盤の石灰岩を垂直に掘り込んでいる。蛸壺 1 は、長辺 1.4 メートル、短辺 1.3 メートル、深さ 0.6 メートルである。蛸壺 2 は、長辺 1.4 メートル、短辺 1 メートルで、深さは 0.8 メートルである。



第58. 図 西更竹の壕群皿位置図



写真 269. 壕 1



写真 270. 壕 1 内部



写真 272. 蛸壺 1



写真 2/1. 堟 2 堟口



写真 273. 蛸壺 2

(7) 西更竹の住民避難壕跡 (にしさらたけのじゅうみんひなんごうあと)

①所在地

宮古島市城辺字下里添西更竹(上区構造改善センターの南東約450メートル)

②立地 • 現況

本壕は2017(平成29)年7月に上区のほ場整備工事に際し、発見された壕である。発見時は、琉球石灰岩の非常に小規模な高まりが畑地内にあったが、ほ場整備工事に伴い記録保存調査が実施され、その後の工事により消滅している。

④遺構の特徴

本壕は、琉球石灰岩の自然の岩陰を利用した住民避難壕である。琉球石灰岩の小規模な岩山の中央部分が窪んだ形状をなし、その窪みの一角に幅約1.5メートルほどの岩陰の入口が確認できる。内部は奥行きが約2メートル、幅1.5メートル、高さ1.5メートルほどの小規模な形態をなしている。明確に人為的に掘り込んだ痕跡がみられないことから、自然の岩陰を利用した壕である。



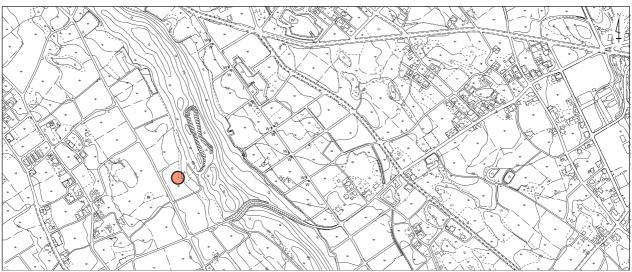
写真 274. 発見時の壕の状況



写真 275. 壕内部



写真 276. 壕口部分



第59. 図 西更竹の住民避難壕跡位置図

(8) ウズラ嶺の陣地壕群(うずらみねのじんちごうぐん)

①所在地

宮古島市城辺字下里添ウズラ嶺

②立地 • 現況

本壕群は、総数5基の壕で構成されている。いずれも、ウズラ嶺という小丘陵地に構築された壕群で、 現在は雑木林となっており、産業廃棄物の不法投棄が著しい。ウズラ嶺の小丘陵地は、サジガーの丘陵部 までのびる一連の丘陵地である。聞き取りでは、この嶺には、水が流れる小規模な川があったということ であるが、現在はそのような水流はみられない。

③歴史状況

『先島群島作戦(宮古篇)』においては、「野原越東方ウズラ嶺」に野戦重砲兵第2中隊が15糎榴弾砲を4門配備したと記されている。これと同様の内容を示す資料として宮古島地区防禦配備図(佐渡山氏提供資料)にも、ウズラ嶺の位置する一帯に榴弾砲を設置したマークを見て取ることができる。

また、聞き取り調査においても、大砲が4門据えられ、2門は白川浜を、2門は野原岳の方向を向いていたとの証言がえられている。その一方で、山砲兵第28 聯隊の砲兵隊陣地構築一覧表によれば、山砲(75ミリ)を「ウズラ嶺八七高地北方百五〇米」に2門、「ウズラ嶺八七高地西側」に3門を設置したと記されている(ref.C11110237900)。ウズラ嶺八七高地とは、西更竹の丘陵地の北西部に位置する最高標高地点を示すものと考えられる。これらの資料から、ウズラ嶺には、15 糎榴弾砲もしくは、山砲(75ミリ)が設置されていたことを示している。

④遺構の特徴

5つの壕はそれぞれ西側から壕 $1 \sim 壕 5$ の名称を付した。これらの壕はその構築場所から、2つのポイントに大別される。西側に位置する壕 $1 \sim 壕 4$ は、隣接して構築されており、最も東側にある壕 5 は、これら 4 基の壕とは離れた道路沿いに位置する。

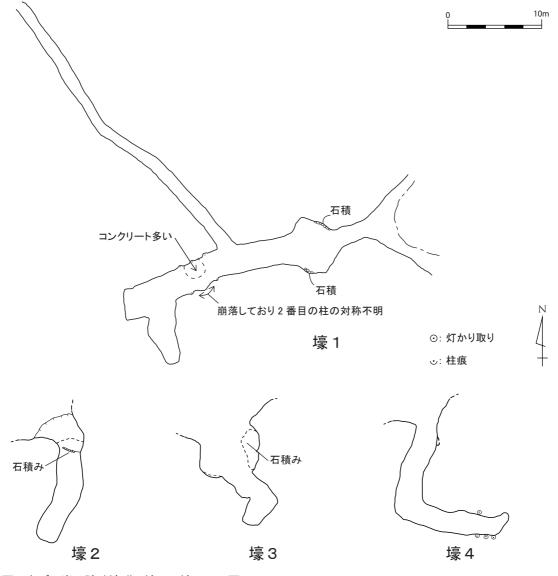
壕 1 は、壕口部分の幅が 3.3 メートル、高さ 3 メートルと規模の大きな壕で、北北西に開口する。壕口近くの平面形態は、両壁面部とも三角に掘り込んで幅を広げ、そこからは、ほぼ直行した平面形態を呈するが、南西方向と、北東方向に通路を設けている。南西方向へは、幅が約 $1.6 \sim 2$ メートル、高さ 1.6 メートルと、人ひとりが歩けるほどの通路である。本来は、丘陵部にむけてもうひとつ壕口を設けるように構築された通路の可能性がある。東北方向へは約 5.5 メートルほど直進して突き当たる。直行する部分は、高さが 2.4 メートルと壕口部分に比べやや低い。また、 3 対の柱と梁を設ける目的で、壁面を半円型に掘り込んだと思わる範囲がみられる。柱間の幅は 1.5 メートルほどで、半円型の直径は約 $0.4 \sim 0.5$ メートルである。梁を設置するために、壁面の上部を丸く掘り込んでいる跡も確認される。この柱痕の近くには、麻袋に入れられていたような形状のコンクリートの固まりが散乱している。

壕2の壕口前には、壕を構築した際の石灰岩礫を山にして積み上げ、目隠しとしている。壕1にみられるような、両壁面を三角に掘り込む形態は、下里添の野戦重火器秘匿壕群にもみられる形態である。前述した歴史状況を踏まえるならば、壕1は九六式15糎榴弾砲を格納する壕の可能性が高いといえる。

最も東側にある壕 5 の壕口は、道路建設時に丘陵部側へ周辺の土砂や石灰岩礫を寄せたものと考えられ、壕口がほぼ埋まった状態にある。聞き取り調査によると、この壕は、食料庫であったとされ、2 つの壕口が内部でつながったコの字型を呈するとされる。実際に、内部を確認したところ、人が立って歩けるほどの高さを有しやや U の字状の平面形態を呈している。大まかな壕の形態が、聞き取り調査と類似する点などから、食料庫として利用されていた壕の可能性が高い。



第60. 図 ウズラ嶺の陣地壕群位置図



第61. 図 ウズラ嶺の陣地壕群 壕1~壕4平面図



写真 277. 壕 1 壕口部分



写真279. 壕1 南西方向への通路



写真281. 壕2 壕口部分



写真283. 壕2 壕口部分の石積み



写真 278. 壕1 壕内部(壕奥より壕口を望む)



写真 280. 壕 1 北東部への掘り込み



写真 282. 壕 2 壕内部



写真284. 壕 2 遺物散乱状況

ウズラ嶺の陣地壕・壕1の機能について

下里添の野戦重火器秘匿壕群は、九六式 15 糎榴弾砲を格納していた壕であり、壕の平面形態などからその機能を特定することのできる点で重要な戦争遺跡である。今回、ウズラ嶺の陣地壕で確認された壕 1 の平面形態は、下里添の野戦重火器砲壕群と類似する形態をなし、前述した戦史資料や聞き取り調査などの点からも同様の機能を有していたことが推察される。聞き取り調査の中では、2 門は白川浜を向き、2 門は野原岳を向いていたとされている。

榴弾砲は、山や丘陵地を超えて攻撃を行う火砲であり、宮古島においては主に上陸時の敵の攻撃を目的に設置されたと想定される。

また、九六式 15 糎榴弾砲の最大射程距離は、11.9 キロ(佐山 2012)と非常に長い。図版 5 は、2 つの戦争遺跡からの最大射程距離を図化したものである。この図からは、聞き取り調査でも証言のあった白川浜への上陸に備えた火砲の設置として妥当な位置関係にあることがみてとれる。もうひとつの証言にある野原岳を向く火砲については、榴弾砲が対空向けの火砲ではなく、地上戦時に司令部壕の位置する野原岳にむけて砲撃を行うことは考えにくい。そのため野原岳の丘陵部を超えて、もうひとつの上陸予想地点である宮国方面もしくは、平良港をを射程としていた可能性が考えられる。しかし、榴弾砲の射程距離の点から平良港は、その範囲内に含まれておらず、宮国方面への主な射程としていた可能性が高いと考えられる。この点において下里添の野戦重火器砲壕は、距離的に海岸線近くがその射程距離の限界にあり、白川浜を主な射程にしていたと考えられる。

注1:伊藤厚史による現地指導による所見。 佐山二郎 2015 年『日本陸軍の火砲 野戦重砲 騎砲他』



図版 6. 下里添の野戦重火器秘匿壕群、ウズラ嶺陣地壕からの九六式 15 糎榴弾砲の射程範囲

(9) ウズラ嶺西の壕跡(うずらみねにしのごうあと)

①所在地

宮古島市城辺字下里添ウズラ嶺

②立地 • 現況

本遺跡は、平成 29 年度のウズラ嶺地区のほ場整備工事に際して新規に発見された壕である。野原岳東部の畑地に隣接した小規模な琉球石灰岩の岩塊に構築された壕である。平成 29 年 12 月から平成 30 年 1 月の期間内に記録保存のための発掘調査が行われ、

現在はほ場整備工事により消滅している。

④遺構の特徴

壕は、人工的に掘削をされているものの、本来の自然の岩盤の割れ目を利用して構築された壕と考えられる。壕内は、略方形の平面形態をなしており、高さは約2メートルほどである。形態としては非常に小規模な壕であるが、人工的な壕である点や野原岳の東側の麓に位置する点などから、日本軍に関連する壕と推察される。



写真285. 壕口(調査時)



第62. 図 ウズラ嶺西の壕跡位置図

(10) ウズラ嶺の野戦病院壕跡(うずらみねのやせんびょういんごうあと)

①所在地

宮古島市城辺字下里添ウズラ嶺

②立地·現況

本壕は、ウズラ嶺の丘陵地北東部の頂上部付近に位置する。現在は、墓がいくつか点在し、周辺は畑地として利用されている。聞き取り調査により、ウズラ嶺にあったとされる野戦病院の洞窟壕は、墓へ2次利用されたとのことで、現在でもその墓を確認することができる。また、畑地に残る石積についても、野戦病院の施設と関連するものとの証言が得られている。

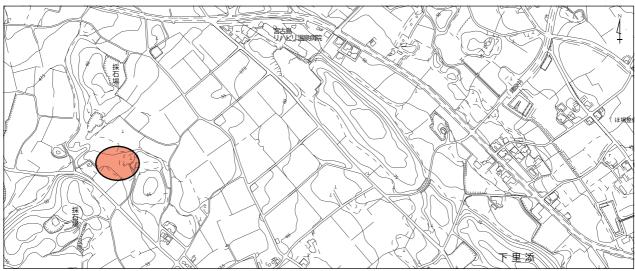
③歴史状況

『先島群島作戦(宮古篇)』(瀬名波 1975 年)には、「(4) 衛生部隊の臨戦準備」(12~14頁)として、師団軍医部、陸軍病院、第28師団野戦病院の位置や構成などについて記されている。その中で、ウズラ嶺の野戦病院は、第28師団第4野戦病院第1半部に比定されるものと考えられる。第28師団第4野戦病院は、城辺町福里に位置しているが、第1半部は更竹付近に洞窟病院を施設とし、主として南地区、中地区及び東地区の傷者を収容するとされている。

④遺構の特徴

本遺跡の石積部分は石積の高さが 0.9 メートル、幅 1 メートルほどの大きさで L 字型の平面形態をなす。 $0.3 \sim 0.6$ メートルの自然の石灰岩を野面積みする。

墓の部分については、現在の墓口は北東方向に開口する。琉球石灰岩を掘り込んで構築されおり、墓の規格は南西 - 北東方向に 4メートル、北西ー南東方向に 4.3 メートルの方形型を呈している。墓の上端部から床面までの高さは 2.5 メートルである。方形型の墓は、壕口を除く 3 面とも石灰岩で構成されていることから本来の野戦病院の壕内部の規格とほぼ同程度と考えられ、野戦病院跡としては非常に小規模な規格であるといえる。



第63. 図 ウズラ嶺の野戦病院壕跡位置図



写真286. 野戦病院壕を利用したとされる墓



写真287. 野戦病院の施設跡とされる石積

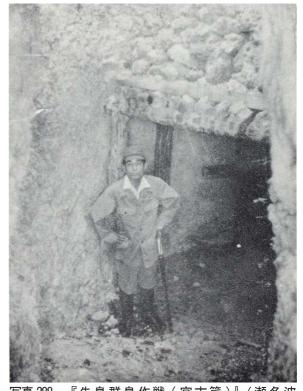


写真 288. 『先島群島作戦(宮古篇)』(瀬名波 1975年)に掲載されているウズラ嶺 の野戦病院(キャプションは「ウズ ラ嶺の洞窟病院入口」)。

(11) 西花切の壕群(にしはなきりのごうぐん)

①所在地

宫古島市城辺字下里添西花切

②立地·現況

本壕は花切集落の西方にそびえる、丘陵の頂上部一帯に位置する。丘陵は西花切の南西部から宮古製糖工場一帯まで延びており、最高標高地点は壕の位置する西花切の南西部にあり、約86メートルである。

丘陵の頂上部からは、東はアーリヤマ丘陵地一帯を、西は上野方面の南海岸までを望むことができ、非常に見晴らしのよい場所であることが分かる。壕の位置する丘陵地は、比較的傾斜が高い雑木林となっているため、壕の確認は容易ではない。

③歷史状況

壕の位置する丘陵は、戦時中は「花切八六高地」と称されていた。丘陵の東側にある、当時の下南青年会場には、山砲兵第28聯隊第2大隊の本部が置かれていた。また、丘陵の南東部には、山砲兵第28聯隊第4中隊の慰霊碑が建てられていることから、同中隊が駐屯していたことが推察され、第6中隊、第7中隊も花切一帯に展開していたことが確認されている。

戦史資料・山砲兵第28 聯隊 (ref.C11110237800、ref.C11110237900) によれば、「花切八六高地東側」に山砲が4門、「花切八六高地南方五百米」に山砲が4門、「花切八六高地西側」に山砲が3門配備されたことが記されている。これらのことから本壕の位置する丘陵一帯は、主に山砲兵第28 聯隊第2大隊に関連する壕が構築されたものと考えられる。

④遺構の特徴

本遺跡は立地の点から大きく、丘陵の頂上部付近と丘陵下部に分かれる。

丘陵の頂上部附近では蛸壺1基と、石灰岩の割れ目を利用した避難地1基と、壕1基(壕1)で構成される。

蛸壺は、直径が 0.7 メートルの円形を呈し、深度は 1 メートルほどである。人がひとり入れるほどの大きさで、緊急避難の場所として使用されたと考えられる。

また、避難地は蛸壺と同様に緊急避難を目的としたものと考えられる。ほぼ南北方向に伸びた長さ約2.8 メートル、幅約0.8 メートル、深度は約1.8 メートルの石灰岩の自然の割れ目を利用したもので、南側部分には高さが不規則ながらも、石灰岩を掘り込んで4段の階段が作られており、北側部分は人が出入りできる通用口のように開いた状態にある。これら2つの遺構は、頂上部付近に設けられたとされる監視所に関連するものと考えられ、機銃掃射などに際しての緊急避難のために構築されたものと考えられる。

壕1はこの頂上部からは約10メートルほど低い場所にあり、石灰岩を掘りこんで構築されている。壕は2つの壕口をUの字形に連結した形態をなしているが、壕口2は、土砂で埋まった状況にある。壕内は、 天井部分から雨水が滴りおちる箇所も多い。

壕口1は、壕口の全面部に長さ 5.6 メートル、幅 $0.4 \sim 0.6$ メートル、最大高 0.8 メートルの石積が設けられており、壕口の秘匿や、爆風除け、戦闘時の防衛を目的に構築されたものと考えられる。壕は地表部から地下へ向かって掘り込まれており、壕口1は、高さが約 1.6 メートル、幅 1.5 メートルで、人がひとり余裕をもって出入りできるほどの大きさである。

壕口1から南西へ約6.5メートル下りながら進むと、階段が3段設けられて、降りた部分からは傾斜のない平坦な空間となり、幅も2メートル以上と広くなる。この広い空間から北西方向へと曲がり、約6メートルほど進むと、今度は上りの階段が設けられている。やや形態が崩れているものの、3段から4段のステップが設けられている。階段を上がった場所の東側の壁面は約0.2~0.3メートル大の石が高さ約

1.5 メートルにわったて積まれており、壁面の崩落防止か、空間をふさぐために積まれたものと考えられる。階段から壕口 2 へと向かう途中には、奥行き 1.2 メートル、幅 0.8 メートル、高さ 1.5 メートルほどの小空間が設けられている。

壕は全体として、2つの壕口から地下へ掘り込むようにして傾斜して構築されており、途中にはそれぞれ階段も設けられている。最奥部に幅が2メートル以上の広い平坦な空間を有するように作られている。

また、いくつかの灯り取りも確認できる。本壕は丘陵部及び、その前面部に駐屯した山砲兵第 28 聯隊 第 2 大隊の緊急時の避難壕としての役割をはたしていたのではないかと考えられ、壕内にはおよそ 20 ~ 30 人を収容できる空間を有している。

これらの壕とは異なり、現在の畑地と雑木林の境界線近くの丘陵下部にも、5つの壕が確認されている。 その内の壕3には4つの壕口があり、総延長が約80メートルにもおよぶ壕である。4つの壕口はおおむ ね南東方向を向いており、琉球石灰岩を掘り込んで構築されている。

壕3の壕口1と壕口2の連結部においては、1.2メートルの段差を有しており、壕口の標高差を調整するようにして構築されていることが見てとれる。また、壕口2の壕口近くを中心に、戦後墓として利用された痕跡がみてとれる。人骨などは確認されないものの、墓内に副葬したと思われる沖縄産無釉陶器や、墓口を塞いでいたとみられる石積跡が、現在も残されている。これらの状況は、戦後に壕を墓として利用したとの聞き取りを裏付けるものといえる。

また、壕3の壕口2の通路部分には、柱と梁が据え付けられた痕跡を壁面にみることができる。多くの場合、柱を壁面に埋め込むようにして設置するため、半円形に壁面を掘りこみ、平面図でみると蛇腹の形態を示すが、本壕ではそのような掘り込みをもたせず、梁のでっぱり部分のみを壁面を掘り込んで設置している。

壕3の壕口2から北西方向に直進する部分には4列にわたって柱を設置しており、柱間は1.3 メートルほどである。次に壕3の壕口3へ向かって南西に直進する部分では、6列に柱を設置している。ここでもおおよそ $1.0 \sim 1.4$ メートルほどの幅で柱を設置している。なお、現在は柱跡のみが確認され、柱材や梁材は残されていない。このような柱跡が確認されるのは、壕口2から壕口3への通路のみで、通路幅も約2.5 メートルと非常に広い作りとなっており、4つの壕の中でも中心的な壕であることがうかがい知れる。壕3から、南東側へ行くと、壕4、壕5が隣接して位置している。2つの壕は連結することが予定されていたと考えられるが、2つの壕の高低差が約2~3メートルほどあり、その高低差の調整を行う必要性がある。

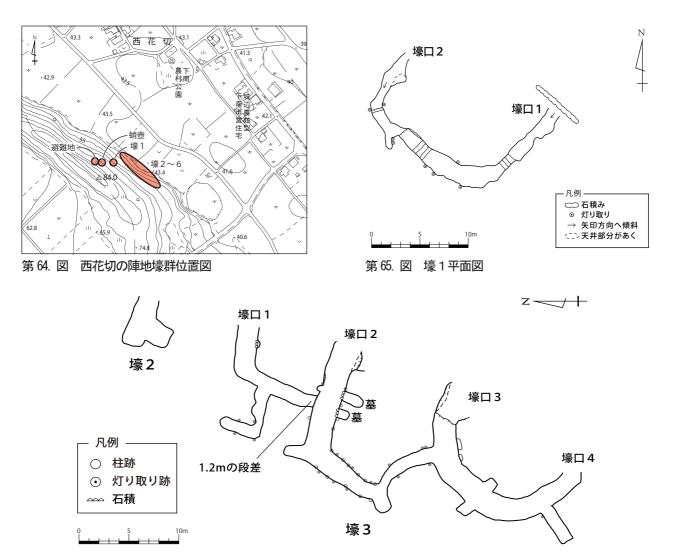
壕6は壕3の北西に位置し、1基のみで構成される。

これらの壕の位置関係から、丘陵上部に位置する壕1と、丘陵下部に構築される壕2~6とに大きく分けることができる。前者については監視所に属する壕であり、後者は地上戦に際して、軍の指令所としての役割を果たす目的があったものと推察される。

まとめ

本壕は体験談などにその記述が認められるものの、今回の確認調査で初めて報告される壕群である。壕 跡は歴史状況にも記したように、主に山砲兵第28聯隊第2大隊に関連する可能性が高い。

今回は6基の壕の確認を行ったが、戦史資料や、体験談、聞き取り調査によれば、さらに多くの壕跡が 残されているものと考える。なお、壕の発見に際しては、立津義康さんらの踏査によって確認されたもの であり、記して感謝申し上げます。



第66. 図 壕2、壕3平面図



写真289. 2016年2月22日撮影

写真290. 「遥かなる宮古島」掲載写真

男著「遥かなる宮古島」に 掲載されている、「第7中 隊本部洞窟」の写真と同一 の壕であると確認できる。

壕3の壕口2は、神田文



写真 291. 壕 1 壕口 1



写真 292. 壕 1 内部(中央付近)



写真294. 壕1 壁面の石積み



写真 293. 壕 1 階段(壕口 1 から中央部へ降りる



写真 295. 壕1 内部部(中央部から壕口1へ登る)



写真296. 壕1壕口2の脇部屋(壁面に明り取り)



写真298. 頂上部近くの蛸壺



写真297. 壕1壕口2(土砂で埋没)



写真299. 頂上部の避難場地



写真300. 壕3壕口1



写真301. 壕3壕口2



写真302 壕3壕口2内部(写真左側は岩陰墓として2次利用されたことがみてとれる)



写真303. 壕4 壕口部分



写真304. 壕 4 内部の灯り取り



写真306. 壕5 壕口部分



写真305. 壕4 内部の壁に打ち込まれた鉄製品



写真 307. 壕 5 内部

(12) ムムクーリャ (むむくーりゃ)

①所在地

宮古島市城辺字下里添西更竹

②立地·現況

更竹(下北)集落の外れにある自然壕である。

③歴史状況

城辺町史の戦争体験編によると、ムムクーリャはウズラ嶺の北側、下北集落にある洞窟で、住民の避難 壕であった。この自然壕は、下に降りていくと広い空間があったとされる。

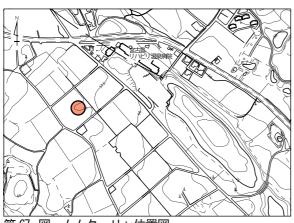
④遺構の特徴

畑と畑の境界に残った、ほ場整備の適用外地に直径 1 メートルほどの自然壕の縦穴があり、そこが入口となっている。現在は土砂が流入しており、入口は狭くなっているが、洞内を底面まで降りると、少なくとも 2 つの横穴がある。そのひとつは幅が $0.8 \sim 1$ メートルほどの幅で、奥行きはおよそ 15 メートルあり、大人が立って歩けるほどの高さを有す。

また、体験談によると広い空間があったとされるが、現在は往時の形態は推測の域を出ない。



写真308. 壕口付近、近景



第 67. 図 ムムクーリャ位置図



写真 309. 内部



写真310. 壕口近傍に設置された石碑

(13)「陣歿せる軍役動物を吊ふ」碑(「じんぼつせるぐんえきどうぶつをとむらう」ひ)

①所在地

宮古島市城辺字下里添佐事川

②立地·現況

本碑は県道78号線の平良と城辺との境界に近く、下里添の野戦重火器秘匿壕群に隣接している。碑は 小高い丘の頂上部に建立されており、現況としては雑木林になっている。そのため道路からは碑を確認す ることはできず、道路から約10メートルほど丘の中に入る必要がある。

③歷史状況

第28 師団病馬収療所(豊5685 部隊)(隊長:保坂斯道獣大尉)は、昭和19年7月8日動員下令先島群島派遣のため斉々哈爾出発、7月20日釜山港出帆、7月22日門司寄港。8月6日鹿児島港出帆、8月12日沖縄県宮古島に上陸(ref. C 12122499000)。宮古島では、城辺村下里添に駐屯している。

体験談や聞き取り調査などから、野原越には病馬廠があり、馬の世話に通ったとの証言がある。昭和20年秋、戦没将兵と軍役動物(主として軍馬)の霊を慰めるための慰霊碑が、先島集団司令部の所在したゆかりの地、野原越に建立された。碑文は納見中将の揮毫によるもので、この慰霊碑の近くには当時の納骨堂も建立された。

④遺構の特徴

本碑は県道78号線の北側にある、雑木林の小山をおよそ10メートル分け入ったところに建立されている。斜面に石積の階段(10段)を構築し、小山の頂上部を石垣で囲った、幅7メートル、奥行き5メートル、高さ1メートルに整地された平地に碑が建立されている。

碑の大きさは、幅 2.5 メートル、奥行き 1 メートル、高さ 2.3 メートルである。現在はガジュマルの大木に覆われて、碑文をすべて読み取ることは困難であるが、かろうじて読める碑文には、「陣歿せる軍役動物を吊ふ 昭和 20 年中秋 納見中将誌」とある。また、碑文下の土台には写真に示したような文様が確認できる。



第68. 図 「陣歿せる軍役動物を吊ふ」碑位置図



写真311. 「陣歿せる軍役動物を吊ふ」碑近景



図版 7. 碑文及び碑文の書き出し (○は判読不明)



図版 8. 碑文下にある文様

第7節 西里添

1. 西里添の沖縄戦時の概況

(1) 西里添北部(小字、更竹・西与並武・中与並武・中山底・山地)

西里添の北部一帯には、野戦重砲兵第1聯隊第1大隊(以下、野重第1大隊と称する)と、独立混成第60旅団(以下、第60旅団と称する)に関連する施設が複数確認されており、『西城小学校沿革誌』によると、昭和19年7月19日に西城国民学校に駐屯したことが記されている。

野重第1大隊は、昭和19年7月16日に宮古島に上陸していることから、上陸後すぐに西城国民学校に 駐屯したと考えられる。西城国民学校周辺において、野重第1大隊に関連する施設としては、下里添佐事 川に榴弾砲を秘匿した壕が確認されていることから、同隊が西里添の北部から下里添佐事川一帯にかけて 展開していたことがみてとれる。

その一方で、『城辺小学校沿革誌』によると、昭和19年11月13日に第60旅団が城辺国民学校から、西城国民学校へ引越を完了したとあるが、『西城小学校沿革誌』にはそのような記述は認められない。聞き取り調査や戦闘詳報においても、終戦時まで第60旅団は西城国民学校に駐屯していたことが判っており、野重第1大隊と同居していたのか、野重第1大隊がいつの時期に移動したのかは明らかではない。体験談によると西城国民学校の北西あたりに、中尉や軍曹が宿泊し、経理室として利用された民家や、本部が置かれた民家があったとされるが、これらの情報が野重第1大隊と第60旅団のいずれに属するものなのかは明らかでない。

また、体験談によると当時、西中共同製糖工場には兵隊が宿泊していたとある。その後、製糖工場を軍部が全部壊して兵舎をつくるための資材として利用したとある。なお、同工場に付設していた2つの煙突のうち1基は空爆によって破壊されたが、もう1基の煙突には機銃掃射の痕が今も残されている。

(2) 西里添の南部(小字、東与並武・西底原・東底原・豆チラ・瓦口・西嶺・横武・溝原・与那節)

東与並武から東底原一帯には、独立歩兵第398大隊(以下、第398大隊と称する)が駐屯していること が体験談や聞き取り調査からみてとれる。

聞き取り調査では西中農事集会所(以下、西中公民館と称する)に、第398大隊の本部が置かれていたとされる。その西中公民館の周辺には、第398大隊の大隊長である黒田少佐の宿泊した民家や、幹部が宿泊したとされる民家を体験談から確認できる。

また、聞き取り調査では西中公民館の南西に位置する、ナベフタヤマとその北西一帯にかけて、鉄条網で周囲を囲って、畑や幕舎、豚舎などを設けていたとのことである。この集合施設には見張りも置かれ、井戸の利用などの場合をのぞき、住民の立ち入りを制限していたとのことである。

その他にもムイニーヤマと呼ばれる小丘陵地には、ほ場整備工事に伴って発見された、複数の壕跡が確認されている。体験談からはナベフタヤマからムイニーヤマ一帯にかけては、第398大隊の第3中隊 (堀之内隊)、第2中隊 (長沼隊)、歩兵砲中隊 (川原隊)が駐屯していたとの記載があり、前述した集合施設は、これらの第398大隊に関連する施設であることが伺える。

西中公民館の西側に位置する丘陵地はアーリヤマと称される。アーリヤマでは沖縄県立埋蔵文化財センターの調査で、発電機壕やトーチカ、貯水池が報告されている。このアーリヤマにおいては、海軍313設営隊が電信基地を構築したとされる。このことから発電機壕は、電信基地に関連するものと捉えられている。電信に関連する部隊としては、最も近い位置では、西東地区農業活動拠点施設(以下、西東公民館と称する)に第60旅団の通信隊が駐屯していたことが体験談から確認でき、アーリヤマの電信基地との関

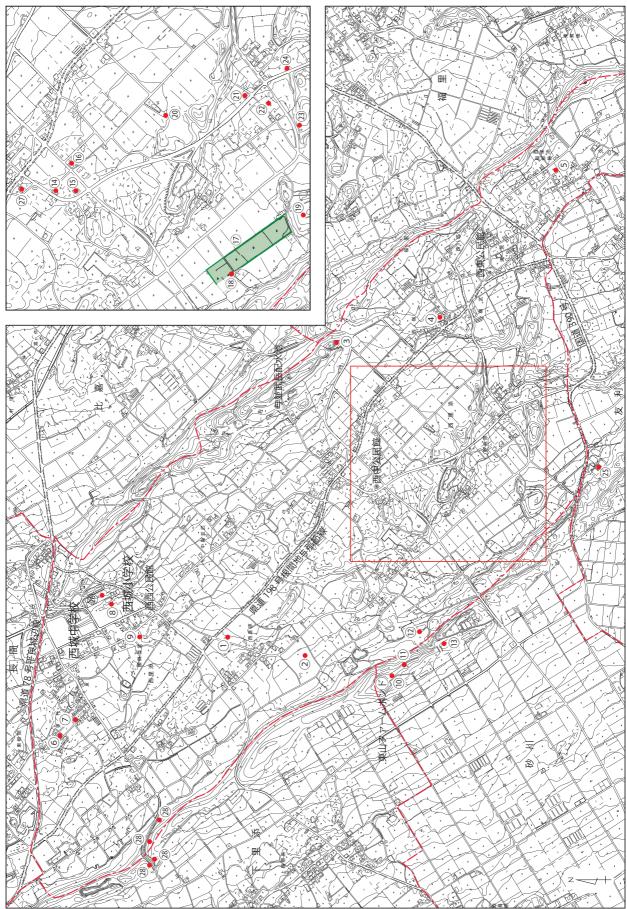
連性が高いと考えられる。アーリヤマにある東山ファームポンドの東側には、ヤマグヌヤーと呼ばれる自然洞窟があり、その洞窟には兵隊が隠れていたと体験談に記されている。発電機壕については、電信基地の関連施設のひとつであると考えられるが、トーチカやヤマグヌヤーに隠れていたとされる兵隊に関しては、その詳細が不明である。

その一方で、西中公民館の東側に位置する丘陵にある、ミルク嶺ファームポンドの南側には、5つの壕が構築されていることが報告されている(沖埋文2005)。このミルク嶺には山砲兵第28聯隊の第2中隊が駐屯しており、「豆チラ北方高地東側」には、15糎榴弾砲が3門設置され、「豆チラ高地西側」には75粍山砲が2門設置されていたことが、戦史資料から読み取れる(ref. C11110237900、C11110237800)。

これらのことから西里添の北部においては、第60旅団を中心に展開され、南部では東西の2つの嶺に 海軍や、山砲兵の施設を確認することができ、第398大隊もこの地域を中心的に展開していたことがみて とれる。

【注釈】

- 注1:聞き取り調査では西城国民学校の敷地内に、多くの大砲が並べられていたが、ある時期からその大砲が見られなくなったとの話が得られた。大砲が学校の敷地内に並べられていたとの話は、複数の聞き取りでも確認されている。これらの大砲は野重第1大隊の所有する15糎榴弾砲で、これらの大砲が見られなくなった時期は不明であるが、西城国民学校の利用に際して、野重第1大隊と第60旅団の本部の入れ替えがあったことを示すことが推察される。
- 注2:西中共同製糖工場は、平成26年6月21日付で国の登録有形文化財(建造物)に指定されている。
- 注3:第398大隊は、黒田孟少佐を大隊長とし、第 $1\sim3$ 中隊、MG (機関銃)中隊、歩兵砲中隊から構成される。第398大隊に関する戦史資料は確認できず、その構成人数などは不明であるが、その構成が類似する第397大隊は、612名から構成される (ref. C11110011000)。第3中隊は、堀之内高彦を中隊長とし、第2中隊は長沼文人を中隊長とし、歩兵砲中隊は、川原繁治を中隊長とする部隊である。
- 注4:アーリヤマは、東山の方言名である。アーリが東を意味しているとされる。
- 注5: 宮古島市史編さん室収蔵、「霧生藤吉郎氏提供資料」に基づく。



第69. 図 西里添地区成果図(地図)

2. 西里添の調査成果一覧

①旧西中共同製糖場煙突

体験談 (下地長太郎さん)によると、昭和18年から操業を開始したが、2年ほどで戦争が始まり操業ができなくなった。製糖所は大きな建物であったことから、兵隊が住み込んでいた。また、聞き取りによると製糖工場に向かって機銃掃射があり、周囲には薬莢が散乱していた。その後、兵隊は移動していった。当時の西中製糖工場には煙突が2つあり、現在ある煙突は機銃により傷つき、戦後の台風で上部が欠落。南側の小さな煙突は業者が解体して、資材としてレンガを売り払ったため、現存していない。

②ヤマスクガー(井戸)

聞き取りによると、海軍の兵隊が井戸で水を汲み、アーリヤマの嶺まで運んでいた。(昭和3年生)

③ミルク嶺の地下壕群

聞き取りによると、ミルク嶺には山砲兵がいたとされ、一帯には5基の壕口が確認されている。また、 宮古島地区防禦配備図には、75粍山砲陣地と10糎山砲陣地が、この周辺に配備されていることが確認 されている。(大正11年生)

④独立混成第60旅団(駒)通信隊宿舎

体験談 (上里マツメガさん)によると、現在の西東地区農業活動拠点施設 (西東公民館)には通信隊がいたとされ、そこで女は山羊の草刈りと米つきをさせられていた。

⑤爆弾投下場所

聞き取りにより、西東部落に1ヶ所だけ200キロ爆弾が落ちたとされる場所。(年齢不明)

⑥経理室(中尉·軍曹宿泊地)

体験談 (伊良部平孝さん) によると、西里添1335-1番地の民家には中尉と軍曹が宿泊し、経理室として利用されていた。また、この民家には風呂があった為、将校の人たちが利用していた。

⑦本部

体験談 (狩俣ハルさん) によると、西里添1304-4番地の民家は瓦葺きの家で、駒部隊の本部として使用され、将校 $5\sim6$ 名が一番座で事務をしており、門の東側には衛兵がずらりと並んでいたとされる。体験談では部隊本部と説明されているが、瓦葺の一般住宅である状況からみて、部隊の高級将校の宿泊地であり、上層部の士官らが出入りしていたのではないかと推察される。

⑧独立混成第60旅団本部

『城辺小学校沿革誌』によると、昭和19年11月13日に独立混成第60旅団が城辺国民学校から、西城国民学校に引越を完了したとあり、聞き取り調査や戦闘詳報等により、終戦時まで第60旅団は西城国民学校に駐屯していたことが確認できる。

9井戸・兵舎跡

体験談 (符俣ハルさん) によると、西西公民館の前、サウヌパー (西南の方角) の方向に井戸があり、 兵舎もあった。現在は畑地。

⑩発電機壕(アーリヤマの戦争遺跡群)

砂川と西里添の間を南北には走る丘陵上には、コンクリート造りの発電機壕がある。丘陵の頂上部には 電波探知機の基地が設置され、電波探知機を機動させるための発電機を壕内に設置していた(『沖縄県 戦争遺跡調査分布調査(V)』)

⑪兵隊壕

体験談 (友利完盛さん) によると、ヤマグヌヤーとよばれている南北に長く入口は狭く巾は広い自然のがあり、この壕は兵隊が使用していた。

(2)貯水池(アーリヤマの戦争遺跡群)

トーチカの北東側20メートルに位置しており、コンクリート造りの桝が造られている。海軍313設営隊が構築したとされる。現在は危険防止のため地権者によって塞がれている。(『沖縄県戦争遺跡調査分布調査 (V)』)

(3)トーチカ(アーリヤマの戦争遺跡群)

発電機壕の南側に位置し、宮古島南側一帯を見渡すことのできる丘陵の頂上に構築されている。2名程度が入ることができる程の広さである(『沖縄県戦争遺跡調査分布調査(V)』)。

伸第398大隊黒田少佐宿泊地

聞き取りによると、西里添709番地の民家には、第398大隊黒田猛少佐が宿泊していた。(大正13年生)

15第398大隊本部

聞き取りによると、現在の西中農事集会所には第398大隊の本部が置かれていたとされる(昭和9年生)。また、体験談(友利金さん)によると、防衛隊が西中の公民館で訓練や宿泊をすることもあった。第398大隊本部設置時期と防衛隊が利用した時期が同時期かは不明である。

16幹部宿泊地(6名)

聞き取りによると、西里添705-2番地の民家には第398大隊の黒田少佐率いる部隊の関係者が宿泊していた。(大正9年生)

①鉄条網(自活畑)・兵舎跡

体験談(友利完盛さん)によると、西底原(地名)には数多くの兵舎があり、畑の周囲に鉄条網を張り巡らせ、そこには民間人が入ることはできなかった。また、兵隊は兵舎近くの畑を徴用し、自活していた。他の聞き取りからも、ナベフタヤマから北方に向けてずっと鉄条網が張られていたことや、自活をしていたことを覚えているとの証言が得られている。

18井戸・炊事場跡

聞き取りによると、鉄条網が張りめぐらされた中に井戸があり、近くには炊事場もあり豚を殺しているのを見た。(昭和3年生)

19第398大隊第3中隊宿舎跡

体験談 (佐久田タケさん)によると、ナベフタヤマの南に堀之内隊という兵舎があったとのことから、独立歩兵第398大隊第3中隊堀之内高彦と思われる。

20ビマル御嶽の避難壕

聞き取りによると、ビマル御嶽内には鍾乳洞穴の自然壕があり、西中の住民が避難壕して利用していた。この自然壕は、入口が大きく開いて空が見えることから、住民たちは入口に石積をして空襲を避ける工夫をした。(昭和9年生)他の聞き取りでは、ビマル御嶽の崖下には軍隊の鍛冶屋があったとの証言も得られている。

②1兵隊宿泊地

体験談(佐久田タケさん)によると、西里添426番地の民家には兵隊が宿泊していた。

②兵隊宿泊地(20名ほど)

体験談 (佐久田タケさん)によると、実家にも20名位の兵隊がいたとされ起床ラッパを吹いたら起きて 準備して体操し、消灯ラッパが鳴ったら点呼を受けて一言も喋らずに就寝した。

②3ムイニーヤマの壕群

聞き取りによると、部隊名は不明だが兵隊がいたとされ、壕跡が5つ確認された。周囲には第398大隊の兵隊がいることから、第398大隊に関係する壕と思われる。(昭和3年生)

24爆弾投下場所

体験談 (佐久田タケさん)によると、馬小屋に馬を繋ごうとしていた時に爆弾が落ち、馬も人も亡くなった。(川上松 昭和20年6月14日死亡 31歳)

②第398大隊兵舎跡

体験談 (佐久田タケさん) によると、独歩第398大隊歩兵中隊川原繁治がいたとされる。現在は葉タバコ生産組合作業所。

②6サンペイ壕

聞き取りによると、西城国民学校の敷地内の東側には、少し丘になった松林があり、トンネルのような細長い壕があった。現在は敷地が平坦化され給食室が建てられている。(昭和9年生) ※サンペイ(散兵)壕とは、塹壕のこと。

② 兵隊宿泊地跡

聞き取りにより、西里添727番地の民家には12名ほどの兵隊が宿泊していた。部隊名は不明であるが、班長の名前はユムラか、アリムラだったとのこと。(年齢不明)

28山地の壕群

今回の踏査で西城中学校から下里添花切へ抜ける道路沿いで発見された壕群。

②アーリヤマ戦争遺跡群 新規壕

今回の踏査でアーリヤマ戦争遺跡群の近傍にて発見された壕。



写真312. ①旧西中共同製糖場煙突



写真314. ③ミルク嶺の地下壕群



写真313. ②ヤマスクガー(井戸)



写真315. ③ミルク嶺の地下壕群



写真316. ④独立混成第60旅団(駒)通信隊宿舎



写真318. ⑥経理室(中尉・軍曹宿泊地)



写真320. ⑧独立混成第60旅団本部



写真322. ⑨井戸・兵舎跡



写真317. ⑤爆弾投下場所



写真 319. ⑦本部



写真321. ⑨井戸・兵舎跡



写真323. ⑩発電機壕(アーリヤマの戦争遺跡群)



写真 324. ① 兵隊壕





写真328. 16幹部宿泊地(6名)



写真330. ®井戸·炊事場跡



写真 325. (13)トーチカ(アーリヤマの戦争遺跡群)



写真 327. 15第 398 大隊本部



写真329. ①鉄条網(自活畑)・兵舎跡



写真 331. 19第 398 大隊第 3 中隊宿舎跡



写真332. ②ビマル御嶽の避難壕



写真 334. ②兵隊宿泊地跡 (20 名ほど)



写真336. ②爆弾投下場所



写真 338. ②6 サンペイ壕



写真 333. ② 兵隊宿泊地



写真335. ② ムイニーヤマの壕群



写真 337. ②第 398 大隊兵舎跡



写真 339. ② 兵隊宿泊地

3 西里添の戦争遺跡

(1)旧西中共同製糖場煙突の弾痕(きゅうにしなかきょうどうせいとうじょうえんとつのだんこん)

①所在地

宮古島市城辺字西里添西底原

②立地·現況

サトウキビ畑の中に建つ煉瓦製の煙突。基部の平面は 2.7 メートル、高さは 13 メートルの細長い四角 錐台状をしている。煉瓦は長手だけの段と、小口だけの段を一段おきに積むイギリス積で積まれ、東西面 の基部に欠円アーチの煙道を残す。宮古島の伝統産業である製糖業を象徴する煙突で、県内でも希少な昭 和前期の製糖工場の遺構である。

④遺構の特徴

旧西中共同製糖場は1942年に設立されたが、わずか2年後に日本軍の強制接収によって、操業停止に追い込まれた。本来、高さ約20メートルの煙突が2本あったが、沖縄戦の終戦間際に米軍のロケット砲弾を受けて1本は破壊され、もう1本は機銃掃射によって損傷した。現存する煙突にはこの時の機銃掃射による弾痕が残されている。

残った煙突は戦後の台風によって、上部が崩落し13メートルまで短くなったという。

尚、製糖場の遺構としては、煙突の外、ボイラー冷却用の貯水槽が残されている。

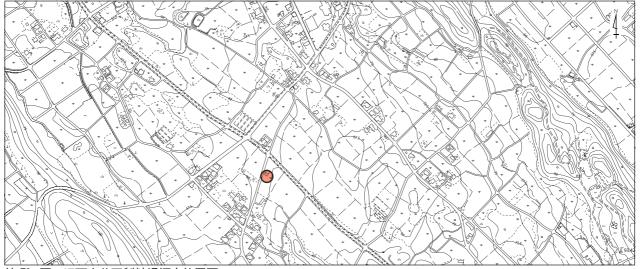
※ 2013 年 6 月 21 日、「旧西中共同製糖場煙突」として国の有形文化財 (建造物) に登録される。 ※ 2017 年11月 12 日、「旧西中共同製糖場跡」として市の有形文化財(建造物)に登録される。



写真340. 煙突全景



写真341. 煙突壁面の弾痕



第70. 図 旧西中共同製糖場煙突位置図

(2)アーリヤマの戦争遺跡群 (アーリヤマのせんそういせきぐん)

①所在地

宮古島市城辺西里添西底原

②立地·現況

東山ファームポンドへ通じる道路の東側。ファームポンドから南へ50メートル先、雑木林の中に発動機壕は位置する。貯水池はこのアーリヤマ丘陵の東側、トーチカは発動機壕より南側の丘陵上に位置する。

また、今回の分布調査で新規に壕を1基確認した。本壕は、宮國武氏からの情報提供に基づいて、確認 調査を行い新規に発見された壕である。発動機壕の南東側に位置する。

③歷史状況

このアーリヤマの電探施設は海軍第 313 設営隊城辺分遣隊と、地元勤労奉仕隊と青年学校生の約 100 名で構築し、防衛については山砲兵第 28 聯隊に委ねたものと推測される。

山砲兵第28 聯隊の戦史資料によると、このアーリヤマの近接地域には第1大隊(第3中隊欠)が駐屯したとある。東南側には独歩第398大隊の駐屯を示唆する体験談が得られている。東側にはミルク嶺の陣地に山砲兵第28 聯隊第2中隊が座し、防衛に当った。この地域には通信隊が駐屯していたという、地元住民の体験談があり、このアーリヤマの発動機壕を使用し、丘陵上の電波探知機を作動させたものと考えられる。この発動機壕の南側にはトーチカ、東側には貯水池等の施設もあり、この発動機壕近接の鍾乳洞には兵隊が避難していたとの聞き取り情報もある。この地域は通信隊のみならず、防衛のための部隊も駐屯していたことが伺える。

④遺構の特徴

ここでは新規に発見された壕(新規壕)についてその特徴を記す。本壕は、琉球石灰岩の岩盤を利用したコンクリート造りの構造物である。天井部分が崩落しているが、内部は一辺が約 3.2 メートルの方形型を呈する部屋と、それに接続する入口の通路部分から構成される。

入口の通路部分は部屋の西側に付設され、通路幅は約 0.8 メートルで長さ 5.2 メートル、高さ 1.8 メートルほどである。この通路部分は天井部分も残され、残存状況は良好である。

部屋の崩落した天井部分の断面から、コンクリートの厚さは約0.4メートルである。入口となる通路部分の他に、北東方向へ向かう通路があったことが観察できるが、崩落による堆積物が厚いため、その形状は明確ではない。部屋の壁面部分には、一辺に3本の柱材が取り付けられていたことが確認できる。

本壕は、北西部に位置する発動機壕との関連性が想定され、発動機で得られた電気を用いた電波探知機などを使用した壕であることが推察される。



写真342. 新規壕 天井部の崩落した部屋



写真343. 新規壕 部屋の壁面(東側)



第71. 図 アーリヤマ戦争遺跡位置図



写真344. 新規壕 西側通路の入口部分



写真 346. トーチカ



写真 345. 壕



写真 347. トーチカ 内部

(3) ミルク嶺の地下壕群(みるくみねのちかごうぐん)

①所在地

宮古島市城辺字西里添豆チラ

②立地·現況

ミルク嶺ファームポンドへの登る道の東側と、鉄塔へ通じる道に挟まれた場所に、3基の壕を見ることができる。その他、鉄塔への登り口へと分岐する一般道の脇にも1基の壕を確認できる。この地域は南北に連なる丘陵にある憩の森公園の南側に位置し、丘陵の東側は福里、西側は西里添である。

③歷史状況

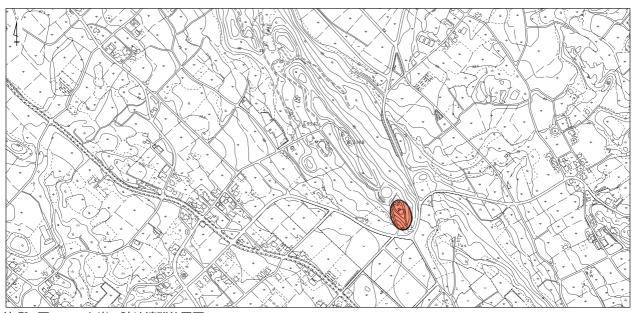
ミルク嶺は豆チラ地域にあり、西城小学校の裏の丘陵の南に位置する。西城小学校沿革誌によると、「昭和 19年7月19日球 4401部隊(部隊長陸軍少佐高矢三郎)本校に駐屯。全校舎(校長室、職員室を除く)転用」とある。

ミルク嶺はその西城小学校裏手の丘陵の南端にあたり、山砲兵第28 聯隊の戦史資料によるとこのミルク嶺にあたる場所(豆チラ)には山砲兵第28 聯隊の第2中隊が駐屯し、山砲も豆チラ高地北側に2基、豆チラ北方高地東側には、15 糎榴弾砲が3基設置されている。

また、独立歩兵第397大隊の戦史資料のよると、近接地域には、独歩第398大隊や同399大隊も展開しており、山砲兵第28 聯隊第2中隊と独歩第398大隊、同399大隊がこの地域の防衛にあたった可能性は否定できない。

④遺構の特徴

城辺最寄集落と長山集落の境に標高 90 メートルの丘陵が南北に連なり、その一帯に 5 基の壕を確認することができる。全て石灰岩を粗く削りこんだ壕で、最も長い壕 2 で総延長約 20 メートル、短い壕 1 は 5 メートル内外と多様である。これらの壕は幅が広い場所でも 1.5 メートル、平均では 1 メートル弱、小部屋がいくつか設置されている壕も見られるが、複雑に内部で分岐するといったものは見られない。小規模な壕をいくつも掘り込んだ陣地壕と言った印象を受ける。丘陵頂上からの眺望は良く、城辺西里添から砂川まで一望できる。



第72. 図 ミルク嶺の陣地壕群位置図



写真 348. 壕 2 北側壕口



写真 350. 壕 2 南側壕口



写真352. 壕3 東側壕口



写真 354. 壕 4 立坑



写真349. 壕2 北側壕口



写真 351. 壕 2 内部



写真 353. 壕 3 内部



写真 355. 壕 4 壕口

(4) 山地の壕群(やまず一のごうぐん)

①所在地

宮古島市城辺字西里添山地

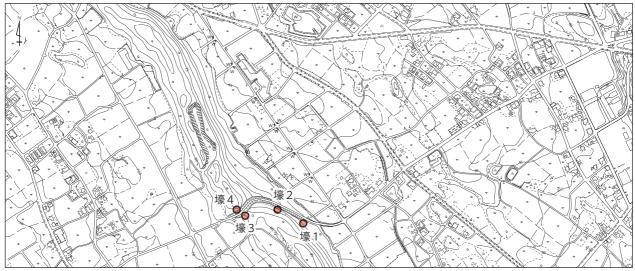
②立地·現況

本遺跡は、県道 198 号根間地与那節線の南西側に連なる丘陵地を、横断する山間の道路沿いで確認された戦争遺跡である。丘陵の中腹から頂上部にかけて 4 基の壕が確認されており、いずれも壕口は道路に向かって開口している。道路際は、草木の繁茂やゴミの堆積が多くみられ、未発見の壕が存在する可能性は高い。尚、丘陵の中腹に字境があり、下里添西更竹にも壕が位置している。

④遺構の特徴

本遺跡は 4 基の壕から構成され、東側より壕 1 、壕 2 、壕 3 、壕 4 とした。いずれの壕も琉球石灰岩を掘り込んで構築された壕であるが、壕 2 、壕 4 は壕口部分が崩落し、土砂も厚く堆積していることから壕内部へ入ることはできなかった。また、発見時に確認できた壕 3 は、草木の繁茂が激しく調査時には確認することが出来なかった。

壕 1 は、東側へ壕口が開口する。壕口から西へ約 7.5 メートル直進し、南南西にほぼ 90 度に折れ曲がり、約 15 メートル直進する。平面形態は L 字型を呈する。壕口部分は、幅 1.6 メートル、高さ 2.3 メートル と比較的広く、90 度に折れ曲がる部分は幅約 1.5 メートルの範囲で約 1 メートル地下へ掘り下がる。そのため、この部分は天井までの高さが約 2.9 メートルとなる。壕の断面系は略逆 U の字型を呈するが、全体的に構築面は粗雑な様相を呈する。壕口付近には産業廃棄物などが多くみられる。



第73. 図 山地の壕群位置図



写真356. 壕1 壕内より壕口を望む



写真 357. 壕 1 内部



写真359. 壕2 崩落開口部



写真 358. 壕 2 壕口



写真 360. 壕 4 壕口

(5) ムイニーヤマの壕群(むいに一やまのごうぐん)

①所在地

宮古島市城辺字西里添東底原

②立地 • 現況

本遺跡は、琉球石灰岩の小丘陵地に構築された壕である。平成27年度に、本遺跡一帯でほ場整備工事の照会があり、その現地調査に際して新規に発見された壕である。壕の位置する場所は草木の繁茂が激しく、現地調査時に壕1基を確認しているが、壕内までの詳細な調査には至っていない。

③歴史状況

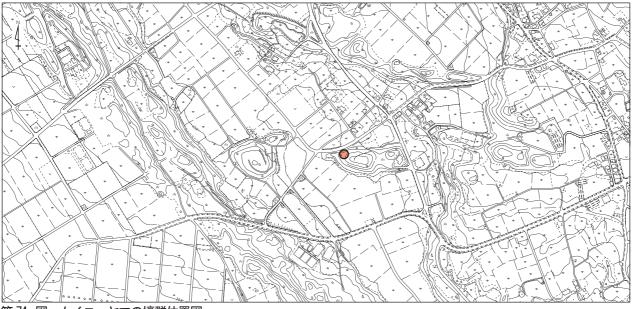
独立歩兵第397大隊の戦史資料によると、東地区(城辺)は4つの区域に分けられ、第397大隊は東、第398大隊は南、第399大隊は西、第400大隊は北を防衛している。聞き取りや体験談等では、将校名などから、ムィニーヤマを含む南には第398大隊本部、第2中隊、第3中隊、歩兵砲中隊の駐屯を確認することができる。



写真 361. ムイニーヤマの 壕群 遠景



写真362. ムイニーヤマの壕群 近景



第74. 図 ムイニーヤマの壕群位置図

第8節 砂川

1. 砂川の沖縄戦時の概況

砂川では山砲兵第28聯隊に関する体験談や、聞き取り調査の成果が確認されている。

「城辺町史第二巻戦争体験編」によると現在の砂川小学校(当時は砂川国民学校)には、山砲兵第28聯隊の連隊本部(連隊長:梶松次郎大佐)が置かれている。また、『砂川小学校沿革誌』によると、昭和19年8月14日に軍が校舎を接収したとあることから、連隊本部がこの時期に入って来たものと考えられる。この連隊本部に関連して隣接する花切地区には、第2大隊が中心的に配備されている。

『体験談』によると砂川小学校から上野へ向かう道路の北側には、独立速射砲第5大隊第2中隊の中隊長である、佐々木中尉の命で陣地の穴掘り作業を行ったとある。さらに、この壕掘りには女子挺身隊18名も作業にあたったとされている。今回の聞き取り調査では、体験談の示す周辺地に、安谷原の壕が確認された。直接この壕と独立速射砲第5大隊を結びつける根拠はないものの、両者の示す位置がほぼ同範囲にあることから、両者が関係している可能性がある。独立速射砲第5大隊は、本部を現在の上区公民館に置き、第2中隊は友利公民館に駐屯している。このことから独立速射砲第5大隊は、下里添から友利にかけての地域を、主な活動範囲としていたことが推察される。尚、独立速射砲第5大隊は西本哲郎少佐を大隊長とし、本部と3つの中隊から編成されており、一式機動47粍砲を各7門ずつ有している。

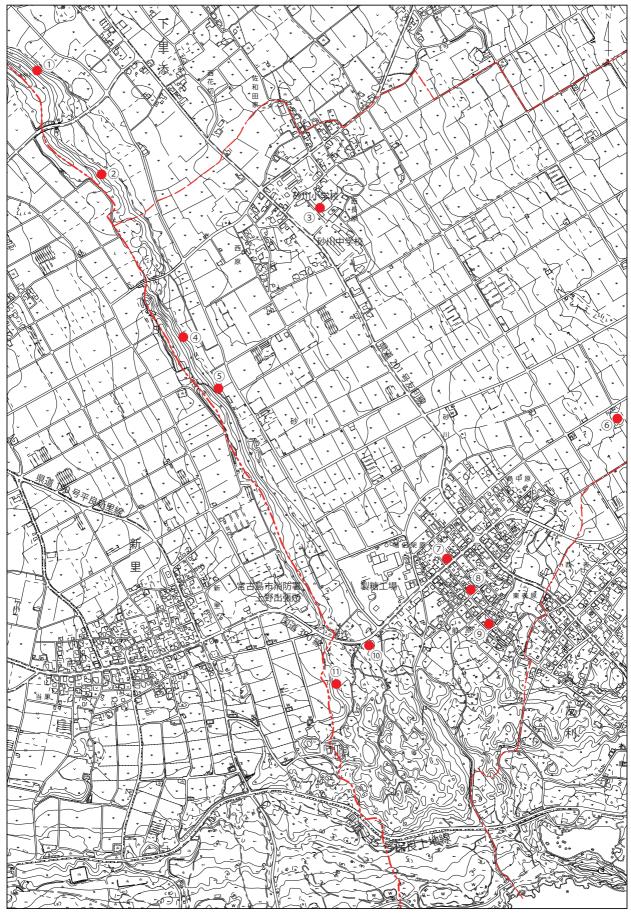
『遥かなる宮古島』(神田文男著)によると、砂川の南部に位置する場。信架原には、山砲兵第28聯隊第7中隊が砲兵陣地を構築したとある。砲兵陣地は新里海岸に向けて扇形の砲兵陣地と、友利方向を射角とする2つの陣地の構築を行ったとある。山砲兵第28聯隊の戦史資料からも「新里八八高地南方七百米」に、水際隠匿山砲を4門配備したことが記されており、「新里八八高地南方七百米」が場侶架原の丘陵地に比定されると推察される。

体験談や聞き取り調査から住民避難壕としては、砂川集落の東側にある自然の洞穴、カーラアブが利用されていた。また、クスヌトゥブソミャーも避難壕として使用されていたと体験談にあるが、現在ではその場所を確認することができなかった。住民の被害状況としては、昭和20年4月3日に機銃掃射で2名が亡くなり、4月12日は爆弾で1人が亡くなっている。この4月は宮古島各地において、ほぼ全日に亘って空襲があったことから、砂川も大きな被害に見舞われたことが示されている。

【注釈】

注1:女子挺身隊は17歳から20歳の女性で構成される、勤労奉仕をする部隊とされている。

注2:『遥かなる宮古島』の中では、新里の場侶架原の砲兵陣地について、蘇鉄などで擬装したが、米軍の航空写真ではこの砲兵陣地の扇形の擬装が浮き彫りにされていたとある。このことから場侶架原の砲兵陣地は、洞窟形ではなかったと推察される。



第75. 図 砂川地区成果図(地図)

2. 砂川の調査成果一覧

①西花切陣地壕群(第7中隊)

下区公民館の西側の嶺に兵隊が掘った陣地壕があり、神田文男さんの手記『遥かなる宮古島』に掲載されている山砲兵第28聯隊第7中隊本部壕の写真と一致していることが確認することができた。このことから第7中隊が構築した壕であったと思われる。※字下里添に所在。重複掲載。

②山砲兵第4中隊戦没者英霊碑

昭和19年7月満州黒竜江省斉斉哈爾から、城辺花切の地に駐屯し、翌年終戦を迎えた同中隊の19名の 戦没者を弔う慰霊碑。昭和51年10月に建立。※字下里添に所在。重複掲載。

③山砲兵第28聯隊本部

昭和19年8月14日に軍に校舎が接収された (「砂川小学校沿革誌」)。当時の砂川国民学校には、山砲兵第28聯隊本部が設置されている (「城辺町史」第二巻戦争体験編)。

④安谷原の壕群(1)

砂川小学校から西に位置する安谷原の嶺に兵隊が掘った竪穴式の陣地壕があることが、畑の所有者への間き取りによって確認された。体験談が示す砂川小学校から上野に行く道路の北側には、独立速射砲第5大隊第2中隊の佐々木中尉の命令で掘った陣地壕があるとのことから、独立速射砲第5大隊第2中隊が関係している陣地壕の可能性がある。

⑤安谷原の壕群(2)

(1) の竪穴の陣地壕から、南方300メートルほど離れた所にも陣地壕が確認された。安谷原の嶺に構築されていることから、独立速射砲第5大隊第2中隊が関係している陣地壕の可能性がある。

⑥カーラアブ(避難壕)

体験談 (川平貞子さん) によると、砂川住民の避難壕として利用されたカーラアブは、小さな縦穴のビキガーラと横穴で広い洞内のミィガーラというふたつの洞穴があり、古墓として利用されていたミィガーラでは洞内にあった骨を拾い出して脇に寄せ、広い洞内に寝泊りをしていた。現在は浸透池となっているため立入禁止となっている。

⑦民間人死亡場所(爆弾破裂)

体験談によると、砂川145-1番地の砂川金定さん(昭和20年4月12日死亡 59歳)が亡くなった。

⑧民間人死亡場所(機銃掃射)

体験談 (川平貞子さん) によると、ウンガーヤー (屋号) の砂川恵和さん (昭和20年4月3日死亡 55歳) は機銃掃射にあたって亡くなった。機銃は家の柱までも突き通していた。

9民間人死亡場所(機銃掃射)

体験談 (川平貞子さん) によると、ユナウリャー (屋号) の砂川カ子メガさん (昭和20年4月3日死亡55歳) が機銃掃射の為、軒先で亡くなったとされている。

⑩クスヌトゥブソミャー

体験談 (川平貞子さん) によると、砂川の住民はカーラアブと並び、この壕に避難していたとのこと。 広い壕であったが、今は塞がれているとのことで確認できない。

⑪場侶架原の壕

畑の所有者からの聞き取りにより、兵隊の掘った壕が確認された。神田文男さんの手記『遥かなる宮古島』によると、場侶架原(地名)に陣地を掘ったと記載されていることから、山砲兵第28聯隊の第7中隊が関係していたと思われる。また、第4章上野地区第1節新里の成果一覧⑤陣地壕跡と、本壕がつながっていたいうと聞き取りがあった。



写真363. ④安谷原の壕(1)



写真365. ⑤安谷原の壕(2)



写真367. ⑦民間人死亡場所(爆弾破裂)





写真364. ④安谷原の壕(1)



写真366. ⑥カーラアブ(避難壕)



写真368. ⑧民間人死亡場所(機銃掃射)



写真370. ①場侶架原の壕

3. 砂川の戦争遺跡

(1)カーラアブ(かーらあぶ)

①所在地

宮古島市城辺砂川

②立地 • 現況

砂川公民館の北東、畑地の中に排水地として囲われた場所に2つの洞穴がある。横穴をミーガーラ、縦穴をビキガーラと呼んでいる。現在は地上の雨水を流し込む、排水地となっており危険防止のためのフェンスで囲われ、立ち入ることはできない。

③歷史状況

戦争体験談によると、ミーガーラは高さ、広さとも規模が大きく、地域の住民は食糧を持ち込み、ここで寝泊まりして避難したとのことである。

④遺構の特徴

本アブは 2 つの鍾乳洞から成り、ミーガーラ、ビキガーラと呼ばれている。ミーガーラの開口部は、北方向を向き、幅は 23.7 メートルほどである。現在は、道路となっている地表部から、およそ $3 \sim 4$ メートルほど下ると、開口部前面の平坦地が広がっている。これは天井部が崩落して形成されたドリーネ地形を呈しているものと考えられる。開口部から洞窟の低部へは、10 メートル以上ほぼ垂直に落ち込んでいるが、崩壊したドリーネの石灰岩などの堆積物が流入して傾斜地があるため、それを足場に洞窟の低部へ進む事が可能である。洞窟の低部は、幅約 15 メートル、長さ $0.8 \sim 2$ メートルほどの鍾乳石が発達した広い空間がある。比較的平坦で土砂の流入が多く見られる。また、ビキガーラは深い竪穴で開口部はとても狭く、人が入れるような大きさではないが、洞内には流水音が聞こえ、水の流れている気配がある。



写真 371. ミーガーラ 近景



第76. 図 カーラアブ位置図



写真 372. ビキガーラ 近景



写真 373. ミーガラ 内部

(2) 安谷原の壕群(あだんばるのごうぐん)

①所在地

宮古島市城辺砂川安谷原

②立地·現況

本壕は砂川集落の西方に連なる丘陵地に構築された壕である。全体で2基の壕から構成される。

③歴史状況

安谷原の東側に位置する砂川小学校には山砲第28 聯隊、隣接する友利の公民館には独立速射砲第5大隊第2中隊(佐々木隊)が駐屯している。体験談によると、佐々木隊は砂川から上野に抜ける道路の横側に壕を構築したとある。当時の道路を特定することは困難であるが、同壕群が佐々木隊の構築した壕の可能性は否定できない。

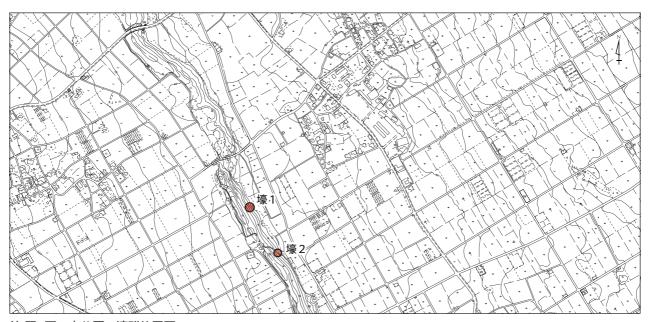
④遺構の特徴

壕1は丘陵下の琉球石灰岩を掘り込んでおり、壕口は南東へ開口する。壕口の幅は約1.2メートルで、土砂の流入などにより、高さも約1メートルほどと狭い。壕の平面形態は、S字型を呈している。壕口から湾曲した通路は、幅が1.2メートル、高さは1.5メートルほどである。S字型の中央部までは、壕口から約8メートルあり、この部分に縦穴が地上部から貫通している。

竪穴は 1.2 × 1.5 メートルの方形型で、非常に丁寧に構築されており直口している。地表部からの壕の 床面までの高さは 7.5 メートルにもおよぶ。縦穴の途中に壁面を掘り込んでいる痕跡がみられるが、今回 はその詳細までは確認できていない。

この縦穴の部分から湾曲の形態が反転し、約12メートルほど進む。その突き当たりの近くに、幅3メートル、奥行き3.5メートルの小部屋が設けられている。

壕2は、丘陵中腹より下の部分で、琉球石灰岩を掘り込んで構築されている。壕は直線的な形状をしており、途中に高さ約0.8メートルの石積みがある。壕口の幅は約1.5メートル、高さは約1.7メートルほどで、壕内部もほぼ同じ形状をなしている。



第77. 図 安谷原の壕群位置図



写真 374. 壕 1 縦穴



写真 376. 壕 1 壕口



写真378. 壕2 近景(↓の部分に壕口)



写真380. 壕2 内部(最奥部)



写真 375. 壕 1 内部から縦穴を望む(壁面に堀込)



写真 377. 壕 1 内部



写真 379. 壕 2 壕口



写真381. 壕2 内部(壕口と石積みを望む)

(3)場侶架原の壕(ばるきゃばるのごう)

①所在地

宮古島市城辺字砂川場侶架原

②立地·現況

本壕は国道 390 号線を、砂川から新里方面へむかう宮古製糖城辺工場の南方の丘陵地下部に位置する。本丘陵地は、野原岳から上比屋山まで連なる丘陵の南端部分に位置しており、通称「バルキャの丘」と称される。このバルキャの丘からは、南は新里から宮国の海岸線を望むことができ、北東側はアーリヤマの位置する丘陵地一帯を望むことのできる、見晴らしのよい地形となっている。丘陵地は雑木林となっているが、壕はこの丘陵地と畑地との境目あたりに位置している。入口部分にはゴミが集積しており、一部崩落の目立つ部分も見られるが、全体的に壕の残存状況は良好である。

③歴史状況

山砲兵第28 聯隊(連隊長:梶松太郎大佐)(豊5647 部隊)は、7月20日釜山出帆、7月20日門司港着。7月25日門司港出帆、7月27日鹿児島港寄港。8月6日鹿児島港出帆、8月12日宮古島上陸。(Ref. C12122494800)

山砲兵第28 聯隊の戦史資料によると、第3大隊は野原岳の北方に本部を構え、その中の第7中隊は花切に駐屯したことが、同中隊所属兵隊の手記から確認できた。同中隊では、小隊、分隊単位での陣地構築作業があり、この場侶架原での陣地構築は昭和19年の秋から昭和20年6月頃までの期間であった。前述の兵隊の手記によると、「私達の分隊は松林のなかに1期工事として新里海岸に向かって扇形の砲兵陣地を造った。これがほぼ完成した頃、陣地の裏側になる南斜面の少し下ったところに、こんどは友利方面を射角とする陣地構築に取り掛かった。これでバルキャの丘から見渡せる海岸線を、ほぼ山砲の射角におさめることができた。」この記述から、場侶架原の壕は山砲兵第28 聯隊第7中隊の分隊が構築したと考えられる。

④遺構の特徴

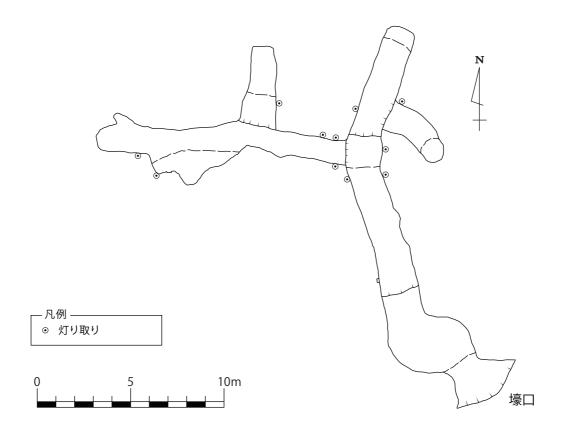
壕口は、現在の地表面からやや地下へ下るようにつくられており、壕口部分には多くのゴミが集積されている。壕は琉球石灰岩を掘り込んで構築されており、壕口は、南東方向をむき、幅約2メートル、高さ2.2メートルと比較的広い。

内部の壕口近くは自然の地形を利用するように、楕円状のやや広い空間を形成し、人為的な掘削の痕跡が少ない。しかし、壕口から北西方向に約5メートル進むと、一転して方形型の断面を形成するように構築されている。内部の通路幅は約2メートル、高さ2.2メートルほどで、全体的に壕口から内部へ向けて緩やかな下り傾斜をつけて構築されている。壕の平面形態としては、大きくほぼ北方向へ並行してのびる通路が2つと、西へのびる通路がひとつ、そして南東方向へ伸びたあと天井部分へと縦穴状で掘りこんでいくひとつの通路からなる。西側と南東側へのびる通路は、前者で0.4メートル、後者で0.7メートルの段差を有しており、一段上がるように構築されている。壕内には複数の地点で灯り取りの痕跡が確認できる。

本壕は、体験談や聞き取り調査をもとに今回新たに報告を行う壕である。今回の調査では、踏査が不十分なこともあり1基のみの報告となったが、本壕の位置するバルキャの丘は山砲第28 聯隊第7中隊が山砲を設置したとされる場所であることから、さらに多くの壕が確認される可能性は高いと考えられる。



第78. 図 場侶架原の壕位置図



第79. 図 場侶架原の壕平面図



写真 382. 壕口



写真 383. 遠景



写真 385. 内部



写真 384. 内部



写真 386. 内部

第9節 友利

1. 友利の沖縄戦時の概況

友利では西部と東部で展開する部隊が大きく異なっていることから、本島、島後、東表、東表下、西島下、他を友利西部とし、箕済、東保茶根、伊祖呂根、仲原、真屋真利、モリガホ、他を友利東部として以下に整理を行った。

(1) 友利西部

独立速射砲第5大隊第2中隊(佐々木隊)は、3小隊からなり、各小隊には7門の速射砲が配備されている(ref.C11110014400)。体験談によると、同中隊は、砂川から上野に抜ける道路の北側、砂川集落の裏(東側)の松林、友利から底原へ下る坂の北側(アンガツカ)の3つの地点で壕構築を行っていたことが確認され、砂川西部から西里添までの範囲で活動していたことが想定される。このうちのアンガツカに近接したムイニーヤマには、複数の壕が確認されており、同隊との関連性も考えられる。

また、友利の天井の南側には兵舎があったとされることから、この兵舎との関連性が想定される部隊として、天井の西に位置する場侶架原に山砲を設置した、山砲兵第28聯隊第7中隊の可能性があるが、これは推測の域を出ない。

友利集落の住民避難壕としては、友利の天井とキィキャガーが体験談から確認され、友利集落の東に位置する、ウプアブとピンダッドゥクにも避難したとある。このウプアブとピンダドゥクは、友利公民館から直線距離で1.5キロ以上も離れた距離にある。現在、公民館附近からウプアブやピンダドゥクの間は畑地として整備され、開けた様相を呈しているが、当時は松林が生い茂っており、その林の中を隠れながら避難したという聞き取りが得られている。しかしながら、今回の調査ではいずれの避難壕も確認することはできなかった。

(2) 友利東部

東部の南岸に位置する東保茶根の小丘陵地には2つの砲台が設置され(東保茶根の戦争遺跡群)、便宜的に東の砲台と西の砲台と称されている。この砲台の構築にあたったのは、海軍第313設営隊の第2中隊第2小隊(小隊長:藤岡勝少尉)である。同隊は現在の城辺中学校(当時は城辺青年学校)に駐屯しており、地元の勤労奉仕隊や城辺青年学校の先生ならびに生徒70名もその構築に従事している。

また、山砲兵第28聯隊第7中隊の一部は、この砲台の構築作業にかり出されたとある(『遥かなる宮古島(神田著)』)ことから、砲台の構築作業に際しては、その他の部隊の協力も得ていることが推察される。

マエノアブには砲台構築の資材が置かれ、旧仲原公民館には宮古海軍警備隊の江口隊が駐屯していることも聞き取り調査から判ってきている。砲台構築後の管轄は江口隊が行っており、昭和20年4月28日には試射を行って成果良好とされている。江口善太郎兵曹長は、旧中原公民館近くの民家に宿泊していることが聞き取り調査から確認された。

戦史資料 (ref. C11110011000) によると友利地区一帯には、独立歩兵第398大隊も展開していたことがみてとれる。しかし、同隊に関する体験談や聞き取り調査の成果は得られておらず、その詳細は不明である。その他、今回の聞き取り調査では、ムイガーの前に通信隊がいたとの情報も得られているが、本情報については、その他の資料から確認することができなかった。

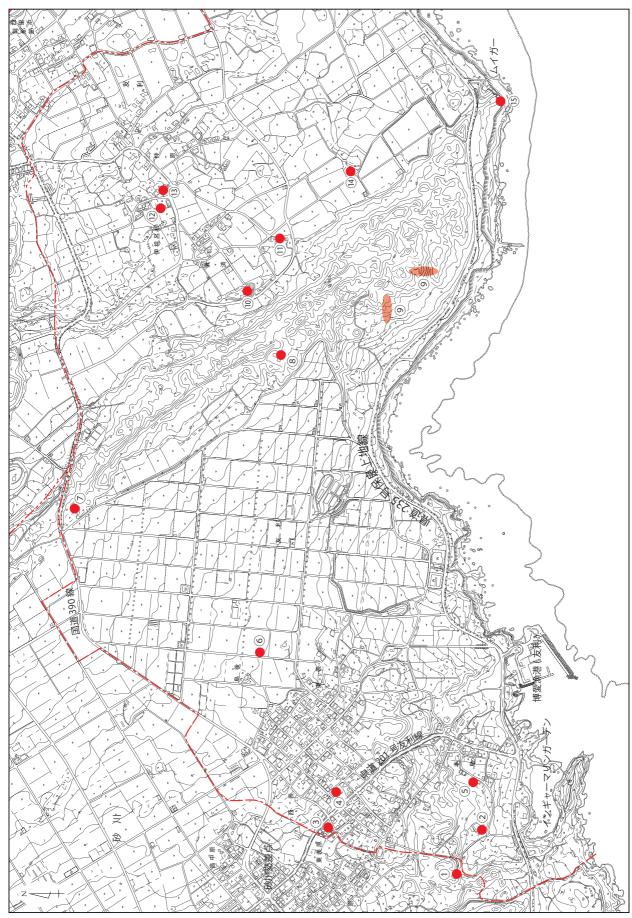
これらの情報から友利の東部には、東保茶根の砲台に関する部隊を中心的に展開していたことがみてとれる。

仲原集落の住民避難壕としてはマエノアブと名称不明の自然壕が確認されている。マエノアブは前述したように砲台の資材置き場でもあったが、住民の避難壕としても使用されていた。聞き取り調査では名称不明の自然壕については、10数名が入れるほどの空間があったとされる。現在でもその自然壕と思われる場所は確認できるが、開口部や奥行きも非常に狭く、10数名の住民が避難できるような痕跡はとどめていない。これらの住民避難壕として使用された壕とは対照的に、聞き取り調査ではアブチャーは軍が使用していたため、住民の立ち入りが禁止されていたとある。

【注釈】

注1:地元では友利から底原へ下る坂道の周辺を、通称"アンガツカ"と呼んでいる。

注2:新田定雄(海軍第313設営隊第2中隊第2小隊の分隊長)氏の資料(資料提供者:霧生藤吉郎)による。



第80. 図 友利地区成果図(地図)

2. 友利の調査成果一覧

①友利の天井

聞き取りによると、住民が避難壕として利用。近くに兵舎もあり、兵隊も利用していた。(年齢不明)

②兵舎跡 (1)

体験談によると、兵舎があった。

③爆弾投下場所

体験談 (西原芳さん)、聞き取りからも友利 1 番地に爆弾が落ち、友利正一 (昭和20年 4 月13日死亡 18歳) が亡くなっている。

④独立速射砲第5大隊第2中隊宿泊地

体験談(砂川武信さん)によると、現在の友利集落センターには、佐々木中尉の部隊(独立速射砲第5大隊第2中隊。通称、佐々木隊)の兵隊が30名くらいいたとされる。

⑤キィキャガー(避難壕)

体験談 (平良政義さん) によると、元島の人は全員、金志川井に避難したという。壕は友利の人全員が入れるくらいの広さがあった。入口は東を向き、西側に山があるので、空襲には安全とされていた。

⑥兵舎跡(2)

体験談によると、友利集落の北東部付近には数多くの兵舎があった。聞き取りによると、当時このあたりには松林が広がっていた。現在では畑地。

⑦ウプアブ(避難壕)

体験談 (西原芳さん) によると、真屋真利 (地名) の嶺に大きな洞穴があり、艦砲射撃の時には大勢の 人が避難した。今回その場所を確認することはできなかった。

⑧ピンダッドゥク(避難壕)

真屋真利から南、西保茶根の嶺に位置する壕。今回、その場所を確認することはできなかった。

⑨東保茶根の戦争遺跡群

友利集落の東部の南岸に位置する東保茶根の小丘陵地には、2つの砲台が設置されている。

⑩マエノアブ(避難壕)

聞き取りによると、住民が避難壕として利用。兵隊の資材置場としても利用されていた。(年齢不明)

⑪アブチャー(兵隊壕)

体験談 (上里マツメガさん) によると兵隊がいたとされ、聞き取りでは大砲の砲身、機銃の保管場所として利用され、避難の際は兵隊がいたので入れなかった。現在は観光施設、仲原鍾乳洞となっている。

12江口隊長宿泊地跡

聞き取りによると、海軍兵曹長江口善太郎が旧仲原公民館 (仲原青年会場) 近くの民家に宿泊していたとされ、東保茶根の砲台設置に関係していた。(昭和11年生)

13江口隊宿舎跡

体験談 (上里マツメガさん) や聞き取りから、旧仲原公民館 (仲原青年会場) には20名ほどの海軍兵がいたとされ、砲台を作る為の作業道具置き場になっていた。

(4)自然壕(住民避難壕)

仲原の住民が避難壕として利用。

15モリガホの壕

急峻な崖下に湧くムイガーの上方にあり、尾根端の頂に構築された壕。近傍に東保茶根の砲台跡があることから、沿岸の監視あるいは銃眼としての機能などが考えられる。



写真387. ①友利の天井



写真 389. ②兵舎跡(1)



写真391. ④独立速射砲第5大隊第2中隊宿泊地



写真393. ⑤キィキャガー(避難壕)



写真388. ①友利の天井



写真390. ③爆弾投下場所



写真392. ⑤キィキャガー(避難壕)



写真 394. ⑥兵舎跡 (2)



写真395. ⑦ウプアブ(避難壕)



写真397. ⑨東保茶根の戦争遺跡群



写真 399. ①アブチャー(兵隊壕)



写真 401. ③江口隊宿舎跡



写真 396. ⑧ピンダッドゥク(避難壕)



写真398. ⑩マエノアブ(避難壕)



写真 400. ⑫江口隊長宿泊地跡



写真402. 4自然壕(住民避難壕)

3. 友利の戦争遺跡

(1) 東保茶根の戦争遺跡群(ひがしほちゃねのせんそういせきぐん)

①所在地

宮古島市城辺字友利東保茶根

②立地 • 現況

県道 235 号線(外周道路)を友利方面から東平安名崎へ向かう、右側に緩くカーブする手前の左側の 丘陵に位置する。同道路には展望スペースとしての駐車場があり、友利寄りの駐車場の向い側の丘陵を東 北に歩くと、東の砲台跡を見ることができる。その左側に交通壕が北に向かって伸びており、弾薬庫に行 きつく。

この弾薬庫から北に直線距離で 100 メートル程の場所に西の砲台跡がある。同砲台は終戦後に破壊されており、その全貌は確認できない。この壕に続く交通壕と周辺の壕は確認することができる。

③歴史状況

霧生藤吉郎氏の資料によると、資料提供者の新田定雄は海軍第313 設営隊第2中隊第2小隊の班長であったと考えられる。同小隊は主に城辺地区の与那浜崎の砲台、アーリヤマ電探基地、友利海軍砲台の構築に携わっている。築城施設の概要は、砲台15糎、弾薬庫、連絡道250メートル。海軍技術少尉藤岡勝を隊長に、隊員30名、勤労奉仕隊、城辺青年学校先生生徒70名で、昭和19年8月10日に着手し、昭和20年4月30日に完成したとある。昭和20年4月28日には、砲試射も実施し、成果良好であった。

海軍第313設営隊の宮古上陸は、同隊第2中隊第1小隊長、大下繁樹技術少尉の手記に寄れば、1944年8月31日に呉軍港を出港し、同年、9月14日に宮古着となっている。この事から前記の友利砲台の着手日が昭和19年8月10日については疑問の余地が残る。しかしながら、大下繁樹の手記にも、藤岡隊は城辺に砲台建設とあることから、この仲原の砲台建設は藤岡隊が手掛けたものと考えられる。

聞き取り調査によると、この仲原地区には宮古島海軍警備隊の江口隊(兵曹長、江口善太郎)が、仲原公民館周辺に駐屯していたことから、この東保茶根の砲台は江口隊が管轄していた可能性がある。

④遺構の特徴

東保茶根の戦争遺跡群は、大きく東の砲台部分、西の砲台部分に分けられ、複数の壕が点在する。 東の砲台部分は、砲台部分と弾薬庫が交通壕でつながれている。弾薬庫は岩盤を掘りこみ、内部をコンクリート造りで補強してあり、入口は西を向いている。

入口部分は、幅が約 0.9 メートル、高さ約 1.7 メートルあり、本来、扉のようなものが設置されていたと考えられ、金属製の突起部が複数確認することができる。弾薬庫内部の断面形状は逆U字状のドーム型を呈し、横幅が約 1.9 メートル、高さが約 1.9 メートルである。内部の部屋に対して入口が斜めに設置されているため、入口の北側の壁面長が約 7.4 メートル、南側が約 6 メートルと差異があり、細長い台形をしている。また、南北の壁際の床面には、幅約 0.15 メートル、深さ約 0.05 メートルの溝を有している。

この弾薬庫から砲台へ向けては岩盤を掘り込み、交通壕が構築されている。弾薬庫前は最大高で約5メートル近い岩盤を掘りこんで広い空間をつくっている。この手前部分には、2つの石積みが確認できる。いずれも高さが約1メートル未満であるが、石灰岩礫とともに、麻袋に入れられていたようなコンクリート片も数多くみられる。

交通壕の砲台近くには、掘りこんだ岩盤の幅3メートルを橋渡すように約0.3メートルの幅でアーチ型つくりのコンクリート施設が構築されている。弾薬庫側の口は頭大ほどの石灰岩の石積みでふさがれた状態にある。コンクリートでアーチを作るなどの技術を用いられていることから何らかの機能を有していたと考えられるが、その用途については現在のところ判然としない。

砲台は戦後に破壊されたと思われ、現在では大部分が瓦礫に埋まった状態にある。しかし、コンクリート造りのドーム型施設の天井部分や入り口部分などを部分的に確認することができ、砲口は西南西を向いて、岩盤を掘りこんだ後にコンクリートで施設を構築している。コンクリート造りの施設の幅は分からないものの、奥行は約7メートルと推察され、内側の幅は約3.8メートル前後と推察される。また、コンクリートの幅は約 $0.5 \sim 0.6$ メートルと非常に厚く、強固な作りであったことが伺い知れる。

現在は、すべてが瓦礫に埋まった状態にあり、交通壕との連結が判然としない。しかしながら、砲台の両端の岩盤にはコンクリートの付着が見られることなどから、砲台の北側に交通壕から砲台への入口が設けられた可能性もある。今後の発掘調査でその形態を明らかにすることが望まれる。

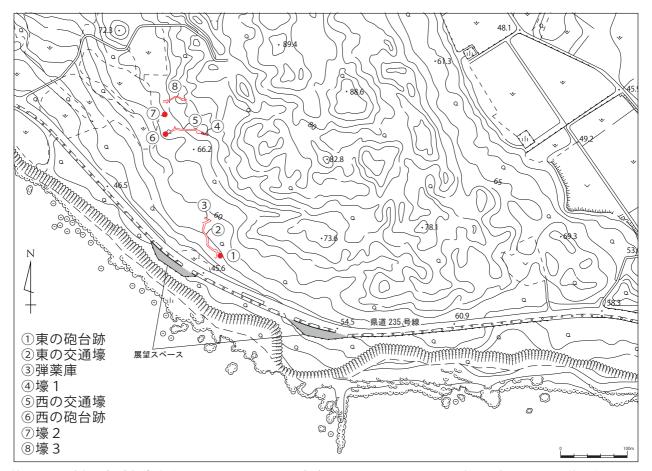
砲台の北西側およそ 40 メートルの場所に、コンクリート造りの貯水池が確認でき、東の砲台に関連する施設と考えられる。貯水池は、長さ 4.2 メートル× 2.2 メートルの長方形をなし、中の両端 1.2 メートルは約 0.7 メートルの深度であるが、中心部は約 2 メートル以上の深度を有している。現在は腐棄土がヘドロ状に堆積している。

以下、西側の砲台部分については、沖縄県立埋蔵文化財センター 2005 年を引用する。

西の砲台は、現在は擂り鉢状に落ち込む地形を呈している。一部に岩盤を整形した痕跡がみられるが、地形以外はほとんど痕跡を残さない。1945(昭和 20)年に既にあった東の砲台を増設する形で、西の砲台は構築された。砲身は南西を向いており、砲弾は上野字宮国沖あたりまで飛んだとのことである。東の砲台と同様に交通壕は砲台の東に接しており、岩盤、地山を掘り込んでいる。この交通壕も砲台へ向かって傾斜している。長さ約 50 メートルで壕 1 まで続く。この交通壕の北側に広がる平坦地は、壕を掘り込んだ際にでた廃土で造成したとのことである。壕 1 は幅 $2.2 \sim 3.2$ メートル、高さは約 2.5 メートル、奥行 11 メートルと規模は大きい。削岩機などで岩盤を掘り込み、壕を構築していたが完成を見ずに終戦を迎えた。

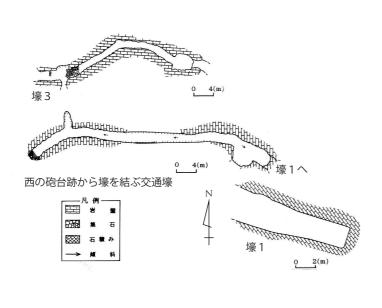


写真 403. 壕 1 壕口



第81. 図 東保茶根戦争遺跡群位置図

※各壕の位置については今回の調査で、沖埋文2005の修正を行った。



沖縄県戦争遺跡詳細分布調査 (V) 宮古諸島編より (2005)

第83. 図 東の砲台跡

第82. 図 西の砲台跡



写真404. 東の砲台跡



写真405. 東の砲台跡



写真406. 東の交通壕に横たわる構造物



写真407. 東の交通壕に残る構造物の内部構造



写真408. 東の交通壕



写真 409. 弹薬庫 近景



写真 410. 弹薬庫 入口部分



写真412 弾薬庫 内部(入口側から望む)



写真 411. 弹薬庫 入口前



写真413. 弾薬庫 内部(奥側から望む)



写真 414. 西の砲台跡



写真 416. 壕 1 内部



写真415. 西の交通壕



写真 417. 壕 2



写真 418. 壕 3

(2) キィキャガー (きぃきゃがー)

①所在地

宮古島市城辺字友利東島下

②立地·現況

友利集落の西側に位置する自然洞の井戸で、命名由来となる金志川豊見親の屋敷跡より150メートルほど西側にある。

③歴史状況

キィキャガーは友利集落の住民避難壕であったことが、聞き取りや体験談等で確認できる。

また、『雍正旧記』(1727年)には「金志川、但し洞川、堀年数不相知」とあることから、古くから地域の住民に利用されていた。

④遺構の特徴

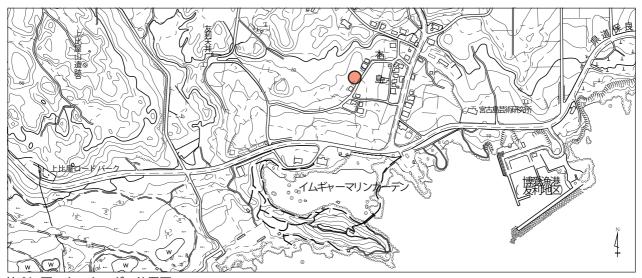
キィキャガーは集落内の生活道路の脇にある小道を降りてゆくと、琉球石灰岩の小さな崖に、裂け目のような開口部がある。洞口から水壺まではおよそ30段の階段が設けられている。水壺は広く、ほぼ楕円形で、水深は1メートルあり、水壺の奥には30畳ほどの空間もある。洞口から階段で降りる左側に棚状の窪地があり、この窪地に避難したものと考えられる。



写真 419. キィキャガー 近景



写真 420. キィキャガー 内部



第84. 図 キィキャガー位置図

(3) マエノアブ (まえのあぶ)

①所在地

宮古島市城辺字友利箕済

②立地 • 現況

道路に面した開口部には多量のゴミが廃棄された状況にある。

③歴史状況

聞き取り調査から、仲原集落の住民避難壕として利用されていたことが確認され、東保茶根の砲台の構築にあたっては、その資材の一部が本壕に置かれたとの聞き取りもえられている。

④遺構の特徴

マエノアブは、自然洞窟である。現在は道路に面する開口部より洞窟内へ入ることができるが、洞窟の天井部にも非常に広い開口部を有する。道路側の開口部は、南を向き、幅0.6 メートル、高さ2.1 メートルと人ひとりが出入りできるほどの大きさである。この開口部から4 メートルほど下って、洞窟内部の平坦面に達する。洞窟内部は、幅が約15.2 メートル×16.5 メートルと非常に広い空間を有し、北側と東側にはさらに洞窟がつづいている。人為的に洞窟内を掘削したような痕跡はみられない。



写真 421. マエノアブ開口部



写真 422. マエノアブ開口部より内部を望む



第85. 図 マエノアブ位置図

(4) アブチャー(仲原洞窟)(あぶちゃー なかばりどうくつ)

①所在地

宮古島市城辺字友利仲原

②立地 • 現況

アブチャーは仲原集落の西側に位置し、自然の鍾乳洞窟である。現在は、「仲原鍾乳洞」の名称で観光施設として利用されている。

③歴史状況

アブチャーは、兵隊が使用し、地元住民は立ち入りを制限されていたとのことで、自然壕を利用した陣 地壕であったことが、体験談や聞き取り調査から確認できる。

④遺構の特徴

本壕は施設の入口から観光用に作られた階段で、深さ 15 メートルほどの断崖に囲まれた、陥没ドリーネの底にある広場へと降りる。広場の北側のドリーネの壁面に洞窟が伸びており、全長は 265 メートルと案内されているが、昔はマエノアブと繋がっていたと、所有者からの聞き取りが得られた。

マエノアブは資材置き場や倉庫として利用されていた鍾乳洞で、この2つの鍾乳洞は軍が使用していた 関連性を示唆している。



写真 423. アブチャー内部



写真 424. アブチャー内部



第86. 図 アブチャー位置図

(5)モリガホの壕(もりがほのごう)

①所在地

宮古島市城辺字友利モリガホ

②立地·現況

本壕は海沿いの急峻な崖に張り出した、尾根の頭頂部にある。壕へは崖下に湧く、ムイガー湧水への降り口にある簡易駐車場の西側から、戦後に設置された、尾根を急登するコンクリート造りの階段を登る。 頂上は眺望の良い未整地の小さない広場があり、階段の取付口から南西方向へ少し回り込んだ場所に、本壕は位置する。壕口部分はアダンなどの草木が繁茂しているため、その確認がやや困難である。

④遺構の特徴

壕口は東南東を向き、幅約 0.9 メートル、高さ約 1 メートルと、人が腰を屈めて入ることのできる程の大きさである。壕の平面形態は、やや不規則であるが、略コの字形を呈している。壕口の通路部分は、幅が約 $0.6\sim0.8$ メートル、高さ約 0.7 メートルと、膝をついてようやく歩けるくらいの大きさにまで小さくなる。

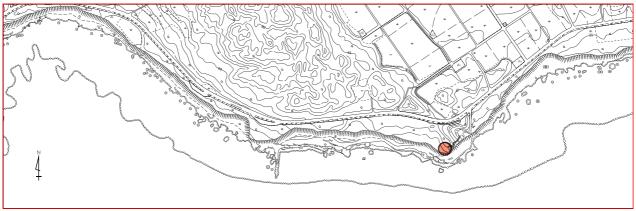
構築途中であったと考えられ、石灰岩を掘り抜いて、もうひとつ壕口を設ける予定だったと推察される。 通路部分には、ダイナマイトを用いて加工するための痕跡も確認できる。本壕は全体的に小規模であるが、 壕口が海岸部を望む点から、水際作戦に伴う銃眼としての機能が想定される。しかし、海岸部はサンゴ礁 の発達した急崖であり、上陸には適していない地形である。一方、非常に見晴らしのよい地形であること から、対空、対海への監視所としての機能が推察される。



写真 425. 壕口部分



写真 426. 通路部分をのぞむ



第87. 図 モリガホの壕位置図

第10節 城辺地区の戦争遺跡のまとめ

			使用主体		形態		調査状況(報告)			
番号	所在地	名 称	軍関係	住民	自然壕	建人造工物壕	新追規加	未確認	消滅	備考
1	城辺保良	フカスクアブ		0	0					*
2	城辺保良	ウンヌヤー		0	0					*
3	城辺保良	村越の壕群	0			0	0		\triangle	一部は記録保存
4	城辺保良	吉野海岸の壕	0			0				*
5	城辺保良	東平安名崎の銃眼	0			0	0			
6	城辺保良	ナナカサアブ		0	0				0	*
7	城辺保良	チビピィキアブ		0	0				0	*
8	城辺保良	キヤマ壕		0	0				0	*
9	城辺保良	兵隊壕	0					0		*
10	城辺新城	福嶺後の陣地壕群跡	0			0	0		0	記録保存
11	城辺新城	南野加那の壕	0			0	0			
12	城辺新城	村の後の壕	0			0	0			
13	城辺新城	カーラアブ		0	0		0	0		
14	城辺福里	福里公園の忠魂碑				0	0			※記念碑
15	城辺福里	ツガマキ御嶽の壕	0			0	0			
16	城辺福里	西川底の壕群	0			0	0			
17	城辺福里	西高阿良後の壕群	0			0	0			
18	城辺福里	兵隊壕	0			0		0		*
19	城辺比嘉	インヌチアブ		0	0					*
20	城辺比嘉	イサガヌアブ		0	0					*
21	城辺比嘉	高腰城跡の蛸壺と壕群	0			0	0			
22	城辺比嘉	按司の泉の壕	0			0	0			
23	城辺比嘉	ツヅピカ御嶽の壕	0			0	0			
24	城辺比嘉	池原・久路布の壕群	0			0	0			
25	城辺比嘉	屋良座の壕	0			0	0			
26	城辺比嘉	瑞福隧道の弾痕				0	0			建造物
27	城辺比嘉	加治道の避難壕跡		0	0		0		0	記録保存
28	城辺長間	与那浜崎の砲台建立	0			0				※砲台
29	城辺長間	長南陣地壕群 [跡	0			0	0		0	記録保存
30	城辺長間	長南陣地壕Ⅱ	0			0	0			
31	城辺長間	長南陣地壕群Ⅲ	0			0	0			
32	城辺長間	山川の壕	0			0	0			
33	城辺長間	長間巣玉川の住民避難壕群跡		0	0		0		0	記録保存
34	城辺下里添	下里添の野戦重火器秘匿壕群	0			0	0			*
35	城辺下里添	佐事川陣地壕	0			0	0			
36	城辺下里添	西更竹司令部壕	0			0				#

			使用主体		形	形態		 状況(设告)	
番号	所在地	名 称	軍関係	住	自然壕	建人造工	新追	未確認	消	備考
			係	民	壕	物壕	規加	認	滅	
37	城辺下里添	西更竹の壕Ӏ跡	0			0	0		0	記録保存
38	城辺下里添	西更竹の壕Ⅱ	0			0	0			
39	城辺下里添	西更竹の壕群Ⅲ	0			0	0			
40	城辺下里添	西更竹の壕IV	0			0			0	
41	城辺下里添	西更竹の住民避難壕跡		0	0		0		0	記録保存
42	城辺下里添	ウズラ嶺の陣地壕群	0			0	0			
43	城辺下里添	ウズラ嶺の野戦病院壕跡	0			0	0		0	
44	城辺下里添	ウズラ嶺西の壕跡	0			0	0		0	記録保存
45	城辺下里添	西花切の壕群	0			0	0			
46	城辺下里添	ムムクーリャ		0	0				0	*
47	城辺下里添	「陣歿せる軍役動物を吊ふ」碑	0			0	0			
48	城辺西里添	アーリヤマの戦争遺跡群	0			0	0			*
49	城辺西里添	ミルク嶺の地下壕群	0			0				*
50	城辺西里添	ムイニーヤマの壕群	0				0			
51	城辺西里添	山地の壕群	0			0	0			
52	城辺西里添	旧西中共同製糖場煙突の弾痕				0	0			建造物
53	城辺砂川	安谷原の壕群	0			0	0			
54	城辺砂川	カーラアブ		0	0					*
55	城辺砂川	場侶架原の壕	0			0	0			
56	城辺砂川	クスヌトゥブソミヤー		0	0				0	*
57	城辺友利	東保茶根の戦争遺跡群	0			0				※ 砲台
58	城辺友利	キィキャガー		0	0					*
59	城辺友利	マエノアブ		0	0		0			
60	城辺友利	アブチャー (仲原洞窟)		0	0					*
61	城辺友利	モリガホの壕	0			0	0			
62	城辺友利	ウプアブ		0	0			0		*
63	城辺友利	ピンダッドゥク		0	0			0		*
64	城辺友利	グンガマヤー		0	0			0		*
城辺地区 小計				(新規39、追加2) 41 8 13 ※2					※ 24 _{±2} 、 # 1	

- 沖埋文 2005 の報告では「長北の砲台」として記されているが、今回の調査では「与那浜崎の砲台」として報告する。 注 1
- 沖埋文 2005 で報告のある「自然壕 (友利)」、「自然壕 (ムイゴシ)」の2遺跡については、所在地等が不明確で、その詳細を確認できなかったことから、本表では含めていない。本表の※の24遺跡に前述した2遺跡を加え、 注2 沖埋文 2005 の報告数 26 遺跡となる。
- ※印 2005 年沖縄県立埋蔵文化財センターにて報告済
- #印 2015年沖縄県立埋蔵文化財センターにて報告済
- ◎ 追加△ 一部消滅

第4章 上野地区の戦争遺跡

第1節 新里

1. 新里の沖縄戦時の概況

現在の上野改善センターの位置する場所は、日本軍に"宮古富士"と称された。この宮古富士には、歩兵第3聯隊第2大隊の本部が置かれた。現在では、開発により大きく地形が変化しており、宮古富士と称された丘陵に面影はない。この第2大隊本部に関連する場所として、前花切の通称長立集落内に、第2大隊長の長谷川多喜雄少佐が宿泊した民家や、経理担当の宿泊した民家等が確認されている。西青原や東青原などの地域にも、兵隊がいた状況やトーチカなどの戦争遺跡も確認されていることから、広い範囲にわたって、第2大隊が展開していた状況が伺える。

新里集落内の公民館やその周辺には将校をはじめとした兵が駐屯していたことが、聞き取り調査から確認できる。新里集落の東に位置するバルキャ原には、山砲兵第28聯隊の第7中隊が展開し、10糎山砲を配備していたことが確認できる(神田文男『遥かなる宮古島』)。

新里集落内に駐屯した兵については、明確な部隊名は確認できなかったが、周辺の状況から山砲の可能性が考えられる。

宮古島防禦作戦大綱では宮古島を、南、北、東、中、海軍地区に分けている。現在の上野から下地にかけての地域は、南地区として歩兵第3聯隊が主体となる地域であるが、新里のバルキャ原周辺は、東地区に含まれることが戦史資料から伺える。また、佐渡山安公氏より新里集落の東側に位置する、多くの住民避難壕についてご教示いただいた。しかしながら、現在では圃場整備工事などの開発によって、これらの住民避難壕を確認することはできない。

また、新里から宮国にかけての南海岸線沿いには、多くの銃眼が確認された。当時、この南海岸が上陸 予想地点のひとつと想定されていたため、水際作戦の一環としてこの地域に多くの銃眼が設けられたもの と考えられる。このような銃眼の他に、今回の聞き取り調査では、海の中に、切り出してきた丸太を杭の ように刺して海からの侵入を阻害するための障害物を構築したとの証言が得られた。同様の障害物の構築 例は平良の大浦湾でも得られていることから、水際作戦の構築物のひとつであったことは明確である。

新里国民学校(現在の上野小学校)は、昭和19年5月20日より要塞建築勤務第8中隊が駐屯している。本部隊は、陸軍中飛行場や戦闘指揮所建設の中心的な部隊であり、4カ月間学校に駐屯している。4カ月後となる9~10月は、陸軍中飛行場の完成時期ともほぼ一致するため、陸軍中飛行場の完成後に移動したと考えられる。その後、歩兵第3聯隊が学校を接収し使用している。

聯隊本部の移動状況や、新里集落一帯における部隊の展開の状況などから、学校を接収したのは歩兵第3聯隊の第2大隊の可能性が高い。明確な時期は記されていないが、この部隊も学校から移動しており、その後は陸軍第28師団の野戦病院として使用された可能性が高い。なお、東青原公民館にも軍医がいたとの体験談の証言がある。

また、学校の敷地内に慰安所が設置されたとの記録も確認できる(日韓共同「日本軍慰安所」宮古島調査団 2009)。

戦時下における新里国民学校に状況については、「上野小学校沿革誌」にまとめられている。次にその概要を整理した。

『新里国民学校沿革誌』に見る戦争関連記事(上野小学校沿革誌より) ※原文のカタカナをかなに変換

- ・昭和19年5月22日 本日より2部授業6学級増す。初4の1 豊原青年会場、初4の2 西青原青年 会場を仮教室として使用す
- ・昭和19年5月20日 戦局緊迫により○○部隊本校に駐屯す(○○設営隊建八隊)
- ・昭和 19年7月2日 本校初等科5年以上の児童午前7時より、宮古本島内陸軍中飛行場に勤労奉仕作業のため出動、4年以下普通授業
- ・昭和 19年7月 5 日 愈々戦局の緊迫に鑑み、5年以上の生徒総動員にて校内待避壕構築作業実施せり、 児童用として数か所設営せり
- ・昭和19年7月6日 本校職員一同3班に別れ待避壕数か所に重要書類保管壕を構築せり
- ·昭和19年7月8日 大詔奉載日

下記行事施行す

奉読式

閱団、閱兵

竹槍訓練、手旗訓練

奉仕作業、慰問作業実施

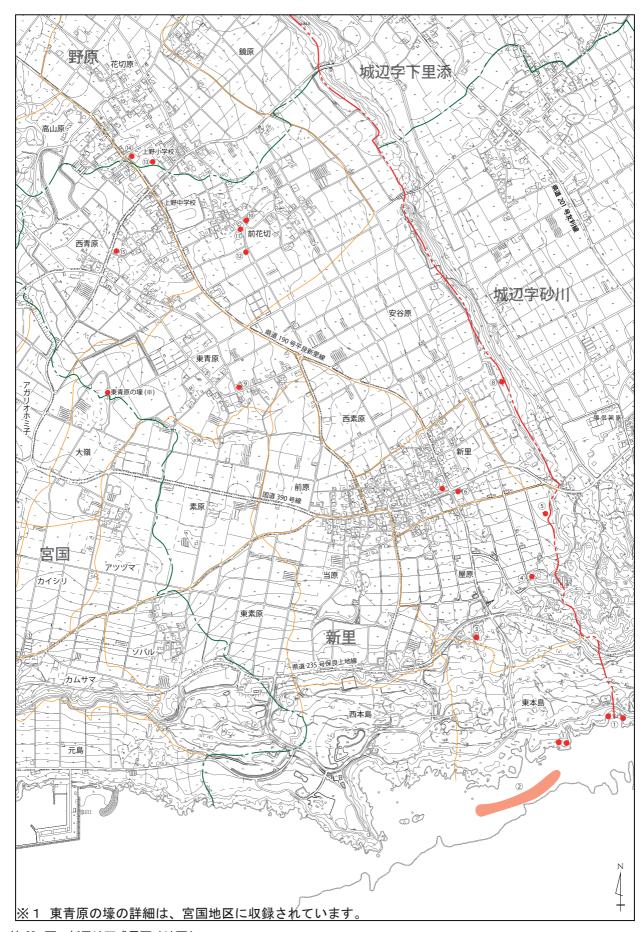
防空訓練、待避訓練実施

- ・昭和 19年7月 22日 本日より初1より高2まで全校生徒、全国体力検定法に依る行軍施行、全員一人 の落伍者もなく優秀なる成績にて所定時間内に帰校す
- ・昭和19年9月1日 第二学期始業式 本校校舎は全部○○に使用されたる故第二学期より学年別に各部落青年会場を使用、授業をなす、尚時局の緊迫のため女教員多数台湾方面へ疎開、転出するため教員数に多大なる不足を生じ教員一人にて2学級を受持つ状態に至る
- ・昭和19年9月 各部落で父兄会や婦人常会を開き学童の島外疎開奨励をなす
- ・昭和19年11月3日 明治節、校庭に於いて全児童遥拝式挙行
- ・昭和 19年11月 3 日 本日の佳日に郡下全国民学校の御真影、野原越の宮古郡御真影奉遷所に奉遷し奉 る 郡下各校の男教員は輪番制で当直し奉護に当る
- ・昭和20年3月30日 各部落に於いて本校卒業式、修了式挙行
- ・昭和20年4月1日 始業式、入学式不能(空襲のため)
- ・昭和20年4月8日 沖縄本島へ敵上陸の報有り
- ・昭和 20年 4 月 13日 学校西タンク南隣前面運動場へ 250キロ爆弾投下さる 入院患者 1 人即死、2 人重傷
- ・昭和 20年 5 月 校舎、運動場、農場等へ爆弾、ロケット投下 本校校舎借用の病院はソバリ部落 へ移動 学校用備品全部部隊が借用
- ・昭和20年5月中~6月中 入学式、始業式不能
- ・昭和 20年8月1日 本年度の入学式挙行 (部落別)高田、豊原は学校で、其の他は自分の部落で
- ・昭和20年8月13日 空襲なきため野原部落を除く学校にて授業
- ・昭和20年8月15日 大東亜戦争終結の大詔渙発(皇国日本に利あらず)

最後に、南地区(現在の上野から下地地域)の地区隊である歩兵第3聯隊について整理しておきたい。 歩兵第3聯隊は、怡土軍大佐を連隊長とし、通称は豊5620部隊である。

本聯隊は、昭和11年2月20日に編成されている。旧満州の納金を昭和19年7月7日に出帆し、釜山港、門司港、鹿児島港を経由して8月12日に宮古島に上陸している。歩兵第3聯隊は、総数3,500名ほどで構成されている。戦史資料から、第2大隊970名、第3大隊772名、歩兵砲大隊247名、通信中隊135名という各部隊の人数を確認することができる。連隊本部は野原集落内からテマカへ移動し、最終的には戦闘指揮所近くに本部を設けている。(歩兵第3聯隊ref. C11110010900)

第2大隊は、現在の上野改善センター一帯に本部を設けている(新里国民学校もその本部としての機能の位置を有していたと考えられる)。第3大隊は積間から下地方面よりに本部を設けていたと考えられる。



第88. 図 新里地区成果図(地図)

2. 新里の調査成果一覧

①新里の機関銃壕群

この付近の海岸線に複数の銃眼の設置跡をみることができる。

②上陸阻止の水際障害物

聞き取りによると、この付近には敵の上陸を阻止するため、丸太の杭を打ち込み障害物を構築していた。 (昭和5年生)

③住民避難壕跡

聞き取りによると、"魚の目のアブ"あるいは"牛の目のアブ"と呼ばれ、出入り口は狭いが中は広い 自然壕になっていて住民の避難壕として利用していた。現在はゴルフ場の敷地内となっている。場所は 旧道(弁務官道路の碑)の傍ら。(昭和 24 年生)

4)住民避難壕跡

聞き取りによると、ツヅバランミの場所にある雑木林の中の自然壕を避難壕として利用した。(昭和 24 年生)

⑤ 陣地壕跡

聞き取りによると、畑の中に丸い石が転がっていて、その奥に陣地壕の出入口があった。(昭和24年生)また、本壕は第3章第8節砂川の成果一覧⑪場侶架原の壕と、繋がっていたとの聞き取りもあった。(昭和5年生)

6 兵隊宿営地

聞き取りによると、新里公民館(字新里 46 番地)は山砲隊の宿舎だった。(昭和5年生)

⑦将校宿泊地跡

聞き取りによると、字新里86番地には将校が宿泊していた。(昭和5年生)

8住民避難壕跡

聞き取りによると、この場所の頂上には岩の割れ目があり、小さな壕があった。集落の東側に、住民が 避難したと言っていた。(昭和 24 年生)

9軍医宿泊地

体験談(根間ツルさん)によると、東青原公民館には軍医が宿泊。近くにロケット弾が落ち、被弾した 18歳の娘の治療をした。

⑩歩兵第3聯隊第2大隊隊長宿泊

体験談(砂川寛章さん)によると、字新里 293 番地には長谷川隊長が宿泊し、本部として使用していた。 戦後、世話になったお礼にと、将校が使用していた鍋を置いていったとのこと。現在でも催事や大きな 行事には煮炊きに使用している。

※歩兵第3聯隊第2大隊長長谷川多喜雄少佐と推測される。

①歩兵第3聯隊第2大隊経理室跡

体験談(砂川寛章さん)によると、字新里333-7番地は、経理室として使用していた。

12兵隊駐屯地跡

聞き取りによると、旧長立公民館は兵隊が使用していた。(昭和6年生)

①新里国民学校

新里国民学校(現上野小学校)の学校沿革誌では、要塞建築勤務第八中隊が駐屯。また、多くの体験談によると、野戦病院として使用していた。校庭には250キロ爆弾も投下され、野戦病院の患者に死傷者がでた。

14慰安所跡

体験談(新里敏男さん)によると、当時の新里国民学校の正門を入って左側には、ヨシズ張りの建物があり、そこは慰安所だった。(日韓共同「日本軍慰安所」宮古島調査団 2009)

15井戸(西青原)

体験談(太田アイ子さん)によると、この地には井戸、隣には製糖小屋があり、豊部隊の炊事場だった。



写真 427. ③住民避難壕跡



写真 429. ⑤陣地壕跡



写真 431. ⑦将校宿泊地跡



写真 428. ④住民避難壕跡



写真 430. ⑥兵隊宿営地



写真 432. ⑧住民避難壕跡



写真 433. ⑨軍医宿泊地



写真435. ⑩第2大隊よりお礼の鍋



写真 437. ②兵隊駐屯地跡



写真 439. ①慰安所跡



写真 434. ⑩歩兵第 3 聯隊第 2 大隊隊長宿泊地



写真 436. ①歩兵第3聯隊第2大隊経理室跡



写真 438. ③新里国民学校(現上野小学校)



写真 440. ① 井戸

3. 新里の戦争遺跡

(1)新里の機関銃壕群(しんざとのきかんじゅうごうぐん)

①所在地

宮古島市上野字新里東本島

②立地 • 現況

宮古島南側の海岸線に立地する。自然の岩を利用して、機関銃が設置できるよう、コンクリート等で補強した跡が見られる。

③歷史状況

宮古島地区防禦作戦大綱によれば、友利・新里・宮国の南海岸は、敵の上陸地点と想定され、水際を堅固に占領し、兵力を重点的に集中、一気に水際にて敵を殲滅するための水際決戦方式が取られることになる。そのため、この海岸線は敵の上陸阻止のための機関銃壕が数多く構築されたと考えられる。

④遺構の特徴

本遺跡の壕は、いずれも海岸線の石灰岩地形を掘削し構築した壕である。ここでは新規に確認された壕 3~7の遺構の特徴について記す。

壕3は、海岸線の岩盤を凹字型に2か所掘り込んで銃眼を構築し、それぞれ南西側と南側の海浜部分を目標としている。銃眼に付設する縦穴は、隅丸の長方形を呈し、0.7 メートル× 0.5 メートルの規格をなす。縦穴の西側部分には、足掛けのための堀込が2か所確認できる。

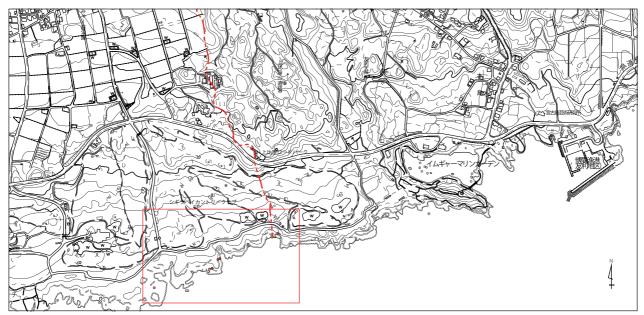
壕4は、壕3の東側に隣接し、石灰岩の岩盤をV字型に掘り込んで銃眼を構築する。銃眼は西南西をむく。縦穴部分は、隅丸の方形型をなし、0.8 メートル×0.9 メートルの規格を呈する。この縦穴の北と西の部分には、足掛けのための堀込が設けられている。

壕 5 は、本遺跡内で最も規模の大きな銃眼である。海岸の崖面部分の自然地形を利用して構築されている。銃眼は自然の空洞を利用しており、断面形態はほぼ三角形の形状を呈する。内陸部の地表面から縦穴部分の床面までは約 3 メートルを有する。海側部分の石灰岩の岩塊を利用して縦穴へ入ることができ、足掛け用のステップが 3 つ確認できる。縦穴は、1.4 メートル× 1.2 メートルの略方形状を呈する。

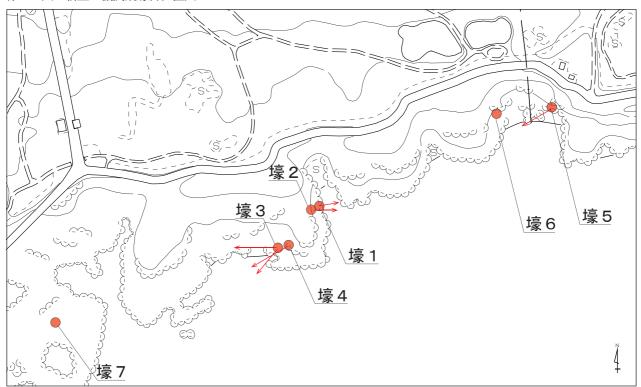
壕6、壕7も石灰岩を縦穴に掘り込んで構築しており、海側部分に銃眼を有する。



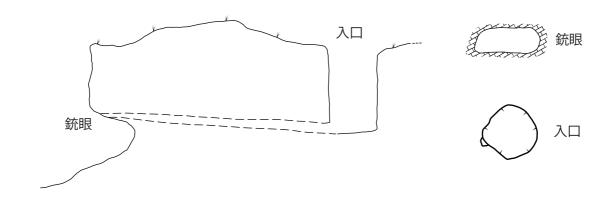
写真 441. 壕 1 诉景



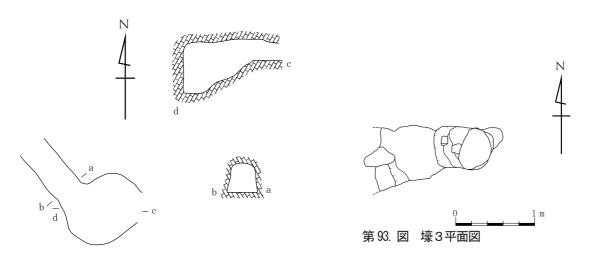
第89. 図 新里の機関銃壕群位置図



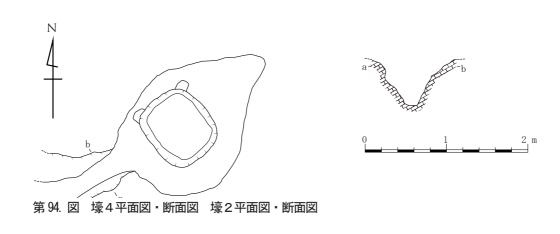
第90. 図 新里の機関銃壕群位置詳細図

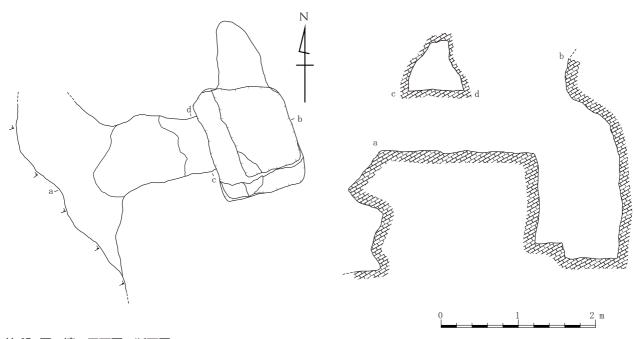


第 91. 図 壕 1 断面図



第92. 図 壕2平面図・断面図





第95. 図 壕5平面図・断面図



写真 442. 壕 2 壕口



写真 443. 壕 2 銃眼



写真 444. 壕 3 近景



写真 445. 壕 3



写真 446. 壕 4 近景



壕3 縦穴と銃眼



写真 448. 壕 5 近景



写真 449. 壕 5 銃眼内部より



写真 450. 壕 5 壕口



写真451. 壕6 縦穴と銃眼



写真 452. 壕 7

第2節 宮国

1. 宮国の沖縄戦時の概況

宮国には、歩兵第3聯隊第2大隊に関係する戦争遺跡が多く見られる。

戦史資料 (ref. C11110010900) によれば、現在の改善センターの位置する場所は「宮古富士」と記され、第2大隊の本部が置かれ、第8中隊の1小隊、機関銃中隊の1小隊、歩兵砲中隊の1小隊も駐屯していたことがみてとれる。現在は、土地が改変され、その痕跡を伺いしることはできないが、改変前は蛸壺や薬莢がみられたという証言が得られている。(図版5・図版6)

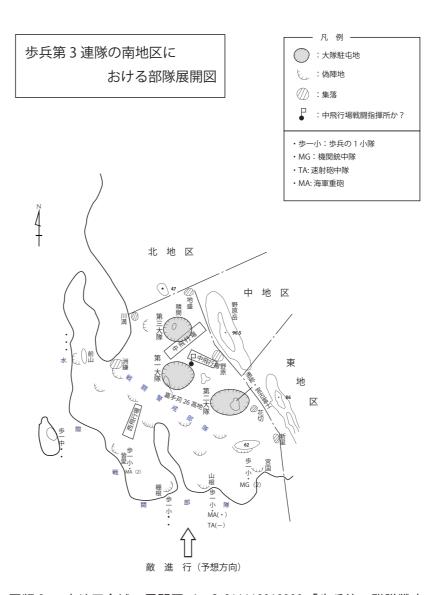
手間嘉には、歩兵第3聯隊の連隊長である怡土軍大佐や、副官の堀江道徳大尉が宿泊していた民家が確認されている。歩兵第3聯隊の連隊本部は、当初、字野原の集落内に置かれていたが、空襲が激しくなるにつれて、手間嘉に移動してきている。しかし、手間嘉でも空襲が激しくなってきたため、再度、陸軍中飛行場戦闘指揮所近くの壕に移動したとされる。今回の踏査では、その連隊長が移動したと考えられる壕も発見されている。(ナベアマ原の壕)。

なお、これらの移動してきた時期については、その詳細な記録を確認することはできない。

今回の分布調査では、大嶺と東 青原の間に、銃眼を有する壕が 確認されている(東青原の壕)。こ の場所は、前述した戦史資料の中 で、「宇品」と記され、第7中隊の 1小隊と機関銃中隊の1小隊が駐 屯していたとされている。「宇品」 とはウナトウという地名を示すも のと考えられる。

宮国集落での聞き取り調査で、 歩兵第3聯隊第2大隊第6中隊の 小隊長である、西村久夫中尉が集 落内の民家に宿泊していることが 判った。しかし、小隊で民家を利 用していたのは小隊長のみで、集 落内に兵隊はいなかったようであ る。この西村小隊に関連する場所 としては、現在のドイツ村の北側 に位置する畑地が点呼場として利 用され、朝礼などを行ったことか ら、兵隊はこの附近に駐屯してい たと考えられる。

また、集落の東端には島の南部 を対象とした見張所が設けられ、



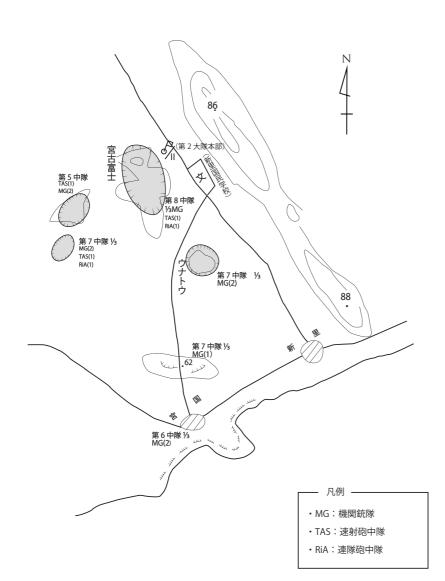
図版 9. 南地区全域の展開図 (ref. C11110010900 「歩兵第3聯隊戦史 資料 0760 の図をトレース)

現地召集の防衛隊と小隊の兵隊がともに監視を行っていた。その見張所の側には高射砲が設置されていた。 集落内の神家といわれる祭祀所は兵隊が宿舎として利用していたとの聞き取りが得られている。

ドイツ村の施設内に位置するヌズガーは現在も残る洞泉で、入口部分は狭いものの、内部は20人程収容できるほどの大きさをもち、兵隊が避難地として利用している。また、ドイツ村の海岸線に位置するタカシガバーの機関銃壕についても西村小隊が構築したものとされる。タカシガバーの銃眼を含め、上野地区の新里から宮国にかけての海岸線は、今回の分布調査で多くの機関銃壕が確認された。これらは上陸予想地として想定されていた、宮国附近の南海岸部への水際作戦に伴うものと考えられる。

宮国集落の南東部に位置する宮国元島上方古墓群では、軍隊に関係する軍杯や、ビール瓶、薬瓶などが 出土する古墓が複数みられる。これらの古墓は、丘陵崖面の上端部に位置しており、南海岸の眺望が良い ことから、なんらか形で古墓を2次利用していた可能性が高いといえる。

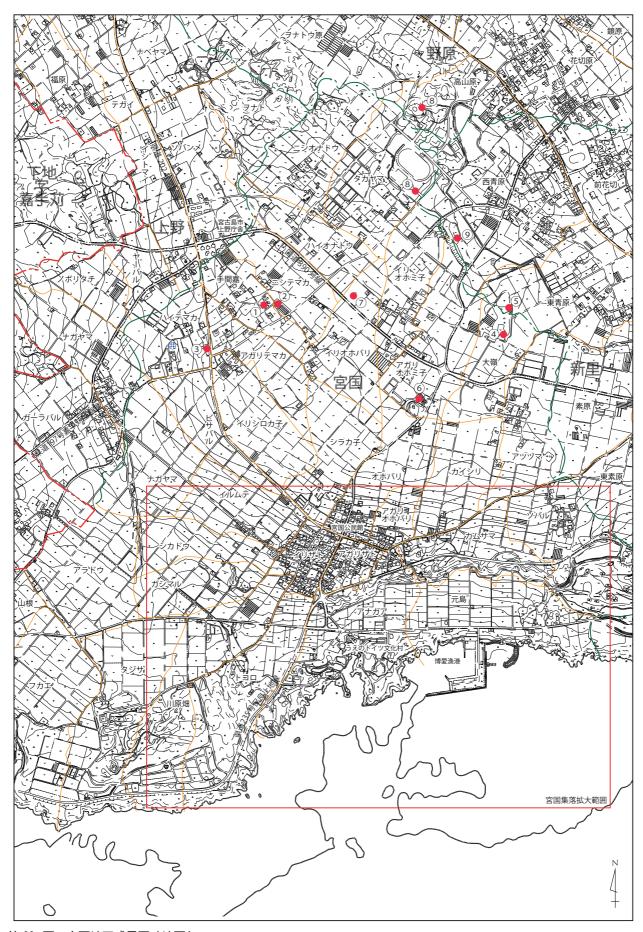
宮国の集落の人々が避難した住民避難壕については、他の地域に比して多く確認された。集落内に位置するススカニ壕や、集落の南西部に位置するアマガー、ウナタガー、サラガマガー、カーラバダの洞穴などが利用されている。また、戦争の初期は好善ミガガマ御嶽も避難地として利用されている。



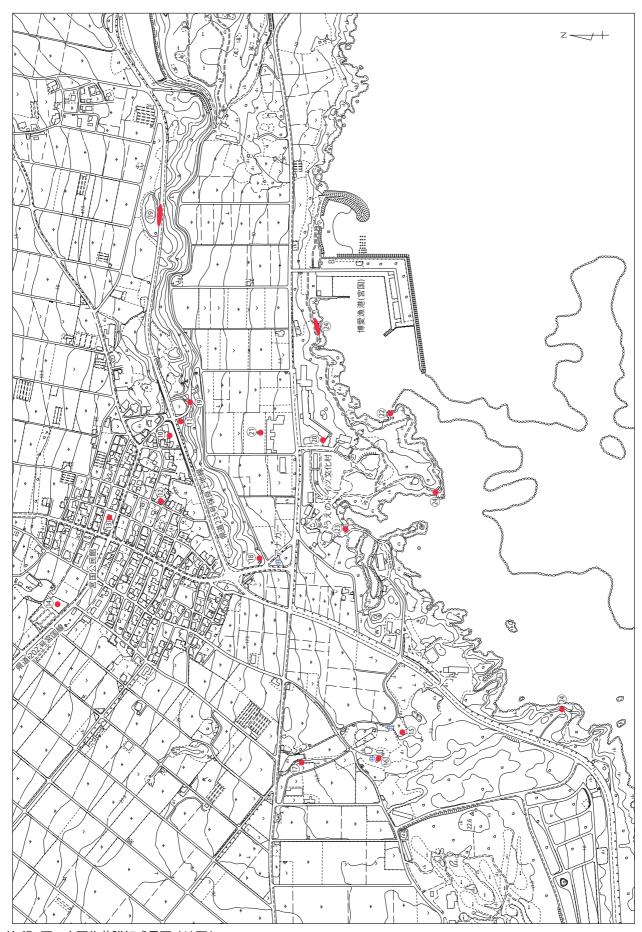
図版 10. 南地区東部の詳細展開図 (ref. C11110010900 「歩兵第3聯 隊戦史資料 0772 の図をトレース)

また、宮国の南の海域に不時着した敵の飛行機に関する証言や体験談では、不時着した飛行機から敵の兵隊2人が海岸へ上陸してきている。この2人は捕虜として、まず、宮国公民館へ連行された。その後、陸軍中飛行場から沖縄本島に移送されている。この宮国公民館へ敵兵を連行した様子などについては、体験談にも複数の証言がみられる。

その他、上野小学校の沿革誌によると、昭和20年5月に新里国民学校の校舎、運動場、農場などに、爆弾、ロケット弾が投下され、校舎を利用していた野戦病院はソバリ(素原)へ移動したとある。ソバリは現在の小字ソバルあたりと考えられるが、その痕跡を確認することはできない。



第96. 図 宮国地区成果図(地図)



第97. 図 宮国集落詳細成果図(地図)

2. 宮国の調査成果一覧

①作戦室

体験談(池間チョさん、堀江道徳さん)によると、字宮国1584-3番地には、歩兵第3聯隊の本部副官の堀江道徳大尉、杦田五考中尉が宿泊し、作戦室として使用していた。

②連隊本部

体験談(池間チョさん)によると、字宮国1616番地には、歩兵第3聯隊の連隊長怡土軍大佐が宿泊し、 連隊本部として使用していた。

③兵隊炊事場跡

体験談(池間チョさん)によると、字宮国39番地の南側には製糖小屋があり、そこが軍の炊事小屋だった。炊事小屋から将校たちにも食事を運んでいた。聞き取りでも同様の証言が得られた。

④東の井戸

体験談(宮国松子さん)によると、この井戸に水汲みにいった。井戸の近くには兵隊がいたとの聞き取りが得られている。

(5)東青原の壕(壕の所在は、境界を接する新里東青原)

コンクリートで固めた方形の銃眼が確認でき、トーチカや蛸壺と思われる壕がある。

※歩兵第3聯隊の戦史資料の配備要図によると、歩兵1小隊、機関銃1小隊が配備されている。

⑥クミヌフーフゥ

体験談(宮国松子さん)によると、この地には大きな洞穴があり、艦砲射撃があった時は、兵隊が住んでいた。洞穴の中には水もあり、そこに住民も避難した。

※歩兵第3聯隊第2大隊の戦史資料の配備要図によれば、この地は62高地と記され、歩兵1小隊、機関 銃1小隊が配備されている。

⑦爆弾投下場所

聞き取りによると、爆弾が投下され、カーゾコ(池)になっていた。(昭和5年生)

(8)高山原の壕(壕の所在は、境界を接する野原高山原)

上野公民館の北側にある丘(当時の兵隊の間では"宮古富士"の通称名で呼ばれていた)の中腹にU字型の陣地壕がある。詳細については未だ不明だが、歩兵第3聯隊第2大隊の本部が置かれていた地域であることから、この部隊に関連する壕と考えられる。

また、聞き取りによると、現在の上野体育館前の農村公園附近に大きな木があり、その下に兵隊が掘った大きな壕があった。(昭和13年生)

9幕舎跡

聞き取りによると、日本ウエザリングテストセンター宮古島暴露試験場の北側あたりには、兵舎として利用された天幕があった。(昭和13年生)

⑩高射砲設置場所跡

聞き取りによると、字宮国812-1番地の南隣には、高射砲が備え付けてあった。(昭和4年生)

⑪見張所跡

聞き取りによると、字宮国812-1番地の向かいあたりに見張所があり、(正規兵)兵隊1人と、(現地召集)防衛隊1人のペアで昼夜を問わず1時間交代の見張に立った。(昭和4年生)

12部隊駐屯地跡

聞き取りによると、字宮国アガリサトにある"神家"には、部隊(部隊詳細は不明)が駐屯していた。(昭和16年生)

※神家とは祭祀で祈祷するために籠る場所

① 兵隊宿舎

聞き取りによると、字宮国1231番地には西村小隊長が宿泊していた。その敷地内に茅葺の小屋を作り、小隊本部とした。(昭和4年生)

(14)ススカニヤマ

体験談(平良トミさん)によると、ススカニ山の石粉を掘りだした後の洞を避難壕として使用した。

(15)ウナタガー

聞き取りによると、ウナタガーは地域の住民の避難壕だった。(昭和15年生)

16サラガマガー

聞き取りによると、サラガマガーは住民の避難壕だった。(昭和15年生)

(17)カーラバダ

聞き取りによると、この地は自然にできた洞を利用した古墓であった。古墓の骨を脇に寄せて避難壕と して使用した。(昭和15年生)

18好善ミガガマ御嶽

聞き取りによると好善ミガガマ御嶽は、大戦初期の地域住民の避難場所であった。(昭和15年生)

(19)陣地壕·避難壕跡

聞き取りによると、県道235号線の南側の崖沿いには古墓が複数あり、地域の住民はこれらを避難壕として使用した。(昭和16年生)

※『宮国元島上方古墳墓群』(2013年)の発掘調査の遺物等が一部の古墓に集中していることから、この 地の古墓群の一部を兵隊が二次使用したと考えられる。

②タズガー

聞き取りによると、この地は歩兵第3聯隊第2中隊の西村小隊が使用した。洞穴の中は20名程が入る ことが出来る広さがあった。(昭和4年生)

21点呼場所

聞き取りによると、ヌズガーの前の畑は小隊の点呼場所であり、朝礼などを行った。(昭和4年生)

②タカシガバーの機関銃壕

聞き取りによると、西村小隊が機関銃を設置して防衛していた。(昭和4年生) ※地元での呼称は「タカシガバー」と呼ばれている。

②「ドイツ商船遭難之地」碑の弾痕

1936 (昭和11)年に建立された記念碑には、機銃掃射の弾痕がある。

24)海岸監視哨

水際作戦に備えた監視哨と推測される場所が3か所確認されている。



写真 453. ①作戦室



写真 455. ③兵隊炊事場跡



写真 457. ⑤東青原の壕



写真 459. ⑦爆弾投下場所



写真 454. ②連隊本部



写真 456. ④東の井戸



写真 458. ⑥クミヌフーフゥ



写真 460. ⑧陣地壕跡(宮古富士)





写真 463. ①見張所跡



写真 465. ③兵隊寄宿地



写真 467. ⑤ウナタガー



写真 462. ⑪高射砲設置場所跡



写真 464. ①部隊駐屯地跡



写真466. ⑭ススカニヤマ



写真 468. 16サラガマガー



写真 469. ①カーラバダ



写真 471. 19陣地壕・避難壕跡



写真 473. ② タズガー



写真 475. ②タカシガバー



写真 470. 18 好善ミガガマ御嶽



写真 472. 19陣地壕・避難壕跡



写真 474. ②1点呼場所



写真 476. ② 「ドイツ商船遭難之地」碑の弾痕

3. 宮国の戦争遺跡

(1)高山原の壕群(たかやまばるのごうぐん)

①所在地

宮古島市上野字野原高山原

②立地 • 現況

現在では上野公民館や体育館、陸上競技場、保健センターなどの施設が建設され、往時の地形とは大き く異なっている。

③歷史状況

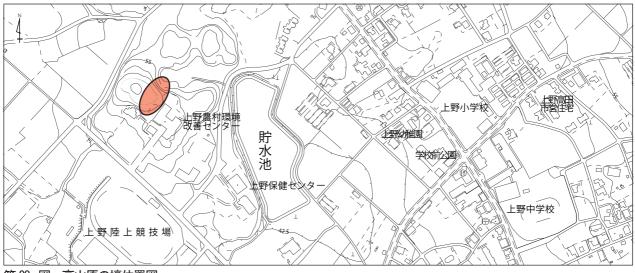
先島集団(第 28 師団)の戦闘態勢は野原岳を核心に宮古地区を北、中、南、東、海軍地区、伊良部支隊に分け、各地区隊に防衛を担任させている。歩兵第 3 聯隊は南地区隊として、上野・下地の守備にあたる。歩兵第 3 聯隊の戦史資料の配備図によれば、第 1 大隊は中飛行場東西滑走路の西側に本部を置き、第 3 大隊の本部は中飛行場南北滑走路の北側であった。第 2 大隊が本部を置いたのは高山原にある「宮古富士」と呼称した丘陵である。第 2 大隊はこの高山原から南の新里集落、宮国集落、下地の入江辺りまでに展開し、上陸地点と想定した海岸線の守備にあたっている。高山原の地は北に中飛行場、戦闘指揮所があり、東北側には師団本部がある。本壕群は高山原にあり、第 2 大隊に関連する陣地壕の可能性が高い。

④遺構の特徴

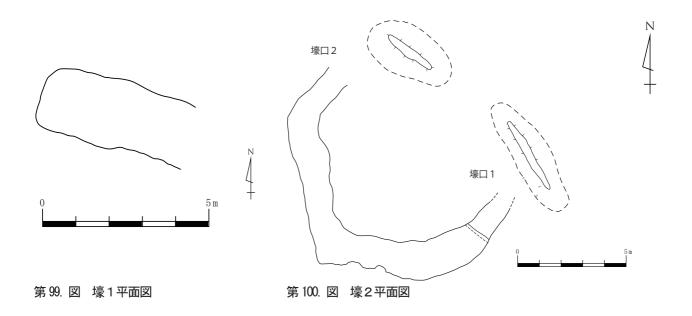
本遺跡は2つ壕から構成される。北側から壕1、壕2とし、いずれも琉球石灰岩を掘り込んで構築された壕である。壕1、壕2の南西側には小規模の塹壕もみられる。

壕 1 は、東南東に壕口が開口する。壕口から西北西に直進する I 字型の壕であるが、天井を有しない塹壕部分が長さ 1.5 メートルほどある。壕内は約 3.1 メートルで幅は約 $1.8 \sim 2.2$ メートルほどで、高さは約 1.5 メートルである。壕の奥の方には、ロト痕が確認でき、構築にあたってはダイナマイトが使用されたと考えられる。

壕 2 は、2 つの壕口からなり、平面形態は U 字型を呈する。いずれの壕口も北東へ開口する。壕内には、横 $0.75 \times 2 \times 6$ 0.25 メートルの規格で、意図的に壁面を掘り込んだ痕や、通路の壁を意識して直線的に仕上げる痕跡が確認できる。また、いずれの壕口とも、前面に壕を掘って出た廃土を高さ約 $1.7 \sim 1.9$ メートルのマウンド状に盛土しており、壕口部分の目隠しが目的と推察される。壕 2 の東側の壕口部分から北北東の方向約 13.8 メートルの場所に壕 1 が位置する。



第98. 図 高山原の壕位置図



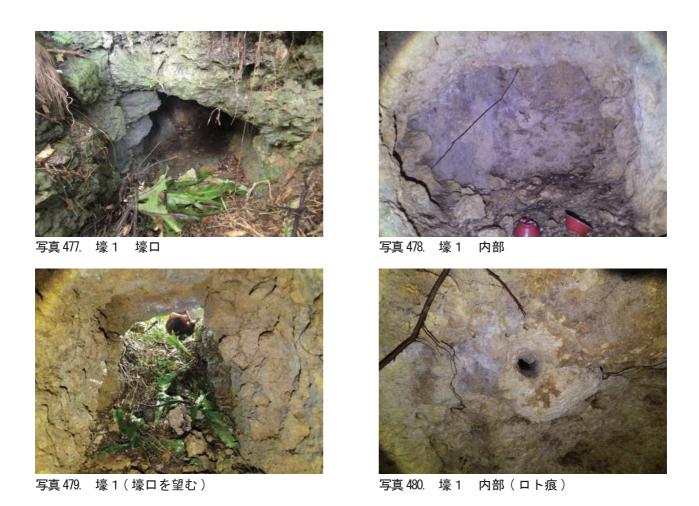




写真 481. 壕 2 壕口 1



写真482. 壕 2 壕口 2



写真 484. 壕 2 内部



写真 483. 壕 2 内部



写真 485. 塹壕

(2) 東青原の壕(ひがしあおばるのごう)

①所在地

宮古島市上野字新里東青原

②立地·現況

第2大隊の本部があった「宮古富士」から、南側へなだらかな丘脈になっており、その南端にトーチカは位置する。周囲にはゴミが堆積する急峻なクレバス状の谷や、古墓なども多く、トーチカの一角のみが雑木が繁茂し、ほ場整備外となっている。

③歷史状況

軍の防禦区割りによると、この地域は南地区となり、歩兵第3聯隊の防衛地域となっている。歩兵第3聯隊戦史資料 (ref. C11110010900) の第1大隊の部隊展開図によれば、本部の南側に第7中隊の1小隊、第2機関銃中隊の1小隊が配置されている。

④遺構の特徴

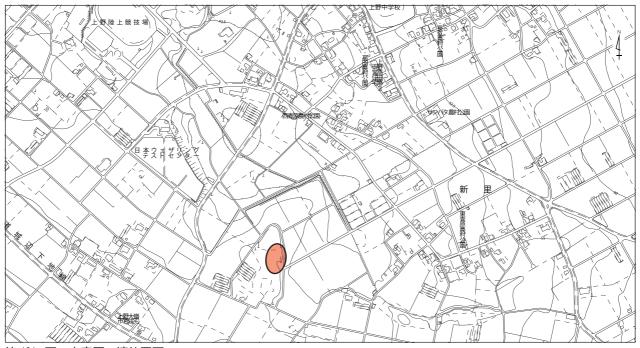
本遺跡は、地表部に露頭する琉球石灰岩の岩盤を掘り込んで構築されている。 壕口は幅が約 0.65 メートル、高さ約 0.95 メートルと比較的狭い。 壕内部の高さは約 1.05 メートルで、人が 2 人は入れるほどの空間を掘りぬいているが、比較的粗雑な造りである。 銃眼と思わる開口部が 2 か所設けられている。

銃眼1は外側部分の規格が、横0.2メートル、縦0.15メートルの長方形形で、岩盤の縁辺部をコンクリートで補填している。南東(135度)の方角を向き、壕内部からの開口部までは約0.95メートルである。

銃眼2は外側部分の規格が、横0.3メートル、縦0.15メートルの長方形である。方角は東(95度)を向き、壕内部から開口部までは約1.4メートルを測る。2つの開口部とも壕内からの距離が比較的長い。

このトーチカとされる岩盤から北北西の方向に、石灰岩の岩盤を竪穴状に掘りぬいた場所がある。規格は、 1×1 メートルの方形で深さは 0.8 メートルである。その機能や用途は判然としないが、トーチカと 関連性のある遺構と推察される。

※方言名では「アガリオーバリ」と呼ぶ。



第101. 図 東青原の壕位置図



写真486. 東青原の壕 全景



写真 487. 銃眼 1



写真 489. 壕内部



与真 488. 銃眼 2



写真 490. 関連遺構

(3) タカシガバーの機関銃壕(たかしがば一のきかんじゅうごう)

①所在地

宮古島市上野字宮国アナガア

②立地·現況

本壕は博愛漁港の西側の海岸線沿いの岩礁地帯に位置している。標高は約1~2メートルである。ドイツ村から博愛漁港に向けては、散策のための歩道が設置されており、この歩道からのアクセスが可能である。壕の周辺は自然の岩礁地形をよく残しており、壕の残存状況も良好である。

③歴史状況

歩兵第3聯隊の戦史資料 (ref. C11110010900) によると、この地域には第2大隊第6中隊の1小隊 と第2機関銃中隊の一部が駐屯している。宮国地区の聞き取りでは、第6中隊の西村小隊(小隊長:西村 久夫中尉)がタカシガバーに機関銃を設置したとの情報が得られた。

本壕の位置する宮国地域を含む南海岸一帯は、米軍の上陸が想定される地域のひとつであり、それに備えるために、宮国地域から友利地域に至る海岸線は、機関銃壕が構築されている。本壕もその上陸に備えての水際作戦一環により構築されたものといえる。

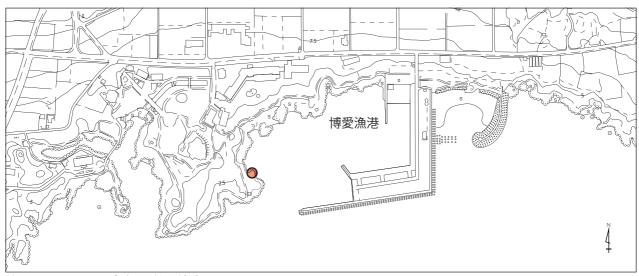
④遺構の特徴

本壕は海岸線の岩礁の中に築かれており、自然の岩盤の空洞部分を利用し構築されている。壕口部分からは、南東へ約 2.9 メートル直進し、北東側へ進路をかえる。そこから約 5.2 メートルほど進むと銃眼に至る。通路部分の高さは約 1.3 メートルほどで、幅は約 $1.2 \sim 1.0$ メートルほどである。通路部分には 2 箇所ほど、小部屋状に一部壁面が掘り込まれた部分もみられる。

銃眼の大きさは、0.55 メートル×0.25 メートルで北東方向、つまり現在の博愛漁港方向を向いて設置されている。銃眼の前には、機関銃を備え付けたと思われる台座が残り、床面より0.15 メートルほど高くなっており、銃眼はこれよりも更に0.2 メートルほど上に設けられている。この台座の中央部分には、直径約0.2 メートルの機銃を備え付けるための金属製の器具が備え付けられている。

また、この壕に隣接する西側部分には、同様の銃眼を設置したと想定されるセメントづくりの遺構が確認されている。現在は天井を有しておらず、自然の地形を利用して構築されている。現況として銃眼などは確認されていないものの、北東方向を向いていることから同様の機能が想定される。

※地元では「タカシガバー」と呼ばれていることから、地元の読みに即した呼称に変更しました。



第 102 図 タカシガバーの機関銃壕位置図



写真491. 銃眼と台座部



写真492 タカシガバー機関銃壕近景



写真 494. 壕内部



与真 493. 場口



写真495. 銃眼部分(外側)

(4)「ドイツ商船遭難之地」碑の弾痕(「どいつしょうせんそうなんのち」ひのだんこん)

①所在地

宮古島市上野字宮国アナガア

②立地·現況

「ドイツ商船遭難之地」碑は、現在うえのドイツ文化村の敷地内にある。周辺整備も行われ、良好な状態で残されている。

③歴史状況

本碑は、1876(明治9)年に宮国沖で座礁、難破したドイツ商船ロベルト船号の遭難から 60年の節目 となる 1936(昭和11)年に建てられたものである。1979(昭和54)年3月9日に、上野村指定文化財(史跡)に指定され、現在は宮古島市の指定文化財となっている。

④遺構の特徴

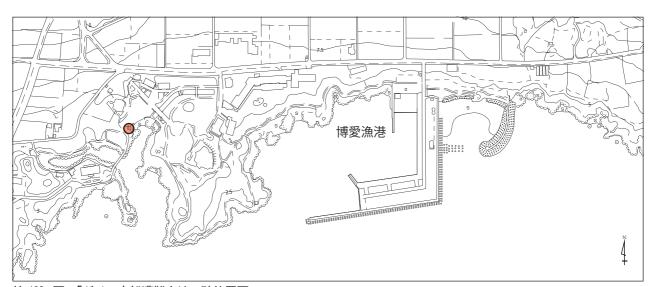
弾痕は、機銃掃射によるものと考えられ、石碑内に複数確認できる。



写真496. 「ドイツ商船遭難之地」碑の全景



写真 497. 弾痕



第103. 図 「ドイツ商船遭難之地」碑位置図

第2節 野原

1. 野原の沖縄戦時の概況

野原には、陸軍中飛行場の滑走路及び戦闘指揮所、野原岳の第28師団本部などの当時の日本軍の重要施設の多くが置かれた地域である。そこで、本設では「野原集落」「陸軍中飛行場」「野原岳の戦争遺跡群」、の3つの項目をたてて、その概要を整理していきたい。

(1)野原集落

野原集落では陸軍中飛行場滑走路が、集落を囲むようにして建設され、集落の北東方向にそびえる野原 岳には第28師団の師団本部が置かれている。また、集落内には、歩兵第3聯隊の本部も置かれるなど、軍事施設が集落を取り囲んだ状態にあり、陸軍中飛行場に付随する誘導路や掩体が複雑に入り組んでいることが、空中写真からもみてとれる。

集落内を南北に貫くカナイダ道路と呼ばれる集落内道路は主誘導路となり、集落内の御嶽は修理隊や掩体として使用された。体験談では、「滑走路工事に関しては用地の強制接収とはいえ、事前に滑走路用地の地主に予告、説明をなし、地主の承認を得て行われたが、誘導路と掩体壕の工事に関しては全くこれに反し、軍の横暴と軽視的行為のもとに行われた。誘導路の幅は 10 メートルであるが、作業の時、道の盛土の両側も土が広く削られ、20 メートルに達する所もあった。」(村民の戦時・戦後体験記録 上野村教育委員会 平成 15 年)

2本の滑走路に挟まれ、誘導路が張りめぐらされ、それに付随する掩体も数多く設置された。集落には 兵舎も混在したため、集落は敵機の標的となり、民間人が巻き込まれる被害も他の地域に比して、類をみ ない状況であったことが推察される。

また、集落の南端には慰安所が設けられ、体験談などでも関連する証言が得られており、記念碑も建立されている。

(2) 陸軍中飛行場

陸軍中飛行場は、野原集落の西方から南方に位置し、南北1,500メートル、幅200メートルからなる滑走路(以下、南北滑走路と呼称)と、東西1,500メートル、幅175メートルからなる2つの滑走路(以下、東西滑走路と呼称)で構成される。

滑走路の建設に先立って、1943(昭和18)年5月から1944(昭和19)年5月にかけて、その建設予定地の土地が強制的に接収されている。土地の接収経緯や、終戦後の土地の払い下げにかかる経緯については、『旧日本軍接収用地調査報告書―旧日本軍が接収し、現在国有地として取り扱われている土地の調査報告書―』(沖縄県総務部総務課1978年)に詳しく記されており、ここではその概略についてのみ触れる。

土地の接収については、当時の飛行場建設に参加した日本軍の兵士の証言や、土地の地主らの証言などから、地主らに事前の話し合いなどはなく、強制的に接収されている。陸軍中飛行場は、117名の地主から346.821坪の土地を強制的に接収している(瀬名波 1975)。

土地の買収には現金又は公債が支払われたが、陸軍関係はほとんど公債で、戦後支払い凍結されたものが多い。(瀬名波 1975)

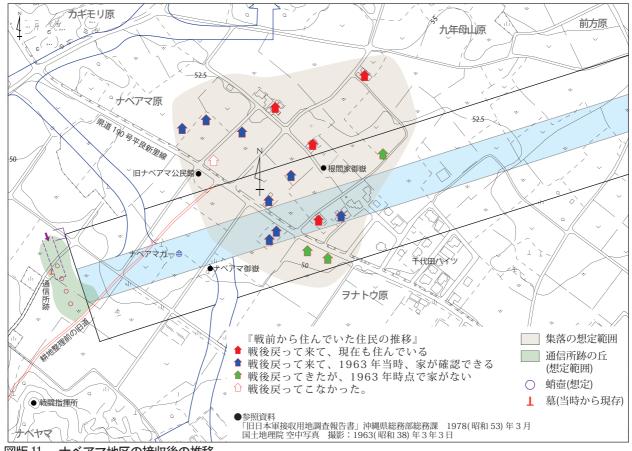
土地の強制的な接収は、畑地や居住地を追われただけでなく、深刻な食糧難をも引き起こしている。 「大東亜戦争中飛行場用地として強制的に買い上げられた土地返還について」の中で、次のように記されて いる。"極度に窮迫していた食糧難の時代において農民の生命である甘藷及び大豆の主作物を始めその他 地上作物の収穫をまつ余裕すら与えられず作戦遂行上急を要するという理由で一気に飛行場建設が行われ たので住民は食うに食なく、食料の欠乏に加えて人心が動揺し、これが原因で精神に異常をきたし、或い はそれが嵩じて生命を失うものすらあったのであります。。

このような強制的な接収は、住居を移動したり、畑地の農作物の収穫を行うことができないという一次 的被害の他に、終戦後の土地の払い下げの段階でも、二次的な被害を引き起こしている。接収された土地 は、昭和20年8月15日の敗戦後、米国民政府財産管理課の管理に置かれ、復帰後は、国有財産として総 合事務局財務部宮古財務出張所が管理している。そのため、接収された土地で耕作を行うためには、土地 の所有権をもつ国と小作を行うための契約を結ばなければならなかった。

東西、南北の2本の滑走路として接収された土地の大部分は、畑地であるが、居住地の接収も確認でき る。聞き取り調査などから、滑走路の建設地には、少なくとも2つの集落があったことが分かる。 本稿では東西滑走路の西端部分のナベアマ原に点在する集落をナベアマ原集落、南北滑走路の北端部分に 位置する積間原に位置する集落を、積間原集落と仮称したい。

今回の調査では、聞き取り調査や『旧日本軍接収用地報告書―旧日本軍が接収し、現在、国有地として 取り扱われている土地の調査報告書一』の資料と聞き取りをもとに、可能な限り接収前の集落内の家屋の 位置と、接収後の移住先、終戦後の集落の再形成の3点に焦点をあて整理を行った。

ナベアマ原集落の土地接収時には、少なくとも16軒の家屋が確認できた。接収されたナベアマ原集落 の住民は、親戚筋などを頼り、野原の集落内やウナトウなどへ移住し、終戦後、元の居住地に戻っている 家屋もあるが、移住先に残った者もいたようである。1963年の空中写真では、少なくとも12軒の家屋が



図版 11. ナベアマ地区の接収後の推移

ナベアマ原集落に戻っていることが確認できる。(図版7)

積間原集落については聞き取りによると、少なくとも10軒の住居があったことが確認できるが、接収時はナベアマ原集落と同様に、それぞれが縁者を頼って移住先を見つけ、移動を余儀なくされている。現在、元の住居地に戻ったことが確認できるのは、1軒のみにとどまった。(中飛行場成果図)

これらの聞き取り調査から、各世帯単位で他の居住地へと移動していることがみてとれ、集団としての 単位での移動は見られない。

また、南北滑走路の西側に隣接する下地字川満の西積間・東積間の集落においても、聞き取りによると 集落内での住人の移動が確認できた。(中飛行場成果図。矢印で指示)

戦史資料(ref.C11110031400)によれば、陸軍中飛行場の建設は、昭和19年5月に、第205飛行場大隊と第129野戦飛行場設定隊が着手している。工事には地元の住民も多く駆り出されている。前述した2本の滑走路に、普通掩体(中型用)が30、秘匿掩体(中型用)35、秘匿掩体(小型用)10が設けられ、誘導路の全長は10,000メートルにも及ぶと記されている。掩体については、コの字型に約2メートルの土盛を行い天井部分を草木で覆って擬装する方法や、御嶽などの雑木林の中に秘匿するといった方法が取られたことが聞き取り調査で得られている。また、中飛行場の滑走路の構築にあたっては、砕いた石灰岩を敷き詰めて転圧したマカダム舗装という工法が用いられている。関連施設として、厚さ1.5メートルの鉄筋コンクリート建ての高等司令部用戦闘指揮所が1基、厚さ1メートルの鉄筋コンクリート建ての通信所を1基、急造茅葺建物50棟の居住設備を設けている。これらの関連施設として現存するのは、戦闘指揮所のみである。

陸軍中飛行場はその軍事的な性格から、敵の空爆の目標とされている。体験談には、空爆された滑走路の爆撃痕を平坦にならすために、地元民が駆り出されて、その整地作業に従事している。

陸軍中飛行場から出撃した特別攻撃隊として、『沖縄・台湾・硫黄島方面陸軍航空作戦戦史叢書36 (16)』と知覧特攻平和館提供資料の2つを確認することができた。これらの資料から、誠第114飛行隊と、誠第116飛行隊の2つの部隊が特別攻撃隊として陸軍中飛行場を利用している。

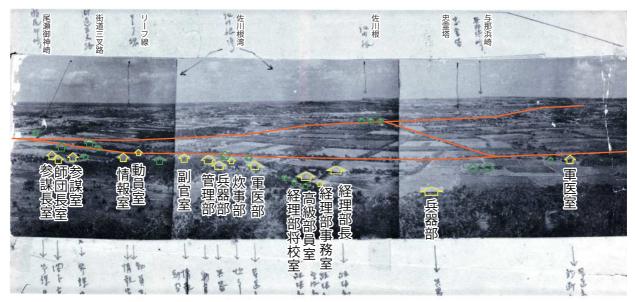
(3)野原岳

野原岳の丘陵部には、1995年時の沖縄県立埋蔵文化財センターの調査では38もの壕群が報告されている。これらの壕群には第28師団の司令部壕の他に、御真影奉護壕、発電機壕、電波探知機壕、トーチカ、銃眼など多種多様な性格を有する壕で構成されている。このような多様な構成を持つ壕群は、宮古島内においては野原岳の丘陵部にのみに限られ、本地域が当時の日本陸軍の中枢であったことを示すひとつの様相であるといえる。

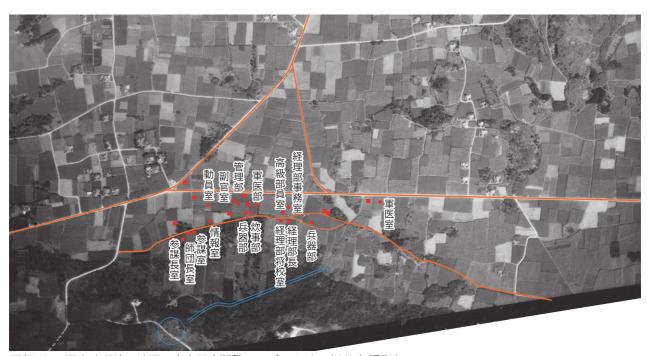
【注釈】

注1: 道路の舗装工法のひとつで、粉砕舗装とも呼ばれる。19世紀イギリスのマカダム J. L. McAdam によって考案 された舗装工法。砕石を敷き詰めローラーで転圧をかけて施工する。砕石は天然の砂利と異なり表面が荒いため、圧し固めることによって噛み合わされ耐久性が生まれ、仕上がりも美しく、それほど自動車が普及していなかった、戦前・戦中まで用いられていた。

宮古島では島で算出する石灰岩の砕石を活用していたため、マカダム舗装を施した道路や滑走路、誘導路は、 上空からは白く輝いて見えており、格好の攻撃目標となっていたようである。



図版 12. 先島群島作戦(宮古篇) 瀬名波栄(1975)より



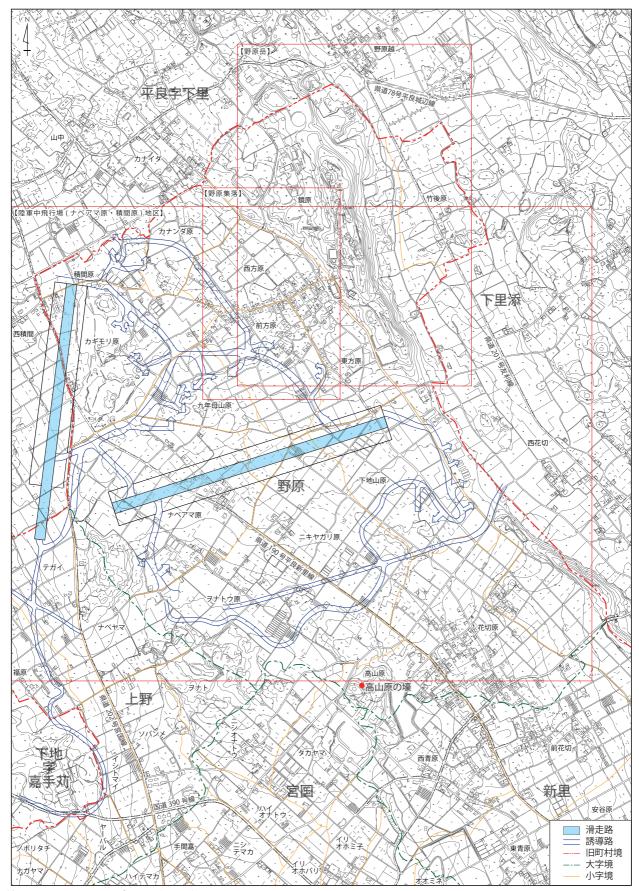
図版 13. 国土地理院 地図・空中写真閲覧サービスより。(1963 年撮影)



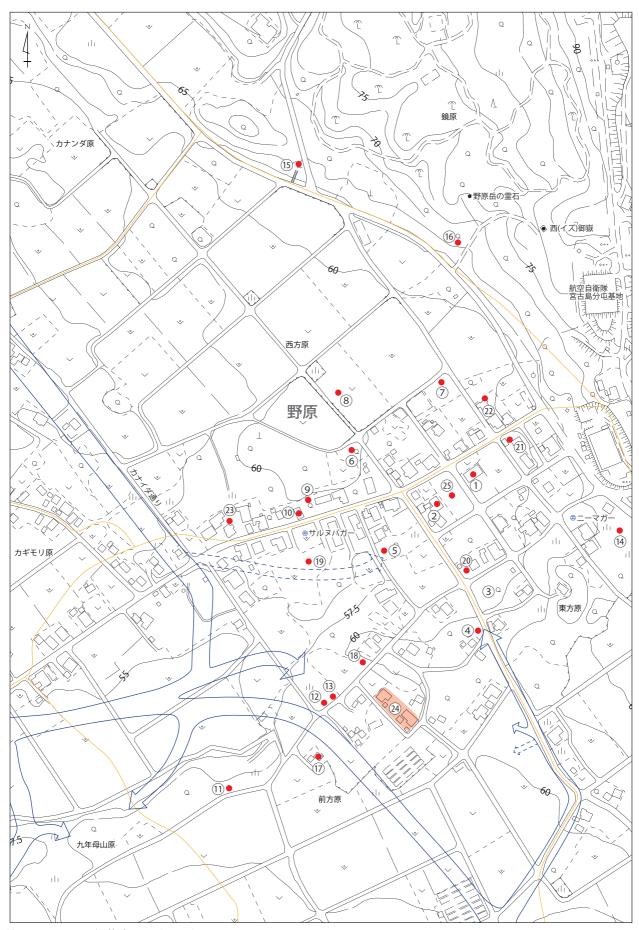
図版 14. 野原岳より望む(北東側)



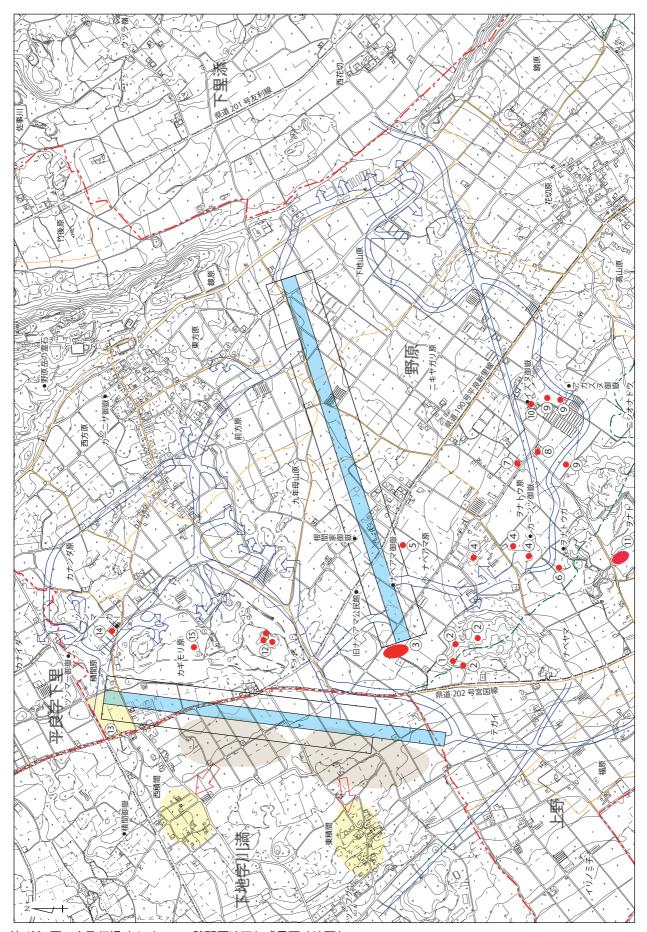
図版 15. 野原岳より望む(南東側)



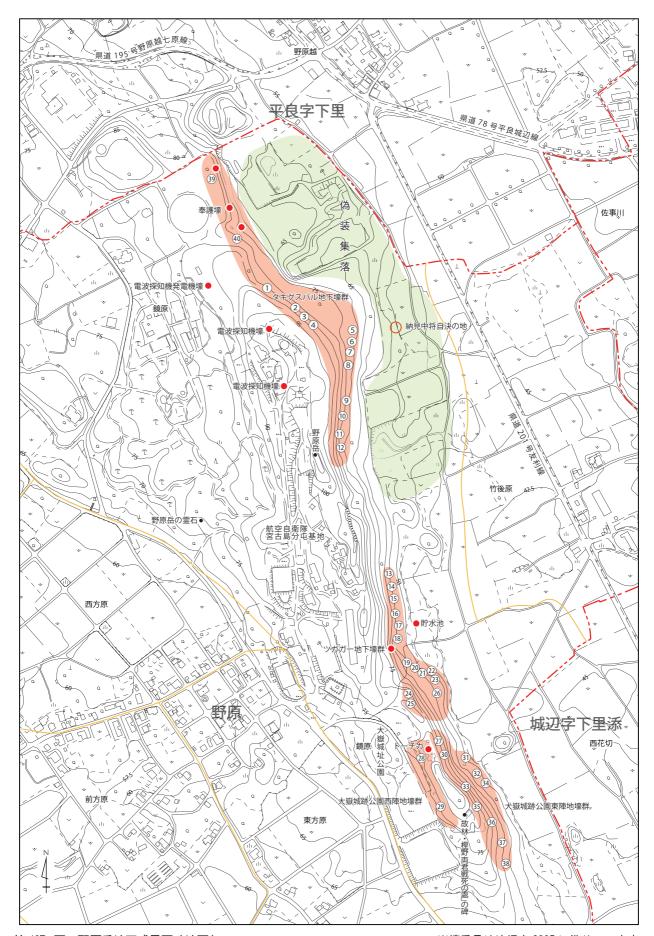
第104. 図 野原地区成果図(地図)



第105. 図 野原集落成果図(地図)



第106. 図 中飛行場 (ナベアマ・積間原地区)成果図(地図)



第107. 図 野原岳地区成果図(地図)

※壕番号は沖埋文 2005 に準じています。

2. 野原の調査成果一覧

(1) 野原集落

①歩兵第三聯隊本部

体験談(野原薫さん、砂川清一さん)によると、野原公民館は歩兵第三聯隊の本部で、2個小隊の護衛兵がつめていた。公民館には大きなセンダンの木があり、木の上には監視小屋を作り、絶えず監視の兵隊がいた。

②連隊長宿舎

体験談(野原薫さん)によると、公民館前の字野原1084番地は連隊長宿所であった。座敷には連隊旗が 安置され、門には昼夜、衛兵が立っていた。空襲が激しくなり、後日、テマカへ宿舎を移転する。

③・4・5掩体

聞き取りによると、この3か所(ムムクーリャ御嶽、バサナカ御嶽、字野原1065-2番地の西側)には、 飛行機を格納する掩体があった。(昭和8年生)

6中隊駐屯地跡

体験談(野原薫さん)によると、字野原216番地の隣には1個中隊がテントを張っていた。

⑦移動式兵器修理部隊

体験談(野原薫さん)によると、カーニザ御嶽には移動兵器修理隊が陣取り、鍛冶屋の道具を使用。ここでは兵器の修理や、砲身を作っていたとの聞き取りも得られた。

⑧住民避難壕

聞き取りによると、畑の中に防空壕を掘り、親戚一族が避難した。(昭和8年生)

⑨茅葺の軍倉庫

体験談(野原薫さん)によると、字野原214-1番地の周囲には米を山のように積んでシートで覆い、物置小屋には衣類を積み、畜舎には履物と缶詰類が積まれていた。敷地内の裏手には茅葺の家が2棟が建てられ、食料や衣料の倉庫として利用されていた。これが敵機の落した曳光弾で火事になり、ほとんどが消失。跡地は現在、窪地となっている。

⑩歩兵第三聯隊の経理室

体験談(野原薫さん)によると、字野原214-1番地は、連隊の経理室として使用され、主(計)長の田中大尉、五十嵐曹長、田中軍曹、富永伍長が事務所兼宿舎とした。

※田中大尉は歩兵第三聯隊本部副官田中豊大尉に比定。

⑪慰安所

聞き取りによると、字野原300-1番地に慰安所があった。慰安所の周辺には機関砲隊、白井隊、通信 隊、歩兵隊などの兵舎があった。(昭和8年生)

※白井隊とは、歩兵第三聯隊第2歩兵砲中隊中隊長白井定信大尉に比定。

⑩高澤義人の碑

高澤義人は1943年に補充兵(衛生兵)として召集され、朝鮮、北満を経て宮古に移駐。米英軍の海上封鎖で食糧や医薬品の補給はなく、マラリア、飢餓のため、連日のように死んでいく兵を茶毘に付す作業に明け暮れた。そのような状況を読んだ歌が、1981年「朝日歌壇」に掲載され、同年の朝日歌壇年間秀歌十種の中に選ばれた。これを記念して2005年、高澤義人歌碑建立実行委員会によって、この地に歌碑が建立された。

③アリランの碑

字野原300-1番地にあった慰安所から、井戸へ行き来する途中で休憩した場所に2008年碑を建立。

「慰安婦」とされた女性たちの12の言語で追悼の碑文を刻んだ。

14通信隊本部跡

体験談(野原薫さん)によると、字野原1117番地の東方には通信隊の本部があり、10張ほどの幕舎が散在し、多くの通信兵が出入りしていた。

15步兵第三聯隊戦没者慰霊碑

集落の外れ(北)に、この地に駐屯した歩兵第三聯隊戦没者慰霊碑が、昭和59年に歩兵第三聯隊有志により建立された。合祀柱439柱。

⑥通信隊兵士の埋葬場所

聞きりによると、通信隊の兵士の遺体を埋葬しようとしていた場所が、奥の御嶽(イズの御嶽)への参道だったので、参道の左脇に移動して埋葬した。(昭和8年生)

①特攻隊宿舎

聞き取りによると、野原305-1番地に赤瓦の家があり、疎開して空き家であったことから、特攻隊員の 宿舎としていた。(昭和8年生)

(18)朝鮮人軍夫の鍛冶屋

聞き取りによると、字野原282-1番地辺りに朝鮮人の鍛冶屋がいた。朝鮮人軍属は民間の製糖小屋に寝泊まりしていた。鍛冶屋があったのは最初の頃で、周囲の陣地構築が終わり、兵隊が南の方に移動していくと同時に鍛冶屋も移動して行った。(昭和8年生)

19步兵駐屯地跡

体験談(野原薫さん)によると、字野原288番地東側の原野には歩兵1個大隊が陣取っていた。

② 步兵砲大隊長宿舎跡

「上野村誌 村制50周年版 (平成10年発行)」の体験談 (豊島貞夫さん) によると、歩兵第三聯隊歩兵砲 大隊長谷川煕敏少佐が宿泊していた。

②1住民被害の場所

体験談(砂川清一さん、久貝シゲさん)によると、昭和20年3月、機銃掃射があり、字野原1091番地では爆音に驚いて外に飛び出した姉弟の姉が機銃弾を浴びて即死。おぶっていた2歳の弟は無事だった。

②住民被害の場所

体験談(久貝シゲさん、久貝千代さん、島尻キクさん、与那覇マツさん)によると、昭和20年7月、字野原207-1番地の防空壕に250キロ爆弾が落ち、避難していた一家6人が全滅。

②住民被害の場所

体験談に(吉村節さん)によると、昭和20年4月、米機の投下した爆弾が字野原229の民家を直撃し、 家の中にいた老婆が即死。

24爆弾被害の場所

聞き取りによると、字野原311-3番地に爆弾が落ち、並びの家数軒が被害 (火災)を受けた。爆弾が投下された家のそばに巨木があり、その根元に機関銃壕が掘られていたことから、それをめがけて投下されたのではないかとのこと。(昭和8年生)

②爆弾被害の場所

聞きとりによると、連隊本部のあった野原公民館と、連隊長宿舎との間に爆弾が投下された。その後、 連隊長は宿舎をテマカに移動した。(昭和8年生)

(2) 中飛行場(ナベアマ・積間原地区)

①陸軍中飛行場戦闘指揮所

陸軍中飛行場の東西滑走路と南北滑走路が最も近接した場所に、戦闘指揮所を構築した。 聞き取りによると、指揮所内には電話機が並んでおり、若い女性たちが働いていた。(昭和12年生) 体験談(川満恵盛さん)によると、戦闘指揮所というのは各部隊に電話で指示するところで、電話機がいっぱい置かれ、兵隊が勤務していた。(平良市史 第四巻資料編2近代資料編 宮古郡民の戦争体験)

②ナベアマ原の壕群

戦闘指揮所の東側の壕群。壕内には小部屋が幾つかあり、歩兵第三聯隊の軍旗を奉護した壕の可能性を 示唆している。

③通信所跡

聞き取りによると、戦闘指揮所の北側、東西滑走路の西端部にコンクリート製の構造物で墓のような作りの入口があり、「グンガマバカ」と呼ばれていた。入口から20~30メートルほど地下へ降りて行く通路があった。この構造物の上は小さな丘になっており、頂頭部には蛸壺が複数点在していた。また、通信所の入口横にも、人が隠れられるようなコンクリート製の空間があったが、現在は圃場整備によって失われてしまっている。(昭和26年生)

※グンガマバカ。"軍の作った墓のようなもの"という意味だと思われる。

4掩体

聞き取りによると、この3か所に掩体があった。掩体の形状は、約2メートルの土塁をコの字型に積み、天井部分はクロツグなどを編んだ網で覆われ、その上に木の枝などを乗せて擬装してあった。(昭和12年生)

⑤見張所(監視所)跡

聞き取りによると、この場所に2階建ての木造の見張所(監視所)があった。(昭和12年生)

⑥炊事場跡

聞き取りによると、近くには井戸 (ヲナトウガー) があり、軍の炊事場があった。(昭和12年生)

⑦爆弾落下場所

聞き取りによると、野原601-2番地では、爆弾が投下され、庭に大きな穴があき、住宅も吹きとんだ。 (昭和12年生)

⑧北ウナトウ青年会場跡

聞き取りによると、この場所には中飛行場設営部隊の要塞建築勤務第八中隊の熊谷分隊の一部が駐屯していた。また、熊谷軍曹は野原601-2番地の民家に宿泊していた。(昭和12年生)

⑨ナベアマの住民の移動場所

聞き取りによると、中飛行場滑走路設営の為、強制立ち退きにあったナベアマ住民3軒の移動先。戦後、15軒はナベアマの元の場所に戻ったが、現在、居住しているのは4軒となっている。(昭和12年生)

10住民避難壕

聞き取りによると、イス°ヌ御嶽と住宅の間に防空壕があり、近隣の女子供ばかりの家族はその防空壕に避難した。(昭和12年生)

⑪砲台設置跡

聞き取りによると、ここには砲台を設置したであろうコンクリートの土台があった。(昭和12年生)

①千代田カギモリ原の壕跡

旧千代田カントリークラブ敷地内で、第205飛行場大隊(通信隊)に関する壕が2基確認されている。

③強制移転前の積間集落跡

聞き取りによると、この地域には少なくとも10軒の民家があったが、飛行場用地となったため、強制的に移転させられた。戦後、元の場所に戻ったのは現在では1軒のみである。(昭和12年生)

⑭積間の慰安所跡

体験談(与那覇キクさん)によると、千代田公民館の敷地内にあるツンマー(積間)井戸があり、この井戸の近くに長屋の慰安所があった。

⑤千代田カギモリ原の碑

ゴルフ場跡に第205飛行場大隊の碑があった。



写真 498. 集落①歩兵第三聯隊本部



写真500. 集落③掩体跡



写真502. 集落⑤掩体跡



写真504. 集落⑦移動式兵器修理部隊



写真 499. 集落②連隊長宿舎



写真501. 集落④掩体跡



写真503. 集落⑥中隊駐屯地跡



写真505. 集落⑧住民避難壕跡



写真506. 集落⑨茅葺の軍倉庫跡



写真508. 集落①慰安所跡



写直 510 集落(3) アリランの碑



写真512. 集落⑤歩兵第三聯隊戦没者慰霊碑



写真507. 集落⑩歩兵第三聯隊の経理室



写真509. 集落12高澤義人の碑



写真 511. 集落14通信隊本部跡



写真513. 集落16通信隊兵士の埋葬場所



写真514. 集落①特攻隊宿舎



写真516. 集落19步兵駐屯地跡



写真518. 集落②住民被害の場所



写真520. 集落②住民被害の場所



写真515. 集落18朝鮮人軍夫の鍛冶屋跡



写真517. 集落⑩歩兵砲大隊長宿舎跡



写真519. 集落②住民被害の場所



写真521. 集落迎爆弾被害の場所



写真522. 集落②爆弾被害の場所



写真524. 飛行場②地下壕群



写真526. 飛行場④掩体跡



写真 528. 飛行場④掩体跡



写真523. 飛行場①陸軍中飛行場戦闘指揮所



写真525. 飛行場③通信所跡



写真527. 飛行場④掩体跡



写真529. 飛行場⑤見張所(監視所)跡



写真530. 飛行場⑥炊事場跡



写真532. 飛行場⑧北ウナトウ青年会場跡



与真 534. 飛行場⑩住民避難場



写真536. ⑫千代田カギモリ原の壕



写真531. 飛行場⑦爆弾落下場所



写真533. 飛行場⑨ナベアマの住民の移動場所



写真535. 飛行場⑪砲台設置跡



写真537. ③強制移転前の積間原集落跡

3. 野原の戦争遺跡

(1)ナベアマ原の壕群(なべあまばるのごうぐん)

①所在地

宮古島市野原ナベアマ原

②立地 • 現況

本壕は陸軍中飛行場戦闘指揮所跡の東側に位置する壕で、今回の分布調査で新規に発見された壕である。 壕は小規模な丘陵の下部近くに立地する。一帯は、雑木林であるが比較的道路に近い場所にある。壕内は 壕口部分を中心に天井の崩落がみられる。

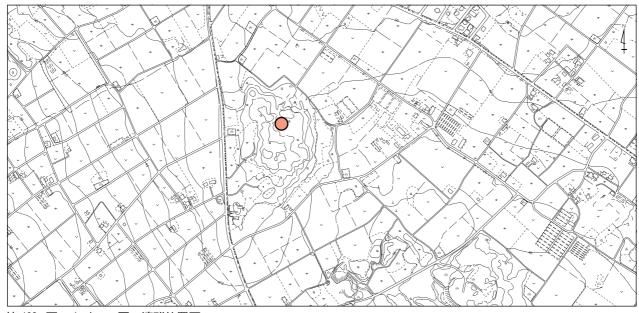
③歷史状況

本壕の歴史状況を考える上で、歩兵第3聯隊歴史を参考とした。この中では、戦闘指揮所に隣接して、 歩兵第3聯隊の連隊長らが避難する壕の構築を行い、軍旗も壕内に移動したとされている。後述するよう に、壕の形態的な特徴から歩兵第3聯隊の連隊本部壕として使用された可能性が高い。

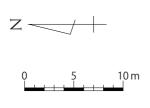
④遺構の特徴

ナベアマ原の壕群は、東側の壕と西側の壕に大別されるが、地上部における2つの壕の距離は直線で約15メートルと目視できる距離にあり、一連の壕として捉えることができる。本壕は、石灰岩の崖面などを横位に掘り込んでいく壕ではなく、壕口から地下へ向けて掘り下げる地下式の壕である。

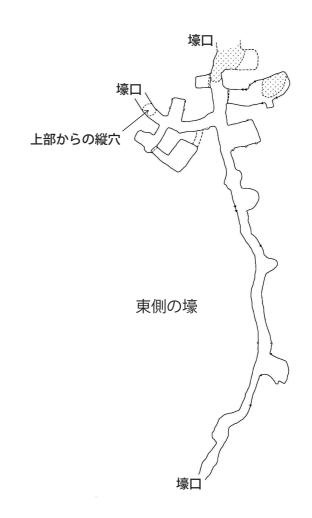
東側の壕は、西に1つ、東の2つの総数3つの壕口を有する壕である。壕内の通路の幅は約1メートル前後で、天井までの高さも約2メートルほどである。東の方に4もしくは5つの小部屋がまとまって集中している。通路にはところどころに灯り取りが設けられる。西側の壕は、東側の壕に比べ複雑な形態を呈している。壕口は全体で4つ確認できる。通路幅は約 $1\sim1.5$ メートルと東側に比べやや広く、小部屋は $9\sim10$ を確認することができる。これらの小部屋は規格が約 2×3 メートルほどの方形を呈し、部屋の両側面には3本ずつの柱を有するという共通した構築方法を見てとることができる。天井までは約2.5メートルと高く、床面もフラットに構築されるなど非常に丁寧な構築方法がとられていることから将校らの部屋であったことも推察される。

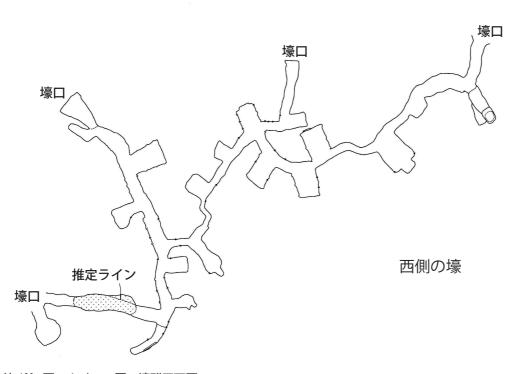


第 108. 図 ナベアマ原の壕群位置図



- ▲ 灯り取り
- ⊙ 柱跡





第109. 図 ナベアマ原の壕群平面図

(2) 陸軍中飛行場戦闘指揮所(りくぐんなかひこうじょうせんとうしきしょ)

①所在地

宮古島市上野字野原ナベアマ原

②立地·現況

陸軍中飛行場戦闘指揮所は、野原集落の南西側に位置する。周辺はサトウキビや、タバコの畑が広がり、 当時の陸軍中飛行場の様相を知る遺構は、本遺構のみである。周辺の畑地よりは、やや小高い丘に位置し ているが、周辺は雑木林に覆われている。本遺構にも、樹木の蔓や根が絡み付くような状況が見て取れ、 今後の遺構の保存に影響を及ぼす可能性がある。

内部には、コンクリート片が非常に多く散乱し、足場が悪い部分も多いが、コンクリートの保存状態自体は、それほど悪くはない。

③歷史状況

陸軍中飛行場戦闘指揮所は、昭和19年から建設が始まった、陸軍中飛行場の東西滑走路の西端付近の 高台に造られた鉄筋コンクリート造りの壕である。この壕の設置された目的は、宮古島での地上戦が激化 することを想定して、非常時には指揮官がその中に入って指揮をとするために造られている。

しかし、宮古島における戦闘はそこまでには至らず、指揮所としては機能していない。当時は、建物の上に盛土をして植物を植え、あわせて周囲の土塁にも植物を植えて、空から見て建物があることがわからないようにカモフラージュしていた。

陸軍中飛行場には、陸軍 205 飛行場大隊が駐屯し、戦闘が激しくなるまでは同大隊のうち約 20 人が指揮所に常駐していた。戦闘が激しくなると指揮所には独立機関銃第 18 大隊山内小隊が駐留し、やがて終戦をむかえた。

昭和20年4月22日に米軍の双発爆撃機により250キロ爆弾の直撃を受けたが、上部に小さな穴が開いた程度で大きな被害がなかったというほど強固なつくりであったといえる。

④遺構の特徴

陸軍中飛行場戦闘指揮所は、鉄筋コンクリート造りで、15メートル×15メートルの方形状の構造をなしている。その外側には、もうひと回り擁壁を巡らしており、南西側の正面部分はコンクリート作りであるが、それ以外の部分が土塁で構築している。この2つの擁壁の間は、約1.7メートルほどである。

外側部分の入口は、幅が1メートル前後、高さは2メートルほどである。天井までの高さは約3メートルであり、天井部分のコンクリートの厚さが0.5メートル以上の強固な作りとなっている。

天井の一部は崩落し、床面にその残骸が散乱しているが、中央部分には2本の柱が残されている。壁面部分などは、戦後、鉄筋を取り出すためにコンクリートをはがし取った痕が、ほぼ全面に見られる。



写真538. 戦闘指揮所 内部





写真541. 戦闘指揮所 天井部分



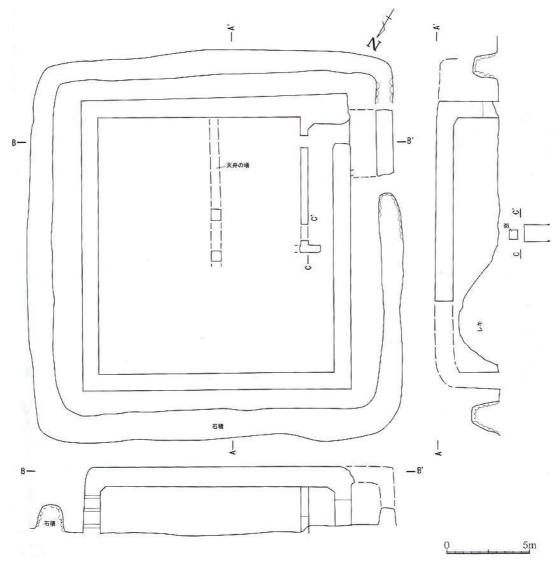
与真540. 戦闘指揮所 内部



写真 542. 鉄筋の抜かれた外壁



第 110. 図 陸軍中飛行場戦闘指揮所位置図



第 111. 図 陸軍中飛行場戦闘指揮所 略測図 沖縄県埋蔵文化財センター調査報告書第 75 集 沖縄県の戦争遺跡 (2015 年)

(3) 野原岳北側発電施設壕(のばるだけきたがわはつでんしせつごう)

①所在地

宮古島市上野字野原鏡原

②立地·現況

2005年時の報告時とは周辺の環境が異なり、現在は、伊良部島への農業用水送水のためのファームポンドへ向かうアクセス路が整備され、壕の側を通っている。周辺は雑木林地であり、壕内まで不法投棄のゴミや土砂が堆積しているが、残存状況は良好である。

③歷史状況

自衛隊施設内に位置する電波探知機(詳細は「野原岳の電波探知機壕」を参照)へ電気を供給するため の発電機壕と考えられている。

④遺構の特徴 (沖埋文 2005 より引用)

本壕はコンクリート造りの半地下式の壕である。自衛隊施設内にある電波探知機壕と同様に、床は水平で、天井がドーム型になっている。幅は約3メートル、奥行きは7.7メートルで、平面形態は長方形となる。壁、天井に僅かながらコンクリートの剥落が見受けられるが、ほぼ当時のまま残存している。周辺地形から石灰岩を掘り込んで輪郭を造り、壕内内部の壁や床などをコンクリートで整形する構築方法がとられている。内部両側壁には電線を取り込むための孔が1か所ずつ設けられている。

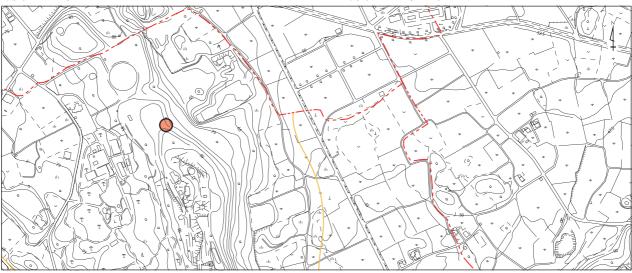
聞き取り調査から、自衛隊施設内にある、電波探知機壕へ電気を供給するために構築された発電機壕であるとされており、終戦直後、壕を残して内部の発電機は壕周辺で爆破してから撤収したとある。



写真 543. 壕口



写真 544. 壕内部



第112. 図 野原岳北側発電施設壕位置図

(4) 野原岳頂上の電波探知機壕群(のばるだけちょうじょうのでんぱたんちきごうぐん)

①所在地

宮古島市上野字野原鏡原

②立地·現況

本壕は、宮古島でも有数の高地である野原岳(最高標高 108 メートル)の頂上部付近に位置している。 現在は、航空自衛隊宮古島分屯基地の敷地内にあり、現在の自衛隊レーダー施設北側に1基(陸軍)、そ の南側に1基(海軍)設置されており、一部が資材置き場として利用されている。本壕は、現況として保 存状態は非常に良い。

③歴史状況

本壕は野原岳の頂上部にあることから、宮古島の四方への眺望が利く。この立地状況を活かして、日本 軍はヤグラ型の野戦警戒器。即ち、野戦乙警戒器と呼ばれる電波探知機を、昭和19年に2基設けた。

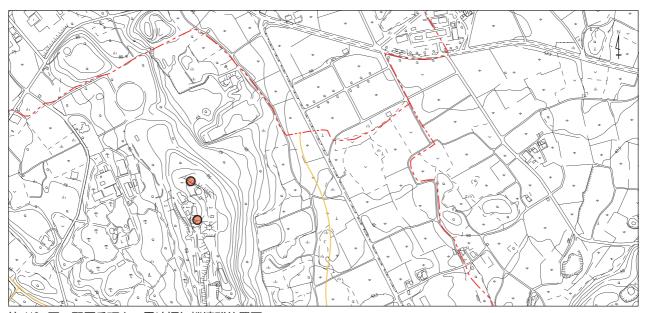
尚、本壕に関連する施設として、電波探知機に電気を供給するための発電機を設置した壕が、本壕の北側に構築されている。詳しくは「野原岳北側発電機施設壕」の項目を参照されたい。

④遺構の特徴

2基の電波探知機壕は、いずれも半円筒型の建物を2つ並べ、その中間を通路で繋ぐ鉄筋コンクリート造り半地下式の施設である。北側の電波探知機壕は、北向きに開口しており、外側入口近くにコンクリート造りの遮蔽物を設けている。遮蔽物のコンクリート内には、レールのような鉄骨も含まれているのを確認できる。開口部は幅約3メートル、高さ3.3メートルで奥行は7.3メートルとなっている。壁には弾痕もみられる。壁面沿いに深さ約0.3メートルの溝を設けている。

南側の壕は西向きに開口し、北側の電波探知機壕とは異なり遮蔽物は設けられていない。2つある構造物の南側の天井部分は、横幅2.3メートルほど開いている。このような開口は北側の壕には見られなかったが、後の段階で塞いだような痕跡はみてとれ、本来は同様に開口していたことが想定される。

野原岳一帯は、第28師団の司令部が設けられたこともあり、本壕の他にもトーチカや地下壕群など数多くの施設が残されている地域である。本壕も司令部に付随する施設であり、コンクリート造りの当時の数少ない構造物のひとつである。現在も、航空自衛隊宮古島分屯基地内で適切に保存されており、遺構の残りも非常に良好である。



第113. 図 野原岳頂上の電波探知機壕群位置図



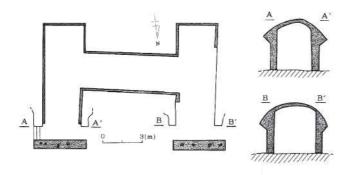
写真545. 北側の壕 全景



写真546. 北側の壕 天井部分



写真547. 南側の壕 内部



第 114. 図 電波探知機壕群平面図及び立面図 沖縄県埋蔵文化財センター調査報告書第 30 集 沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(V)宮古諸島編(2005)

(5)御真影奉護壕(ごしんえいほうごごう)

①所在地

宮古島市上野字野原鏡原

②立地 • 現況

本壕は野原岳の北西部、標高約80メートルに位置する。野原岳の大嶽城址公園として管理されている 区域以外にあり、壕周辺は雑木林が繁茂した状態にある。本壕の東側には砕石場があり、現在では本壕 の近くまで砕石が行われている。従来は、野原岳の東側にある畑地部分からもアクセスが可能であった が、砕石場の拡大により東側からのアクセスは困難となり、野原岳頂上部の自衛隊分屯地の北側の野原岳 ファームポンド附近から入って行くことが出来る。

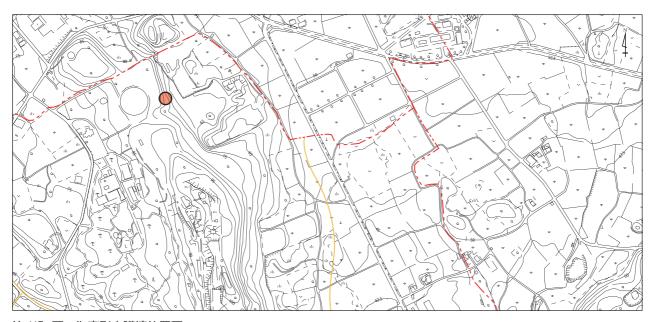
③歴史状況

野原岳一帯は日本軍の第 28 師団の本部として利用されており、一帯には本壕を含め司令部壕と推察される「タキグスバルの地下壕群」や、トーチカなどの関連した壕跡が群をなして構築されている。本壕はこれらの壕群の中で、最も北側に位置しており、壕内には御真影が安置されていたことが、聞き取り調査などで明らかになっている。

昭和19年10月10日の空襲によって、宮古郡教育部会各学校に置かれている、御真影の安全について宮古支庁と軍当局で協議がもたれた。協議の結果、宮古郡内の国民学校に安置されている御真影を、野原岳麓に疎開させることに決定した。11月1日、郡内に奉安する御真影を宮古中学校に奉遷し、11月2日に、宮古中学校より野原岳の仮奉安所へ奉遷している。

壕の構築には、郡内の国民学校教員が携わっており、下地小学校沿革誌によると、下地小学校からは男性教員 1 人 2 日間まで奉仕することとなっており、3 名、3 名、2 名と 3 回に渡って派遣されている。奉護壕守衛は、12 時間交代で島内の各学校教員が勤務しており、内部には白木で組まれた神宮造りの祠が作られ、その中に御真影を安置していた。その日の守備に当たる者は、御真影に拝礼してから勤務に就いたとされている。また近くに守衛室が設置されて、アダン葉の筵が 2 枚敷かれている粗末なものであったとある。

御真影は8月31日に、「内務次官通牒」によって焼却されている。沖縄戦時の呼称は、「御真影奉遷所」



第 115. 図 御真影奉護壕位置図

(沖縄県立埋蔵文化財センター 2005)。

④遺構の特徴

本壕は、琉球石灰岩を掘り込んで構築されている。壕口は2か所あるが、南側は壕口から土砂が流入しており、その周辺部分を含め確認がやや困難な状況である。北側の壕口については、石灰岩を掘り込んだ羨道が、壕口から北側へ約9.2メートル設けられている。しかし、この部分については、守衛室のような遺構跡を確認することはできない。内部の平面形態は、ほぼ「コ」の字型の形態をなしている。北側の壕口から西へ約6.6メートル直進すると、南向きに90度曲がり、壕最奥部にある約6.1メートルの直線の

連絡通路に通じている。連絡通路の南端は、更に東へ90度曲がっており、5.4メートル直進すると南側の壕口に達し、2つの壕口を有する壕が構築されている。尚、本来の天井の高さは、1.8メートル程度と推察される。

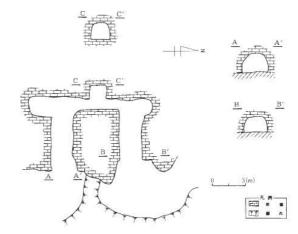
本壕の重要な目的である御真影は、壕奥の連結通路の中央部附近にあり、南北どちらの壕口からも直接見えない位置にある。縦 0.84 メートル、横 0.94 メートル、奥行き 0.46 メートルほどの棚状の掘り込み部分が作られここに御真影が安置されていたとされている。現在は、壁面の剥落もあり、祠を設置したような痕跡を確認することはできない。



写真548. 南側壕口外観



写真550. 内部から北側壕口を望む



第 116. 図 御真影奉護壕平面図・断面図 沖縄県埋蔵文化財センター調査報告書第 30 集 沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(V)宮古諸島編 (2005)



写真549. 壕内部(北側壕口付近)



写真551. 棚状の掘り込み部分

(6) 大嶽城跡公園西側壕群・トーチカ(おおたけじょうしこうえんにしがわごうぐん・とーちか)

①所在地

宮古島市上野字野原鏡原

②立地 • 現況

本公園の駐車場沿いに2基の壕があり、公園展望台への遊歩道沿いに3基のトーチカが並列して構築されている。

③歴史状況

当該壕群・トーチカの西側には陸軍中飛行場が構築され、南地区隊としての歩兵第3聯隊の防衛範疇となる。歩兵第3聯隊は野原集落内及び飛行場周辺に部隊を展開していたことが、体験談や聞き取りなどからも確認でき、これらの施設は歩兵第3聯隊に関係する可能性が高い。

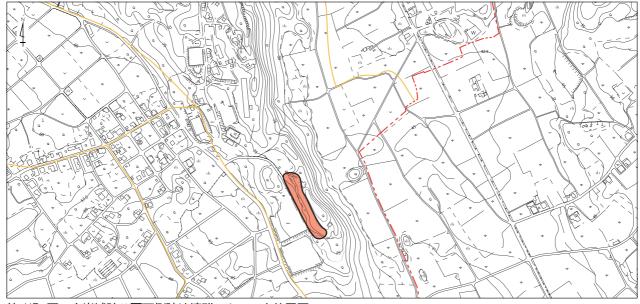
④遺構の特徴(沖埋文2005より引用)

本遺跡は、2基の壕と3基のトーチカで構成される。2基の壕は、現在も公園の歩道沿いで確認することができる。いずれも奥行きは10メートル前後で、琉球石灰岩を掘り込んで構築されている。

トーチカ部分については、沖縄県立埋蔵文化財センター 2005 年に詳細な報告があるため、以下に引用する。

大嶽城跡公園の頂上に展望台があり、その北側に隣接してトーチカは南北に、3基並んでみることができる。2基の壕とは直線距離で約30メートルで、両施設の関連性が位置の上から指摘できる。トーチカの銃眼はそれぞれ西、北側に向いている。いずれも岩盤をくり抜いた中にコンクリートが流し込んでおり、内部の高さは約2メートルで2~3人入ることができる空間を創り出している。北側にあるトーチカは屋根が壊されており、内部の様子が判る。それぞれはは高さ1.8メートルで岩盤を四角に加工している点は共通している。

注1:コンクリート製のトーチカは南北に1基ずつ確認され、その間に通路と思われる立坑1基が確認できる。



第117. 図 大嶽城跡公園西側陣地壕群・トーチカ位置図



写直 552 壕28 壕口



写真554. 南側トーチカ 監視窓



写真556. 北側トーチカ内部(北東壁)



写真558. 北側トーチカ 東向き銃眼



写真 553. 壕② 壕口



写真555. 南側トーチカ 内部



写直557 北側トーチカ内部(南壁)



写真559. 南北トーチカ間の立坑

(7) 大嶽城跡公園東側壕群(おおたけじょうしこうえんひがしがわごうぐん)

①所在地

宮古島市上野字野原鏡原

②立地 • 現況

本公園の東にある遊歩道を挟んで、両側に大小 10 基の壕を確認することができる。遊歩道から少し外れた南側には総延長 100 メートルと比較的大きな壕(壕口③・38)があり、壕内の遺物から病院壕の可能性がある。また、遊歩道沿いにはカマド跡のある壕(壕口②)もあり、棲息壕としての機能も想定される。

※壕口番号は「沖縄県戦争遺跡詳細確認調査(V)宮古諸島編」(沖縄県立埋蔵文化財センター 2005)に付番されているものを引用。

③歷史状況

大嶽城跡公園は野原岳に連なる嶺に位置しているが、大嶽城跡公園の東側となる本壕群は、城辺字下里添り、一方嶺や、同西花切と隣接しており、部隊の配備状況は東地区となる。資料によると師団本部のある野原岳周辺には、師団直轄の山砲兵第28聯隊第3大隊が野原南に、第8中隊が野原裏(船良台)に、それぞれ布陣している。

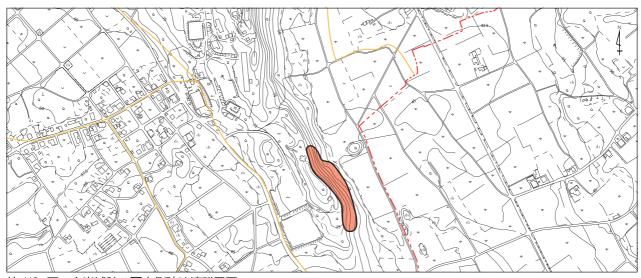
聞き取りや体験談などでは、具体的な部隊名は確認できなかったが、同地域は山砲兵第 28 聯隊及び、 師団直轄の部隊が布陣した可能性は否定できない。

④遺構の特徴 (沖埋文 2005 より引用)

沖縄県立埋蔵文化財センター 2005 年の報告によれば本遺跡は、大小 10 基程度で構成されている。各 壕の分布状況から、本遺跡は、②、③~③の壕番号が該当するとし、前述したように③と③はひとつの壕 の各壕口に付された番号である。一方で隣接する、ツガガーの地下壕群は、⑤~⑥の壕が該当する。

本遺跡において、もっとも大規模な壕が③と③の壕口が連結した壕である。③、③については、「内部は幅3メートル内外の主洞が南西軸にのびて、途中で3本ほどの支洞がみられる。小部屋が配置されている支洞が薬品の瓶が散乱している空間もみられた。壕口は東側と南東側にあり、東側は塹壕となって更に東側へのびていく。」と記されている。本壕の総延長は100メートルにも及び、大嶽城跡公園の南側に病院壕があったとの聞き取り調査での証言もふまえ、本壕との関連性が示唆されている。

また、2003(平成 15) 年 9 月 12 日に宮古島を直撃した、台風 14 号によって一帯の土砂が流れてしまい、小規模な壕のいくつかは壕口が完全に埋没しているとある。



第 118. 図 大嶽城跡公園東側陣地壕群置図



写真 560. 壕口② 壕口



写真 562. 壕口33 壕口



写真564. 壕口3 壕内部から壕口を望む



写真566. 壕口③ 瓶と缶



写真 561. 壕口② 壕内のカマド



写真 563. 壕口③ 壕口(病院壕)



写真 565. 壕口③ 内部



写真 567. 壕口③ 薬瓶

(8) ツガガーの地下壕群(つがが一のちかごうぐん)

①所在地

宮古島市上野字野原鏡原

②立地·現況

本壕群は、野原岳・大嶽城跡公園戦争遺跡群 (沖縄県立埋蔵文化財センター) の壕番号⑯~②で構成される。遺跡名にも冠されているように、宮古島市指定文化財ツガガーの周辺で確認された壕群を総称している。遺跡一帯は雑木林であるが、畑地が隣接し、ツガガーへ至る歩道も整備されている。

③歷史状況

ツガガーの地下壕群については、戦車壕としての使用が考えられている (沖縄県立埋蔵文化財センター 2005)。今回の分布調査においても、本遺跡一帯に戦車があったとの聞き取りの証言がえられている点や、その規模においても戦車壕である可能性は高い。

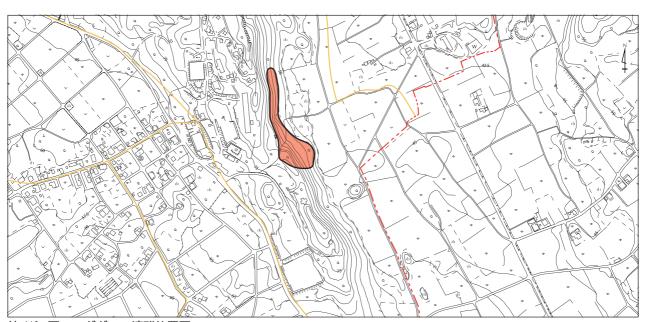
宮古島に配備された戦車部隊は、戦車第27 聯隊第3中隊である。本部隊は昭和19年6月20日に 勃利(現黒竜江省内)を出発した後、7月2日に釜山を出帆し、7月16日には宮古島へと上陸している(Ref. C12122494800)。

④遺構の特徴

ツガガーの地下壕群は、野原岳の東側の丘陵下部に位置し、宮古島市指定文化財ツガガーの周辺部に15の壕が確認されており(沖縄県立埋蔵文化財センター2005)、⑮~⑰の3つの壕が戦車壕と考えられている。3つの壕は、すべて東を向いて壕口が開口し、壕⑰と壕⑯の間は約34メートル、壕⑯と壕⑮の間は約30メートルとほぼ等間隔に壕が構築されている。今回の分布調査では、この戦車壕と考えられる3つの壕について重点的に調査を行った。ここではその報告について以下に記す。

壕⑰ 琉球石灰岩を掘り込んで作られており、羨道は 11.5 メートルを有する。壕口は東を向き、幅 3.3 メートル、高さ 3 メートル、奥行は直線で約 7 メートルまでは進めるが、奥には上方に向かう幅 2 メートルの斜坑があり、土石の流入で埋没している。壕⑰では天井の剥離がみられ、床面に瓦礫による凹凸感がある。また、壕の奥の方、斜坑入口部分に"ヒメノ"と黄色い塗料で記されている。

壕⑩ 羨道は 7.2 メートル、壕口は東を向き、幅 3.2 メートル、高さ 2.8 メートル、奥行き 8.5 メート



第119. 図 ツガガーの壕群位置図

ルで壕⑰と同形状である。壕奥の突き当りには壕⑰と同様に斜坑があり、現在は流入土石で埋没しているが、地上への出入口の可能性がある。また、壕奥の斜坑手前には左側へ続く通路状に掘り込んだ枝壕が伸びており、途中で粘土質に変わる。この通路状の枝壕も流入した土石埋没しておりて、地上まで通じていたかどうか確認することはできなかった。天井部分の崩落は少なく、床面はフラットである。その他、本壕の壕口の両サイドに、黄色の塗料で"1 S A"と"ヒメノタイ"と読み取れる文字が書かれている。

壕⑮ 羨道は9メートル、壕口は幅3.5メートル、高さ2.4メートル、奥行き10.7メートルで、前述の壕⑯・壕⑰と同様の形状をしている。壕口に少し崩落が見られるが、壕内の天井部分の崩落は少なく、床面は土肌になっている。壕奥の壁は土石が流入して形跡はなく、構築時の奥行きの原型を留めていると考えられる。

ここで壕⑯と壕⑰に記された、"ヒメノ"と"1SA"について考えてみたい。戦車第27聯隊第3中隊の戦史資料や『群島作戦』などを見る限り、ヒメノという隊員に関する情報はえられなかった。その一方で、野戦重砲兵第1連隊第1大隊には、姫野の名前が見て取れる。また、SAは野戦重砲兵を意味する日本軍の略記号でもあり、"1SA"は野戦重砲兵第1連隊、もしくは第1大隊を示す略記号であるとも考えられる。

黄色い塗料で文字が書かれた経緯としては、戦後に関係者がその壕の構築もしくは使用を記録する目的で行ったことが推察される。これらの点を考慮するならば、本遺跡は野戦重砲兵の所有していた榴弾砲を格納していた可能性も考えられる。推測の域を出ないが、戦車壕と榴弾砲の格納が時期差をもって使用されていた可能性が残る。



写真 568. 壕① 壕口



写真 569. 壕① 内部

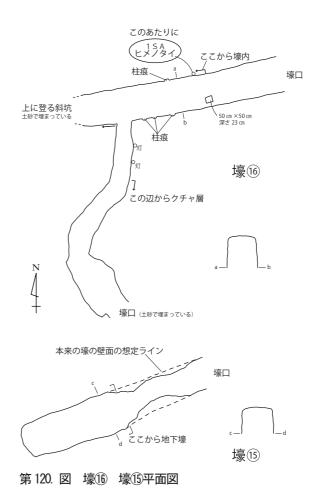




写真 570. 壕16 壕口



写真 571. 壕⑯ 羨道部



写真 573. 壕⑯ "1SA"と"ヒメノタイ"



写真572. 壕⑯ 内部(奥に斜坑部)



写真 574. 壕⑯ 壕奥から南方に伸びる支壕



写真 575. 壕(17) 壕口



写真 576. 壕① 羨道部



写真 578. 壕① 壕奥の斜坑部口の"ヒメノ"



写真 5//. 場⑪ 場奥の斜坑部



写真 579. 貯水槽

(9) タキグスバルの地下壕群 (たきぐすばるのちかごうぐん)

①所在地

宮古島市上野字野原鏡原

②立地·現況

2005年時の報告時とは周辺の環境が異なり、現在は、伊良部島への農業用水送水のためのファームポンドへ向かうアクセス路が整備され、壕の側を通る。また、周辺ではほ場整備工事が行われている。

本壕群は、野原岳・大嶽城跡公園戦争遺跡群 (沖縄県立埋蔵文化財センター) の壕番号②~⑫で構成されるが、今回の分布調査で、井戸跡周辺より新たな壕が 2 基確認された。これらの壕については、これまで報告されている壕番号につづけて壕⑨、壕⑩とした。

③歷史状況

先島集団では敵の来攻必至とみて昭和20年1月12日麾下全部隊に対し戦闘準備を命ずると共に県立 女学校及び平良第一国民学校に設けられていた司令部を2月16日急遽野原越に移し、戦闘指令所を開設 した。

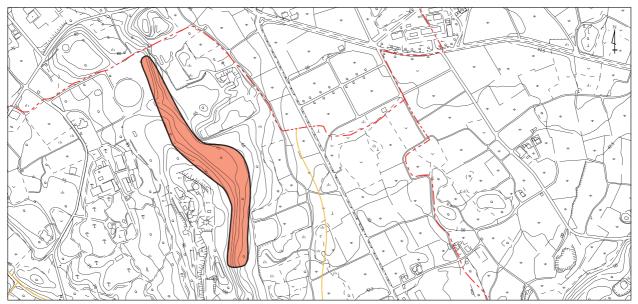
野原越戦闘指令所は偽装集落と洞窟指令所の2つから成り、洞窟指令部は野原岳の中腹をくり抜いた横穴の中に設けられ、甲戦備下令後は司令部の各機関がこの中に入ることになっていた。洞窟は19年5月上陸した要塞建築勤務第8中隊が主となって集団麾下の各部隊や民間人協力のもとに造られ、規模は明らかでないが、如何なる砲爆撃にも耐え数百名の司令部職員が長期間生棲し、指揮機能が発揮出来るよう設計されて居り、入口は2か所、東北部に向かって開いている。この洞窟は6月2日の乙戦備下令後一時使用されただけで、平常は糧秣・弾薬・資材の貯蔵に充てられていたようである。偽装部落は洞窟入口に接し、師団長・参謀長宿舎、参謀部、副官部、管理部、兵器部、経理部、軍医部、獣医部、通信隊、炊事所などを収容する茅葺建物(師団長宿舎のみは瓦葺)数十棟より成り、平常業務はここでとられていた。背面に野原岳を控えているので、南からの攻撃に対しては比較的安全だったが、北からの攻撃には位置をさらされるのが欠点だったが、この一帯は大体島の中央部にあたり、戦闘指令所の位置としては最も適していたと云える。

先島群島作戦(宮古篇)より引用 p24

④遺構の特徴(沖埋文2005より引用)

ここでは新規に発見された壕について、その遺構の特徴について概略する。

壕⑨は野原岳の丘陵上部の崖面部に構築され、2つの壕口が連結した壕である。本壕で最も特徴的なのは、コンクリートを使用した部屋を有する点である。この部屋は、入口部分の両側面を0.3~0.4メートル大の石灰岩を積み上げ、コンクリートで補強している。現在は、破損している部分も大きいが、本来は扉を有していたことが推察される。部屋の内部は、琉球石灰岩を掘り込んで拘置したものであるが、床面に、非常に厚いコンクリートの台座を設置している。この台座の用途については判然としないが、発動機などの機材を設置していた可能性も考えられる。壕内内部は、全体的に石灰岩などの崩落も多くみられる。壕⑩は、すでに報告されている井戸の周辺部で確認された縦穴である。縦穴の直径は約1メートル前後あり、深度は3メートル以上に達する。内部は、深度が深く、底部には、枯葉や土砂等が堆積しており、その詳細な状況の確認には至っていない。タキグスバルの地下壕群の多くは、丘陵の下部に位置しており、第28 師団の司令部壕との関連性が報告されている。今回新規に発見された2基の壕は、いずれも丘陵上部に位置している。そのため、壕の機能や用途など面では下部の壕群と異なる要素も多く、今後検討を深めていきたい。



第121. 図 タキグスバルの壕群位置図



写真580. タキグスバルの壕群全景



写真 581. 壕④壕⑤ 壕口



写真 582. 壕④壕⑤ 壕内



写真 583. 壕⑥ 壕口



写真 585. 壕⑦ 壕口





写真 589. 壕⑩



写真 584. 壕⑥ 壕内



写真 586. 壕⑦ 壕内



写真 588. 壕③



写真590. 壕⑩ 近傍の古井戸

(10) タキグスバル北の壕跡(たきぐすばるきたのごうあと)

①所在地

宮古島市上野字野原竹後原

②立地 • 現況

本壕は宮古島市農林水産整備課の実施する、ほ場整備工事に際して発見された壕である。野原岳の丘陵 下に広がる畑地で壕口が確認され、重機を用いて検出を行った。内部での詳細調査には危険が伴うことか ら、簡易な計測と写真撮影のみを行った。調査後は埋め立てて畑地として利用されている。

③歴史状況

野原岳およびその周辺には、第 28 師団、野戦重砲兵第 1 連隊、山砲兵第 28 聯隊などが展開しているが、本壕との関係性を示す資料及び聞き取りの証言は得られていない。

④遺構の特徴

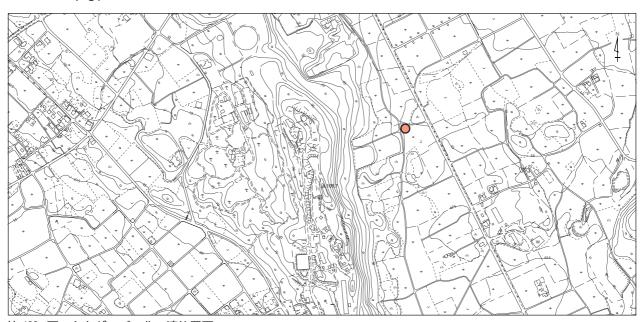
壕の規模は、奥行 8.2 メートル、幅 2.1 メートル、高さ $1.5 \sim 1.9$ メートルを呈する。壕口は南を向いており、壕口から奥にかけて僅かに傾斜しながら真っ直ぐに伸びている。作りは粗雑で、灯り取りなどの痕跡も見られない。尚、壕口付近にはゴミの投げ込みが見られた。



写真591. 近景(壕口は人のいる場所から地下へ 下る)



写真 592. 壕内部



第122. 図 タキグスバル北の壕位置図

(11) 野原鏡原の壕跡(のばるかがみはらのごうあと)

①所在地

宮古島市上野字野原鏡原(自衛隊基地内)

②立地 • 現況

本遺跡は陸上自衛隊宮古島分屯基地内に位置しており、基地施設の工事に伴い新規に発見された壕である。工事の際に壕の天井部分が一部掘削を受けて発見されたものであり、発見時に宮古島市教育委員会が立ち合いを行い、壕内の簡易な測量図の作成を行った。

③歴史状況

本壕の立地している野原岳中腹部は、2基ある野原岳電波探知機壕の南側の壕に近接している。野原岳は、歩兵第3聯隊の防衛する南地区にあたり、第28師団司令部の移駐してきた地でもあることから、本壕はこれらの部隊に関連した壕の可能性が高い

が詳細については判っていない。

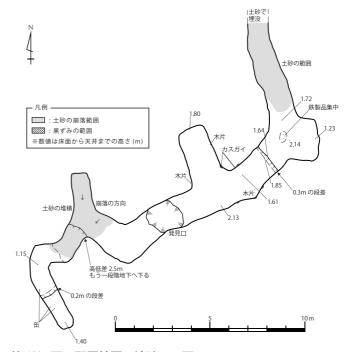
④遺構の特徴

本遺跡は、壕内の幅は約2メートルにも及ぶ、 比較的大規模な壕である。

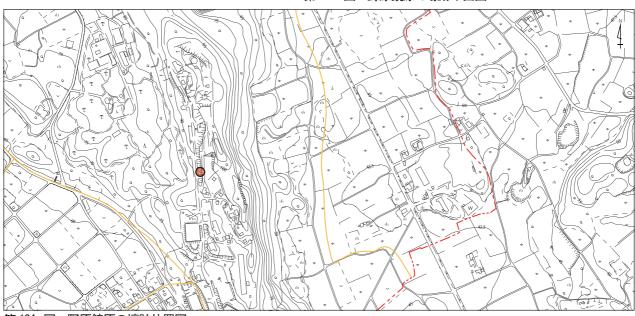
壕の全体的な平面図としては、北に向かう3つの通路がある。現在は、土砂の2次堆積により壕口は埋没した状況にある。

また、西端部分ではひとつ、南南東へ向かう 通路も確認できる。壕内の高さは、約 $1.6\sim2$ メートルに及ぶ。

壕内には当時の遺物として、カスガイ、木片 などが多くみられた。



第123. 図 野原鏡原の壕跡平面図



第124. 図 野原鏡原の壕跡位置図



写真593. 発見時の壕口



写真 594. 壕内部



写真596. 土砂で埋没した壕口



写真595. 壕内部 灯り取り



写真597. 壕内で確認された缶

(12) 千代田カギモリ原の壕跡(ちよだかぎもりばるのごうあと)

①所在地

古島市上野字野原カギモリ原

②立地·現況

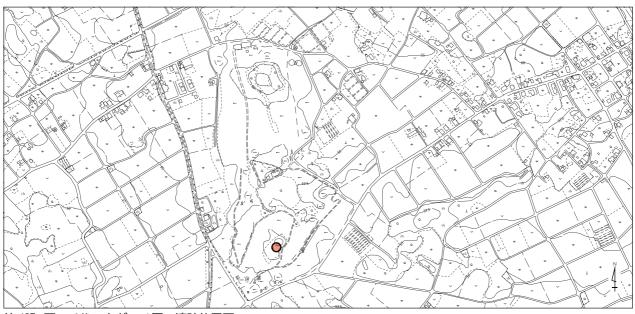
本遺跡は、旧千代田カントリーゴルフ場の敷地内に位置し、平成29年の陸上自衛隊の基地建設に伴い新規に発見された壕である。2基の壕が確認され、いずれも琉球石灰岩の岩盤を地下へ掘り込んで構築されている。平成29年度に宮古島市教育委員会によって記録保存調査が実施されている。

③歷史状況

本遺跡については、聞き取り調査によって第 205 飛行場大隊の通信隊に関連する壕であるとの証言が得られている。

④遺構の特徴

壕1は、琉球石灰岩の緩斜面を地下へ掘り込んで構築されている。壕口は西へ開口し、地下壕へ至る塹壕を有する。塹壕は、幅約0.8メートルで、深さ約1.8メートルほどである。地下壕へは、壕口部分から階段が3段設けられ、地下へと下る。階段の段差は約0.1~0.2メートルほどである。階段の終わった部分から、さらに南東方向へ斜面地が形成され、約3メートル進んだ部分に、長軸約2メートル、短軸1.5メートルの楕円形の縦穴部分へ至る。縦穴の深さは、落ち込み前の床面から約1.2メートル、天井までは約2.3メートルを測る。この縦穴からさらに南南東の方向へ地下へ傾斜する入口が設けられている。入口部分は、石灰岩礫の2次堆積などもあり、現況としては高さ約0.8メートル、幅約1メートルと非常に狭い。この高さ約0.8~1メートルの通路が約3メートルほど南南東に向いて掘り込まれ、南南西と東向きの二股に分かれる。それぞれ約2メートル直進して行き止まりとなるが、この二股部分は高さが約1.8メートル、幅約1メートルと通路部分に比して広く構築されている。特に、南南西側の突き当り部分は、方形状に角をもって掘り込まれており、壕口部分に比して丁寧な作りである。壕1は、現在の地表面から塹壕部分を経て、縦穴の底へ至るまでに約3.5メートルの高低差を有する。また、縦穴の底面から二股の突き当り部分までは、約1メートルほどの高低差を有しており、地下へ向かって壕を構築している。壕内からは、薬莢が1点のみ確認された。



第125. 図 千代田カギモリ原の壕跡位置図

壕2は、石灰岩の小規模な高まりの頂上部付近に構築されている。自然の洞穴を利用して壕を構築している。壕口の手前には、長さ約2.7メートル、幅約0.6メートル、高さ0.95メートルのコンクリートの壁が設けられ、壕口の壁面部分に対してL字形を呈する。コンクリート壁の先端部は三角形をなし、表面への加工は確認されない。壕口を隠すとともに、壕内への防壁を目的として設置されたと考えられる。壕口からは、約北側へ進むが、現況としては約1メートル近い石灰岩礫の流入などが多くみられる。また、壕口からは比較的急な斜面地となっており、現地表面から約2メートルほど下る。その北進した先は、長軸約1.8メートル、短軸約1.3メートルの楕円形の縦穴状に落ち込んでおり、この落ち込み部分から東側へ約90度折れ曲がる。この東進する壕内は、幅が約1.6メートル、高さ1.7メートルほどと比較的広い空間を呈している。そして東進した突き当り部分にもうひとつの壕口である縦穴が位置する。この縦穴は、壕口部分で約1.1×1.3メートルの略隅丸方形状の形態をなし、現地表面から、約5.1メートルの深度を有して、壕内へと至る。壕内部からの遺物は確認されなかった。



写真 598. 壕 1・壕口



写真 600. 壕 2 • 壕内部



写真 599. 壕 2 ・壕口



写真 601. 壕 2 • 縱穴

(13) 千代田カギモリ原の碑(ちよだかぎもりぱるのひ)

①所在地

宮古島市上野字野原カギモリ原

②立地 • 現況

本碑は、旧千代田カントリーゴルフ場の敷地内で確認された碑である。本碑は、これまで報告例がなかったが、聞き取り調査から、本来は、カーンミ御嶽の側に建てられていたものであり、戦後に石碑を現在の位置に移設したとのことである。平成29年度より開始された陸上自衛隊の基地建設に伴い本来の御嶽近くに移設される予定である。

③歴史状況・石碑の概要

碑は石灰岩を用いており、頂上部を三角錐形に尖らせており、部分的に破損している。現況としては、地中埋まった状態であるため、その全体形を計測することはできない。一面には「忠魂碑」と掘り込まれ、その反対側の側面には、石碑の由来等が記されている。破損しているため、全文を判読することはできないが、球 714 部隊である第 205 飛行場大隊が昭和 19 年 12 月 8 日建てたことが確認できる。

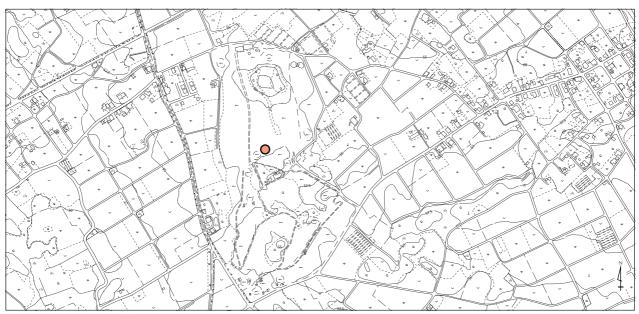
第205飛行場大隊は、陸軍中飛行場の建設の主要部隊のひとつである。碑文内にも飛行場建設やその使用に関する内容がみてとれ、10月13日の台湾沖航空戦についても触れられている。



写真602. 碑の採寸



写真603. 碑周辺(工事前)



第126. 図 千代田カギモリ原の碑位置図

第4節 上野

1. 上野の沖縄戦時の概況

字上野は、西は下地字嘉手苅、東は上野字宮国・野原に接している。戦争遺跡の多くは、これらの周辺部に多くみられ、字上野については、壕などの戦争遺跡は確認されなかった。下地字嘉手苅イリノソコでは、陸軍中飛行場に伴う掩体が点在するほか、山砲兵第28聯隊に関係するものと思われるイリノソコ陣地壕群なども確認されている。今回聞き取り調査を行う中で、詳細な部隊は不明であるが、福原の集落内で、病院跡と本部跡と言われる場所が確認された。

ソバンミには松林の中に兵舎が造られ、歩兵第3聯隊12中隊の現地入隊者が訓練を受けたとの体験談がある。体験談の中では次のように記されている。

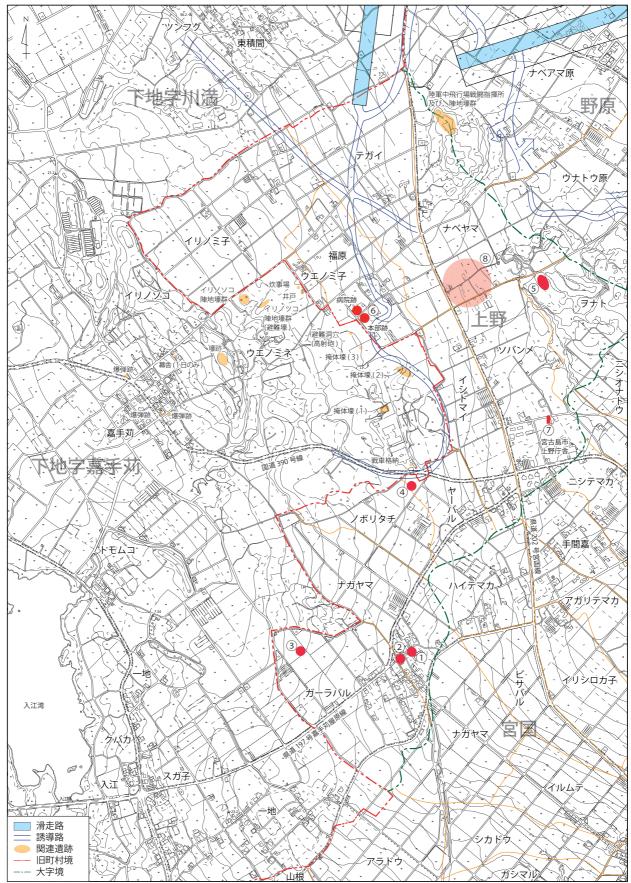
「ソバンミの訓練期間の三か月間は空襲の連続でした。飛行場の戦闘指揮所のすぐ南の松林の中に兵舎が作られ、そこに住んでいたのですが、すぐそばに、三門か四門の高射機関銃が取り付けられてあったが、そこがねらわれたのですね。」(沖縄県史第10巻各論編9沖縄県教育委員会1974)。

ソバミネという地域には、上記の体験談で使用した施設を含め、数多くの兵舎があった事が他の体験談等からも確認できる。

聞き取り調査で、ヲナトウには砲台の土台が残っているとの情報があったが、その場所が上記の高射機 関銃を設置した場所と近似している。しかし、今回の分布調査では、この砲台跡を確認することはできな かった。

体験談『村民の戦時・戦後体験記録 上野村教育委員会』では、ヤーバリガーの周辺に飛行機が墜ちたことが記されていて、上記の現地入隊した体験談の中にも、訓練期間中に不時着した米軍機からの没収品を見せてもらったことがあるとのことから、この地域には、米軍機が少なくとも1機落下し、搭乗員が捕虜となったと考えられる。

ガアラバリの集落内では、歩兵第3聯隊第1機関銃中隊の中隊長である、仮屋隆三大尉が宿泊していた 民家が、今回の聞き取り調査で確認された。この中隊長の宿泊した民家を中心に前の方には軍医が宿泊 し、隣には食糧庫があったとされる。このガアラバリの集落の西方に位置する掘り抜き井戸の側には、炊 事場も設けられていたとされ、同中隊との関連性が高いと考えられる。



第127. 図 上野地区成果図(地図)

2. 上野の調査成果一覧

①隊長宿泊地

聞き取りによると、上野105番地には歩兵第3聯隊第1機関銃中隊の中隊長假屋隆二大尉が宿泊。隣の家は食糧庫として使用していた。(昭和4年生)

②軍医宿泊地

聞き取りによると、隊長宿泊地の西隣の民家には軍医が宿泊していた。(昭和4年生)

③井戸(ガーラバリ)

聞き取りによると、この集落の井戸近くには、軍の炊事班がいた。(昭和4年生)

④ヤーバリガー

地域の井戸で、テマカやイシドマイあたりからも水汲みに通ったとの体験談がある。

⑤砲台跡

聞き取りによると、戦後、この場所ではコンクリートの土台が残っていた。(昭和4年生)

⑥病院跡·本部跡

聞き取りによると、この場所には部隊 (部隊名は不明)の本部があり、その隣には病院があった。(昭和4年生)

⑦慰霊の塔

先の大戦の戦没者を弔うため、昭和35年4月に上野地区遺族会により建立された。

⑧訓練兵舎跡

体験談(砂川昌良さん)によると、中飛行場の南の端にあるソバンミ(側嶺)の兵舎で訓練を受けた。



写真 604. ①隊長宿泊地



写真606. ③井戸(ガーラバリ)



写真608. ⑥病院跡・本部跡



写真 610. ⑦訓練兵舎跡



写真 605. ②軍医宿泊地



写真 607. ④ヤーバリガー



写真609. ⑦慰霊の塔

第5節 上野地区の戦争遺跡のまとめ

_			使用主体		形態		調査状況(報告)			
番号	所在地	名 称	軍関係	住	自然壕	建人造工	新追	未確認	消	備考
			1糸	民	- 塚 	物壕	規加	認	滅	
1	上野新里	新里の機関銃壕群	0			0	0			*
2	上野新里	東青原の壕	0			0	0			
3	上野宮国	タカシガバーの機関銃壕	0			0				*
4	上野宮国	「ドイツ商船遭難之地」碑の弾痕				0	0			
5	上野宮国	トゥクルアブ		0	0				0	*
6	上野宮国	陸軍中飛行場戦闘指揮所	0			0				*
7	上野野原	高山原の壕群	0			0	0			
8	上野野原	野原岳頂上の電波探知機壕群	0			0				*
9	上野野原	タキグスバルの地下壕群	0			0				*
10	上野野原	ツカガーの地下壕群	0			0				*
11	上野野原	大嶽城跡公園西側壕群・トーチカ	0			0				*
12	上野野原	大嶽城跡公園東側壕群	0			0				*
13	上野野原	野原岳北側発電施設壕	0			0				*
14	上野野原	御真影奉護壕	0			0				*
15	上野野原	野原鏡原の壕	0			0	0		0	記録保存
16	上野野原	ナベアマ原の壕群	0			0	0			
17	上野野原	千代田カギモリ原の壕跡	0			0	0		0	記録保存
18	上野野原	千代田カギモリ原の碑	0			0	0			記念碑
19	上野野原	タキグスバル北の壕跡	0			0	0		0	記録保存
上野地区 小計				(新規	8、追	加1)	9	0	4	* 11

※印:2005 年沖縄県立埋蔵文化財センターにて報告済

宮古島市内戦争遺跡発掘分布調査報告書(1)

一城辺地区・上野地区—

発 行 日:平成30(2018)年3月30日

編集発行:宮古島市教育委員会

₹ 906-0103

宮古島市城辺福里 600 番地 1 TEL 0980-77-4987

TEL 0980-77-4957

印 刷:シモジ印刷